

チノ語文法(悠楽方言)の記述研究

著者	林 範彦
雑誌名	神戸市外国語大学研究叢書
巻	43
ページ	1-184
発行年	2009-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000300/



神戸市外国語大学 研究叢書 第43冊

チノ語文法(悠楽方言)の記述研究

林 範彦 著

神戸市外国語大学外国学研究所

2009

チノ語文法(悠楽方言)の記述研究

林 範彦 著

謝辞

本書は筆者が2007年に京都大学大学院文学研究科へ提出した博士論文「チノ語悠楽方言の記述的研究」を元に改訂を加えたものである。博士論文では第1部にチノ語悠楽方言の音韻・形態統語論を中心とした共時的体系が、第2部にチノ語悠楽方言の文法の類型的特点が記述され、また付録としてチノ語悠楽方言の基礎語彙集が置かれていた。しかし、本書では紙幅の都合上、第2部を含めず、第1部と付録を土台に編み変えた。更に基礎とした第1部と付録についても博士論文の内容を簡潔にまとめ直している。そのため、議論についてやや物足りないところもあるかもしれないが、逆に博士論文の段階よりもこの言語において重要な部分が明確になっていると言える。

本書の元となっているデータは2000年以降から断続的に行っている中国雲南省における現地調査である。この調査は文部科学省特定領域研究(A)「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」(2000年～2002年、領域代表者 宮岡伯人)、日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明—チベット・ビルマ系未記述言語とシャンシュン語の解読—」(2004年、2007年、2008年、研究代表者 長野泰彦)、日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費、2003年・2005年)、日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究(B)「チノ語の記述調査と言語接触・言語類型論から見た東南アジア諸語研究」(2008年、研究代表者 林範彦)。この場で深謝したい。調査でお世話になった王阿珍さんをはじめ、チノ族および中国雲南省景洪市基諾郷に住む皆さんには心からお礼申し上げる。

本書の出版を可能にいただいた神戸市外国語大学外国学研究所をはじめ、筆者を学部生・大学院生時代から指導していただいた諸先生方・諸先輩方・同輩方、および神戸市外国語大学の同僚の先生方に感謝申し上げたい。お名前を挙げれば書ききれないが、特に阿部卓・池田巧・上野善道・太田齋・大西正幸・長田俊樹・梶茂樹・熊本裕・坂本比奈子・佐藤晴彦・庄垣内正弘・田窪行則・武内紹人・長野泰彦・西田龍雄・西村義樹・林徹・宮岡伯人・藪司郎・吉田和彦・吉田豊の各先生には具体的なご指導を賜った。厚く御礼申し上げる。

本書はチノ語悠楽方言の基本構造を可能な限り簡潔に提示している。しかし、もちろん問題はあまねく自己生成する。今後も本書を土台としてより精緻で透明なチノ語文法の記述を筆者は引き続き目指している。

目次

謝辞	i
図目次	xi
表目次	xii
序章 はじめに	1
0.1 チノ族について	1
0.1.1 名称について	1
0.1.2 チノ族の伝説と歴史	2
0.1.2.1 チノ族に関する伝説	2
0.1.2.2 チノ族に関する歴史資料	2
0.1.3 チノ族の生活習慣	3
0.1.3.1 生業形態	3
0.1.3.2 食事	4
0.1.3.3 住居	4
0.1.3.4 衣服	4
0.1.3.5 恋愛・結婚	5
0.1.3.6 葬礼・埋葬・祭礼行事	6
0.2 チノ語について	7
0.2.1 チノ語の先行研究	7
0.2.2 チノ語の系統	7
0.2.3 チノ語の方言	8
0.2.4 チノ語の書記法	10
0.2.5 チノ語の使用状況	10
0.3 本書で採用する方法と構成について	11
0.3.1 本書のデータと方法	11
0.3.2 本書の構成	12
第1章 音論	14
1.1 音節構造	14
1.2 単音のレベル	14
1.2.1 子音音素	14

1.2.1.1	C ₁ (頭子音)	15
1.2.1.2	C ₂ (介音)	17
1.2.1.3	C ₃ (末子音)	19
1.2.2	母音	19
1.2.2.1	V ₁ (単母音)	20
1.2.2.2	V ₂ (二重母音)	21
1.2.2.2.1	上昇二重母音	21
1.2.2.2.2	下降二重母音	22
1.2.2.3	V ₃ (三重母音)	22
1.2.3	分節音のレベルで注意すべき特徴	22
1.2.3.1	成節鼻音	22
1.2.3.2	無声鼻音の有声化	23
1.2.3.3	母音の融合	24
1.3	かぶせ音素のレベル	25
1.3.1	/T (声調)	25
1.3.1.1	音韻的動機付けによる声調交替 (PTA)	26
1.3.1.2	文法範疇に特有な声調交替 (GTA)	26
1.3.1.2.1	名詞に見られるパターン	26
1.3.1.2.2	数詞に見られるパターン	26
1.3.1.2.3	形容詞に見られるパターン	27
1.3.1.2.4	動詞に見られるパターン	28
1.3.2	その他のかぶせ素性	32
1.3.2.1	ストレス	32
1.3.2.2	強度の強調とイントネーション	32
第2章	名詞句	34
2.1	指示詞	34
2.2	名詞	36
2.2.1	語構成	36
2.2.2	統語的位置	38
2.2.2.1	主語	39
2.2.2.2	目的語	39
2.2.2.3	コピュラ文の補語	39
2.2.2.4	名詞述語文	40
2.2.3	位置関係を表す名詞	40
2.3	代名詞	40
2.3.1	種類と語構成	40

2.3.2	格の基本的な機能	42
2.3.2.1	主格	42
2.3.2.2	斜格	43
2.3.2.2.1	所有格	43
2.3.2.2.2	斜格	44
2.4	名詞接尾辞	45
2.4.1	-ma	45
2.4.2	-pu	46
2.4.3	-lo	47
2.4.4	-tʃhə	47
2.5	数詞	48
2.5.1	基数	48
2.5.1.1	基本的体系	48
2.5.1.2	概数と分数	49
2.5.2	序数	50
2.5.3	ko-	50
2.6	類別詞	50
2.6.1	類別詞の種類	50
2.6.1.1	名詞類別詞	51
2.6.1.2	回数詞	53
2.6.2	類別詞の重複	54
2.7	数量詞句接尾辞	55
2.8	後置詞	56
2.8.1	=s ⁴⁴	56
2.8.2	=ɛ ⁴⁴	56
2.8.3	=va ⁵⁵	57
2.8.4	=la ⁵⁵ <I>	58
2.8.5	=jo ⁴⁴	58
2.8.6	=jo ⁴⁴	60
2.8.7	=the ⁴⁴	61
2.8.8	=la ⁵⁵ <II>	61
2.8.9	=lœ ⁴⁴	61
第3章	動詞複合形式	63
3.1	動詞複合形式の概要	63
3.2	接頭辞類	64
3.2.1	前動詞 (preverb, prev)	64

3.2.1.1	tɕ ⁴² -	64
3.2.1.2	ʃɔ-	64
3.2.1.3	tʃy ⁵⁵ -	65
3.2.1.4	ku ⁵⁵ -	65
3.2.2	接頭辞 1 類 (prefix ₁ , pref ₁)	66
3.2.2.1	a ₁ -	66
3.2.2.2	ma- ~mɔ-	66
3.2.2.3	thə-	66
3.2.2.4	a ₂ -	67
3.2.3	接頭辞 2 類 (prefix ₂ , pref ₂)	67
3.2.3.1	pi-	67
3.2.3.2	khə-	67
3.2.3.3	ja-	68
3.2.4	接頭辞 3 類 (prefix ₃ , pref ₃)	69
3.2.4.1	m-	69
3.3	動詞	69
3.3.1	語構成と動詞分類	69
3.3.1.1	語構成	69
3.3.1.1.1	基本形	69
3.3.1.1.2	重複	70
3.3.1.2	動詞分類	70
3.3.1.2.1	自動詞/他動詞	71
3.3.1.2.2	動態動詞/静態動詞	72
3.3.1.2.3	意志動詞/無意志動詞	72
3.3.1.3	注意すべき動詞	73
3.3.1.3.1	コピュラ動詞 ɣu ⁵⁵	73
3.3.1.3.2	伝達系動詞	74
3.3.1.3.3	思考・感情系動詞	74
3.3.1.3.4	移動系動詞	75
3.3.1.3.5	tʃhɿ ⁵⁵ 「似ている」	77
3.3.2	動詞連続構造	78
3.4	接尾辞・助詞類	78
3.4.1	「達成」	78
3.4.1.1	-khjo	78
3.4.2	受益・相互	79
3.4.2.1	-mɔ	79
3.4.2.2	-ʃi	79

3.4.3	テンス・アスペクト 1 類	80
3.4.3.1	-kɔ	80
3.4.4	テンス・アスペクト 2 類	80
3.4.4.1	-tɔ	80
3.4.5	使役	81
3.4.5.1	-vi	81
3.4.6	「助動詞」 1 類	82
3.4.6.1	-khju	82
3.4.6.2	-tɕhe	82
3.4.7	「助動詞」 2 類	83
3.4.7.1	-ɲu	83
3.4.7.2	-mɣ	84
3.4.8	テンス・アスペクト 3 類	84
3.4.8.1	-mɣ	84
3.4.8.2	-me	85
3.4.9	「まだ」	86
3.4.9.1	-suɪ	86
3.4.10	テンス・アスペクト 4 類	87
3.4.10.1	-a	87
3.5	その他の動詞複合形式に生起する接辞類および後置詞	88
3.5.1	その他の接辞類	88
3.5.1.1	lɔ-	88
3.5.1.2	-jɔ	88
3.5.1.3	-tsɣ	89
3.5.2	動詞複合形式に生起する後置詞の用法	89
3.5.2.1	=ɣ ⁴⁴	90
3.5.2.2	=ɛ ⁴⁴	90
3.5.2.3	=la ⁵⁵ <II>	91
3.5.2.4	=lɔ ⁴⁴	92
第 4 章	その他の範疇	94
4.1	形容詞	94
4.1.1	語構成	94
4.1.1.1	基本形	94
4.1.1.2	否定形	95
4.1.1.3	強調等を表す派生接辞類および副詞	95
4.1.1.4	重複と意味の強調	96

4.1.1.4.1	重複の基本的形式	96
4.1.1.4.2	頭子音の部分重複	96
4.1.1.4.3	最上級	97
4.1.2	用法	97
4.1.2.1	修飾用法	97
4.1.2.1.1	名詞修飾用法	98
4.1.2.1.2	動詞修飾用法	99
4.1.2.2	叙述用法	99
4.1.2.3	名詞的用法	101
4.2	副詞	101
4.2.1	様態副詞	101
4.2.2	時間副詞・場所副詞	103
4.3	疑問語	103
4.3.1	疑問代名詞	104
4.3.1.1	khə ³³ su ⁵⁵ 「誰」	104
4.3.1.2	khə ⁵⁵ tur ⁴⁴ /ŋur ⁵⁵ kxi ⁴⁴ /khao ⁴² 「何」	104
4.3.1.3	ŋur ⁴² /khə ⁵⁵ 「どれ」	105
4.3.2	疑問副詞	106
4.3.2.1	ŋur ⁵⁵ mə ⁴⁴ /khə ⁵⁵ mə ⁴⁴ 「いつ」	106
4.3.2.2	ŋur ⁴² /ŋur ⁵⁵ va ⁴⁴ /khə ⁵⁵ 「どこ」	107
4.3.2.3	ŋur ⁵⁵ lo ⁴⁴ /kha ⁵⁵ lo ⁴⁴ 「いかにして」	108
4.3.2.4	ŋur ⁵⁵ lo ⁴⁴ ŋur ⁵⁵ vu ⁵⁵ /kha ⁵⁵ e ⁴⁴ 「なぜ」	109
4.3.2.5	ŋur ⁵⁵ pu ⁴⁴ -/khə ⁵⁵ pu ⁴⁴ -「いくつ」	109
4.3.3	疑問語における注意すべき特徴	110
4.3.3.1	統語的位置による解釈の差異	110
4.3.3.2	不定化	111
4.4	接続詞	112
4.5	感嘆詞と擬態語等	113
4.5.1	感嘆詞	113
4.5.2	擬態語	114
第5章	文末および節末を表す範疇	115
5.1	文末を表す範疇	115
5.1.1	文終止助詞	115
5.1.1.1	-nce ⁴⁴	116
5.1.1.2	-la ⁴²	116
5.1.1.3	-ŋa ⁴²	117

5.1.1.4	-ŋɔ ⁴²	118
5.1.1.5	-a ⁴⁴	118
5.1.2	モーダル	119
5.1.2.1	-po ⁴²	119
5.1.2.2	-jo ⁴⁴	121
5.1.2.3	-tɔ ⁴² (-tu ⁴²)	121
5.1.2.4	-ka ⁴²	121
5.1.2.5	-te ⁴²	122
5.1.2.6	-je ⁴⁴	122
5.2	従属節末を表す範疇—接続助詞—	123
5.2.1	-mjə ⁴²	123
5.2.2	-vu ⁵⁵	124
5.2.3	-xɔ ⁴²	125
5.2.4	-mɤ ⁴²	126
5.2.5	-təu ³³	126
5.2.6	-ɛ ⁵⁵ nœ ⁴⁴	127
第6章	文法現象における諸問題	128
6.1	語順と情報構造	128
6.1.1	語順と格標示システム	128
6.1.1.1	基本語順	128
6.1.1.2	文脈ないし言語外的知識による判断	130
6.1.1.3	二重斜格名詞句と二重 =va ⁵⁵ 制約	132
6.1.2	情報構造と言語表現	133
6.1.2.1	情報の流れ	133
6.1.2.2	重要度の低い情報の省略	135
6.2	名詞修飾	136
6.2.1	名詞句による修飾	136
6.2.2	形容詞	138
6.2.3	関係節	138
6.2.3.1	用法	139
6.2.3.1.1	主語	139
6.2.3.1.2	目的語	139
6.2.3.1.3	場所	140
6.2.3.1.4	その他	141
6.2.3.2	語順と意味	141
6.3	疑問表現	143

6.3.1	直接疑問文	143
6.3.1.1	回答要求	143
6.3.1.1.1	真偽疑問文	143
6.3.1.1.2	疑問語疑問文	145
6.3.1.1.3	選択疑問文	147
6.3.1.2	自問・不確定ニュアンスの表明	148
6.3.2	間接疑問文	149
6.4	使役構文	150
6.4.1	使役接辞を用いる形態的手法	150
6.4.1.1	使役接辞・使役の種類・強制度	151
6.4.1.2	二重使役	153
6.4.1.2.1	直接使役 & 間接使役	153
6.4.1.2.2	間接使役 & 間接使役	154
6.4.1.3	使役接辞の機能する領域	155
6.4.2	動詞を用いた統語的手法	156
6.5	受益構文	157
6.5.1	受益構文の基本的構造	157
6.5.2	使役接辞との共起	159
6.6	動詞連続構造	160
6.6.1	動詞連続構造の位置	160
6.6.2	チノ語の動詞連続構造における動詞の特徴	161
6.6.2.1	動詞の自他による組み合わせ	161
6.6.2.1.1	自動詞+自動詞	161
6.6.2.1.2	自動詞+他動詞	163
6.6.2.1.3	他動詞+他動詞	163
6.6.2.1.4	他動詞+自動詞	164
6.6.2.2	動詞連続構造の性質	165
6.6.2.2.1	主語の同一性と項の併合	166
6.6.2.2.2	各動詞の意味的關係と時間的順序	168
6.6.2.3	動詞連続構造のまとめ	169
6.6.3	非動詞連続構造—関係明示表現: 接続助詞 -mja ⁴² との関わり—	170
6.6.3.1	接続助詞 -mja ⁴² の生起条件	170
6.6.3.1.1	項の併合が行えない場合	170
6.6.3.1.2	項の併合が可能な場合	171
6.6.3.2	-mja ⁴² と否定辞との共起制限	172

おわりに	174
略号一覧	175
参考文献	176
索引	182

図目次

1	中国雲南省景洪市とチノ族の居住区	1
2	悠楽チノ族(左、中央)と補遠チノ族(右)[2004年2月、中央は玉 納氏]	6
3	Bradley(1997)における系統分類[本書筆者により簡略化]	8
4	チノ語下位方言群の系統的分類(仮説)	9

表目次

1	チノ語の文の基本モデル	12
1.1	子音音素一覧	14
1.2	母音音素一覧	20
1.3	形容詞の声調交替	27
1.4	単音節動詞の変調パターン(1)	28
1.5	単音節動詞の変調パターン(2)	29
1.6	2音節動詞の声調交替パターン(1)	31
1.7	2音節動詞の声調交替のパターン(2)	32
2.1	チノ語の名詞句構造(モデル)	34
2.2	指示詞一覧	34
2.3	人称代名詞一覧	41
2.4	「自分」	42
2.5	名詞接尾辞の種類と意味	45
2.6	チノ語の数詞: 1~100	48
2.7	専用類別詞の種類と機能	51
2.8	名詞由来の類別詞の種類と機能	52
2.9	度量衡の類別詞の種類と機能	53
2.10	回数詞の種類と機能	53
2.11	後置詞の種類と機能	56
3.1	チノ語の動詞複合形式(モデル)	63
3.2	名詞・形容詞・動詞の判定基準	70
3.3	統語的要求項に基づいた動詞分類	71
3.4	チノ語の伝達系動詞	74
3.5	チノ語の思考・感情系動詞	75
3.6	チノ語の移動系動詞	76
3.7	動詞連続構造の動詞語根部分	78
4.1	形容詞の形式	94
4.2	名詞修飾用法の語順	98
4.3	叙述用法の語順	99

4.4	疑問語一覧	104
4.5	接続詞一覧	112
5.1	文、文終止助詞とモーダル助詞の構造	115
5.2	接続助詞一覧	123
6.1	名詞修飾の位置関係	136
6.2	関係節による名詞修飾	139
6.3	真偽疑問文における $-la^{42}$ と $-na^{42}$ の性格	143
6.4	疑問語疑問文における $-na^{42}$ と $-a^{44}$ の性格	146
6.5	チノ語使役接辞における強制度	151
6.6	動詞連続構造の動詞語根部分	161
6.7	自動詞+自動詞の組み合わせ	162
6.8	自動詞+他動詞の組み合わせ	164
6.9	他動詞+他動詞の組み合わせ	164
6.10	他動詞+自動詞の組み合わせ	165
6.11	自動詞+自動詞パターンの項併合システム	167
6.12	他動詞+他動詞パターンの項併合システム	167
6.13	自動詞+自動詞で「意志+無意志」型1類に属する場合の項併合	168
6.14	(360)の項の併合	171

序章 はじめに

本書で取り上げるチノ族とチノ族の話すチノ語、および本書の構成や方法論などについて、ここで紹介する。

0.1 チノ族について

0.1.1 名称について

チノ族は中国雲南省西雙版納傣族自治州景洪市基諾郷および補遠山地区に居住する少数民族である。中国以外には基本的に居住していない。2000年の人口統計¹によると、チノ族の総人口は20899人である。そのうち20199人が西雙版納傣族自治州に居住している。

中国雲南省は中国の西南部に位置し、南にビルマ（ミャンマー）、ラオス、ベトナムと国境を接する地域である。図1²に中国雲南省景洪市とチノ族の居住区の地図を示しておく。



図 1: 中国雲南省景洪市とチノ族の居住区

¹この統計は國家統計局人口和社会科技統計司・國家民族事務委員會經濟發展司(編)《2000年人口普查中国民族人口資料》(上下冊)(北京: 民族出版社、2003年)によった。

²この地図は以下のサイトより引用したものに對し、筆者による若干の改訂を加えた。

<http://www.travelchinaguide.com/images/map/yunnan/yunnan.gif>

チノ族の自称は悠楽方言巴卡下位方言話者の発音³では ki⁵⁵no⁵⁵ である。そのため巴卡下位方言話者にとっては日本語では「チノ族」よりも「キノ族」と呼ばれるほうがより自称に近い。しかし本書では慣例に従い、「チノ族」と称することとする⁴。

0.1.2 チノ族の伝説と歴史

0.1.2.1 チノ族に関する伝説

史実に基づいているとは言えないが、自民族の口頭伝承・伝説もわずかながら残されている(杜 2004[1996])。大きく「洪水伝説」と「諸葛孔明伝説」に分かれる。

「洪水伝説」は雲南の諸少数民族に共通するものである⁵。チノ族の洪水伝説は以下のとおりである。二人の兄妹、マヘイとマニウが造物主の教えに従い、洪水の難を逃れる。その後、兄妹でありながら結ばれ、生活のためにヒョウタンを植えて育てる。成長したヒョウタンの中からチノ族をはじめ、プーラン族、ハニ族、漢族などが出てきたというものである。

もう一方の「諸葛孔明伝説」は以下の通りである。諸葛孔明の率いる南進の軍隊につき従っていたチノ族の祖先は、行軍途中で疲労により、眠ってしまい、隊列を離れる。全力で追いつくも軍紀に厳しい孔明は、その後の行軍を認めなかった。その際、孔明が茶の苗をこれらの者たちに与え、以降は茶を植えて生計を立てるように教えた、というものである。

0.1.2.2 チノ族に関する歴史資料

チノ語は文字を持たないため、自民族の歴史を資料として書き記すことはなかった。よって、基本的に漢語史料に依拠せざるを得ない。

王・薛・田(2000: 239)ならびに王・龍・陳(2005: 432-433)によれば、チノ族は漢代から晋代にかけて四川南部ないし雲南一帯に居住していた叟族・昆明族の一部分から発展してきたと考えられている。

1180 年、傣族の帕雅真(叭真)が勐ロク⁶一帯を統一し、建国後、チノ族地域は帕雅真一族の世襲による統治が行われた。

チノ族の人類学的研究などによると、ごくわずかではあるが、チノ族についての記述が漢族によってなされている(呉 2000)。しかし、清代になるまで、歴史資料に上ることはなく、清代以前の歴史的事実は明瞭とはいえない。

³蓋(1986)では ty⁴⁴no⁴⁴ もしくは ki⁴⁴no⁴⁴ とされている。筆者の調査でも他村落出身者の発音で前者のごとく呼ばれることがあった。

⁴日本の人類学では「ジノ族」と称されることが多い。

⁵チノ族の洪水伝説と極めてよく似た伝説は雲南に居住するペー族やヌ族にも存在し、いずれも洪水の後、兄と妹の2人が結ばれ、子孫を作ったという内容を含んでいる(馬ほか 1992: 94)。

⁶「ロク」はさんずいへんにこごとへんを加えて、右端に「力」を加えた文字である。漢語普通話では lè と読む。

王・龍・陳(2005: 488-489)によると、清朝政府が雲南南部に普洱府⁷を設置したときにチノ族が集中して居住している悠楽山区に「悠楽同知」を設置した。しかし雍正十三年(1735年)、清朝政府は「マラリア性の病気が流行」し、駐屯していた軍隊や行政官らがかなり病死したので、「悠楽同知」を解消し、軍隊を撤退させた。以後は「悠楽土目」でもってこの地を管理させた。道光の《雲南通誌》巻一百三十六に記載されている悠楽山区の領域と村の名称が現在の状況とほぼ一致しているという。また村名は記されていないが、当時32の村落が存在したとされている。悠楽土目であった叭龍横は清朝政府が信頼できるチノ族代表であると見なされ、この人物をもってチノ族全体を統治させる地域長官とした。この叭龍横から刀直乃にいたる40年あまりはチノ族の土目が清朝政府から委託され、チノ族地域の実質的統治を行ったとされる(杜1985: 44)。

杜(2004[1996])によると、チノ族は現代に入って極めて急速な変化を遂げたとされる。1958年、中国政府はチノ族の民族識別工作⁸を開始した。その際、民族学的、社会学的調査等に加えて、言語学的調査も行われた。1979年6月6日、中国国務院により正式にチノ族が単一の民族であるとの認定が与えられた。チノ族は中国国務院に正式に認定された56民族中、現時点で最も新しく認定を受けた民族である。

0.1.3 チノ族の生活習慣

チノ族の生活習慣、特にその伝統的なものについては、杜(2004[1996])、劉・白(主編)(1999)、于(2000)などに詳しい。ここでは杜(2004[1996])をはじめとする人類学的記述を参考にしながら、チノ族の生活習慣について概説していきたい。現代の生活習慣については筆者の現地での観察をもとに補う。

0.1.3.1 生業形態

杜(2004[1996])によると、新中国が成立するまで、チノ族は主に農業を生業とした、いわば「原始農業の段階」の生活を営んでいた。一般に焼畑を行い、わずか1,2年で土地を不能にしていた。また水牛および黄牛を飼っていたが、一般的には農耕には用いなかった。農具は通常腰に身につける鋤^鋤を用いた。

生産力が低下すると、通常は半年分の食糧しか持っていないため、30種類程度の野菜を、農作業中に適当に採集して食していた。また男性は通常猟銃や弓

⁷ 尤(1994: 550)や杜(2004[1996])によると、道光の《雲南通誌》に関連する記述がある。その中の「三撮毛」と呼ばれる者がチノ族であるという。「三撮毛」は「3房の毛」、すなわち当時のチノ族が頭部の左右と中央の3箇所に髪の毛を生やしていたことから漢族がつけた他称である。尤(1994: 550)によれば、道光の《普洱府誌》巻十八に収められている《人種誌》にこのことが記されている。

⁸ 蓋興之教授によると、民族識別工作は雲南省の広範囲にわたってなされたが、それゆえに一つの民族に対する調査期間が短く、3日程度で1民族支系の認定を行っていたようだ。

矢を携帯し、リスから野生の牛に至るまで狩っていた。女性は農作業の合間にカニやタケネズミのような小動物を獲っていたようだ。

筆者の情報では、農作業として早朝ゴムの樹液採取や茶摘を行い、それを収入の一部にする例が多い。またどの家庭でも豚、アヒル、鶏などの家畜を飼うのが通常である。

また毎年8月中旬頃、各家庭では山に栽培してある「砂仁(shārén)」(縮砂^{しゆくしゃ}, 学名 *Amomum villosum*) を摘み、生のままか乾燥させたものを都市部から来た仲買人に販売する。

0.1.3.2 食事

食事の習慣であるが、基本的に主食は米である。「紅米」と呼ばれる、脱穀の段階から赤い米を炊いて食べるのが一般的である。農作業の際には炊いた米をバナナの葉で包んで仕事場まで持ちはこび、現地で食すことも多い。食事の味付けは基本的に辛い、すっぱい。甘いものは好まれない。

肉に関しては、豚・牛・鶏・アヒル・川魚・犬・蛙・蛇などを食べる。またサワガニを食べることも多い。タケムシ(ガの幼虫)をスープにして食すこともある。さらに鶏を殺した際に出る血を寒天状に固めて食べることもある。野菜は筍・大根・かぼちゃ・芋・冬瓜^{とうがん}などをよく食べる。かぼちゃの茎を似て食べることも多い。果物はマンゴー・パイナップル・バナナ・梨・柑橘類などを食べる。

0.1.3.3 住居

住居については、集落内では木材で組まれた高床式住宅が一般的である。従来は「ロングハウス」と呼ばれる大家族が居住できるような細長い家屋が作られていたようだが、最近では減少している。高床式のため、一階部分は家畜のスペースあるいは重機などが置かれ、二階部分で人間が生活する。家庭内にトイレは基本的になく、通常隠れたところに排便をするスペースを設けてある。

人民政府付近の基諾郷中心部では、建物はレンガ造り(その上をセメントで固める)か木材で組まれている。近年古い家屋を取り壊して新しく建て直しているため、レンガ造りが一般的になりつつある。レンガ造りの住居は長屋のようなタイプが一般的で、一軒を二階建てにした家屋を十軒ほど連ねるタイプか、あるいはアパートのような仕組みで四階建てにするタイプが通常である。

0.1.3.4 衣服

チノ族の伝統的な衣服は男性・女性ともに太陽をモチーフとしたもので、綿密な刺繍が施されている。しかし、これは各村落で異なる。以下は全体的な傾向を述べる。

男性は上下とも白地を基調とした服を全身にまとう。上着の背中の部分に太陽の刺繍が施されているものが多い。黒色のターバンのような帽子をかぶるこ

ともある。現在の男性が伝統的衣装を着るときは基本的に 0.1.3.6 (p. 6) で述べるトモク節のときだけである。日常生活において伝統的衣装を着るのはまれで、通常は洋服を着ている。

女性は頭に白を基調とした三角帽をかぶり、上半身は黒・青・赤・緑の刺繍がライン上に入った衣服を着る。下半身は黒のスカートを履き、⁹ 脛にも黒のゲートルをはく。現在の女性も通常は洋服を身に付け、伝統的な衣装を着るときは基本的にトモク節のときのみである⁹。ただし、年寄りの女性は日常も伝統的衣装を身につけている場合が少なくない。

女性は旧来は耳たぶに穴を開け、イヤリングもしくは花をつける習慣があった。現在はその習慣はなく、若い女性で耳に穴を開けるものはいない。50 代以上の女性でもイヤリングをつけていないことがほとんどであるが、昔開けた穴が今も残っている人が多い。

男女共通して、日常的に手製の肩掛けかばんを用いる¹⁰。全体は白を基調とし、側面部には複雑な模様を刺繍してある。また両隅に太陽をモチーフとした図柄が刺繍されている。

0.1.3.5 恋愛・結婚

恋愛・結婚は自由に行われる。特に制限はない。王・薛・田(2000: 242–243)などによると、チノ族は伝統的に父系家長制を中心とした一夫一婦制をとっている。伝統的には男女とも 15, 16 歳になると、成年の儀式を執り行い、複雑なプロセスを経て、成人の衣服をまとい始める。成人服をまとい始めて、ようやく公社のメンバーの資格を持ち、かつ恋愛をする権利も有した。

伝統的には成年式をするような年齢の若い男女は結婚までに 3 段階の恋愛プロセスがあった。すなわち、「巴漂」(思いをしのばせ密会する段階)→「巴宝」(愛情を公開する段階)→「巴里」(同棲の段階)である。同棲の後、双方の愛情がむつまじくなると、男性は女性宅に赴き、掃除などを行いつつ、世間にやがて結婚することを知らしめる。その後自らの父親もしくは母方の伯父を妻方へ派遣し、妻方の両親に結婚の承諾を得させる。妻方の両親が承諾すると、結婚の時期を決定する。このようなプロセスを伝統的に行っていたため、結婚後、離婚するものは少なかった。

現代の若者では以上のような伝統的なプロセスを踏む者は少ないと思われる。漢族などと同様の「現代的」な結婚のスタイルをとることが多い。結婚の制限はやはり現在でもなく、漢族・タイ族・ハニ族などとも通婚している。恋愛の段階から、相手方の家に家族同様に出入りすることも一般的である。また近年

⁹ この点が補遠山のチノ族と異なる。補遠山のチノ族女性は現在も伝統的衣装をまといることが多い。

¹⁰ 西雙版納一帯の少数民族は同形のかばんを持ち歩いている。しかし、それぞれの民族に特徴的な模様が施されているため、かばんでどの民族であるかがあらかじめ判別できる。

は離婚率も上昇している。特に集落内で農作業をしている人の間では結婚年齢は低い。基諾郷の人民政府が置かれている基諾郷中心部で商店や公的な仕事を持っている人たちの結婚年齢は集落内生活者に比べて高い。

0.1.3.6 葬礼・埋葬・祭礼行事

王・薛・田(2000: 243)によると、チノ族は伝統的に死者が出ると、長老が非常に太い幹の木を伐り、幹の中央を中に死者を安置できるほどに彫り、それを棺とする。そこに死者が生前愛用していた生活用品を入れる。棺は1メートル程度の深さに掘られたところに土葬されるが、すぐには土をかぶせず、その上に小さな竹製の小屋を作る。死者の生活用具などはすべてこの竹製の小屋に置く。小屋の中には遺族が祭礼を行うための竹製のテーブルを置く。遺族は死者に対する哀悼の意を示すため、毎日テーブルに食事を供えるが、村によってはそれを毎日3回、死後1年から3年にいたるまで行うところもある。3年後はこの小屋を取り潰し、先に亡くなった者とともに埋葬してもよい。

現在ではこのような埋葬法が逐一行われているとは限らないが、死者が出ると、遺族ならびに遺族に近い友人は死後3日間は死者に付き添わねばならないとされている。

また、チノ族の祭礼行事は数種あるが、その最大の行事が「トモク節」と称される新年を祝う祭である。毎年2月6日前後に行われ、近隣集落から多くの人々が集まる。チノ族は太陽神を元来信仰しており、それを祭る太鼓を叩いて、新年の訪れを祝う。



図2: 悠楽チノ族(左、中央)と補遠チノ族(右) [2004年2月、中央は玉納氏]

0.2 チノ語について

0.2.1 チノ語の先行研究

チノ語は正式に民族として「認められた」歴史が浅いためか、言語研究の歴史も長くない。1977年ごろ、「チノ族民族認定工作」が行われた際、民族学・宗教学などとともに言語学的な調査も施された。その言語学的調査のリーダーが雲南民族学院の蓋興之である。蓋は数度の調査を行い、1981年の言語学雑誌『民族語文』に「基諾語概況」という論文を発表した。

この論文を受け、チノ語がどの系統に属するかという議論が起こり、1983年、David Bradley が“The Linguistic Position of Jinuo”という論文を発表している。このデータは蓋(1981)を基にしている。

しかし蓋(1981)はデータに不十分な点も多く、蓋自身もそれ以降の調査によって大きくデータを修正している。その修正された研究でもっとも重要なものが、1986年に出版された『基諾語簡誌』である。蓋(1986)は、多くのチベット・ビルマ(Tibeto-Burman, TB)語学者にとって、比較研究をするうえできわめて有用な存在となった。とくにロロ・ビルマ(Lolo-Burmese, LB)諸語比較研究の上では、チノ語が常に参考にされるようになった。しかしこれ以降、チノ語自身に言及された先行研究は、管見の及ぶ限り、筆者のものを除いて、わずか4点にすぎない(蓋 1987, Thurgood 1989, 西田 1989, 蓋 1998)。

蓋(1987)はチノ語の文のニュアンスについて、Thurgood(1989)はチノ語の系統について、それぞれ論じている。西田(1989)は蓋(1986)を元にチノ語の構造を簡潔にまとめているが、西田教授自身の見解も含まれていて興味深い。蓋(1998)は曼雅下位方言の概要を記している。

筆者はこれらの先行研究を引き継ぐ形で、チノ語研究を進めてきた。しかし、いずれも独自の調査データと方法を用いている。これまで国内外の学会等での口頭発表および論文で、2000年よりチノ語の音韻論および形態統語論の問題を論じてきた。その一覧については参考文献(p. 176)を参照されたい(林範彦ないし Hayashi, Norihiko の項目を参照)。本書の部分的な各項目については、筆者がこれまで公開した発表資料ないし論文を大幅に加筆・改訂しているものである。なお、ここでは具体的な節との対応関係は省略しておく。

本書は筆者のこれまでの研究を総合する形で、チノ語の基礎的な構造を記述していく。ここではこれまで筆者が発表してきたデータについても改訂が加わっていることも断っておく。

0.2.2 チノ語の系統

チノ語はシナ・チベット語族(Sino-Tibetan)チベット・ビルマ語派(Tibeto-Burman)ロロ・ビルマ語支(Lolo-Burmese)に属すると考えられる。ロロ・ビルマ語支がチベット・ビルマ語派で設定できるという考え方は Shafer(1972), Benedict(1972),

Matisoff (2003) をはじめとして、中国の諸研究にも広く浸透している。

しかし、更なる下位語群の設定や、チノ語を含む具体的な言語の帰属に関する問題は各研究者により意見の一致を見ない部分も多い。ここでは、図3に、先行研究 (Bradley 1997) からチノ語の系統的位置を引用しておく。

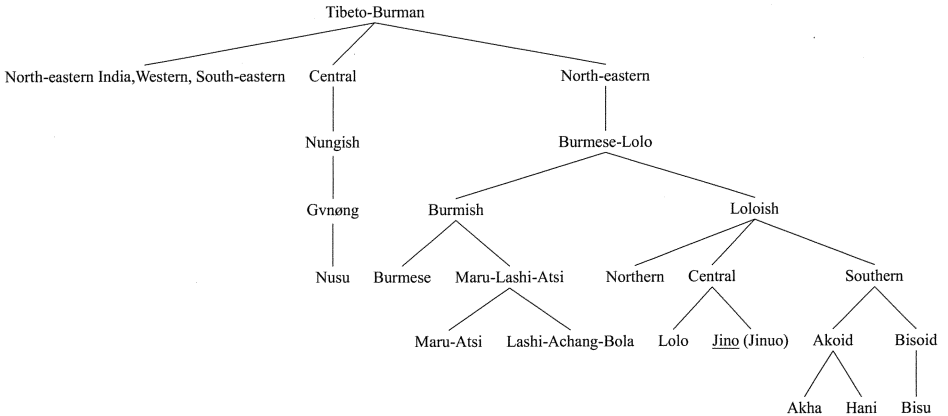


図3: Bradley(1997)における系統分類 [本書筆者により簡略化]

先行研究では口語群に属するとするものが多い。確かに開音節を基調とする音節構造や語構成の面で口語群の特徴をチノ語は持っていると考えられる。しかし、筆者としては口語群内でもかなりビルマ語群に近い一種であると考えている¹¹。これについては羅 (1994) も具体的な理由については示していないが、指摘している。

0.2.3 チノ語の方言

チノ語にも大きく分けて2つの方言がある。すなわち、悠楽方言と補遠方言である。

悠楽方言は景洪市中心部から南東へ約30km程度入った基諾族郷一帯で話される方言である。チノ語話者の約9割がこの方言を話すとされる。基諾族郷一

¹¹ 東・東南アジアでは有史以来、劇的な民族移動が繰り返され、民族の接触および民族間の通婚に伴う、言語接触ならびに言語の消滅・融合・発生が各地で見られたと考えられる。その立場から考えれば、そもそも東・東南アジア地域において系統樹モデルを用いた言語系統論そのものが成立しないという見方もある (LaPolla 2001, Matisoff 2001)。

例えば、Benedict (1972) はシナ・チベット語族がチベット・カレン語系 (Tibeto-Karen) と漢語系 (Sinitic) に分かれ、チベット・カレン語系が更にチベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) とカレン語派 (Karenic) に分けられるところまでは系統樹モデル的であるが、チベット・ビルマ語派内ではカチン語を中核 ('Linguistic Crossroad') にすえ、放射線状に様々な言語群が配置されるというモデルを提示しており、系統樹を用いていない。また Matisoff (1978) もチベット・ビルマ語のデータからは明瞭な系統樹を描くことはできないと述べている。

帯には大小数十の村落が存在する。チノ族自身の印象として個々の村落の音や語彙が若干異なるが、全体として相互のコミュニケーションが成立するというのである。ただし、同じ悠楽方言の話者でも、別の村の言葉を「汚い」と言ったり、「よくわからない」と感じることも多いようである。

さらに悠楽方言内部でも中心から離れた山村で話される茄碼下位方言や巴萊下位方言などはやや特徴的であるとされる。しかし、これまで詳しい資料は筆者を含め、提示されたことはない。また筆者の聞き取りの印象では巴卡下位方言と洛特下位方言の形式は非常に近似している。

もう一つの方言である補遠方言は景洪市中心部から北東へ約 100km 程度入った勐旺郷一帯で話される方言である。チノ語話者の約 1 割がこの方言を話すとされる。勐旺郷のチノ族の村落は更に大きく科聯・壩岡・壩南の 3 つに分かれる。筆者の聞き取りによると、壩岡・壩南は元来同じ集落であったものを近年 2 つに分割したため、言語としてはほぼ同一の下位方言に属すると考えられる。科聯は壩岡・壩南とはやや異なる。科聯下位方言と壩岡・壩南下位方言の話者は相互に通話するが、形式はかなり異なるようである。科聯下位方言は悠楽方言の巴卡下位方言に語彙的にはやや近い特徴をもっている。しかし、補遠方言に属するこれら 2 つの下位方言と悠楽方言との差異は音韻、形態、統語の各側面において見られるようである。

以下、仮説的に図 4 にチノ語の下位方言に関する分類を系統樹的に示す。しかし、詳細についてはチノ語下位方言群のデータの綿密な検討を必要とするため、具体的な検討は今後の課題としたい。

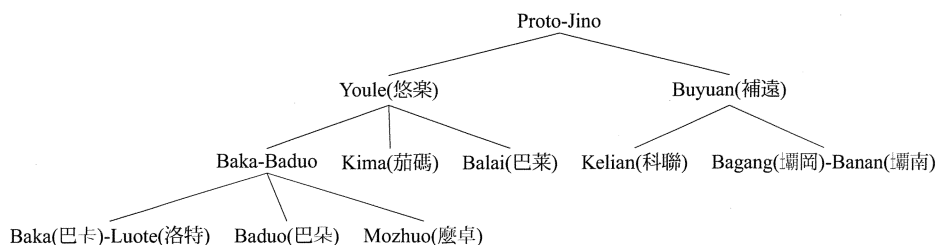


図 4: チノ語下位方言群の系統的分類 (仮説)

以降、本書ではチノ語悠楽方言のデータの記述を行う。よって、特に明示しない限り、「チノ語」という表記のみでチノ語悠楽方言を指すことにする。

0.2.4 チノ語の書記法

チノ語がまとまった書記法で書き記されたことはこれまでない。しかし古来、チノ族は牛皮に文字を書いたが、空腹になった者が牛皮を食べてしまったので、現在では文字を知るものがない、という伝説が今に残っている。この伝説の真偽は定かではない。

ただ、竹の皮をはいで編むことによって、特定のメッセージを送ることがあったようだ。しかし、これはチノ語を自由に表記できる体系ではなかった。現在では用いられていないようだ。

蓋がチノ語の音素分析を整理し、ラテン・アルファベットを用いて創作した「チノ語文字方案」がある。これは現在政府が整理しているチノ語の口頭伝承を筆記する際に用いられているシステムである。しかし、一般にはまったく普及していない。

0.2.5 チノ語の使用状況

チノ語は現在多くのチノ族によって話されるが、その使用状況は様々である。

まず世代の面から見ると、高い年齢になればなるほどチノ語でのみ会話することが多い。居住地域が村落であれ、人民政府付近であれ、老年層はほぼチノ語でのみ会話している。1950 年前後に生まれた世代も同様にチノ語でのみ生活しているが、買い物や公用で用いる言語は漢語雲南方言景洪下位方言（以下、景洪漢語）であることも多い。

青年層以下の状況は基本的に二分される。人民政府付近に居住する 1970 年代前後生まれの青年層ではすでにチノ族でありながらチノ語を話すことができない者もいる。この世代もかなりの割合でチノ語を流暢に話すか、多くは家庭内でのみ、あるいは老年層との会話でのみである。チノ語を流暢に話すことができる青年チノ族同士でも日常的に景洪漢語を話すことが多い。1990 年代以降に生まれた若年層ではチノ語をともに話す者がかなり少ない。特に人民政府付近に住む若年層のほとんどは景洪漢語でのみ生活していると言って過言ではない¹²。基諾郷中心部におけるチノ語は消滅に瀕していると言えるかもしれない¹²。

一方で村落内のチノ語は比較的安定していると言える。村落内では景洪漢語を使うことはまれで、各村落で用いられるチノ語下位方言が一般的に話される。村落内では青年層以下でもチノ語を流暢に話すことができ、言語生活上チノ語の地位はかなり高い。よって、村落内のチノ語は今後も安定した状況が続くだ

¹²近年、世界の言語学の潮流に呼応する形で、中国国内でもいわゆる「消滅の危機に瀕する言語」に対する関心が徐々にではあるが高まってきている（徐 2001）。チベット・ビルマ諸語においては湖南省で主に話されるトゥチャ語や雲南省のカンタウ語などは非常に危機的状況であることが報告されている（戴 主編 2004）。基諾郷中心部では確かに漢語方言しか話せない青年層が増えてきているが、チノ語全体から見るとまだ少数派と言えよう。そのためチノ語全体を「消滅の危機に瀕する言語」と位置づけるのは尚早である。

ろう。しかし、チノ語の単一言語話者は青年層以下においては皆無と考えてよい。基諾郷の小学校の就学率は村落内でもほぼ 100 パーセントに近く、漢語を習得する機会はいまやすべてのチノ族に平等に与えられていると言ってよい。識字率も高くなっている。そのため、村落内のチノ族にとっても漢語の影響は少なからず存在すると考えられる。

社会言語学的に見ると、とくに青年層ではコードスイッチングが頻繁に起こる。基諾郷中心部では各村落から移住してきている人が多いため、通話が可能であるにも関わらず、青年層は景洪漢語で会話することが多い。会話の場にチノ族しかいない場合でも景洪漢語が話されることも多い。宴会時や食事のときはチノ語で会話することがやや多くなることもある。村落内は上述したとおり、チノ語でいかなるときも会話することが基本である。

0.1.2.2 (p. 2) で述べたように、チノ族は歴史的に傣族(タイ・ルー族)によって統治されたため、タイ・ルー語(西雙版納傣語、以下では「ルー語」)¹³を話することができる者も多かった。現在ではルー語を話すことのできるチノ族はまれであるが、現代のチノ語においてもルー語起源の語彙が散見される。しかし、文法の面ではルー語からの影響は比較的少ないと考えられる。むしろ、上述したように、漢語を話することができる者が多いことから、語彙・文法の両面において漢語からの影響を圧倒的に受けていると言えよう。

なお、チノ語の使用状況ないし社会言語学的情報については戴ほか(2007)に詳しい。特に統計的データなどについては現時点で最新の情報であるため、参考になる。

0.3 本書で採用する方法と構成について

0.3.1 本書のデータと方法

本書は 2000 年 7 月から 2008 年 8 月までに断続的に行った現地調査によって得られたデータに基づいている。データは調査票に基づく語彙調査および文法項目調査によって得られたものと、会話等の録音を書き起こした自然発話の 2 種が含まれる。

筆者の調査のすべてに関わっていただいたのは王阿珍氏(1980 年生、女性。チノ名 tʃə⁵⁵mo⁴⁴)である。王阿珍氏は基諾郷パカー(巴卡)村の出身である。両親ともにチノ語悠楽方言巴卡下位方言の話者で、就学以前ではチノ語のみで生活していた。小学校入学後、漢語普通話を学習し、他村出身者とは景洪漢語で会話することが基本となっている。家族内ではチノ語で会話することが多い。

¹³ 中国における傣語は大きく西雙版納方言(タイ・ルー)と徳宏方言(タイ・ヌア)の 2 つに分かれる。これらは主に中国の研究者からはシナ・チベット語族チュワン・トン語派チュワン・タイ語支に属すると考えられている(王 1984: 210)が、中国以外の研究者はシナ・チベット語族ではなく、タイ・カダイ語族という別の語族に属する言語であると考えられている。

また自然発話のデータも本書には非常に多く含まれている。その主なデータ提供者は王阿珍氏の両親である、王志榮氏(男性。1949年生、チノ名 pao⁵⁵tfə⁵⁵)・玉納氏(女性。1950年生、チノ名 ji⁵⁵na⁴²)である。

なお、本書のチノ語データはすべて筆者の独自の現地調査による最新のものであり、また調査時期や調査対象地点も大きく異なるため、本書は蓋(1986)とは異なる文法に属すると考える。そのため必要のない限り、蓋(1986)に言及せず、筆者のデータの解釈・分析のみを提示していく。

本書は現代に流行する特定の言語理論に拠ってはいない。理論的にはきわめて中立的である。可能な限り、記述は簡潔に行い、例も過不足なく提示することを心がけた。

0.3.2 本書の構成

本書は全体で本論および付録からなる。

本論はチノ語の音論・形態論・統語論にまつわる共時的記述を行う。ここで記述は基本的に筆者の調査データに基づく。

それでは以下でやや詳細に各章の概要を紹介する。

第1章はチノ語の音論をまとめる。頭子音、介子音、主母音、末子音、声調についてそれぞれ例を提示しながら説明した。特に問題となると思われる箇所については別に扱っている。また声調交替が非常に複雑な言語であるため、やや詳細に述べた。

第2章から第5章までは形態統語論に関する記述である。

ここでチノ語文法の概略をごく簡単に述べておく。チノ語の文は非常に単純にモデル化すると、以下ようになる。

表 1: チノ語の文の基本モデル	
i) $\boxed{NP_1}$ $\boxed{NP_2}$ \boxed{VC} \boxed{SFP} . $\langle A \rangle = S$ $\langle P \rangle = O$	「 $\boxed{NP_1}$ が」 $\boxed{NP_2}$ を」 \boxed{VC} する」
ii) $\boxed{NP_1}$ $\boxed{NP_2}$ \boxed{SFP} . $\langle A \rangle = S$	「 $\boxed{NP_1}$ は」 $\boxed{NP_2}$ である」

表1について説明する。チノ語の文の形式的なタイプは2種類ある。i)は述部に動詞複合形式(Verbal Complex, VC)を含んだ、「動詞述語文」である。ii)は述部が名詞句(Nominal Phrase, NP)、あるいは名詞相当語句である「名詞述語文」である。すなわち、チノ語も他の多くの諸言語と同様、名詞と動詞が文の骨格をなす。

第2章では表1であげた形式のうち、名詞句(NP)について記述する。名詞句は基本的に「指示詞」「名詞」「数量詞」「後置詞」の4要素の合成によって構成されることを例示して述べる。

第3章では表1であげた形式のうち、動詞複合形式 (VC) について記述する。チノ語の動詞複合形式は極めて膠着性の高い性質を持つことを記述していく。

第4章では表1では明示されていないが、名詞句とも動詞複合形式とも呼びがたい3つの文法範疇、すなわち、形容詞、副詞、疑問語について記述する。

第5章では表1で示されているように、文末に用いられる助詞類 (SFP) について記述する。またチノ語でも他の言語同様、複文を作ることができる。その際の従属節末に用いられる接続助詞についてもここで記述する。

第6章はチノ語の文法現象における諸問題を扱っている。主に「語順と情報構造」「疑問」「使役」「動詞連続構造」などについて記述している。使役、疑問などについては第3章でも若干言及しているが、第6章での記述のほうがより総合的で詳細なものとなっている。

最後に付録を加えた。付録はそれ自体で独立した構成となっている。本書の参考となるよう、チノ語悠楽方言の分類基礎語彙を示してある。

音節構造の各スロットに入る具体的な子音、および調音における注意点に関して以下で述べる。

1.2.1.1 C₁ (頭子音)

表 1.1 のすべての子音が入りうる。各系列の音価などは以下の通りである。

[子音音素の特徴]

破裂音 /p/ [p], /ph/ [p^h], /t/ [t], /th/ [t^h], /k/ [k], /kh/ [k^h] である。有声音はないが、無気音は半有声音に聞こえることがある。有気音は閉鎖の開放後、若干の気音が観察される。

破擦音 /ts/ [ts], /tsh/ [ts^h], /tʃ/ [tʃ~tʃ^s], /tʃh/ [tʃ^h~tʃ^h], /tʃ/ [tʃ], /tʃh/ [tʃ^h] である。漢語からの借用で、漢語普通話ピンインの zh, ch は /tʃ/, /tʃh/ に、j, q は /tʃ/, /tʃh/ に対応する。有声音はない。

鼻音 /m/ [m], /m̥/ [m̥m], /n/ [n], /n̥/ [n̥n], /ɲ/ [ɲ], /ɲ̥/ [ɲ̥ɲ], /ŋ/ [ŋ], /ŋ̥/ [ŋ̥ŋ] である。有声と無声の対立がある。無声鼻音は、入りわりに無声音がでるが、出わたりが有声になる。/ŋ/, /ŋ̥/ は後舌母音としか結合しない。

側面音 /l/ [l], /l̥/ [l̥l] である。有声と無声の対立がある。無声側面音は、やはり入りわりに無声音がでるが、出わたりが有声になる。/l/ はいわゆる「明るい l」である。

摩擦音 /f/ [f], /v/ [v], /s/ [s], /z/ [z], /ʃ/ → [ç]/ __[-back], [ʃ]/ elsewhere, /r/ [z], /ç/ [ç], /j/ [j~j̥], /x/ [x], /ɣ/ [ɣ] である。/f/ はほとんどが借用語に現れるが、若干固有語にも見られる。/v/ は /-u/ の前に置かれると、音声的にかなり弱く [v~w] 程度にしか聞こえないことが多い。/z/ は後舌母音としか結合しない。/r/ は後述するように C₂ の位置にも現れるが、音価は異なる。頭子音としての /r/ は漢語の借用語にしか現れない。/j/ は /-i/ の前で [j] のように発音されることが多い。/ɣ/ はほとんど消えかかっている音素である¹。

半母音 /w/ [w] である。漢語の借用語にしか現れない。

以下、各頭子音について例を掲げよう。

[破裂音]

/p/ : /pe³³/ [pe³³] 「分ける」、/pa⁵⁵/ [pe⁵⁵] 「担ぐ」、/pi⁵⁵/ [pi⁵⁵] 「与える」

/ph/ : /phe⁴²/ [p^hei⁴²] 「付き添う」、/pha⁴²/ [p^he⁴²] 「壊す」、/phi⁵⁵/ [p^hi⁵⁵] 「吐く」

/t/ : /te⁵⁵/ [te⁵⁵] 「見る」、/to³³/ [tō³³] 「出る」、/ti⁴²/ [ti⁴²] 「重ねる」

¹現在のチノ語では /ɣw⁵⁵/ 「だけ、のみ」をあらわす語にのみ見られる。

- /th/ : /the⁴²/ [t^he⁴²] 「(手で軽く)叩く」、/tho⁵⁵/ [t^ho⁵⁵] 「余る」、/thi⁵⁵/ [t^hi⁵⁵] 「1」
 /k/ : /kø⁵⁵/ [kø⁵⁵] 「だます」、/ka⁵⁵/ [kø⁵⁵~ka⁵⁵] 「追いかける」、/kw⁵⁵/ [kw⁵⁵] 「(雷などか)鳴る」
 /kh/ : /khø⁴⁴/ [k^hø⁴⁴] 「恐れる」、/kha⁴²/ [k^he⁴²~k^ha⁴²] 「(太陽か)照りつける」、/khu³³/ [k^hu³³] 「払い落とす」

[破擦音]

- /ts/ : /tsø⁵⁵/ [tsø⁵⁵] 「編む」、/tso³³/ [tsø³³] 「家」、/tsi⁴⁴/ [tsi⁴⁴] 「吹く」
 /tsh/ : /tsha⁵⁵/ [ts^hø⁵⁵] 「譲る」、/tsho⁴²/ [ts^ho⁴²] 「差し込む」、/tshi⁵⁵/ [ts^hi⁵⁵] 「洗う」
 /tʃ/ : /tʃø⁴²/ [tʃø⁴²~tʃø⁴²] 「生きる」、/a³³tʃa⁵⁵/ [e³³tʃe⁵⁵~e³³tʃe⁵⁵] 「料理」、/pu⁵⁵tʃu⁵⁵/ [pu⁵⁵tʃu⁵⁵~pu⁵⁵tʃu⁵⁵] 「虫」
 /tʃh/ : /tʃhø⁴⁴/ [tʃ^hø⁴⁴~tʃ^hø⁴⁴] 「話す」、/tʃha⁵⁵/ [tʃ^he⁵⁵~tʃ^he⁵⁵] 「煮る」、/tʃhu³³/ [tʃ^hu³³~tʃ^hu³³] 「弓く」
 /tʃ/ : /a³³tʃi⁵⁵/ [e³³tʃi⁵⁵] 「少ない」、/tʃe⁴⁴/ [tʃe⁴⁴] 「濡れる」、/a⁵⁵tʃe⁵⁵/ [e⁵⁵tʃe⁵⁵] 「生の」
 /tʃh/ : /tʃhi³³/ [tʃ^hi³³] 「旗」、/tʃhe⁵⁵/ [tʃ^he⁵⁵] 「^く衝える」、/a⁵⁵tʃhe⁴²/ [e⁵⁵tʃ^he⁴²] 「狭い」

[鼻音]

- /m/ : /m³³/ [m³³] 「作る」、/mi⁵⁵/ [mi⁵⁵] 「火」、/mu³³ʃi⁵⁵/ [mu³³ʃi⁵⁵] 「砂」
 /ɱ/ : /ɱ⁵⁵/ [ɱɱ⁵⁵] 「言う」、/ɱi⁴²/ [ɱmi⁴²] 「(火を)消す」、/ɱu⁵⁵/ [ɱmu⁵⁵] 「吸う」
 /n/ : /n⁵⁵ɔ⁴⁴/ [n⁵⁵ɔ⁴⁴] 「いる; ある」、/nɔ⁴²/ [nɔ⁴²] 「痛む」、/na⁴²/ [ne⁴²] 「早い」
 /ɲ/ : /ɲ⁵⁵/ [ɲɲ⁵⁵] 「2」²、/ɲɔ⁴²/ [ɲɲɔ⁴²] 「聴く」、/a³³ɲa⁵⁵/ [e³³ɲne⁵⁵] 「深い」
 /ɳ/ : /ɳi⁵⁵pu⁴⁴/ [ɳi⁵⁵pu⁴⁴] 「鼻水」、/ɳø⁵⁵/ [ɳø⁵⁵] 「粘る」、/ɳø⁴²/ [ɳø⁴²] 「忘れる」
 /ɳ/ : /ɳi⁵⁵/ [ɳɳi⁵⁵] 「2」³、/ɳe⁵⁵/ [ɳne⁵⁵] 「つかむ」、/a³³ɳø⁵⁵/ [e³³ɳɳø⁵⁵] 「空っぽの」
 /ŋ/ : /ŋa³³ɔ⁵⁵/ [ŋa³³ɔ⁵⁵] 「鳥」、/ŋɔ⁵⁵/ [ŋɔ⁵⁵] 「5」、/ŋu⁴²/ [ŋu⁴²] 「どこ」
 /ŋ/ : /ŋa⁵⁵/ [ŋŋe⁵⁵~ŋŋa⁵⁵] 「もぎ取る」

[側面音]

- /l/ : /le⁴²/ [lei⁴²] 「アルミニウム」、/lø⁵⁵/ [lø⁵⁵] 「向こうの方」、/lɔ⁴²/ [lɔ⁴²] 「来る」
 /l/ : /le⁴²/ [lei⁴²] 「学ぶ」、/lø⁵⁵/ [lø⁵⁵] 「晒す」、/lɔ⁵⁵/ [lɔ⁵⁵] 「(~か)月」

²/ɳi⁵⁵/という形式もあるが、巴卡下位方言話者は主にこの形式を用いる (2.5.1, p. 48 も参照)。

³/ɳ⁵⁵/という形式もあるが、巴朶下位方言話者は主にこの形式を用いる (2.5.1, p. 48 も参照)。

[摩擦音]

- /f/ /a⁴⁴fu⁴⁴/[v⁴⁴fu⁴⁴]「先に」、/mjən³⁵fən⁴²/[m³⁵en³⁵fən⁴²]「小麦粉」 < CH. miànfěn、
/to³⁵fu⁴²/[to³⁵fu⁴²]「豆腐」 < CH. dòufu
- /v/ /vi⁴⁴/[vi⁴⁴]「(使役接辞)」、/va⁵⁵/[və⁵⁵]「豚」、/vu³³ta⁵⁵/[vu³³tə⁵⁵~vu³³tə⁵⁵~wu³³tə⁵⁵]「はげ」
- /s/ /se⁵⁵/[sei⁵⁵]「撒く」、/sa³³kə⁵⁵/[sə³³kə⁵⁵]「ゴミ箱」、/so⁴²/[sɔ⁴²]「響く」
- /z/ /za⁵⁵/[zə⁵⁵]「降りる」、/zo⁵⁵/[zɔ⁵⁵]「歩く」、/zo⁵⁵ku⁵⁵/[zɔ⁵⁵ku⁵⁵]「子供」
- /ʃ/ /ʃi⁴²/[ʃi⁴²~ʃi⁴²]「死ぬ」、/ʃɛ⁴²/[ʃɛ⁴²]「鉄」、/ʃɔ⁴²/[ʃɔ⁴²]「探す」
- /r/ /ran³³/[zan³³]「染める」 < CH. rǎn, /wen⁵⁵ro⁴⁴/[wen⁵⁵zɔ⁴⁴]「優しい」⁴ < CH. wēnróu
- /ç/ /çi⁴⁴/[çi⁴⁴]「これ」、/ça⁵⁵/[çə⁵⁵]「住む」、/çu⁴²/[çu⁴²]「養う」
- /j/ /ji³³tʃho⁵⁵/[ji³³tʃhɔ⁵⁵~ji³³tʃhɔ⁵⁵]「水」、/ja⁴²/[jɛ⁴²]「鶏」、/ju⁴²/[ju⁴²]「買う」
- /x/ /xe⁵⁵/[xei⁵⁵]「立つ」、/xo⁴²/[xɔ⁴²]「(雨が)降る」、/xə³³tshə⁵⁵/[xə³³tsʰə⁵⁵]「おかず」
- /ɣ/ /ɣw⁵⁵/[ɣw⁵⁵~w⁵⁵]「~のみ」

[半母音]

- /w/ /we³⁵/[wei³⁵]「胃」 < CH. wéi, /wai³⁵ko⁴⁴/[wei³⁵ko⁴⁴]「外国」 < CH. wàiguó、
/waŋ³³/[wɛŋ³³]「網」 < CH. wǎng

1.2.1.2 C₂ (介音)

チノ語では -r-, -j- の2種類の介音がある。それぞれ以下略述しておく。

/-r-/ 音声的には [r] である。頭子音 p-/ ph-/ m-/ m̥-/ k-/ kh- と結合する。固有語にしか見られない。/mr-/、/m̥r-/、/kr-/、/khr-/については語彙数は多くない。/pr-/は結合母音に制限はないようだが、/phr-/は後舌母音に偏りがある。

/-j-/ 音声的には [j] である。頭子音 p-/ ph-/ m-/ m̥-/ t-/ th-/ l-/ k-/ kh- と結合する。t-/ th-/ l- と結合した例は基本的に漢語からの借用語である。なお、結合母音は後舌母音に偏りがある。特に、固有語に関しては後舌母音としか結合しない。

⁴この語は漢語の影響で [wen⁵⁵zou⁴⁴] のように発音されることもある。

以下、頭子音と介音との結合例を掲げる。

[-r-]

/pr-/ /pre⁴²/ [pre⁴²] 「飛ぶ」、/a⁵⁵pra⁴²/ [e⁵⁵pre⁴²] 「まばらである」、/a⁵⁵pru⁴⁴/ [e⁵⁵pru⁴⁴] 「いっぱいだ」

/phr-/ /a⁵⁵phra⁵⁵/ [e⁵⁵phr⁵⁵] 「板」、/a³³o⁵⁵phrə⁴⁴/ [e³³o⁵⁵phr⁴⁴] 「下の方」、/phru³³/ [p^hru³³~p^hrəu³³] 「金」

/mr-/ /mrə³⁵/ [mrə³⁵] 「おいしい」、/mrə³³/ [mrə³³] 「きれいだ」、/mrə⁵⁵/ [mrə⁵⁵] 「なめる」

/m̥r-/ /m̥rə⁵⁵/ [m̥mrə⁵⁵] 「(煙などが)立ち上る」、/m̥rə⁵⁵/ [m̥mrə⁵⁵] 「久しい」、/m̥ru⁵⁵/ [m̥mru⁵⁵] 「(頭が)ふらふらする」

/kr-/ /a³³krə⁵⁵/ [e³³krə⁵⁵] 「すべりやすい」、/krə⁵⁵/ [krə⁵⁵] 「歌う」、/krə⁴⁴/ [krə⁴⁴] 「落ちる」

/khr-/ /a⁵⁵khri⁵⁵/ [e⁵⁵k^hri⁵⁵] 「糞」、/khrə⁵⁵/ [k^hrə⁵⁵] 「置く」、/a³³khro⁵⁵/ [e³³k^hrə⁵⁵] 「穴」

[-j-]

/pj-/ /pia⁴²/ [p^je⁴²] 「話す」、/a³³pjo⁵⁵/ [e³³p^jə⁵⁵] 「文字、紙」、/ne⁵⁵pju⁵⁵/ [ne⁵⁵p^ju⁵⁵] 「エビ」

/phj-/ /sa³³phja⁵⁵/ [se³³p^hjə⁵⁵] 「鳥かご」、/phjə⁵⁵/ [p^hjə⁵⁵] 「(風が)吹く」、/phju⁵⁵/ [p^hju⁵⁵] 「焙り焼く」

/mj-/ /mjən³⁵fen⁴²/ [m^jen³⁵fen⁴²] 「小麦粉」 < CH. miànfěn、/a⁵⁵mja⁴²/ [e⁵⁵m^jə⁴²] 「芽」、/mjo⁵⁵/ [m^jə⁵⁵] 「草」

/m̥j-/ /jə⁵⁵m̥jo⁵⁵/ [jə⁵⁵m̥m̥jə⁵⁵] 「(背が)高い」、/a³³m̥jo⁵⁵/ [e³³m̥m̥jə⁵⁵] 「年」、/m̥jɤ⁴⁴/ [m̥m̥jɤ⁴⁴] 「熟している」

/tj-/ /tje⁴⁴tje⁴⁴/ [t^je⁴⁴t^je⁴⁴] 「お父ちゃん」 < CH. diē

/thj-/ /thjen⁵⁵xua⁵⁵pan³³/ [t^hen⁵⁵xue⁵⁵pen³³] 「天井」 < CH. tiānhuābǎn、/thja³⁵vu⁴⁴/ [t^həo³⁵v^u⁴⁴] 「踊り」 < CH. tiàowǔ

/lj-/ /ljen³⁵ai³⁵/ [l^jen³⁵ai³⁵] 「恋愛」 < CH. liàn'ài、/si³⁵ljao³⁵/ [s^j³⁵l^jəo³⁵] 「飼料」 < CH. sìliào、/tan³³ljaj³⁵/ [ten³³l^jəj³⁵] 「肝っ玉」 < CH. gānliàng

/kj-/ /a⁵⁵kja⁴²/ [e⁵⁵k^jə⁴²] 「静かだ」、/kjo⁵⁵/ [k^jə⁵⁵] 「思う」、/kju⁵⁵/ [k^ju⁵⁵] 「9」

/khj-/ /tsha⁵⁵khja⁴²/ [ts^hə⁵⁵k^hjə⁴²] 「脅す」、/khjo⁵⁵/ [k^hjə⁵⁵] 「6」、/a³³khju⁵⁵/ [e³³k^hju⁵⁵] 「痩せている(人)」

1.2.1.3 C₃ (末子音)

チノ語では -n, -ŋ の2種類の末子音がある。いずれも漢語あるいはルー語からの借用語のみに現れる。それぞれについて以下略述しておく。

/-n/ 音声的には [n] である。母音 -i-, -(u)e-, -(u)a- と結合する。

/-ŋ/ 音声的には [ŋ] である。母音 -i-, -(u)a-, -o-, -x- と結合する。

それでは以下、母音と末子音との結合例についてそれぞれ見ていこう。

[-n]

/-in/ /jin³⁵/ [jin³⁵~çin³⁵] 「手紙」 < CH. xìn, /tɕin³³tsi⁴⁴/ [tɕin³³tsɿ⁴⁴] 「スカート」 < CH. qúnzi, /tho⁵⁵lin⁴⁴/ [tho⁵⁵lin⁴⁴] 「落花生」 < XD. tho⁵din¹

/-en/ /ti³³ren⁴²/ [ti³³zen⁴²] 「敵」 < CH. dīrén, /tɕhen³³mɛ³³/ [tɕhɛn³³mɛ³³] 「ペンチ」 < CH. qiánzi, /wen³³tɕaŋ³⁵/ [wen³³tɕeŋ³⁵~wen³³tɕɛŋ³⁵] 「蚊帳」 < CH. wénzhàng

/-uen/ /pu³³juen³³/ [pu³³juen³³] 「補遠(地区)」 < CH. bǔyuǎn

/-an/ /phan³³tsi⁴⁴/ [phɛn³³tsɿ⁴⁴] 「皿」 < CH. pánzi, /tsi³³tan³⁵/ [tsɿ³³ten³⁵] 「銃弾」 < CH. zǐdàn, /tɕhan³³tsi⁴⁴/ [tɕhɛn³³tsɿ⁴⁴~tɕhɛn³³tsɿ⁴⁴] 「スコップ」 < CH. chǎnzi

/-uan/ /tuan³³ku³⁵/ [tuen³³ku³⁵] 「半ズボン」 < CH. duǎnkù, /tɕhuan⁴²/ [tɕhuen⁴²~tɕhuen⁴²] 「船」 < CH. chuán, /kuan³⁵tsi⁴⁴/ [kuen³⁵tsɿ⁴⁴] 「壺」 < CH. guànzǐ

[-ŋ]

/-iŋ/ /phiŋ³³ko⁴²/ [phɿŋ³³kɔ⁴²] 「りんご」 < CH. píngguǒ, /tɕiŋ³⁵/ [tɕiŋ³⁵] 「一献差し上げる」 < CH. jìng

/-aŋ/ /maŋ⁴²/ [mɛŋ⁴²] 「忙しい」 < CH. máng, /tɕhaŋ⁴²/ [tɕhɛŋ⁴²] 「壁」 < CH. qiáng, /waŋ³³/ [wɛŋ³³] 「網」 < CH. wǎng

/-uaŋ/ /tɕhuaŋ³³/ [tɕhuen³³~tɕhuen³³] 「床」 < CH. chuáng, /tɕhuaŋ³³xu³⁵/ [tɕhuen³³xu³⁵~tɕhuen³³xu³⁵] 「窓」 < CH. chuānghu

/-oŋ/ /thoŋ³³/ [thɔŋ³³] 「桶」 < CH. tǒng, /thi⁵⁵joŋ⁴⁴/ [thɿ⁵⁵joŋ⁴⁴] 「しばらくの間」、/xoŋ³³ɕhi³³/ [xoŋ³³ɕhɿ³³] 「赤旗」(中国共産党の旗) < CH. hóngqí

わずかに固有語もある。

/-yŋ/ /tɕhyŋ³⁵kan³³/ [tɕhɿŋ³⁵ken³³] 「天秤」 < CH. chènggǎn, /fɿŋ⁵⁵ji³³/ [fɿŋ⁵⁵ji³³~fɿŋ⁵⁵ɕi³³] 「リウマチ」 < CH. fēngshǐ,

1.2.2 母音

チノ語の母音音素は表 1.2 のとおりである。

音節構造の各スロットに入る具体的な母音、および注意点に関して以下で述べる。

表 1.2: 母音音素一覧

i				u	u
e	ø			ɤ	o
ɛ	æ		ə	ɔ	
		a			

1.2.2.1 V₁(単母音)

単母音は前舌母音と後舌母音の2種のグループに分けられる。以下、注意点について述べる。

前舌母音 /i/→[ɿ]/ {ts, tsh, s, z} __, [ɿ]/ {tʃ, tʃh, r} __, [i]/ elsewhere, /e/ [ei~ɛ], /ɛ/ [ɛ], /ø/ [ø], /æ/ [ɶ]

/æ/をもつ語彙は少ない。

後舌母音 /a/ [a~ɐ], /ɔ/ [ɔ], /ə/ [ə], /o/ [o], /ɤ/ [ɤ], /u/ [u], /ʊ/ [ʊ]

/a/は [ɐ] で発音されることが多い。

/u/ は多くは [u] で発音される。しかし [əu] と二重母音で発音されることも多い。翻ってみると、[əu] と発音されるものの多くは [u] ととも発音される。しかし [u] と交替できない例も若干あるため、以下の二重母音の項では [əu] という音素を立てざるを得ない⁵。

母音が絶対語頭で頭子音を伴わずに現れる場合、音声的にはわずかに声門閉鎖音 [ʔ] を伴うことがある。また音節境界の前後で母音が連続する際も [ʔ] が後続母音の初頭に観察されることもある。しかし声門閉鎖音が音韻的な意味を持つことはいずれにおいてもない。

それでは以下、前舌母音・後舌母音のそれぞれについて見ていく。

[前舌母音]

/i/ 非円唇舌尖母音 [ɿ]/ {ts, tsh, s, z} __, 非円唇舌尖そり舌母音 [ɿ]/ {tʃ, tʃh, # r} __, 前舌非円唇狭母音 [i]/ elsewhere; 結合する頭子音によって、3種類の異音が実現する。

/a⁵⁵tsi⁴⁴/ [e⁵⁵tsɿ⁴⁴] 「種」、/koŋ⁵⁵si⁵⁵/ [koŋ⁵⁵sɿ⁵⁵] 「店」 < CH. gōngsī;

/tɕe³⁵tʃi⁴⁴/ [tɕe³⁵tʃɿ⁴⁴~tɕe³⁵tsɿ⁴⁴] 「指輪」 < CH. jièzhì, /no³³tʃhi⁵⁵/ [no³³tʃhɿ⁵⁵~no³³tʃhɿ⁵⁵] 「豆」;

/a⁵⁵phi⁴⁴/ [e⁵⁵p^hi⁴⁴] 「紐」、/çi⁴⁴/ [çi⁴⁴] 「これ」

/e/ 前舌非円唇半狭母音と前舌非円唇高母音からなる二重母音 [ei] ~ 前舌非円唇半狭母音 [ɛ]; 大部分の語彙で [ei] と発音されるが、一部 [ɛ] と発音されるものもある。[ei] と通常発音するものを [ɛ] と発音しても問題はない。

⁵ これは構造主義的音韻解釈では biuniqueness(二方向唯一性)の原則を破ることとなる。/əu/ の音素設定は形態の情報も含めたものになる。

- /pe³³/ [pei³³] 「分ける」、/se⁵⁵/ [sei⁵⁵] 「撒く」、/te³³/ [tei³³] 「田」; /tse³³phu⁵⁵/ [tse³³ph^hu⁵⁵] 「酒」、/a³³ke⁵⁵/ [e³³ke⁵⁵] 「おかず」
- /ø/ /khø⁴⁴/ [k^hø⁴⁴] 「恐れる」、/pø⁵⁵/ [pø⁵⁵] 「腫れる」、/sø⁵⁵/ [sø⁵⁵] 「3」、/lø⁴²/ [lø⁴²] 「脱ぐ」
- /ɛ/ /ɛ⁵⁵kɿ⁵⁵/ [ɛ⁵⁵kɿ⁵⁵] 「柱」、/a⁵⁵tɛ⁵⁵/ [v⁵⁵tɛ⁵⁵] 「風邪」、/xɛ⁵⁵/ [xɛ⁵⁵] 「8」
- /œ/ /khœ⁴²/ [k^hœ⁴²] 「する、作る」、/khroœ⁴⁴/ [k^hroœ⁴⁴] 「(服や道具を数える類別詞)」、/noœ⁴⁴/ [noœ⁴⁴] 「(文終止助詞)」

[後舌母音]

- /a/ /a⁵⁵mɛ⁴²/ [v⁵⁵mmɛ⁴²] 「(背が)低い」、/tʃo⁵⁵ka⁴²/ [tʃo⁵⁵ke⁴²~tʃo⁵⁵ke⁴²] 「アヒル」、/na⁴²/ [nɛ⁴²] 「早い」
- /ɔ/ /a³³ɔ⁵⁵/ [e³³lɔ⁵⁵] 「舌」、/ŋɔ⁴²/ [ŋnɔ⁴²] 「尋ねる」、/kɔ⁵⁵/ [kɔ⁵⁵] 「勝つ」
- /ə/ /prə⁴⁴/ [prə⁴⁴] 「怠けている」、/tə⁴²/ [tə⁴²] 「たたき切る」、/kə⁴²/ [kə⁴²] 「抜く」
- /o/ /a³³to⁵⁵/ [e³³to⁵⁵] 「羽」、/lɔ³³/ [llo³³] 「ウジ」、/ko⁴⁴/ [kɔ⁴⁴] 「売る」
- /ɤ/ 後舌非円唇半狭母音 [ɤ]; 通常の [ɤ] よりもやや狭めに発音される傾向がある。それゆえに /w/ との区別が難しい場合がある。
/a⁵⁵pɤ⁴⁴/ [e⁵⁵pɤ⁴⁴] 「前」、/tʃhɤ³³/ [tʃ^hɤ³³~tʃ^hɤ³³] 「似ている」、/la⁵⁵xɤ⁴⁴/ [lɛ⁵⁵xɤ⁴⁴] 「大きい」
- /u/ /a³³nu⁵⁵/ [e³³nu⁵⁵] 「緑」、/pu³³ki⁵⁵/ [pu³³ki⁵⁵] 「星」、/ku⁵⁵tu⁴⁴/ [ku⁵⁵tu⁴⁴] 「曲がり角」
- /u/ /u³³/ [w³³] 「蛇」、/pu⁵⁵/ [pw⁵⁵] 「閉まる」、/tu⁴²/ [tu⁴²] 「(雨などを) 浴びる」

1.2.2.2 V₂(二重母音)

二重母音は上昇二重母音、下降二重母音のいずれも存在する。それぞれを以下にまとめる。

(2) a. [上昇二重母音]; ue, ua

b. [下降二重母音]; ai, ao, xi, ou

歴史的に見れば、上昇二重母音をもつ語はすべて漢語・ルー語からの借用語である。下降二重母音をもつ語は借用語も含むが、固有語も存在する。以下にその例を挙げる。

1.2.2.2.1 上昇二重母音

ほぼすべて漢語・ルー語からの借用語と考えてよい。

- /ue/ /ʃue³³kuan³³/ [ʃue³³kuen³³] 「血管」 < CH. xuèguǎn
- /ua/ /ʃi⁴⁴kua⁴⁴/ [ʃi⁴⁴kue⁴⁴~ɕi⁴⁴kue⁴⁴] 「スイカ」 < CH. xīguā

1.2.2.2.2 下降二重母音

借用語も多いが、固有語も少なからず存在する。

/ai/ /a⁵⁵ŋai⁴⁴/ [e⁵⁵ŋei⁴⁴] 「易しい」 < XD. ŋai: /vai⁴⁴/ [vɛi⁴⁴] 「速い」 < XD. va:i, /ljen³⁵ai³⁵/ [lɛn³⁵ai³⁵] 「恋愛」 < CH. liàn'ài, /a⁵⁵lai⁵⁵/ [e⁵⁵lei⁵⁵] 「すべて」、/sa⁵⁵khai⁴²/ [se⁵⁵k^hei⁴²] 「香毛草」

/ao/ /khao⁴²/ [k^hɔ̃⁴²] 「何」、/lao³³si⁵⁵/ [lɔ̃³³sɿ⁵⁵] 「先生」 < CH. lǎoshī, /ta³⁵ɕhao⁴⁴/ [tɕ³⁵ɕ^hɔ̃⁴⁴] 「橋」 < CH. dàqiáo

/si/ /nɿ³⁵khu³⁵/ [nɿ³⁵k^hu³⁵] 「半ズボン」 < CH. nèikù⁶, /ŋw⁵⁵kɿ⁴⁴/ [ŋw⁵⁵kɿ⁴⁴] 「何、どれ」、/kha⁵⁵kɿ⁴⁴/ [k^hɕ⁵⁵kɿ⁴⁴] 「ハニ族」

/əu/ 多くの語彙で /-u/ と交換可能である。しかし、若干の語彙で /-əu/ とならなければならないものがある。

/təu³³mə⁵⁵/ [təu³³mə⁵⁵] 「蜂の幼虫」、/tho³³nəu³⁵/ [t^ho³³nəu³⁵] 「しばらく」、/təu³³/ [təu³³] 「～(する) とき」

1.2.2.3 V₃(三重母音)

本書ではチノ語に1種類の三重母音 (/uai/) を認める。

/uai/ /a⁵⁵kuai⁴⁴/ [ɕ⁵⁵kuɛi⁴⁴] 「アクワエ」(呼び名) < CH. āguài

基本的には漢語からの借用語のみに現れる。それゆえに、頭子音 k-/ kh-/ tʃ-/ tʃh-/ ʃ-/ にのみ結合しうる。例としては極めて少ない。

1.2.3 分節音のレベルで注意すべき特徴

1.2.3.1 成節鼻音

チノ語悠楽方言ではごくわずかな例であるが、m, m̥, n, n̥ が成節鼻音 (syllabic nasal) として現れうる。他の鼻音である ɲ, ɲ̥, ŋ, ŋ̥ は成節鼻音としては現れない。

成節鼻音としての m̥, n̥ も頭子音として現れるときと同様、入りわりに無声音が起こり、出わりに有声音が出る。やや出わたりの有声音部分が、頭子音として現れるときよりも弱く聞こえることが多い。

以下に例を示しておく。

(3) a. /m̥/; m³³tha⁵⁵ [m̥³³t^he⁵⁵] 「雨」、m⁴² [m̥⁴²] 「する、作る」

b. /m̥/; m̥⁵⁵ [m̥m̥⁵⁵] 「話す」

⁶漢語普通話では用いられないので、詳細はよく分からない。漢字では「内裤」と書かれるのではないか。

- c. /ŋ/; n⁵⁵to⁴⁴[n⁵⁵to⁴⁴] 「ある、いる」 d. /ŋ/; n⁵⁵[n⁵⁵] 「2」

これらは巴卡下位方言あるいは洛特下位方言話者などによく用いられる⁷。

自然発話では、成節鼻音の後に後置詞 =a⁵⁵ もしくは助詞 -a が後接した場合、後置詞ないし助詞に頭子音として成節鼻音と同じ(ただし、成節鼻音が無声鼻音の場合は調音点の同じ有声の)鼻音がかぶさることがある。

- (4) a. jo³³ma⁵⁵ tʃao³⁵-me⁵⁵-la⁴², ni⁵⁵n⁵⁵=na⁴⁴?
3PL.NOM 撮る-PAST-Q 2PL.NOM=VA

「誰かが(写真を)撮ったの、あなたたちの?」

- b. ji⁵⁵ʃi⁵⁵ tʃen³⁵ʃi³⁵=jo⁴⁴ faŋ³⁵-to⁴⁴-la⁵⁵-vu⁵⁵, o⁵⁵tʃo⁵⁵-ma⁵⁵=ɛ⁴⁴ m³³-ma⁴⁴,
昔 テレビ=より 放送する-EXP-PART-のでヨーロッパ-PL=POSS 話す-PART
kha⁵⁵=ɛ⁴⁴+mi⁵⁵ xo³⁵=ɛ⁵⁵-jo⁴⁴?
何=POSS+言葉 話す=POSS-PART

「昔テレビでやっていたのだけど、ヨーロッパの人たちが話しているのは、どんな言葉なのか分からないわ。」

(4)は無声の成節鼻音のあとに後置詞 =a⁵⁵ ないし助詞 -a が後接した例である。いずれの例も無声の成節鼻音と調音点が同じ有声の鼻音が頭子音として後続する =a⁵⁵ ないし -a にかぶさっている。

1.2.3.2 無声鼻音の有声化

無声鼻音は頭子音として現れる際、上述のとおり、入りわたりに無声音が起り、出わたり到有声音が出る。しかし、自然発話においては、入りわたりの無声部分が弱くなり、出わたりの有声部分が強くなることで、全体としては有声音として聞こえることも少なくない。

- (5) a. mi⁵⁵ʃo⁵⁵ni⁴⁴ ~mi⁵⁵ʃo⁵⁵ni⁴⁴
明日 明日

- b. so³³-mjo⁵⁵ ~so³³-mjo⁵⁵ 「3年」
3-CL 3-CL

⁷いくつかの語彙については、別の下位方言の話者では母音 -i をつけて発音される傾向がある。

i) /m/ → /mi/; mi³³tha⁵⁵[mi³³h⁵⁵e⁵⁵] 「雨」

ii) /ŋ/ → /ŋi/; ni⁵⁵to⁴⁴[ni⁵⁵to⁴⁴] 「ある、いる」

iii) /n/ → /ni/; ni⁵⁵[ni⁵⁵] 「2」

注意すべき点は、n および ŋ が -i を伴って発音される際、そのまま -i が加わるのではなく、n および ŋ に変わることである。

また(3a)の m⁴²「する」と(3b)の m⁵⁵「話す」は -i をつけて発音されることはない。特に前者は 3.2.4.1 (p. 69) で後述するように、文法化して使役の接頭辞として用いられるが、この場合も -i をつけて発音されることはない。

(5)では左右ともに用いられる。右の形式の太字の部分**は**本来の無声鼻音の入
りわたりの無声部分が弱くなった結果、有声化したものである⁸。

1.2.3.3 母音の融合

自然発話内では母音始まりの音節が前の音節の母音と融合することがある。
母音始まりの音節はそのまま保持される代わりに、前の音節の母音が脱落する
傾向がある。模式化すると(6)のとおりとなる。

$$(6) \dots CV_i + V_j > \dots CV_j$$

例は(7)のとおりである。

- | | |
|---|---|
| (7) a. $po^{33}o^{55} > po^{35}$ 「メロン」 | d. $\eta u^{55}-a > \eta a^{42}$ 「COP-PFT」
COP PFT |
| b. $no^{35}=a^{55} > na^{35}$ 「2SG.OBL=PART」 | |
| c. $a^{33}no^{55}=e^{55} > a^{33}ne^{35}$
自分(3) POSS | e. $my -a > ma^{42}$
PAST PFT |
| 「自分(3)=POSS」 | 「PAST-PFT」 |

(7a)のように2音節名詞が1音節化する場合や、(7b, c)のように代名詞と後
置詞が融合する場合はじめ、動詞複合形式において(7d)のようにコピュラと
完了助詞、(7e)のように過去と完了助詞の融合が見られる。このような例は多
く見られるわけではない。

また(6)の模式に外れる場合もある。

$$(8) mo^{33}-\eta u^{55} > mo^{35} \text{ 「NEG-COP」}$$

(8)では声調を除いてはすべて前部要素が保持されたまま融合している⁹。現
在のところ、このパターンは(7a)および(8)以外見つかっていない。

⁸全体としては声立て時間(Voice Onset Time, VOT)のずれが影響していると考えられる。無
声鼻音として発音されるときも、声帯振動が鼻音の閉鎖時間内に起こっていると考えられる。
しかし、その声帯振動の開始時間が鼻音の開放開始時間に近づけば近づくほど、聴覚印象とし
て有声鼻音により近づく。類型論的には無声鼻音よりも有声鼻音のほうが無標とみなされるた
め、全体としては無標の方向へ調音されていると考察できよう。

⁹もちろん、融合ではないという見方もある。しかし、筆者は融合であると考えている。根拠
は以下のとおりである。

(8)のような例は必ずといってよいほど、 $mo^{35}-a^{44}$ 「違う [NEG-PART]」の形で現れる。チノ
語文法においては $mo-$ は否定の接頭辞であり、自立性がないと考える。そのため、もしこれを
自立性のない接頭辞であるとする、全く自立要素のない「動詞複合形式」が存在すること
なり、文法理論内での負担が大きい。さらに $mo^{35}-a^{44}$ はすべて $mo^{33}-\eta u^{55}-a^{44}$ に言いかえが可
能である。声調も33調+55調が融合して、35調となるのは調音音声学的に容易に予想がつく。

このため現在のところ、この例を融合の一例と見なしている。もちろん、 $mo-$ と ηu^{55} のかば
ん語として見なすことができようが、これから更なる検討を施したい。

1.3 かぶせ音素のレベル

1.3.1 /T (声調)

チノ語には 55, 44, 33, 35, 42 の 5 種の声調素が認められる。音節単位で見られる声調素において注意すべき点を以下に掲げる。

- 55 調 (高平調, H) [55] 高く平らに発声する。
- 44 調 (中平調, M) [44] 2 音節語の後部要素に出現することが多い。
- 33 調 (低平調, L) [22~33] 低く平らに発声する。2 音節語の前部要素に現れることが多い。
- 35 調 (上昇調, R) [35~24] 文法機能を表す語、あるいは借用語に多い。
- 42 調 (下降調, F) [42~53] 高いところから落ちる。

それぞれの声調が用いられている例を以下に掲げる。

- (9) a. a⁵⁵phi⁵⁵ [e⁵⁵phi⁵⁵] 「祖母」、nu⁵⁵ [nu⁵⁵] 「掬う」、ɕɔ⁵⁵ [ɕɔ⁵⁵] 「100」
 b. a⁵⁵phi⁴⁴ [e⁵⁵phi⁴⁴] 「紐」、a⁵⁵tu⁴⁴ [e⁵⁵tu⁴⁴] 「つぼみ」
 c. a³³phi⁵⁵ [e³³phi⁵⁵] 「辛い」、nu³³ [nu³³] 「動く」、khu³³ [khu³³] 「払い落とす」
 d. a³³mo³⁵ [e³³mo³⁵] 「正しい」、ɕɔ³⁵ [ɕɔ³⁵] 「田畑」
 e. a⁵⁵tu⁴² [e⁵⁵tu⁴²] 「濃い」、khu⁴² [khu⁴²] 「こする」

チノ語には複雑な声調交替が見られる。本書ではそれを「音韻的動機付けによる声調交替 (Phonological Tone Alternation, 以下 PTA)」と「文法範疇に特有な声調交替 (Grammatical Tone Alternation, 以下 GTA)」の 2 種に分けて記述する。

ただ、ここで一点だけ声調交替の観点から、チノ語の音韻論における声調の位置づけに関して指摘しておきたい。チノ語では特に動詞 (複合形式) において、非常に複雑な声調交替を示す。同じ音連続であっても、前に置かれる名詞や副詞の影響、あるいは文脈等の影響により異なる声調で発話されることが多い。中には声調そのものに文法的な機能が備わっている場合もあるが、多くは声調そのものが何らかの意味を持っているわけではなく、基本的に発話内容は分節音のレベルで理解される。後述するように、確かにチノ語では多くの声調交替のパターンを示すが、必ずしもすべての発話でこのように発音されるわけではない。この意味でチノ語における声調は分節音に比べ、やや弱い意味づけがなされるべきであろう¹⁰。

¹⁰チノ語話者にとっては各下位方言間では分節音のレベルでは同じでも声調が違うという感覚があるようだ。ただ、同一下位方言内でも名詞や動詞を単独で発音した場合にはかなり明瞭に

1.3.1.1 音韻的動機付けによる声調交替 (PTA)

PTA には以下の 2 種の規則がある。それぞれの例を (10, 11) に挙げる。

Rule 1: 42+55→33+55

Rule 2: 55+55→55+44

(10) a. ja⁴² + vu⁵⁵ → ja³³vu⁵⁵
鶏 卵 鶏の卵

b. mja⁴² + m̥u⁵⁵ → mja³³m̥u⁵⁵
目 毛 眉毛

(11) a. sɔ⁵⁵ + -n̄⁵⁵ → sɔ⁵⁵n̄⁴⁴
3 CL 3 日

b. ki⁵⁵n̄o⁵⁵ + mi⁵⁵ → ki⁵⁵n̄o⁵⁵mi⁴⁴
チノ族 言葉 チノ語

ただし、Rule 2 は Rule 1 とは異なり、随意的な規則だと考えられる。

1.3.1.2 文法範疇に特有な声調交替 (GTA)

1.3.1.2.1 名詞に見られるパターン

これは蓋 (1986) にも記述されているが、名詞は、所有関係を表示する際、修飾要素の名詞の最後の音節が 35 調に変わる。

(12) N₁^α+N₂→N₁³⁵+N₂ (N は任意の名詞、α は任意の声調)

(13) a. mjo⁵⁵ + vu⁵⁵khe⁵⁵ → mjo³⁵vu⁵⁵khe⁵⁵
馬 頭 「馬の頭」

b. ji⁵⁵mi⁴⁴ + si⁵⁵ɕhiŋ³³ → ji⁵⁵mi³⁵si⁵⁵ɕhiŋ³³
昨日 こと 「昨日のこと」

これは形態論的に言えば、普通名詞の斜格形は最終音節の 35 調によって表されていることとなる。よって、名詞が目的語となる場合も、随意的ではあるが、最終音節が 35 調となることがある (2.2.1, p. 38 参照)。

1.3.1.2.2 数詞に見られるパターン

単独で発音されるとき、1~9 は 55 調で読まれ、10 は 42 調で読まれる。

(14) thi⁵⁵ 「1」, ni⁵⁵ 「2」, sɔ⁵⁵ 「3」, li⁵⁵ 「4」, n̄o⁵⁵ 「5」, khjo⁵⁵ 「6」, ji⁵⁵ 「7」, xɛ⁵⁵ 「8」, kju⁵⁵ 「9」, tshɿ⁴² 「10」

「11」から「19」までの数詞は [10+1] のように 2 個の数字が現れ、2 音節となる。このときは PTA の Rule 1 が適用されて、[33-55] の声調パターンとなる。

それぞれの声調の差異を指摘することはできるが、文内で発音されると、声調が非常に複雑に交替してしまうことが多い。このことは特に動詞複合形式が音韻的に一個の言語単位を形成し、膠着的な性質をもっていることを示す傍証となろう。

- (15) a. $\text{tshy}^{42} + \text{thi}^{55} \rightarrow \text{tshy}^{33}\text{thi}^{55}$ b. $\text{tshy}^{42} + \text{ŋo}^{55} \rightarrow \text{tshy}^{33}\text{ŋo}^{55}$
 10 1 11 10 5 15

更に、以下の例に見るように、「1~9」の数詞が「10」や「100」の前に置かれると「1~9」は33調に、「10」、「100」は55調になる。すなわち、(15)の例もあわせて考えると、2音節の数詞は[33-55]の声調パターンをとる。

- (16) a. $\text{ni}^{55} \times \text{tshy}^{42} \rightarrow \text{ni}^{33}\text{tshy}^{55}$ b. $\text{so}^{55} \times \text{ɕo}^{55} \rightarrow \text{so}^{33}\text{ɕo}^{55}$
 2 10 20 3 100 300

「21」から「99」までの数詞は[2×10+1]のように3個の数字が現れ、3音節となる。この場合は[33-55-44]の声調パターンをとる。

- (17) a. $\text{ni}^{55} \times \text{tshy}^{42} + \text{thi}^{55}$ b. $\text{kju}^{55} \times \text{tshy}^{42} + \text{kju}^{55}$
 2 10 1 9 10 9
 → $\text{ni}^{33}\text{tshy}^{55}\text{thi}^{44}$ → $\text{kju}^{33}\text{tshy}^{55}\text{kju}^{44}$
 21 99

(17)のような3音節数詞は[(10の位×10)+1の位]のように分析できる。実際に、10と1の位の間にはPTAのRule 2が適用されている。

「何千」といった数詞の場合はPTAのRule 2が適用され、[55-44]の声調パターンを取る。

- (18) a. $\text{thi}^{55} \times \text{tshen}^{55} \rightarrow \text{thi}^{55}\text{tshen}^{44}$ b. $\text{so}^{55} \times \text{tshen}^{55} \rightarrow \text{so}^{55}\text{tshen}^{44}$
 1 1000 1000 3 1000 3000

1.3.1.2.3 形容詞に見られるパターン

形容詞には5種の声調交替のタイプがある。基本形では4種の声調パターンが存在する。一方でそれらが否定形、「もっと～」、「すこし～」、「すごく～」の形式になった場合、表1.3のように声調が交替する。

表 1.3: 形容詞の声調交替

	基本形	否定形	「もっと～」	「すこし～」	「すごく～」
a1	$\text{a}^{33}[\text{root}]^{55}$	$\text{ma}^{33}[\text{root}]^{42}(\text{A})$	$\text{tʃy}^{33}[\text{root}]^{42}(\text{A})$	$\text{a}^{33}\text{thi}^{55}[\text{root}]^{42}(\text{I})$	$\text{tɕɛ}^{42}[\text{root}]^{42}(\text{i})$
a2				$\text{a}^{33}\text{thi}^{55}[\text{root}]^{35}(\text{II})$	$\text{tɕɛ}^{42}[\text{root}]^{35}(\text{ii})$
b	$\text{a}^{55}[\text{root}]^{55}$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}(\text{B})$	$\text{tʃy}^{55}[\text{root}]^{55}(\text{B})$	$\text{a}^{33}\text{thi}^{55}[\text{root}]^{44}(\text{III})$	$\text{tɕɛ}^{42}[\text{root}]^{44}(\text{iii})$
c	$\text{a}^{55}[\text{root}]^{42}$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{35}(\text{C})$	$\text{tʃy}^{55}[\text{root}]^{35}(\text{C})$	$\text{a}^{33}\text{thi}^{55}[\text{root}]^{35}(\text{II})$	$\text{tɕɛ}^{42}[\text{root}]^{35}(\text{ii})$
d	$\text{a}^{55}[\text{root}]^{44}$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{44}(\text{D})$	$\text{tʃy}^{55}[\text{root}]^{44}(\text{D})$	$\text{a}^{33}\text{thi}^{55}[\text{root}]^{44}(\text{III})$	$\text{tɕɛ}^{42}[\text{root}]^{44}(\text{iii})$

表1.3について略述しておく。否定形と「もっと～」の形式については4種、「すこし～」と「すごく～」にかんしては3種のパターンがある。否定形と「もっ

と～」の形式、および「すこし～」と「すごく～」の形式はそれぞれ同じである。(a) グループは「すこし～」と「すごく～」の形式において2種に分かれる。(a1), (c), (d)の否定形、「もっと～」、「すこし～」および「すごく～」の語幹の声調はそれぞれ同じである。

重複形においては(19)のように基本的に語根の声調は交替しない。

(19) a. a³³na⁵⁵ → a³³na⁵⁵na⁵⁵
「深い」 「非常に深い」

b. a⁵⁵kha⁴² → a⁵⁵kha⁴²kha⁴²
「硬い」 「非常に硬い」

1.3.1.2.4 動詞に見られるパターン

チノ語の動詞は単音節動詞と2音節動詞の大きく2種に分かれる。本来語の多くが単音節動詞に属し、かつ2音節動詞の変調パターンはやや複雑である。本書では単音節動詞、2音節動詞の順に記述していく。

■ 単音節動詞

否定形に基づけば、表1.4のように、単音節動詞においては15パターンの声調交替が見られる。大変複雑であるが、否定形のついた声調の連続は(A)～(F)の6パターンに収束する。

経験を表す接尾辞には、-təと-kə⁵⁵tə⁴⁴の2種類がある。両者に意味機能的な違いはない。しかし、後者を後接できない動詞も存在する。経験を表す接尾辞をつけた形式では、前者は5パターン、後者は4パターンに収束する。

表 1.4: 単音節動詞の変調パターン (1)

	基本形	否定形	「～したことがある」(α)	「～したことがある」(β)
a1	[root] ⁵⁵	ma ⁵⁵ [root] ⁵⁵ (A)	[root] ⁵⁵ tə ⁵⁵ (i)	[root] ³³ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (I)
a2		ma ³³ [root] ⁴² (B)	[root] ⁵⁵ tə ⁴⁴ (ii)	[root] ⁵⁵ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (II)
a3		ma ⁵⁵ [root] ⁴² (C)	[root] ⁵⁵ tə ⁵⁵ (i)	[root] ³³ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (I)
a4		ma ³³ [root] ⁵⁵ (D)	[root] ⁵⁵ tə ⁴⁴ (ii)	[root] ⁵⁵ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (II)
a5		ma ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (E)	[root] ³³ tə ⁵⁵ (iii)	[root] ⁴⁴ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (III)
b1	[root] ⁴⁴	ma ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (E)	[root] ³³ tə ⁵⁵ (iii)	[root] ³³ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (I)
b2		ma ⁵⁵ [root] ³⁵ (F)	[root] ⁴⁴ tə ⁴⁴ (iv)	
c1	[root] ³³	ma ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (E)	[root] ³³ tə ⁵⁵ (iii)	[root] ³³ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (I)
c2		ma ⁵⁵ [root] ³⁵ (F)		
c3		ma ³³ [root] ⁴² (B)		
d	[root] ³⁵	ma ³³ [root] ⁴² (B)	[root] ³⁵ tə ⁴⁴ (v)	[root] ³⁵ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (IV)
e1	[root] ⁴²	ma ³³ [root] ⁴² (B)	[root] ³³ tə ⁵⁵ (iii)	[root] ³³ kə ⁵⁵ tə ⁴⁴ (I)
e2		ma ³³ [root] ⁵⁵ (D)		
e3		ma ⁵⁵ [root] ³⁵ (F)		
e4		ma ⁵⁵ [root] ⁴² (C)		

次に助動詞類(-*nu* 「～したい」, -*khju* 「～できる」)が後接した場合について、表 1.5 にまとめる。ここでは「～したい」、「～できる」、「～できない」の 3 種について掲げた。このとき単音節声調で (a1), (b1) に属するグループはそれぞれ 2 種に分かれる。

表 1.5: 単音節動詞の変調パターン (2)

	「～したい」	「～できる」	「～できない」
a1a	$[root]^{55}nu^{35}(A)$	$[root]^{55}khju^{42}(i)$	$ma^{55}[root]^{33}khju^{42}(I)$
a1b	$[root]^{33}nu^{42}(B)$	$[root]^{33}khju^{42}(ii)$	$ma^{55}[root]^{55}khju^{42}(II)$
a2		$[root]^{55}khju^{42}(i)$	$ma^{33}[root]^{55}khju^{42}(III)$
a3		$[root]^{33}khju^{42}(ii)$	$ma^{55}[root]^{55}khju^{42}(II)$
a4		$[root]^{55}khju^{42}(i)$	
a5	$[root]^{55}nu^{35}(A)$	$[root]^{33}khju^{42}(ii)$	$ma^{55}[root]^{33}khju^{42}(I)$
b1a	$[root]^{55}nu^{35}(A)$	$[root]^{33}khju^{42}(ii)$	$ma^{55}[root]^{33}khju^{42}(I)$
b1b	$[root]^{55}nu^{42}(C)$		$ma^{33}[root]^{55}khju^{42}(III)$
b2	$[root]^{33}nu^{35}(D)$		$ma^{55}[root]^{33}khju^{42}(I)$
c1	$[root]^{33}nu^{35}(D)$	$[root]^{33}khju^{42}(ii)$	$ma^{55}[root]^{33}khju^{42}(I)$
c2			
c3	$[root]^{55}nu^{42}(C)$		$ma^{33}[root]^{55}khju^{42}(III)$
d	$[root]^{35}nu^{42}(E)$	$[root]^{35}khju^{42}(iii)$	$ma^{33}[root]^{55}khju^{42}(III)$
e1	$[root]^{55}nu^{42}(C)$	$[root]^{33}khju^{42}(ii)$	$ma^{33}[root]^{55}khju^{42}(III)$
e2			$ma^{55}[root]^{55}khju^{42}(II)$
e3	$[root]^{33}nu^{35}(D)$		$ma^{55}[root]^{33}khju^{42}(I)$
e4			

また (a) に属する単音節動詞は、命令法るとき、42 調となることがある。

(20) a. zo^{55} 「走る」 → zo^{42} 「走れ。」

b. tso^{55} 「食べる」 → tso^{42} 「食べろ。」

■2 音節動詞

否定形に基づき、基本形などとの組み合わせを考慮すれば、表 1.6 (p. 31) のように、2 音節動詞においては 13 パターンの声調交替が見られる¹¹。大変複雑であるが、否定形のついた声調の連続は (A) ～(I) の 9 パターンに収束する。

経験を表す接尾辞をつけた形式を見ておく。-*to* 「～したことがある (α)」が ついた形式では 7 パターン、-*ko*⁵⁵*to*⁴⁴ 「～したことがある (β)」が ついた形式では 6 パターンに収束する。

¹¹基本形と否定形の声調交替のみで数えれば、12 パターンということになるが、(f) のパターンを「～したことがある (α)」「～したことがある (β)」に基づいて 2 種類に分けると、13 パターンとなる。

なお、以下の表で「——」としてある場合があるが、これは当該の形式が現在のところ見つかっていないことを表す。

■2 音節動詞

表 1.6: 2 音節動詞の声調交替パターン (I)

	基本形	否定形	「～したことがある」(α)	「～したことがある」(β)
a1	[root] ⁵⁵ [root] ⁵⁵	ma ⁵⁵ [root] ⁵⁵ [root] ⁵⁵ (A)	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ tɔ ⁵⁵ (i)	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (I)
a2		ma ⁵⁵ [root] ⁵⁵ [root] ⁴² (B)	[root] ⁵⁵ [root] ⁵⁵ tɔ ⁵⁵ (ii)	—
a3		ma ³³ [root] ⁵⁵ [root] ⁵⁵ (C)		[root] ⁵⁵ [root] ⁵⁵ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (II)
b1	[root] ⁵⁵ [root] ⁴⁴	ma ³³ [root] ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (D)	[root] ⁵⁵ [root] ⁷⁴⁴ tɔ ⁵⁵ (iii)	[root] ⁵⁵ [root] ⁷⁴⁴ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (III)
b2		ma ⁵⁵ [root] ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (E)		—
c	[root] ⁵⁵ [root] ³³	ma ⁵⁵ [root] ⁵⁵ [root] ³³ (F)		—
d	[root] ⁵⁵ [root] ⁴²	ma ³³ [root] ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (D)	[root] ⁵⁵ [root] ³³ tɔ ⁵⁵ (iv)	[root] ⁵⁵ [root] ³³ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (IV)
e1	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁴⁴	ma ³³ [root] ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (D)	[root] ³³ [root] ³³ tɔ ⁵⁵ (v)	[root] ³³ [root] ³³ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (V)
e2		ma ⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ [root] ⁴⁴ (G)	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ tɔ ⁴⁴ (i)	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (I)
f1	[root] ³³ [root] ⁵⁵	ma ³³ [root] ⁵⁵ [root] ⁴⁴ (D)	[root] ³³ [root] ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (vi)	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ kɔ ³⁵ tɔ ⁴⁴ (VI)
f2		[root] ³³ [root] ³⁵	[root] ³³ [root] ³³ tɔ ⁵⁵ (v)	[root] ⁷⁴⁴ [root] ⁷⁴⁴ kɔ ⁵⁵ tɔ ⁴⁴ (I)
g	[root] ³³ [root] ³⁵	ma ⁵⁵ [root] ³³ [root] ³⁵ (H)		—
h	[root] ³⁵ [root] ⁴⁴	ma ³³ [root] ³⁵ [root] ⁴⁴ (I)	[root] ³⁵ [root] ⁷⁴⁴ tɔ ⁵⁵ (vii)	—

次に助動詞類 ($\text{nu}^{42\sim 35}$ 「～したい」, khju^{42} 「～できる」) が後接した場合について、表 1.7 にまとめる。ここでも「～したい」、「～できる」、「～できない」の 3 種について掲げた。このとき単音節声調で (a1), (b1) に属するグループはそれぞれ 2 種に分かれる。

表 1.7: 2 音節動詞の声調交替のパターン (2)

	「～したい」	「～できる」	「～できない」
a1a	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{55}\text{nu}^{42}(\text{A})$	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{55}\text{khju}^{42}(\text{I})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{55}\text{khju}^{42}(\text{I})$
a1b	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{44}\text{nu}^{42}(\text{B})$		
a2			—
a3	—	—	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{55}\text{khju}^{42}(\text{I})$
b1a	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{44}\text{nu}^{35}(\text{C})$	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{44}\text{khju}^{42}(\text{II})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{II})$
b1b	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{44}\text{nu}^{42}(\text{B})$		
b2	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{44}\text{nu}^{35}(\text{C})$		
c	—	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{III})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{44}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{III})$
d	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{42}\text{nu}^{35}(\text{D})$		$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{II})$
e1	$[\text{root}]^{33}[\text{root}]^{33}\text{nu}^{42}(\text{E})$	$[\text{root}]^{33}[\text{root}]^{35}\text{khju}^{42}(\text{IV})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{II})$
e2	$[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{55}\text{nu}^{42}(\text{A})$	$[\text{root}]^{44}[\text{root}]^{44}\text{khju}^{42}(\text{V})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{55}\text{khju}^{42}(\text{I})$
f1	$[\text{root}]^{33}[\text{root}]^{55}\text{nu}^{42}(\text{F})$	$[\text{root}]^{33}[\text{root}]^{55}\text{khju}^{42}(\text{VI})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{33}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{IV})$
f2	$[\text{root}]^{33}[\text{root}]^{55}\text{nu}^{35}(\text{G})$	$[\text{root}]^{44}[\text{root}]^{44}\text{khju}^{42}(\text{V})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{II})$
g	—	—	—
h	$[\text{root}]^{35}[\text{root}]^{44}\text{nu}^{35}(\text{H})$	$[\text{root}]^{35}[\text{root}]^{44}\text{khju}^{42}(\text{VII})$	$\text{ma}^{55}[\text{root}]^{55}[\text{root}]^{33}\text{khju}^{42}(\text{II})$

1.3.2 その他のかぶせ素性

1.3.2.1 ストレス

ストレスは音韻的に大きな意味を持っているわけではない。特に 2 音節語において、弱強型 (iambic) のストレスパターンが存在していると考えられる。音韻領域 (phonological domain) が 3 音節を超える場合や 1 音節に収まる場合にはストレスパターンが存在しない考える。

2 音節語において弱強のストレスが音声的に存在する例¹²は、(21) のように 33-55 の声調パターンとなる。この場合、第 1 音節はやや短く発音される。

(21) $\text{ts}\phi^{33}\text{mo}^{55}$ 「鷹」、 $\text{a}^{33}\text{n}\text{x}^{55}$ 「赤い」、 $\text{tsh}\text{x}^{33}\text{thi}^{55}$ 「11」

1.3.2.2 強度の強調とイントネーション

強度の強調やイントネーションも音韻的に大きな意味を持つものではない。

強度の強調 (intensity) は、特に遠称を表す指示詞、および形容詞にかかる。ピッチの著しい上昇と下降があり、強調のかかる母音は大変長く発音される。

¹² 強勢が置かれる音節は太字で示した。

(22) a. lə⁵⁵ 「むこう」 → [lə:⁵⁵⁴] 「ずっとむこうに」

b. a⁵⁵kha⁴² 「硬い」 → [e³³k^he:⁵⁵⁴] 「とてつもなく硬い」

また疑問を表す際、文末において明瞭な下降イントネーションが聞こえることがある。(23)のように、疑問を表したい場合、文末に来る要素の最終音節が非常に明瞭な下降調となることも多い。

(23) a. khɿ³⁵ mɔ³³-n⁵⁵tɔ⁵⁵-a⁵⁵, jo³³ma⁴²? 「あそこにはいないの、彼らは?」
あれ.OBL NEG-いる-PART 3PL.NOM.Q

b. ɲi⁵⁵jo⁴⁴ thi³³-ɕo⁵⁵ ɲu³³-me⁴²? 「お前一人なのか?」
自分 (2) 1-CL COP-NML.Q

第2章 名詞句

本章では名詞句における形態統語論について記述していく。

まず、名詞句の内部構造を示すと、表 2.1 の通りである。

表 2.1: チノ語の名詞句構造 (モデル)

指示詞	名詞	数量詞句	後置詞
(Dem)	(N)-(Suf)	(NUM)-(CL)-(Suf)	=(Post)

Dem は指示詞、Suf とは接尾辞、NUM は数詞、CL は類別詞、Post は後置詞を表す。名詞接尾辞や数量詞句接尾辞も若干存在する。

名詞句構造で重要なのは、指示詞、名詞句、数量詞句はそれだけで独立して現れうることである。すなわち、自立性があり、指示詞や数量詞句が単独で現れた場合も名詞句と同じ統語的性格を持っている。

また後置詞は独立して現れることがない前倚辞と考えられる。後述するように (3.5.2, p. 89)、後置詞の一部は動詞複合形式にも後接されるものがある。

本節では名詞句構造の配列どおり、指示詞、名詞、代名詞、名詞接尾辞、数詞、類別詞、数量詞句接尾辞、後置詞の順に記述していく。

2.1 指示詞

名詞句構造において最前に位置するのが指示詞である。チノ語の代表的な指示詞は、以下の表 2.2 のとおりである。

表 2.2: 指示詞一覧

	主格	斜格
近称	çi ⁴⁴	çi ³⁵
遠称 1 類	khɿ ⁴⁴	khɿ ³⁵
遠称 2 類	lɔ ⁵⁵	lɔ ³⁵

表 2.2 を見ると、チノ語においては基本的に発話者から近い、遠いかで指示詞を使い分ける。近称は発話者から非常に近い位置であることを指す。時に発話者および聞き手の両方から近い場合もある。遠称 1 類は発話者・聞き手ともに視認可能で、やや遠い位置に存在することを示すことが多い。遠称 2 類は

- c. $ta^{35}li^{44}=a^{44}$ $tʃo^{33}noe^{44}$ $ʔe^{33}xun^{35}+so^{35}-a^{44}=la^{55}$ lo^{44} $ku^{33}-nu^{35}+ja^{42}$.
 大理=VA いる-SFP 結婚する+終わる-PFT=すなわち あれ.NOM また-再び+行く

「(例の新郎は普段) 大理にいる。結婚し終わったら ([= 結婚式が終わったら]) あそこ ([= 大理]) にまた戻る。」

遠称2類は、近称および遠称1類と異なり、斜格形で用いられることは少ない。しかし、若干の例で(29)のように斜格形が生起することもある。

- (29) a. $\eta a^{55}ve^{55}$ lo^{35} $to^{33}mja^{42}$, $pa^{55}kha^{42}=e^{44}$ $pao^{55}tʃo^{55}$ $to^{33}mɿ^{44}$ $lu^{55}-xa^{44}$.
 1PL.EXCL.OBL あれ.OBL 伐る-して パカー=POSS パオチャ 伐る-NML 足りる-PFT

「我々はあそこで(雑草を)伐って、(あとは)パカーではパオチャが伐ったので充分だ。」

- b. $khø^{44}$ $tʃo^{55}+tʃa^{33}=e^{44}$, lo^{35} $lo^{33}ʃu^{55}a^{33}$ $pu^{55}=a^{55}$.
 それでは いる+ある=POSS あれ.OBL ラシュ山=VA

「それではあそのラシュ山にはあるだろう。」

- c. $khø^{33}noe^{44}$ $jo^{33}ma^{55}=e^{55}$ $lo^{35}=e^{55}$ $va^{55}a^{33}phru^{55}lu^{55}=e^{55}$ $\eta u^{33}=e^{44}$.
 しかし 3PL.NOM=POSS あれ.OBL=POSS 豚 白い=POSS COP=POSS

「しかし、あその彼らの(私たちのところのような黒い豚の肉ではなく)白豚の(肉)でしょう。」

(29)の遠称2類斜格形である lo^{35} もやはり主格形同様、「発話地点より遠い場所」を指示することが多い。

上記の近称・遠称1類・遠称2類の指示詞以外にも、更に遠い場所を表す指示詞として kha^{55} , $ma^{55}mo^{44}$, mu^{35} などが用いられることがある。これらはいずれも「あそこ」「向こう」などを表しており、主格/斜格の形式上の対立はないと考えられる。

2.2 名詞

チノ語において名詞を区別する明確な形態的標識はない。基本的には統語的な位置関係によって名詞は相対的に(あるいは、消極的に)決定される。すなわち、名詞自体に直接否定辞 $mo-$ をとることができない点などが名詞の決定基準として挙げられる。

2.2.1 語構成

音節数から見た名詞の語構成としては2音節語が最も多い。1音節語や3音節語などもある。3音節以上の語は、複合語か、漢語・ルー語からの借用語が多い。

- (30) a. 1 音節語 khi^{55} 「靴」、 mjo^{55} 「馬」、 mi^{55} 「火」、 ne^{55} 「幽霊」、 tso^{33} 「家」など。
 b. 2 音節語 $pu^{55}tʃu^{55}$ 「虫」、 $ko^{55}to^{44}$ 「服」、 $la^{55}pu^{44}$ 「手」など。
 c. 3 音節語 $ma^{55}kɤ^{55}ma^{55}$ 「なす」(XD.), $ma^{55}khe^{55}ne^{55}$ 「パイナップル」(XD.), $ʃaŋ^{55}ʃao^{44} + khe^{44}$ 「ゴム林」
 d. 4 音節語 $mi^{33}tha^{55} + xo^{42} + khe^{42}$ 「雨季(雨 + 降る + 季節)」

語構成は、名詞語根 + 接辞¹、動詞語根 + 接辞、名詞 + 名詞などがある(31)。

- (31) a. [名詞語根 + 接辞] $a- + \eta^{55} \rightarrow a^{55}\eta^{44}$
 PREF 日 日にち
 b. [動詞語根 + 接辞] $tsɔ^{55} + -tu \rightarrow tsɔ^{55}tu^{55}$
 食べる (v.) ところ (SUF) 食べるところ
 c. [名詞 + 名詞] $a^{55}pu^{44} + a^{55}mo^{44} \rightarrow a^{55}pu^{44}a^{55}mo^{44}$
 父 母 両親

多くの名詞は音節を単位とする部分重複ならびに完全重複ができない。しかし、いくつかの事例で音節内部での部分重複を見ることはできる。

頭子音 l- による部分重複は一部の名詞に見られる (「l- 重複」)。重複前後で意味的な差異はほばない。

- (32) a. $tʃhə^{55}kʰə^{42} \rightarrow tʃhə^{55}kʰə^{42}lə^{42}$ 「塩」
 b. $a^{55}mo^{55} \rightarrow a^{55}mo^{55}lo^{55}$ 「ばかもの」 c. $pho^{55}tʰe^{44} \rightarrow pho^{55}tʰe^{44}lɛ^{44}$ 「蛙」

最終音節が重複される場合もある。名詞単独で用いられることは極めてまれで、通常は文中で現れる。重複後は「いつも～」 「すべて～」 「まったく～」 といった強調の意味が加わる。

- (33) a. $ni^{33}tʃhɤ^{55}so^{33}-mjo^{55}-tse^{55}=ɣ^{44} zo^{55}kʰo^{55}kʰo^{35}=ɣ^{55}-suw^{44}-a^{44}$.
 23-CL-くらい=EMPH 若い男性.RDP=EMPH-まだ-PART
 「23 歳なんて、まだ全く若者よ。」
 b. $zo^{55}ku^{55}ku^{55}=jo^{55} mo^{33}-ŋɔ^{55}-to^{55}-a^{55}$.
 子供.RDP=ごとく NEG-聞く-EXP-PART
 「(彼はもう大人なのに) 全く子供みたいに言うことを聞かない。」

¹以下「接辞」と表記する際、接頭辞と接尾辞を含む。なお、接中辞はチノ語にない。

- c. $\text{kh}\gamma^{42} \quad \text{a}^{55}\text{n}\text{ə}^{55} \quad \text{a}^{55}\text{nu}^{42}\text{nu}^{42} \quad \text{tjha}^{55}\text{-k}\text{ə}^{44}\text{-mj}\text{ə}^{42}=\text{l}\text{ə}^{44}$.
 3SG.NOM 自分(3) 後.RDP 煮る-PROG-して=も

「彼自身、最後に(おかずを)煮たのね。」²

- d. $\text{le}^{33}\text{fe}^{35}=\text{la}^{55} \quad \text{a}^{55}\text{fo}^{55}\text{fo}^{55} \quad \text{nu}^{55}\text{-n}\text{ə}^{42}$.
 レイフェイ.OBL=すなわち 兄/姉.RDP COP-RCP

「レイフェイはまさに(彼ら兄弟の中で)一番上の兄なのだ。」

- e. $\text{t}\text{e}^{33}\text{phu}^{55}\text{phu}^{35}=\gamma^{55} \quad \text{t}\text{ə}^{33}+\text{tj}\text{ə}^{33}\text{-k}\text{ə}^{44}\text{-m}\gamma^{44}$.
 酒.RDP=EMPH 飲む+いる-PROG-PAST

「(彼は)まったく酒ばかり飲んでいた。」

大変まれであるが、(34)のように最終音節が2度重複する例も存在する。

- (34) a. $\text{mi}^{55}\text{kho}^{55}\text{kho}^{55}\text{kho}^{55} \quad \text{lu}^{33}\text{-m}\gamma^{35} \quad \text{tsh}\gamma^{33}\text{khju}^{55} \quad \text{tsh}\gamma^{33}\text{ji}^{55}\text{-mjo}^{55}$.
 若い女性.RDP 来る-NML 16 17-CL

「まさに若き乙女よ、16歳、17歳なんて。」

- b. $\text{ja}^{55}\text{n}^{44}\text{n}^{44}\text{n}^{44} \quad \text{fu}^{33}\text{-m}\text{ə}^{55} \quad \text{m}\text{ə}^{55}\text{-tj}\text{ə}^{55}\text{-xa}^{55}$.
 今日.RDP 連れる-BEN NEG-いる-PFT

「まさに今日は(赤ん坊を)連れてあげる者がいなかった。」

(34)のように、最終音節が幾度にも重複する場合は「まさに～」といった程度の高い強調を表している。

また名詞の最終音節の声調が35調に交替すると、斜格を標示する(1.3.1.2.1, p. 26 参照)。

- (35) a. $\text{a}^{55}\text{phr}\text{ə}^{44} \rightarrow \text{a}^{55}\text{phr}\text{ə}^{35}$ b. $\text{a}^{55}\text{san}^{44} \rightarrow \text{a}^{55}\text{san}^{35}$
 板 板.OBL アサン(人名) アサン.OBL

(35)のように最終音節の声調が35調となれば斜格となる。所有構造や目的語を標示する際になどに斜格は用いられるが、義務的とまでは言えない。

2.2.2 統語的位置

名詞は統語的には主に主語・目的語となる。コピュラ文においてはその補語となることができる。また述語となり、名詞述語文を形成することができる。

名詞は他の名詞を修飾する場合を除いて、基本的に動詞(複合形式)の要求する項の解釈を受ける。すなわち通常、項解釈を受けない名詞はない。そのため、自動詞が項解釈を行う場合は主語のみが、他動詞が項解釈を行う場合は主語および目的語が文中に現れうる。その他の名詞が自由に文中に現れることはない。

²この例の $\text{a}^{55}\text{nu}^{42}\text{nu}^{42}$ 「最後に」は述語を修飾する副詞のような働きがある。

- b. kɔ³⁵nen⁴⁴-mɣ⁴⁴ ɕi⁴⁴ a⁵⁵lɔ⁴⁴ tʃeŋ⁵⁵je⁴⁴ ŋuɐ³⁵-noɐ⁴⁴.
 年を越す-NML これ 月 正月 COP-SFP

「年越しは今月が正月なのだ。」

(38a)の pɣ³³tsu³³「白族」、(38b)の tʃeŋ⁵⁵je⁴⁴「正月」はいずれも文中でコピーの補語の位置を占めている。

2.2.2.4 名詞述語文

更に、述語となり、名詞述語文を形成する例である。

- (39) a. ɕi⁴⁴ ri³³pen³⁵ tʃhə³³zo⁵⁵. b. tʃo⁵⁵ʃi³³-la⁴²?
 これ 日本.OBL 人 チョウシェン-Q
 「こちらは日本人です。」 「チョウシェン(人名)か?」

(39a)の ri³³pen³⁵tʃhə³³zo⁵⁵「日本人」、(39b)の tʃo⁵⁵ʃi³³「チョウシェン」はいずれも名詞述語となっている。なお、(39b)は疑問文であるが、名詞述語に直接文末助詞が後接している例である。

2.2.3 位置関係を表す名詞

後置詞(2.8, p. 56)などとは異なるが、(40)のように他の名詞との位置関係を示す特殊な名詞類がある。単独で生起することはほとんどなく、一般の名詞に後続する。

- (40) a³³tha⁵⁵(pɔ⁴⁴)「～の上に」、tha⁵⁵la⁴²「～の上に」 khjɔ⁵⁵lɔ⁵⁵「～の中に」、a⁴⁴ty⁴⁴
 「～の外に」、a³³o⁵⁵(pɔ⁴⁴)「～の下に」、a⁵⁵fu⁵⁵「～の前に」、a⁵⁵no⁴²「～の後ろに」など
 (41) tʃo³³tsi⁵⁵ tha⁵⁵la⁴²「テーブルの上に」、tso³³ khjɔ⁵⁵lɔ⁵⁵「家の中で」
 テーブルの上に 家の中に

2.3 代名詞

代名詞は人称代名詞と指示代名詞に分けることができる。ただし、指示代名詞とは指示詞が単独で用いられた場合であると考えられる。そのため、ここでは記述しない。詳細は上述した 2.1 (p. 34)を参照されたい。

ここでは人称代名詞について記述していく。

2.3.1 種類と語構成

チノ語の人称代名詞は表 2.3 のようにまとめられる。

表 2.3 に見るように、代名詞は 1 人称、2 人称、3 人称の 3 つの人称、および単数、双数、複数の 3 つの数に区分される。すべての人称・数で主格と斜格の

表 2.3: 人称代名詞一覧

	単数		双数		複数	
	主格	斜格	主格	斜格	主格	斜格
		所有格 対格				所有格 対格
1 人称	ŋɔ ⁴²	ŋɔ ³⁵ ŋɔ ³³ ε ⁵⁵ ŋɔ ³⁵	a ³³ ŋi ⁵⁵ / ŋa ⁵⁵ ŋi ⁵⁵	a ³³ ŋi ⁴²	a ³³ ŋu ⁵⁵ (INCL) ŋa ⁵⁵ vu ⁴⁴ (EXCL)	a ³³ ŋu ⁴² /ŋu ⁵⁵ (INCL) ŋa ⁵⁵ ve ⁵⁵ (EXCL.POSS)
2 人称	nɔ ⁴²	nɔ ³⁵ nɛ ³⁵ nɔ ³⁵	ŋi ⁵⁵ ŋ ⁴⁴	ŋi ⁵⁵ ŋi ⁴²	ŋi ⁵⁵ ju ⁴⁴	ŋi ⁵⁵ ve ⁵⁵ ŋi ⁵⁵ ju ³⁵
3 人称	khɤ ⁴² / thu ⁴²	khɤ ³⁵ /a ⁵⁵ ŋɔ ³⁵	khɤ ³³ ŋi ⁵⁵	khɤ ³³ ŋi ⁴²	khɤ ³³ ma ⁵⁵ /jo ³³ ma ⁵⁵	khɤ ³³ ma ⁴² /jo ³³ ma ⁴²

区別がある。表 2.3 における ‘/’ はその左右(上下)の形式がいずれも用いられることを表す。

1 人称単数および 2 人称単数では斜格を更に 2 つに分類できる。主に所有格と対格である。1 人称単数・2 人称単数の所有格形は所有のみを標示し得るが、上段の斜格形は所有格とも対格とも置換可能である。

また 3 人称単数では khɤ⁴² と thu⁴² の形式が存在する。これらに意味・用法的な差異はほとんどない。thu⁴² は バカ下位方言でより用いられる形式である。

双数は一般的に数詞の「2」 ŋ⁵⁵(ŋi⁵⁵) が付いた形式である。斜格形では語末が 42 調となる。

1 人称複数に包括形と除外形の区別がある。除外的な意味合いを持つときも包括形を用いることもまれにあるが、一般に両者は厳密に区別して用いられる。また ŋa⁵⁵ve⁵⁵ は ŋa⁵⁵vu⁴⁴=ε⁵⁵ の縮約した形である。しかし、後者の形式は一般に用いられない。前者の形式を主に用いる。

2 人称複数の斜格は斜格形として共通した形式は用いられない。所有格に ŋi⁵⁵ve⁵⁵, 対格に ŋi⁵⁵ju³⁵ を用いる。

また再帰代名詞的な形態素もある。チノ語には「自分(自身)」を表す表現がいくつかある。もっとも広く用いられるのは ko⁵⁵to⁴⁴ である。これは先行詞の人称に左右されず、用いることができる。

- (42) a. ŋɔ⁴² ko⁵⁵to⁴⁴ tɕw³³-mɤ⁴⁴. 「私は自分を殴った。」
1SG.NOM 自分 殴る-PAST

- b. ko⁵⁵to⁴⁴ lao³³toŋ⁵⁵+ja⁵⁵-vu⁵⁵ le⁴⁴=ε⁵⁵-tu⁴² khɤ³³-lo³³ m³⁵-nɔ⁴⁴.
自分 農作業する+いく-ので行く=POSS-HORT それ-ように 言う-SFP

「(彼は)「自分で農作業しに行け」と言った。」

しかし、先行詞の人称に左右されるものもある。それを表 2.4 にまとめる。

「自分」の用いられた例を挙げておく。

表 2.4: 「自分」

先行詞	1 人称	2 人称	3 人称
「自分」	ŋu ⁵⁵ jə ⁴⁴ , ŋa ⁵⁵ jə ⁴⁴	ni ⁵⁵ jə ⁴⁴	a ⁵⁵ ŋə ⁵⁵

- (43) a. tso³⁵ ŋə⁴² ŋu⁵⁵jə⁴⁴ thi⁵⁵-çə⁴⁴ tʃə³³-nœ⁴⁴. 「家には私一人だけがいる。」
家.OBL 1SG.NOM 自分 (1) 1-CL ある-SFP

- b. a³³ŋə⁵⁵ a⁵⁵pu⁴⁴=lœ⁴⁴ pa⁵⁵kha⁴²=jə⁴⁴ mɔ³³-nu⁵⁵-lɯ³³-xə⁴², ŋa⁵⁵jə⁴⁴ thi⁵⁵-çə⁴⁴
3SG.OBL 父=も パカ=より NEG-また-来る-なら 自分 (1) 1-CL
tso³³ n³³tə⁵⁵-a⁴⁴ ŋu³³-ɛ⁴⁴.
家 いる-PART COP-POSS

「彼女の父もパカから戻らなかったの、私一人だけが家にいることになったのよ。」

- (44) nɔ⁴² ni⁵⁵jə⁴⁴ ma⁵⁵-le³⁵-nœ⁴⁴ ma³³-kja⁴², ten³³xua³⁵ ta³³+le⁵⁵-to⁴⁴.
2SG.NOM 自分 (2) NEG-行く-SFP NEG-きつい電話 かける+行く-HORT

「あなた自身は行かなくてもかまわない。電話をかけてくれ。」

- (45) khɿ⁴² a⁵⁵ŋə⁵⁵ tsi³⁵ljao³⁵ la⁵⁵thə⁴² ko³⁵+ja³³-mɿ⁴⁴.
3SG.NOM 自分 (3) 資料 多い 持つ+行く-PAST

「彼は自分で多くの資料を持ち出した。」

(43) は 1 人称に「自分」、(44) は 2 人称に「自分」、(45) は 3 人称に呼応する「自分」が用いられた例である。代名詞と共起することが多い。またこれら (43, 44, 45) の「自分」はいずれも ko⁵⁵to⁴⁴ に置換が可能である。

2.3.2 格の基本的な機能

2.3.2.1 主格

代名詞の主格は基本的に主語にのみ現れる。以下に例を挙げておく。

- (46) a. ji⁵⁵ji⁵⁵ ŋə⁴² tshɿ³³thi⁵⁵-mjo⁵⁵ su⁴⁴-a⁴⁴, lə⁵⁵tsho⁵⁵=lœ⁴⁴ mɔ⁵⁵-tsho⁵⁵-a⁵⁵.
昔 1SG.NOM 11-CL まだ-PFT ズボン=も NEG-履く-PFT
tə³³pjo⁵⁵lo⁵⁵ tsho⁵⁵-a⁵⁵.
スカート 履く-PFT

「昔、私が 11 歳くらいのとき、ズボンも履かなかった。(チノ族式) スカートを履いていた。」

- b. nɔ⁴² n³³ko⁵⁵+ja⁵⁵-xə⁴², nɛ³⁵ a⁵⁵kəu⁵⁵ m³³-phi⁵⁵-khju³⁵=ɛ⁴⁴.
2SG.NOM 遊ぶ+いく-なら 2SG.POSS 荷物 CAUS-なくなる-AUX=POSS

「あなたが遊びに出ってしまったら、荷物がなくなっちゃうかもよ。」

- c. ja⁵⁵ŋ⁴⁴ ni⁵⁵ju⁴⁴ ŋo⁵⁵ʃo⁵⁵ tsəu⁴⁴+le⁴⁴-no⁴⁴ m⁵⁵-a⁵⁵.
 今日 2PL.NOM 魚 捕まえる+行く-SFP 言う-PFT

「(聞くところによると)あなたたちは今日魚を捕まえに行ったらいいね。」

2.3.2.2 斜格

広義としての「斜格」は所有格と狭義の斜格の2種類に分かれる。斜格は多くの人称代名詞で所有を表現するのに用いられるが、ごく一部では所有固有の形式を持っていることがある。その所有表現形式を「所有格」と呼ぶこととする。しかし、この所有格も広義の斜格の1種であると考ええる。

以下、具体的に所有格と狭義の斜格の例を見ていこう。

2.3.2.2.1 所有格

表 2.3 を見ると、1 人称単数・2 人称単数・1 人称複数除外形・2 人称複数において所有格が存在する。例を (47) で見ておく。

- (47) a. ŋo³³ɛ⁵⁵ a⁵⁵ʃo³⁵=ɛ⁵⁵ zo⁵⁵ku⁵⁵-ma⁵⁵=ɣ⁴⁴ mo⁴⁴-su⁴⁴-a⁴⁴=ɣ⁵⁵. ko³³-khø³⁵
 1SG.POSS 兄.OBL=POSS 子供-PL=EMPH NEG-知る-PART=EMPH それぞれ-CL.OBL
 ko³³-khø⁴⁴ su³³-mɣ³⁵.
 それぞれ-CL 知る-NML

「私の兄の子供たちはチノ語を知らない。一言二言しか知らない。」

- b. nə⁴² ne⁵⁵ ɕa⁵⁵tu⁴⁴=a⁴⁴ mo⁵⁵-ɕa⁵⁵-xo⁴²-lə⁴⁴jo³³ma⁵⁵ ɕa⁵⁵-to⁴⁴-ɛ⁴⁴.
 2SG.NOM 2SG.POSS 部屋=VA NEG-住む-なら-も 3PL.NOM 住む-EXP-POSS

「あなたがあなたの部屋に住まなかったら、他の人たちが住むでしょうよ。」

- c. ɕi⁵⁵vu⁴⁴ ŋa⁵⁵ve⁵⁵ a³³ʃi⁵⁵ ji⁵⁵mjo⁵⁵ ji⁵⁵mjo⁵⁵ ta³³-mɛ³⁵ wen⁵⁵ɕa⁵⁵pao³³=lə⁴⁴.
 今 1PL.EXCL.POSS 新しい去年 おとし上る-REL 温家宝=も

「今我々の去年おととしに新しく(首相の地位に)上った温家宝も(科学の重要性を訴えている)。」

- d. ni⁵⁵ve⁵⁵ ri³³pen³³=ɛ⁵⁵ khø⁵⁵mo⁴⁴-xao³⁵-a⁴⁴, ja⁵⁵ŋ⁴⁴?
 2PL.POSS 日本=POSS いつ-日-Q 今日

「あなたたち(の)日本では(何月)何日なの、今日は?」

(47a) では 1 人称単数の所有格 ŋo³³ɛ⁵⁵ が後続名詞 a⁵⁵ʃo³⁵ 「兄」を、(47b) では 2 人称単数の所有格 ne⁵⁵ が後続名詞 ɕa⁵⁵tu⁴⁴ 「部屋」を、(47c) では 1 人称複数除外形の所有格 ŋa⁵⁵ve⁵⁵ が後続名詞 wen⁵⁵ɕa⁵⁵pao³³ 「温家宝」を、(47d) では 2 人称複数の所有格 ni⁵⁵ve⁵⁵ が後続名詞 ri³³pen³³ 「日本」を修飾している。

2.3.2.2.2 斜格

■ 目的語として

チノ語の斜格でもっとも一般的な用法は目的語として現れる場合である。(48)を見てみよう。

- (48) a. khv^{35} $ju^{55}+le^{44}-me^{44}$ m^{35} . 「彼/彼女を連れて行くという。」
3SG.OBL 連れる+行く-FUT 話す

- b. $kh\theta^{33}mjo^{55}$ $mo^{33}-ku^{55}-nu^{33}+ku^{33}-ma^{33}-lo^{55}-ka^{42}$, $jo^{35}=a^{55}$.
それでは NEG-また-帰る+持つ-BEN-来る-PART 1SG.OBL=VA

「それでは(残ったものは)私に持って帰ってこないで。」

- c. $jo^{35}=a^{55}$ $li^{33}co^{55}$, jo^{42} $teij^{33}xoj^{44}=a^{44}$ $khan^{35}pij^{35}-me^{44}$.
1SG.OBL=VA 400 1SG.NOM 景洪=VA 診る-PAST

「私に 400 元(くれたので)、それで景洪で診てもらった。」

(48)における斜格代名詞はいずれも目的語として用いられている。(48a)の斜格代名詞 khv^{35} は動詞 ju^{55} 「連れる」の直接目的語として、(48b)の斜格代名詞 jo^{35} は後置詞 $=a^{55}$ を伴い、間接目的語として現れている。(48c)の斜格代名詞 jo^{35} も(48b)と同じく、間接目的語として現れているが、「与える/くれる」に相当する動詞が省略され、語用論的に述語の意味が解釈されている。

■ 主語として

代名詞は $=la^{44}$ などの後置詞を伴った場合、斜格になることも少なくない。その後置詞が後接した斜格の代名詞が文中で主語として働くことがある。

例として(49)を挙げる。

- (49) a. $jo^{35}=la^{55}$ $te^{42}-mo^{44}-jo^{55}+su^{55}-a^{44}$, $pa^{55}ja^{44}-ma^{55}$.
1SG.OBL=も すぐく-NEG-聞く+知る-PFT パヤー-PL

「私も聞いてもよく分からないの、パヤー人の(言葉)は。」

- b. $khv^{35}=la^{44}$ $a^{55}jo^{55}$ $li^{33}co^{55}$ $ku^{55}-la^{44}-ku^{35}+ja^{44}-me^{55}$.
3SG.OBL=も 自分(3) 400 また-ずっと-持つ+いく-PAST

「彼もまた 400 元持って行ってしまった。」

- c. $ja^{55}ve^{55}$ lo^{35} $to^{33}-mjo^{42}$, $pa^{55}kha^{42}=e^{44}$ $pao^{55}to^{55}$ $to^{33}-m^{44}$ $lu^{55}-xa^{44}$.
1PL.EXCL.OBL あそこ.OBL 伐る-して パカー=POSS パオチャ 伐る-NML 足りる-PFT

「我々はあそこで(雑草を)伐って、(あとは)パカーではパオチャが伐ったので充分だ。」(= 29a)

(49)の後置詞=loc⁴⁴の直前に置かれている斜格代名詞はいずれも文中では主語として機能している。(49a)のŋɔ³⁵は動詞ŋɔ⁵⁵+su⁵⁵「聞いてわかる」の、(49b)のkhɿ³⁵は動詞ku³⁵+ja⁴⁴「持っていく」の、(49c)のŋa⁵⁵ve⁵⁵は後置詞を伴っていないが、動詞to³³「伐る」の主語として機能している。

2.4 名詞接尾辞

名詞接尾辞は表 2.5 の通りまとめられる。

表 2.5: 名詞接尾辞の種類と意味

種類	意味	種類	意味
-ma	複数	-lo	～のように
-pu	～ほど	-tʃhə	～ごと

名詞接尾辞は通常名詞に直接後接する。しかし、-pu と -lo は指示詞に直接後接する場合も少なからずあることに注意しなければならない。

それぞれの用法について、以下記述していこう。

2.4.1 -ma

接尾辞 -ma は名詞に後接し、複数を表す。人間や地名を表す名詞に後接すると「～たち」という人間の複数を表す。人称代名詞においては 3 人称複数にも用いられ、複数を表す(表 2.3, p. 41 参照)。人間を表す名詞に後接した場合は、「その人を含んだ仲間」という意味を持つ。

- (50) a. ʃao³³xoŋ⁴⁴-ma⁵⁵
小紅-PL

「小紅たち(あるいは小紅家)」

- b. a³³y⁴⁴-ma⁵⁵
阿二-PL

「阿二たち(あるいは阿二家)」

地名を表す名詞に後接した場合は、「その地域に住んでいる人たち」を指す。

- (51) a. pa⁵⁵kha⁴²-ma⁵⁵
パカー-PL

「パカーの人たち」

- b. pu³³juen³³-ma⁵⁵
補遠-PL

「補遠の人たち」

-ma は人間を表す名詞に後接する例が最も多い。しかし、無生名詞にも後接し、「～など」を表すことも少なくない(52)。

- (52) a. ʃi⁴⁴-ma⁵⁵ 「これら」
これ-PL

- b. khɿ⁴⁴ a⁵⁵kəu⁵⁵-ma⁵⁵ 「それらのもの」
 それ もの-PL

複数を表す数量詞句が後続する場合は、-ma は一般に生起しない。

- (53) a. ɕi⁴⁴ ʃue³³sɿŋ⁵⁵-∅/-ma⁵⁵ sɔ⁵⁵-lai⁵⁵ 「これら 3 人の学生」
 これ 学生-PL 3-CL
- b. lo³³si⁵⁵-∅/-ma⁵⁵ li³³-lai⁵⁵ 「4 人の先生」
 先生-PL 4-CL

(53) の例は、複数接辞 -ma が生起可能であるが、通常は生起しないほうが自然に聞こえるようである。

-ma が後接した名詞句が文中で目的語になる場合、時に -ma⁴² と声調が交替する。

- (54) a. a⁵⁵tʃen⁴⁴=a⁵⁵ a⁵⁵nɔ³⁵=ɛ⁵⁵ ma⁵⁵tʃhə⁴⁴-ma⁴² ki⁵⁵nɔ⁵⁵mi⁴⁴ pja³³+tʃhə⁵⁵=ɛ⁴⁴
 アチエン=VA 自分(3)=POSS 友達-PL.OBL チノ語 話す+しやべる=POSS
 m⁴⁴, a⁵⁵xɔ⁴⁴mi⁵⁵ lo⁴⁴-pja³³+tʃhə⁵⁵-mɿ⁴².
 言う 漢語 ずっと-話す+しやべる-PAST

「(私は) アチエンや彼女の友達にチノ語を話すように言うんだけど、(彼女たちは) ずっと漢語で話しているの。」

- b. a⁵⁵tʃhə⁵⁵ mo⁵⁵nɛ⁵⁵-ma⁴², a³³ʃo⁵⁵-ma⁴²=ɿ⁴⁴ tʃhiŋ³³-a⁴⁴ ŋw³³-mɛ³⁵.
 友人 親戚-PL.OBL 兄・姉-PL.OBL=EMPH 呼ぶ-PART COP-PAST

「(私の結婚式のときには) 友人や親戚たち、兄さんや姉さんたちを呼んだのよ。」

(54a) ではアチエンとその友達とはともに動詞 m⁵⁵ 「言う」に対する間接目的語となっている。(54b) では友人、親戚、兄・姉はすべて動詞 tʃhiŋ³³ 「呼ぶ」の目的語となっている。それぞれの複数接尾辞 -ma は声調が 42 調に交替している。

2.4.2 -pu

名詞接尾辞 -pu は「～ほど」という意味を表す。名詞に後接して、動詞を修飾する。主に指示詞に後接するが、一般名詞にも後接する例も見られる (55b)。

- (55) a. ŋɔ⁴² ɕi⁵⁵-pu⁴⁴ thə³⁵ a⁵⁵ke⁵⁵ ma⁵⁵-tsɔ⁵⁵-khjɔ⁴⁴-khju⁴².
 1SG.NOM これ-ほど 多い おかず NEG-食べる-ACP-AUX
 「私はこんなにたくさんおかずを食べられません。」
- b. ŋɔ⁴² ji⁵⁵ʃi⁵⁵ a⁵⁵tʃen⁴⁴-pu⁵⁵ pɔ⁵⁵+pɔ⁴²-nɛ⁴⁴.
 1SG.NOM 昔 アチエン-ほど 太った+太った.RDP-SFP
 「私は昔アチエンくらい太っていた。」

2.4.3 -lo

名詞接尾辞 -lo は「～のように」という状態の意味を表す。名詞に後接して、動詞を修飾する。主に指示詞に後接する。一般名詞に後接する例は少ない。-lu と自由に交替する。

- (56) a. $\text{ci}^{55}\text{-lo}^{44}$ 「このように」 b. $\text{kh}\text{y}^{55}\text{-lo}^{44}$ 「そのように」
 これ-のように それ-のように

- c. $\text{kh}\text{o}^{55}\text{t}\text{f}\text{h}\text{o}^{44}\text{-lo}^{44}$ 「異なっている」
 異なっている-のように

しかし、自然発話中ではまれに以下のような動詞句に後接し、ある状態を表すことがある。

- (57) $\text{kha}^{55}\text{e}^{44}\text{no}^{33}\text{+pho}^{33}\text{-lo}^{33}$ $\text{ŋw}^{55}\text{-e}^{55}\text{-jo}^{44}?$
 なぜ また+裏返る-のように COP-POSS-SFP

「どうして(向こうとこちらでは昼と夜が)ひっくり返っているのか?」

(57) では $\text{no}^{33}\text{+pho}^{33}$ 「ひっくり返る」という通常動詞句として用いられるものに -lo が付いている。意味としては「ひっくり返った状態」のごとくなる。

まれではあるが、重複されることもある。その場合、状態の強調を表す。

- (58) $\text{mu}^{35}\text{t}\text{ij}^{33}\text{xoj}^{44}=\text{a}^{55}=\text{l}\text{e}^{55}\text{kh}\text{y}^{33}\text{-lo}^{33}\text{-lo}^{33}$ $\text{t}\text{f}\text{ao}^{35}\text{-t}\text{o}^{44}\text{-m}\text{j}\text{o}^{42}$,
 あそこ 景洪=VA=も それ-ように-ように.RDP 撮る-EXP-して
 $\text{j}\text{i}^{33}\text{+tu}^{35}\text{-a}^{44}=\text{l}\text{e}^{44}$ $\text{t}\text{f}\text{a}^{35}$.
 現像する+出る-PART=も ある

「あの景洪でもまさにその場で撮って、すぐ現像するようなものもある。」

(58) では -lo が重複され、直訳としては「まさにそのように」のような意味となる。この例では「写真を撮影してすぐ現像する」という部分を修飾し、「現像の即時性」を強調している。

2.4.4 -tʃhə

名詞接尾辞 -tʃhə は「～ごとに」という意味を表す。名詞に後接して、動詞を修飾する。しかし、類似した意味を持つ ko -(2.5.3, p. 50) とは異なり、自然発話中ではほぼ時間を表す名詞にしか後接しない。

- (59) a. $\text{ŋi}^{33}\text{-t}\text{f}\text{h}\text{ə}^{55}\text{-t}\text{f}\text{h}\text{ə}^{55}$ 「毎日」
 日-ごとに-ごとに.RDP
 b. $\text{l}\text{o}^{55}\text{-t}\text{f}\text{h}\text{ə}^{35}=\text{e}^{55}$ $\text{ko}\text{ŋ}^{55}\text{tsi}^{55}\text{t}\text{f}\text{a}^{33}=\text{e}^{55}\text{-n}\text{e}^{44}$.
 月-ごとに=POSS 給料 ある=POSS-SFP

「(彼らは) 月ごとに給料はあるけどね。」

巴卡下位方言では (59a) のような例では -tʃhə が重複して現れることが多い。

2.5 数詞

数詞には基数と序数がある。基数に関しては固有語を主に用いる。序数は漢語からの借用語である。

ここにはいわゆる数詞だけではなく、「それぞれ、各々」を表す *ko-* も入る。本書では、*ko-* が数詞と排他的に置かれる点などを考慮し、数詞と同位置に入る形態素として、本小節で記述したい。

以下、それぞれについて述べていく。

2.5.1 基数

2.5.1.1 基本的体系

基数は基本的に固有語を用いる。10進法を用いる。11以上の数を表現する際「10」と「1」を並列する。21以上99までは「2」「10」「1」（「21」の場合）のように並列する。以下、1から100までの数詞の具体例を示す（ただし、表2.6は途中の31~90を省略している）。

表 2.6: チノ語の数詞: 1~100

1~10	11~20	21~30	...	91~100
thi ⁵⁵ 「1」	tshɿ ³³ thi ⁵⁵ 「11」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ thi ⁴⁴ 「21」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ thi ⁴⁴ 「91」
ni ⁵⁵ /n̥ ⁵⁵ 「2」	tshɿ ³³ ni ⁵⁵ 「12」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ ni ⁴⁴ 「22」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ ni ⁴⁴ 「92」
sø ⁵⁵ 「3」	tshɿ ³³ sø ⁵⁵ 「13」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ sø ⁴⁴ 「23」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ sø ⁴⁴ 「93」
li ⁵⁵ 「4」	tshɿ ³³ li ⁵⁵ 「14」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ li ⁴⁴ 「24」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ li ⁴⁴ 「94」
ŋɔ ⁵⁵ 「5」	tshɿ ³³ ŋɔ ⁵⁵ 「15」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ ŋɔ ⁴⁴ 「25」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ ŋɔ ⁴⁴ 「95」
khjo ⁵⁵ 「6」	tshɿ ³³ khjo ⁵⁵ 「16」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ khjo ⁴⁴ 「26」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ khjo ⁴⁴ 「96」
ʃi ⁵⁵ 「7」	tshɿ ³³ ʃi ⁵⁵ 「17」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ ʃi ⁴⁴ 「27」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ ʃi ⁴⁴ 「97」
xɛ ⁵⁵ 「8」	tshɿ ³³ xɛ ⁵⁵ 「18」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ xɛ ⁴⁴ 「28」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ xɛ ⁴⁴ 「98」
kju ⁵⁵ 「9」	tshɿ ³³ kju ⁵⁵ 「19」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ kju ⁴⁴ 「29」	...	kju ³³ tshɿ ⁵⁵ kju ⁴⁴ 「99」
tshɿ ⁴² 「10」	ni ³³ tshɿ ⁵⁵ 「20」	sø ³³ tshɿ ⁵⁵ 「30」	...	thi ³³ çɔ ⁵⁵ 「100」

注意すべきは、「2」は *n̥⁵⁵* でも *ni⁵⁵* でもよい⁴。下位方言間の差異であると

⁴特に複合される際、*ni⁵⁵* のように頭子音が有声化することも多い。無声鼻音の有声化につ

2.5.2 序数

序数はすべて漢語からの借用語を用いる。(64)の例はすべて漢語の *diyī*, *diwǔ*, *diyībǎi* から借用されている。

- | | | |
|---|--------------------------------------|---|
| (64) a. $ti^{35}ji^{33}$
第-1
「1 番目」 | b. $ti^{35}vu^{33}$
第-5
「5 番目」 | c. $ti^{35}ji^{55}pa^{33}$
第-100
「100 番目」 |
|---|--------------------------------------|---|

次に、曜日も漢語から借用されているため、そのまま数詞もともに漢語から借用される。(65)の例は漢語の *libàiyī*, *libàiwǔ* から借用されている。

- | | |
|---|--|
| (65) a. $li^{33}pai^{35}ji^{55}$ 「月曜日」
週-1 | b. $li^{33}pai^{35}vu^{33}$ 「金曜日」
週-5 |
|---|--|

2.5.3 kə-

kə- は類別詞とともに用いられ、「それぞれ、各々」を表す形態素である。*kə^{33}-kə^{55}* の声調交替を行う。

- | | |
|--|---|
| (66) a. $kə^{55}n^{55}$ 「毎日」
それぞれ-CL(日) | b. $kə^{33}lai^{35}$ 「各人」
それぞれ-CL(人) |
|--|---|

それでは *kə-* が用いられる文例を挙げよう。

- (67) a. $kə^{55}lo^{35}$ $kə^{55}lo^{35}$ $mo^{33}ŋu^{55}a^{44}$. 「毎月ではない。」
それぞれ-月 それぞれ-月 NEG-COP-PART
- b. $tshi^{55}kə^{33}tsə^{55}$ $n^{55}tsi^{44}$ $tsə^{44}$. 「薬は毎回 2 粒ずつ飲む。」
薬 それぞれ-CL 2-CL 食べる

「それぞれ」の意味に加え、数詞「1」と同じような役割を果たすことも多い。(68)では、*italic* で示された *kə-* を数詞 *thi^{55}*「1」と置き換えても問題ない。

- (68) a. $tshi^{55}kə^{33}tsə^{55}$ $kə^{33}tsi^{44}$ $tsə^{44}$. 「薬は毎回 1 粒ずつ飲む。」
薬 それぞれ-CL 1-CL 食べる
- b. $kə^{33}ki^{55}li^{33}jen^{35}$ $ŋu^{33}me^{35}$. 「1 斤 4 元で売った。」(=[直訳] 1 斤 4 元だった)
1-CL 4-元 COP-PAST

2.6 類別詞

2.6.1 類別詞の種類

類別詞は大きく名詞類別詞と回数詞⁹の2種類に分けられる。名詞類別詞は基本的に名詞の種類を区別し、その数を数える。構造的には[数詞-名詞類別詞]の

⁹漢語文法で言うところの「動量詞」に相当する。

形式をとり、名詞に後置修飾する。しかし、名詞を修飾せず、[数詞-名詞類別詞]のみでも独立して生起しうる。

回数詞は基本的に動作の回数を数える。構造的には名詞類別詞と同じく[数詞-回数詞]の形式をとる。そのため、回数詞は類別詞の1カテゴリーに属すると考えられる。しかし、名詞を修飾することは少なく、独立して動詞を修飾することが多い。

以下、名詞類別詞と回数詞の種類について、順次記述する。なお、類別詞は声調交替が頻繁に生じるため、一部の漢語由来の2音節類別詞(表2.9, p. 53)を除き、類別詞単独形の声調表記は省略する。

2.6.1.1 名詞類別詞

名詞類別詞は比較的豊富に存在する。名詞類別詞には類別詞専用に用いられるものと、名詞から派生してできたものがある。名詞由来の類別詞は、2音節名詞の後部要素を類別詞として用いることが多い。類別詞専用に用いられるもの(以下では「専用類別詞」と呼ぶ)を表2.7(p. 51)に、名詞から派生してできた類別詞を表2.8(p. 52)に示す。全体としては専用類別詞よりも名詞由来の類別詞のほうが数が多い。

表2.7, 表2.8では代表的な類別詞掲げる。

表 2.7: 専用類別詞の種類と機能

由来	類別詞	数えうる名詞の種類
固有語	-lœ	多くの名詞
	-e	～軒(建物や家)
	-kɤ	部屋
	-khrœ	衣服や道具
	-li/-lai	人間
	-ɕo	人間
	-mɔ	動物
	-su	瓶
漢語	-ko	漢語由来の一般名詞(Ch. < gè 「箇」)
	-tʃaŋ	車(Ch. < zhāng 「張」)
	-pen	本(Ch. < běn 「本」)
	-pa	道具(Ch. < bǎ 「把」)
	-pao	袋、パック(Ch. < bāo 「包」)
	-xɔ	(薬や砂糖などの小型の)箱(Ch. < hé 「盒」)

(69)以降では、いくつか例を挙げておく。

表 2.8: 名詞由来の類別詞の種類と機能

由来	類別詞	数えうる名詞の種類
固有語	-pø	稲わら、草 (< ku ⁵⁵ pø ⁴⁴ 「稲わら」)
	-po<I>	花 (< a ⁵⁵ po ⁴⁴ 「花」)
	-po<II>	せいろ (< mja ⁵⁵ po ⁴⁴ 「せいろ」)
	-pu	布団や紙類一冊 (< pø ³³ pu ⁵⁵ 「布団」)
	-pu	手 (< la ⁵⁵ pu ⁴⁴ 「手」)
	-pja	ほうき (< ja ⁴⁴ pja ⁴⁴ 「ほうき」)
	-phi	紐 (< a ⁵⁵ phi ⁴⁴ 「紐」)
	-phu<I>	椀 (< lo ³³ phu ⁵⁵ 「椀」)
	-phu<II>	村 (< phu ⁴⁴ 「村」)
	-phrø	板 (< a ⁵⁵ phrø ⁴⁴ 「板」)
	-kx	椅子 (< thx ³³ kx ⁵⁵ 「椅子」)
	-kho<I>	道 (< jo ⁵⁵ kho ⁵⁵ 「道」)
	-kho<II>	歌 (< krø ³³ kho ⁵⁵ 「歌」)
	-khu	髪の毛 (< tshø ⁵⁵ khu ⁵⁵ 「髪の毛」)
	-tso<I>	薪 (< mi ⁵⁵ tso ⁵⁵ 「薪」)
	-tso<II>	家 (< tso ³³ 「家」)
	-tsu	粒 (< a ³³ tsu ⁵⁵ 「種」)
	-tshø	矢 (< a ⁵⁵ tshø ⁴⁴ 「矢」)
	-su	果物、球形のもの (< a ⁴⁴ su ⁴⁴ 「球」)
	-vu	卵 (< a ³³ vu ⁵⁵ 「卵」)
漢語	-phiŋ	瓶 (Ch. < píng 「瓶」)
	-thoŋ	桶 (Ch. < tǒng 「桶」)
	-kaŋ	かめ (Ch. < kǒugāng 「口缸」)
	-tsao	かまど (Ch. < zào 「竈」)
	-tshao	橋 (Ch. < dàqiáo 「大橋」)
	-xu	つば (Ch. < cháhu 「茶壺」)

- (69) a. a⁵⁵pø⁴⁴ thi⁵⁵-læ⁵⁵
 巢 1-CL

「一つの巢」

- b. kō⁵⁵tø⁴⁴ thi⁵⁵-khrø⁴²
 服 1-CL

「一枚の服」

- (70) a. tshø³³zø⁵⁵ thi⁵⁵-li⁴⁴/ lai⁴⁴/ ço⁴⁴
 人 1-CL

「一人の人」¹⁰

- b. jo³³ma⁵⁵ sø⁵⁵-li⁴⁴/ lai⁴⁴/ ço⁴⁴
 3PL.NOM 3-CL

「彼ら3人」

¹⁰自然発話で、動物でも擬人的に表現するときに -ço を用いる例が存在する。

i) a³³pø⁵⁵ thi³³-ço⁵⁵ khe⁴²-mø⁴⁴. 「(猫が) 自分一人で食べている。」

自分 (3) 1-CL かじる-PAST

この例では jo³³mø⁵⁵ 「猫」という名詞が文中に出ていないことが重要であるかもしれない。

(71) a. tsø³³mo⁵⁵ thi⁵⁵-mø⁵⁵
鷹 1-CL

「一羽の鷹」

b. ɲa³³su⁵⁵ thi⁵⁵-su⁵⁵
バナナ 1-CL

「一本のバナナ」

このほか、度量衡にかかわる類別詞もある。物体などの量を計量するために用いられる。主なものを表 2.9 で掲げる。

表 2.9: 度量衡の類別詞の種類と機能

由来	類別詞	数えうる名詞の種類
固有語	-lo	～両 (約 50g)
	-pi	～100 斤 (約 50kg)
	-pə	列、並び
	-tʃu	グループ
漢語由来	-ki	～斤 (約 500g) (Ch. < jīn 斤)
	-koŋ ³³ ʈɕin ³³	～キログラム (Ch. < gōngjīn 公斤)
	-koŋ ³³ li ³³	～キロメートル (Ch. < gōnglǐ 公里)
	-tʃhi	～尺 (Ch. < chǐ 尺)

やはり [数詞-度量衡類別詞] の語順で用いられる。

(72) a. ɲi⁵⁵-pi⁵⁵
2-100 斤

「200 斤 (約 100kg)」

b. thi⁵⁵-ki⁵⁵
1-斤

「1 斤 (約 500g)」

c. ɲi⁵⁵-koŋ³³ʈɕin³³
2-kg

「2kg」

2.6.1.2 回数詞

回数詞の種類は少ない。以下に代表的なものを掲げる。

表 2.10: 回数詞の種類と機能

由来	回数詞	数えうる動詞の回数
固有語	-la	「～回」、多くの動作・行為
	-tə	「～回」、車を動かす回数
	-tsə	「～回」、薬を飲む回数など
	-khə<I>	「～口」、言葉を発する回数、飲み物を飲む回数
	-khə<II>	「～すくい」、手ですくう回数
	-lə	～月 (< pu ⁵⁵ lə ⁴⁴ 「月」)
	-mjo	～年、歳 (< mjo ⁵⁵ 「年」)
漢語	-fən	「～めぐり (歩く)」 (Ch. < xuán 「旋」)
	-tʃaŋ	車 (Ch. < zhāng 「張」)
	-pen	本 (Ch. < běn 「本」)
	-pa	道具 (Ch. < bǎ 「把」)

最も汎用的に用いられるのは -la であるが、その来源は不明である。-tso は動詞 tso⁵⁵「食べる」から、-lo は名詞 pu⁵⁵lo⁴⁴「月」から文法化したものである。その他の類別詞の由来は表 2.10 のとおりである。

以下、回数詞が用いられている例を挙げる。いずれの回数詞も一般的に [数詞-回数詞] の形式で動詞に先行する。

(73) a. thi³³-la⁵⁵ zo⁵⁵
1-CL 歩く

「一度行く」

b. thi³³-la⁵⁵ me³³
1-CL 泣く

「ちょっと泣く (一度泣く)」

(73) は回数詞 -la が用いられ、動作の回数表現している。数詞と結合し、全体で後続する動詞を修飾している。thi³³la⁵⁵ のように数詞 thi⁵⁵「1」と結合する際、実際には「1 回」のような意味だけではなく、(73b) のように「すこし」「ちょっと」などの意味を持つことも多い。

(74) は時間を表す回数詞で、やはり後続動詞に修飾している。動詞の動作が一定時間継続して行われる、ないし行われたことを表す。

(74) a. thi³³-n⁴⁴ tʃa⁴²
1-CL いる

「一日いる」

b. thi³³-lo⁴⁴ zo⁵⁵
1-CL 歩く

「1ヶ月行く (歩く)」

2.6.2 類別詞の重複

類別詞の重複は一般的に [thi³³-CL-CL] の形式で用いられ、「1~ごと」のような点在的な意味を表す。

(75) tso³³ thi³³-e⁵⁵-e⁵⁵ tʃa³⁵. 「家が 1 棟 1 棟ある。」
家 1-CL-CL.RDP ある

類別詞自体が重複することは多くなく、一般には数詞との組み合わせ、すなわち数量詞句の形式ごと重複されることが多い。

(76) a. sɔ³³-lai³⁵ sɔ³³-lai³⁵=e⁴⁴ lo⁴². 「3 人ごと来る。」
3-CL 3-CL=POSS 来る

b. ko⁵⁵-n⁵⁵ ko⁵⁵-n⁵⁵=e⁵⁵ te⁵⁵+le⁴⁴. 「1 日ごと行って見る。」
それぞれ-CL それぞれ-CL=POSS 見る+行く

(76) では sɔ³³-lai³⁵-lai³⁵ のように類別詞のみの重複を行うことはできない。

2.7 数量詞句接尾辞

数量詞句に後接する接尾辞として -tse 「～くらい」がある。この接尾辞は tse⁵⁵ 「あまる、残る」という動詞に由来している。[NUM-tse (CL)] のように数詞に直接付加される場合 (77, 78) と [NUM-CL-tse] のように類別詞の直後に付加される場合 (79) の2タイプが存在する。

最も多いのは数詞に直接後接するタイプである。

- (77) a. ni³³ɕɔ⁵⁵-tse⁴⁴ 「200 くらい」
200-くらい

- b. ji⁵⁵ji⁵⁵ thi³³tʃɿ⁵⁵=jɔ³³=ɛ⁵⁵ tshɿ³³-tse⁵⁵ n³³tshɿ⁵⁵-mjo⁵⁵
昔 長い間=より =POSS 10-くらい 20-CL

tʃɔ⁵⁵+tʃɔ³³-ɔ³³=la⁵⁵ su⁵⁵jɔ³⁵-nɔ⁴².
いる+いる.RDP-PART=すなわち 知る-RCF

「(あの湖南から来た漢族たちは) 昔から長い間、10年20年くらい住んでいるから、(チノ語も) 分かっているのよ。」

特に tshɿ³³ と n³³tshɿ⁵⁵ の2つの数詞が並列している (77b) では、類別詞である mjo の直前に -tse が置かれず、数詞 tshɿ³³ の直後に置かれている点は注意すべきである。

更に、(78) のように類別詞の前に -tse が置かれている例も存在する。

- (78) tshɿ⁵⁵-tse⁵⁵ n³³=la⁵⁵ phe³³-khju⁵⁵-xɔ⁴⁴.
10-くらい CL=すなわち 切る-AUX-PART

「10日くらいで(灯台葉の木を切っていればゴムの木の皮も)切れるようになるわ。」

(77, 78) と異なり、(79) は類別詞の直後に -tse を置いている例である。

- (79) a. sɔ³³-ki⁵⁵-tse³⁵ tse³³-ɔ⁵⁵-nɛ⁴⁴. 「3斤くらいあまった。」
3-CL-くらい あまる-PART-SFP

- b. ɲɔ⁴² te⁴⁴-mɿ⁴² ɕi⁴⁴ va⁵⁵ ni⁵⁵-pi⁵⁵-tse⁴⁴ tʃa³⁵=ɛ⁴⁴.
1SG.NOM 見る-PAST これ 豚 2-100斤-くらい ある=POSS

「私はこの豚が200斤(約100kg)くらいあると思う。」

(77, 78, 79) により、-tse は数詞あるいは類別詞のいずれかの直後に置かれると考えられる¹¹。また数量詞句接尾辞 -tse は名詞類別詞のうち専用類別詞や名詞由来の類別詞に後接することは少なく、(77, 78, 79) で見たように、度量衡の類別詞や回数詞に後接することが多いようである。

¹¹(77b) および (78) は類別詞がいずれも「年」や「日」といった時間を表している。ともすれば、このような時間を表す類別詞に特徴的な語順なのかもしれない。

2.8 後置詞

後置詞の種類と基本的機能は表 2.11 の通りである。

表 2.11: 後置詞の種類と機能

種類	機能	種類	機能
=ɣ ⁴⁴	強調	=jo ⁴⁴	同等比較
=e ⁴⁴	所有者	=the ⁴⁴	随伴者
=va ⁵⁵	場所、方向、被動者、受領者など	=la ⁵⁵ <II>	要約
=la ⁵⁵ <I>	手段、道具	=lœ ⁴⁴	列挙
=jo ⁴⁴	共同者、起点、尊格		

ここでは以下、各後置詞の例を掲げておく。

2.8.1 =ɣ⁴⁴

後置詞 =ɣ⁴⁴ は先行する名詞句を強調する機能を持つ。また話題や対比的な意味を担うこともある。

- (80) a. pa⁵⁵kha⁴²=ɣ⁴⁴ mo⁵⁵-xo³³ʃi⁵⁵-a⁴⁴.

パカー=EMPH NEG-ふさわしい-ASP

「(その作業をするには)パカーはふさわしくない。」

- b. ji⁵⁵ʃi⁵⁵=ɣ⁴⁴ lœ⁴⁴ tʃhɣ³³lu³⁵ jo⁵⁵tse⁵⁵ tha⁵⁵la⁴² kho³³-xɣ⁵⁵-a³³=ɣ⁵⁵

昔=EMPH むこう 道路 そば 上 どれほど-大きい-PFT=EMPH

mjo³³+le³³-mɣ⁵⁵.

見える+行く-PAST

「昔は道路そばの上の辺りにとてつもなく大きな(ゴムの木)が見えた。」

- c. ko⁵⁵to⁴⁴ ko⁵⁵to⁴⁴ thi³³-e⁵⁵=ɣ⁵⁵ -po⁴².

自分 自分 1-CL=EMPH -RCF

「(私たちの家のような長屋ではなく)自分たちだけの一軒家でしょう?」

動詞複合形式に後接する場合については 3.5.2.1 (p. 90) を参照のこと。

2.8.2 =e⁴⁴

後置詞 =e⁴⁴ は所有者を表す。=e⁴⁴~=e⁵⁵ のように交替する。

- (81) a. ʃao³³xoŋ³⁵=e⁵⁵ a⁵⁵mo⁴⁴ ki⁵⁵no⁵⁵ ŋw³³-nœ⁴⁴.

シャオホン=POSS 母 チノ COP-SFP

「シャオホンの母親はチノ族なのだ。」

- b. pu⁵⁵txi⁵⁵-ma⁵⁵=e⁴⁴ tse³³ri³³, ja⁵⁵ŋ³³. 「軍人たちの祝日なのよ、今日は。」

軍人-PL=POSS 祝日 今日

多くは、所有を表す際に用いられるが、(82)のように属性を表す名詞などに後接することも少なくない。

- (82) a. pa⁵⁵phju⁴⁴=e⁵⁵. 「(彼女は)パピユの人だ。」
パピユ=POSS

- b. ja⁵⁵ŋ⁴⁴=e⁵⁵ thi³³-la⁵⁵=lo⁴⁴ mo⁵⁵-lu³³-a⁴⁴. 「今日一回も来なかった。」
今日=POSS 1-CL=も NEG-来る-PFT

(82a)は話題となっている人物の出身地を表している。(82c)のように時間を表す名詞に後接し、時間的背景を発話に導入することもある。

動詞複合形式に後接する場合については 3.5.2.2 (p. 90) を参照のこと。

2.8.3 =va⁵⁵

後置詞 =va⁵⁵ は場所・方向、被動者を表す。これらの用法のいずれの場合において義務的ではない。

まず、(83a)に場所、(83b)に方向、(83c)に被動者の例を示す。

- (83) a. khɿ⁴² khun³⁵miŋ³⁵=va⁵⁵ a³³pjo⁵⁵ tu³³+lo³⁵-mɿ³⁵.
3SG.NOM 昆明=VA 本 読む+来る-PAST

「彼は昆明に勉強しにきた。」¹²

- b. ŋɔ⁴² tɕiŋ³³xoŋ⁴⁴=va⁵⁵ le⁴⁴-no⁴⁴. 「私は景洪に行く。」
1SG.NOM 景洪=VA 行く-SFP

- c. kho⁵⁵pho⁵⁵ kho⁵⁵mo⁴⁴=va⁵⁵ jo³⁵-mɿ³⁵. 「夫は妻を叱った。」
夫 妻=VA 叱る-PAST

被動者であっても、無生物であれば、=va⁵⁵ をつけることはできない(84)。

- (84) zo⁵⁵ku⁵⁵ pu⁵⁵na⁴⁴fo⁵⁵=Ø/*=va⁵⁵ tso⁵⁵-no⁴⁴. 「子供が肉を食べた。」
子供 牛肉 食べる-SFP

=va⁵⁵ は動作者以外の名詞句であれば、接続することが可能である。しかし、=va⁵⁵ は主語との曖昧性を回避するためだけに置かれるので、一文中に2度現れることはできない。詳細は 6.1.1.3(p. 132) を参照のこと。

また巴卡下位方言では =a⁵⁵ と言われることも多い。場所・方向の例を(85a)で、被動者の例を(85b)で挙げる。多くは被動者が有生名詞である。

- (85) a. khɿ⁴⁴-po⁵⁵=a⁴⁴ le⁵⁵-ŋu³³=e⁴⁴ mo³³-tɕɛ⁴².
あれ-ほう=VA 行く-AUX=POSS NEG-知る

「あっちのほうへ(彼女が)行きたいか分からないわ。」

¹²a³³pjo⁵⁵tu³³は直訳すると「本を読む」であるが、「学校に行く」というイディオムとして一般的に用いられる。

- b. tsu³³ khœ³⁵+jɔ⁴⁴-xɔ⁴², nɛ³⁵ a⁵⁵pu⁴⁴+a⁵⁵mo⁴⁴=a⁴⁴ ʃur⁵⁵+lu⁵⁵.
 家 作る+よい-なら 2SG.POSS 父+母=VA 連れる+来る

「(我々の)家を建てたら、あなたの両親を連れてきなさい。」

2.8.4 =la⁵⁵<I>

後置詞=la⁵⁵は「～で」「～を使って」といった、道具・手段を表す。無標名詞句が道具・手段を表すことはできず、=la⁵⁵<I>は義務的に用いられる。

- (86) a. khɿ⁴² lu³³pja⁵⁵=la⁴⁴/ *= \emptyset ŋa³³zɔ⁵⁵ pɔ³³-mɿ³⁵.
 3SG.NOM 弓=で 鳥 打つ-PAST

「彼は弓で鳥を撃った。」

- b. pa⁵⁵kha⁴⁴mi⁴⁴=la⁵⁵/ *= \emptyset ŋ⁵⁵-lai³⁵ m³³-ŋɔ⁴².
 パカー方言=で 2-CL 話す-RCF

「パカー方言では(「2人」のことを)“ŋ⁵⁵lai³⁵”っていうんだろ。」

2.8.5 =jɔ⁴⁴

後置詞=jɔ⁴⁴は共同者、起点を表す。

まずは共同者を表す例である。「～と」の意味を表す。並列する名詞句が3個以上の場合、最後から2つめの名詞句の末尾に=jɔ⁴⁴を置く(87b)。

- (87) a. ʃao³³ma³⁵=jɔ⁴⁴ ʃao³³jan³⁵ ljen³⁵ai³⁵-a⁴⁴-no⁴⁴.
 馬さん=と 楊さん 恋愛する-PFT-SFP

「馬さんと楊さんは(お互い)恋をした。」

- b. ke⁵⁵khø⁵⁵ lo³³pu³⁵, ma⁵⁵khe⁴⁴, po³³tshai³⁵=jɔ⁴⁴ ma⁵⁵khe⁴⁴ ma⁴⁴ la⁵⁵thə⁴² khœ³³-tɔ⁴².
 菜園 大根 なす ほうれん草=と トマト 多い 植える-EXP

「菜園には大根、なす、ほうれん草およびトマトがたくさん植えてある。」

=jɔ⁴⁴は「年々」のように「次第に～」などの意味を表す場合にも用いられる。

- (88) ʃa³³ren³⁵ tɕa³⁵ky⁴⁴ thi⁵⁵mjo⁵⁵=jɔ⁴⁴ thi⁵⁵mjo⁵⁵ tʃɿ⁵⁵-ma⁵⁵-phu⁴⁴-a⁴⁴-no⁴⁴.
 砂仁.OBL 値段 1年=より 1年 もっと-NEG-高い-ASP-SFP

「砂仁の値段は年々安くなっていった。」

次に起点を表す例である。「～から」の意味を表す。

- (89) a. ʃao³³li³³ a⁵⁵khro⁵⁵=jɔ⁴⁴ zɔ⁵⁵ku⁵⁵ nu⁵⁵-tɔ⁴⁴-mɿ³⁵.
 李さん 川=より 子供 掬う-ASP-PAST

「李さんは川から子供を引き上げた。」

- b. mi⁵⁵jo⁵⁵ni⁴⁴ mi³³khj⁵⁵ a⁵⁵je⁴²=jo⁴⁴ tɕ³³-tɕho⁴²+pe³⁵+lo⁴² pja³³-ko³³-mɕ³⁵.
 明日 晩 近く=より より-寒い+変わる+来る 言う-PROG-PAST

「明日の晩近くから寒くなると言っていた。」

この起点の用法には、「比較の基準」の後に =jo⁴⁴ を置き、「～よりも」という比較の対象の意味も表す。「比べられるもの」と「比較の基準」との間に何らかの差異がある場合に用いられる。この比較用法のとき、=jo⁴⁴ の前に置かれる名詞は斜格形を取ることがある¹³。

この比較構文をパターン化すると以下ようになる。

[比べられるもの] [比較の基準]=jo⁴⁴ tɕ³³(もっと)-V.
 「[比べられるもの]は[比較の基準]より Vだ。」

- (90) a. khw³³ni³⁵ na⁵⁵kh⁵⁵ jo³³me³⁵=jo⁴⁴ tɕ⁵⁵-xɕ⁴².
 犬.OBL 耳 猫.OBL=より もっと-大きい

「犬の耳は猫のよりも大きい。」

- b. tɕ⁴²-na⁴² lo⁴⁴-mɕ⁴⁴ a⁵⁵la⁴² lo⁴⁴-mɕ⁴⁴=jo⁴⁴ tɕ⁵⁵-jo⁵⁵.
 とても-早い 来る-NML 遅い 来る-NML=より もっと-よい

「早く来るほうが遅く来るよりもよい。」

(90a)では「猫の(耳)」、(90b)では「遅く来る(者、こと)」に、後置詞 =jo⁴⁴ が置かれている。いずれも「比較の基準」である。

また 2.8.6 (p. 60) で後述する同等比較の際に用いられる後置詞 =jo⁴⁴ はこの比較用法には用いられない。

- (91) a. a⁵⁵ɕw⁵⁵ a³³nɕ⁵⁵=jo⁴⁴/ *=jo⁴⁴ tɕ⁵⁵-ma⁵⁵-jo⁵⁵.
 黄色 赤=より /=のように もっと-NEG-よい

「黄色は赤よりよくない。」

- b. a³³ke⁵⁵ a³³phi⁵⁵ a³³tɕhi⁵⁵=jo⁴⁴/ *=jo⁴⁴ tɕ⁵⁵-mre⁴².
 おかず 辛い 甘い=より /=のように もっと-おいしい

「辛いおかずは甘いのよりおいしい。」

(91)の例はいずれも「比べられるもの」と「比較の基準」との間に差異がある比較表現である。この場合、「比較の基準」には =jo⁴⁴ のみが置かれうる。

¹³ 「比べられるもの」が[斜格名詞+名詞]であるとき、「比較の基準」として後部要素の名詞を省略することから生じる現象である。

2.8.6 =jo⁴⁴

後置詞 =jo⁴⁴ は同等比較を表す際に用いられる。同等比較のときは、後置詞 =jo⁴⁴ は用いられない。

構文的には以下のパターンを取ることが多い。

[比べられるもの] [比較の基準]=jo⁴⁴ thi³³tʃho⁵⁵ (同じくらい) V.
「[比べられるもの]は[比較の基準]と同じくらいVだ。」

- (92) a. khɿ⁴² a³³nə⁵⁵ a⁵⁵jo⁵⁵=jo⁵⁵/*=jo⁵⁵ thi³³tʃho⁵⁵ mra³⁵.
3SG.NOM 自分 (3) 姉=のように/=より 同じく きれいだ

「彼女はお姉さんと同じくらいきれいだ。」

- b. khɿ⁴² pjo³³-mɿ⁵⁵ nə⁴² pjo³³-mɿ⁵⁵=jo⁴⁴/*=jo⁴⁴ thi³³tʃho⁵⁵ mra³⁵.
3SG.NOM 書く-NML 2SG.NOM 書く-NML=のように/=より 同じく きれいだ

「彼が書いたのはあなたが書いたのと同じくらいきれいだ。」

(92a)のように名詞句に後接するのが一般的であるが、(92b)のように名詞化された動詞にも後接できる。いずれの例でも =jo⁴⁴ は用いられない。

=jo⁴⁴ は元来的意味としては「~のごとく(~のように)」のような意味を持っていたのではないかと考えられる。自然発話ではまれだが、(93)は形式的には純粋な同等比較ではなく、「~のごとく」といった意味を表している。

- (93) a. pu⁵⁵tɛ⁵⁵=jo⁵⁵. ŋa⁵⁵vɛ⁵⁵ mi⁵⁵tso⁵⁵ tɔ³³-jo⁵⁵ jo⁵⁵kho⁵⁵=a⁵⁵.
綿花=のように 1PL.EXCL 薪 刈る-NML 道=VA

「(ライチの花は)綿花のように(白く咲いている)。私たちの柴刈り場のあたりの道では。」

- b. ŋa⁵⁵vu⁴⁴ ki⁵⁵nə⁵⁵-ma⁵⁵=jo⁴⁴ thi⁵⁵-phu⁴⁴=ɛ⁵⁵ thi⁵⁵-phu⁴⁴
1PL.EXCL.NOM チノ-PL=のように 1-CL=POSS 1-CL

mo⁵⁵-thoŋ³⁵=ɛ⁴⁴=jo⁴⁴ ŋu⁵⁵-vu⁵⁵ ŋu³³=ɛ⁴⁴.
NEG-同じである=POSS=のように COP-ので COP=POSS

「(ヨーロッパの人たちの言葉が理解できないのはすなわち、)私たちチノ族のように、(ヨーロッパも)それぞれの村で(言葉が)違うからだろう。」

(93a)では「綿花のように、ライチの花は白く咲いている」という意味を表す。「ライチの花はまさしく綿花のようである」と表現している。

(93b)は表面的には構造を捉えにくい。直訳に近い形は次のようになるだろう。つまり、「私たちチノ族と同じように、(つまり)それぞれの村で(言葉が)違うようになっているので、(ヨーロッパの人たちの言葉が理解できないのは)当然だ。」というような意味である。この文では2つの =jo⁴⁴ が呼応しているよう

になっている。チノ族の言語状況がそれぞれの村で違うのであるという説明があり、それに対応する形で(文中では表面的には現れていないが)ヨーロッパの言語状況も同様だということを最後の $\eta w^{33} = \epsilon^{44}$ ¹⁴ で表していると考えられる。

2.8.7 =the⁴⁴

後置詞 =the⁴⁴ は「～とともに」という随伴者の用法を持つ。老年層に多く用いられる。=jo⁴⁴ と異なり、A and B のような並列には用いられない。

- (94) a. $le^{33} i^{55} = the^{55} mi^{55} na^{44} thi^{33} \cdot mjo^{55} \quad \epsilon a^{33} - me^{55}$.

レイリー=と ミナ 1-CL 住む-PAST

「ミナはレイリーと一緒に1年住んだ。」

- b. $le^{33} fe^{55} = the^{35} ku^{55} - le^{35} + ja^{42} \quad \eta w^{55} = \epsilon^{55} \quad tʃhɿ^{33} - a^{44}$.

レイフェイ=と また-行く+行く COP=POSS 似ている-PFT

「レイフェイと一緒にまた行ってしまったみたいだ。」

- c. $thu^{42}, a^{33} si^{55} pje^{44}, a^{55} san^{44} - ma^{55} = the^{44} \quad ni^{33} ko^{33} + le^{33} - me^{55} - je^{44}$.

あれ アスピエ アサン-PL=と 遊ぶ+行く -PAST-EUP

「(彼は) あそこのアスピエやアサンたちと遊びに行っちゃったんだわ。」

2.8.8 =la⁵⁵ <II>

後置詞 =la⁵⁵ <II> は「すなわち」といった、先行名詞句の要約ないし言い換えを表す。後置詞 =la⁵⁵ <I> (2.8.4, p. 58) と同音であるため、注意を要する。

- (95) a. $\epsilon i^{44} = la^{55} \quad jin^{33} nan^{33} ps^{33} jo^{33}$. 「これはすなわち、雲南白薬だ。」

これ=すなわち 雲南白薬

- b. $\epsilon i^{44} \quad thi^{33} \cdot mjo^{55} \quad \eta^{33} \cdot mjo^{55} = la^{55} \quad kho^{33} ji^{33} - a^{44} \quad a^{55} no^{44} tai^{35} = la^{55} \quad mo^{55} - sur^{55} jo^{35} - no^{42}$.

これ 1-CL 2-CL=すなわち 大丈夫だ-PART 後の代=すなわち NEG-知る-RCF

「この1,2年は(まだチノ語は)大丈夫だ。その後の代はすなわち(もうチノ語は誰も)わからないだろうよ。」

動詞複合形式に後接する場合については 3.5.2.3 (p. 91) を参照のこと。

2.8.9 =læ⁴⁴

後置詞 =læ⁴⁴ は「～も」という列挙を表す。代名詞に後接する際、斜格を要することもある。

- (96) a. $jo^{35} = læ^{44} \quad mo^{55} - tsɔ^{55} - a^{44}, \quad mi^{55} pu^{55}$. 「私も食べないな、たけのこ。」

1SG.OBL=も NEG-食べる-ASP たけのこ

¹⁴本文ではこの部分を「当然だ」と訳した。チノ語では提示された命題が正しい場合、それを $\eta w^{33} - a^{44}$ などのコピュラを用いた形で表現する。

- b. u³³sə⁵⁵ ɲo³⁵=lə⁴⁴ vu⁵⁵khɛ⁵⁵ tshi⁵⁵, ji³³tʃho⁵⁵ tshi³³-mɛ⁵⁵.
 先ほど 1SG.OBL=も 頭 洗う 水 洗う-PAST

「さっき私も髪を洗い、水浴びしたよ。」

疑問詞句を(多くは否定文中で)不定名詞句化することもできる。

- (97) a. nə⁴² ɲur⁵⁵kɿ⁴⁴=lə⁴⁴ thə⁵⁵-ko⁴⁴. 「お前は何も持ってくるな。」
 2SG.NOM 何=も PROH-持つ

- b. kho³³su⁵⁵=lə⁴⁴ mo⁵⁵-tʃə³⁵. 「誰もいない。」
 誰=も NEG-ある

(97) はいずれも疑問詞句が文中に入っている。しかし、文全体は疑問文ではない。いずれの疑問詞句も =lə⁴⁴ により不定化されているからである。

動詞複合形式に後接する場合については 3.5.2.4 (p. 92) を参照のこと。

(98)の接辞類がすべて共起することはない。いくつかの接辞類が共起しない。

以下では表 3.1 で示した [VERB] の前に置かれたものを「接頭辞類」、後ろに置かれたものを「接尾辞・助詞類」とし、接頭辞類 (3.2, p. 64)、動詞 (3.3, p. 69)、接尾辞・助詞類 (3.4, p. 78) の順に説明する。

3.2 接頭辞類

3.2.1 前動詞 (preverb, prev)

前動詞は接頭辞よりも動詞語根に対して結びつきが弱い。やや副詞的な性格を持った範疇である。そのため動詞語根との間に他の副詞を挿入することもある (100)。しかし、単独で用いられることはなく、非自立形式と考えられる。以下、具体例とともに用法を概観しておく。

3.2.1.1 tɕ^{42} -

前動詞 tɕ^{42} - は「すごく～だ」「きわめて～だ」といった、状態の程度が強いことを表す。一般に静態動詞に前接する。形容詞語根に前接することも多いが、その場合、形容詞基本形の接頭辞 a- は現れない。語根に直接前接する。

- (99) a. khy^{42} $\text{tɕ}^{42}\text{-maŋ}^{33}$. 「彼はすごく忙しい。」
3SG.NOM すごく-忙しい

- b. ci^{44} tɕ^{35} $\text{a}^{55}\text{mɛ}^{55}$ $\text{tɕ}^{42}\text{-mɿ}^{44}$. 「この田んぼの米はとてもよい。」
この 田 米 すごく-よい

動詞語根との間に $\text{nɛ}^{33}\text{khe}^{35}$ 「大変」といった強調の副詞を挿入することもある。

- (100) $\text{lao}^{33}\text{si}^{55}$ $\text{ɕao}^{33}\text{tɕaŋ}^{55}$ $\text{tɕ}^{42}\text{-nɛ}^{33}\text{khe}^{35}\text{-pro}^{55}\text{-tɔ}^{44}\text{-nɔ}^{44}$.
先生 張さん すごく-たいへん-助ける-EXP-SFP
「先生は張さんを大いに助けた。」

3.2.1.2 ɕo-

前動詞 ɕo- は「とても～だ」といった、程度の強いことを表す。一般に静態動詞に前接する。 tɕ^{42} - と意味的に大きな差異はない。

- (101) a. nɔ^{42} ci^{35} $\text{lo}^{44}\text{-mɿ}^{44}$ $\text{ŋu}^{55}\text{lo}^{44}$ $\text{ɕo}^{33}\text{-la}^{35}$?
2SG.NOM ここ 来る-NML なぜ とても-遅い

「あなたはどのようにしてこんなに遅くここに来たのですか?」

(= [直訳] 「あなたがここに来るのがどうしてとても遅いのですか?」)

- b. $\text{ɕo}^{33}\text{-mre}^{42}\text{-po}^{42}$. 「とてもおいしいでしょ?」
とても-おいしい-RCF

- c. $\text{jo}^{33}\text{-sa}^{42}$. $\text{a}^{33}\text{sa}^{55}$. 「とても暑い。暑い。」
とても-暑い 暑い

3.2.1.3 tʃ^{55} -

前動詞 tʃ^{55} - は「より～だ」「もっと～だ」といった、比較してより程度の強いことを表す。

- (102) a. khy^{42} $\text{nur}^{33}\text{zo}^{55}=\text{jo}^{55}$ $\text{tʃ}^{55}\text{-tshon}^{55}\text{min}^{44}$. 「彼は弟より賢い。」
3SG.NOM 弟=より もっと-賢い
- b. khy^{42} $\text{ji}^{55}\text{ji}^{55}=\text{jo}^{44}$ $\text{tʃ}^{55}\text{-khju}^{44}\text{-a}^{44}\text{-nœ}^{44}$.
3SG.NOM 昔=より もっと-やせている-PFT-SFP
「彼は以前に比べてやせました。」
- c. $\text{fan}^{55}\text{mi}^{33}$ $\text{tʃ}^{55}\text{-phu}^{55}\text{-a}^{55}$. 「香米(米の一種)はもっと高い。」
香米 もっと-高い-PFT

3.2.1.4 ku^{55} -

ku^{55} - は「また～する」という、動作の再開および事態の再発を表す。通常、(103)のように動詞語根に前接する。 $\text{ku}^{33}\sim\text{ku}^{55}$ -のように声調交替する。

- (103) a. $\text{a}^{55}\text{jo}^{55}$ $\text{ku}^{33}\text{-lo}^{42}\text{-nœ}^{44}$. 「お兄さんはまた来た。」
兄/姉 また-来る-SFP
- b. ŋ^{42} $\text{ku}^{55}\text{-mœ}^{55}\text{-o}^{44}\text{-nœ}^{44}$. 「私はまたおなかが減った。」
1SG.NOM また-飢える-PFT-SFP
- c. $\text{mi}^{33}\text{tha}^{55}$ $\text{ku}^{33}\text{-xo}^{55}+\text{lu}^{33}\text{-me}^{35}$. 「雨がまた降ってくるだろう。」
雨 また-降る+来る-FUT

形容詞が述語として用いられ、「～になった」という変化の再発を表す場合、[形容詞 ku -コピュラ]のように、 ku - がコピュラ動詞 ŋu^{55} に前接する。

- (104) nœ^{35} $\text{jo}^{33}\text{fu}^{55}\text{fu}^{55}$ $\text{ku}^{33}\text{-ŋu}^{55}\text{-xa}^{44}$. 「あなたの(髪)はまた長くなったわ。」
2SG.OBL 長い.RDP また-COP-PFT

また (105) のように、[ku -VERB] が並列する場合もある。その場合は「～ながら…する」といった意味を表す。

- (105) khy^{42} $\text{ku}^{55}\text{-tsɔ}^{44}\text{-ku}^{55}\text{-ko}^{44}+\text{khœ}^{42}\text{-nœ}^{44}$.
3SG.NOM また-食べる-また-持つ+する-SFP
「彼はまた食べながら(何かを)持っているよ。」

3.2.2 接頭辞 1 類 (prefix₁, pref₁)

3.2.2.1 a₁-

接頭辞 a₁- は動詞を名詞化する機能をもつ。いかなる他の接頭辞とも共起しない。a₁-[VERB] は基本的に形容詞として用いられる (4.1 [p. 94] 参照)。しかし、a₁-[VERB] が形容詞として用いられず、名詞として用いられることがある。

- (106) a³³-ts⁵⁵ 「食べ物、餌」
 PREF-食べる

3.2.2.2 ma- ~mɔ-

接頭辞 ma- は否定を表す。巴卡下位方言では mɔ- がよく用いられる。両者に意味的な違いはない。これらの否定辞の作用域は基本的に同一の動詞複合形式内のすべてに及ぶ。

- (107) a. xə³³tshə⁵⁵=lɛ⁴⁴ mɔ⁵⁵-ko³³-a⁴⁴. 「おかずも持ってこなかった。」
 おかず=も NEG-持つ-PFT
- b. ɕi⁴⁴ jo³³kha³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma⁵⁵-tɔ⁵⁵-a⁴⁴-nɛ⁴⁴.
 この 老人 酒 NEG-飲む-PFT-SFP
 「このお年よりは酒を飲まなくなった。」
- c. thi³³-ɕo⁵⁵=lɛ⁴⁴ xɔ⁵⁵pɔ⁴⁴ mɔ⁵⁵-kjo⁵⁵-a⁵⁵. 「一人も話し声が聞こえない。」
 1-CL=も 声 NEG-聞こえる-PFT

3.2.2.3 thə-

接頭辞 thə- は動詞に前接し、禁止、すなわち「～してはならない」という意味を表す。thə- と言うことも多い (109)。

(108) は接頭辞 thə- が、(109) は接頭辞 tho- が動詞語根に前接している例である。thə- と tho- の間には有意味な意味・機能的差異が現段階では見つからない。

- (108) a. thə⁵⁵-ŋi⁵⁵kha³⁵-tɔ⁴⁴. 「ぼんやりするな。」
 PROH-ぼんやりする-EXP
- b. nɔ⁴² khy³⁵ nɣ³³su⁵⁵ thə³³-khu⁵⁵. 「彼に対して怒るな。」²
 2SG.NOM 3SG.OBL 心 PROH-怒る
- (109) a. jo³³ma⁵⁵ su⁵⁵=lɛ⁴⁴ ko⁵⁵to⁴⁴+ko⁵⁵to⁴⁴ tho³³-su⁵⁵.
 3PL 話す=も 自分+自分.RDP PROH-話す

「みな、自分たち同士で話しをするのはやめなさい。」

²nɣ³³su⁵⁵ khu⁵⁵ は [名詞 + 動詞] の複合によってできたイディオムの一種で、「怒る」を意味する。

- b. khɿ⁴² a³³phi⁵⁵ tho³³-tə⁵⁵. 「それ、白酒³を飲むな。」
 それ 辛い PROH-飲む

3.2.2.4 a₂-

接頭辞 a- は動詞に前接し、禁止、すなわち「～してはならない」という意味を表す。接頭辞 tho- に比べて自然発話での出現頻度は少ない。

- (110) a. we⁴². a⁵⁵-jə⁴⁴-ji⁵⁵-kə⁴⁴. 「こら。けんかするな。」
 こら PROH-しかる-RCP-PROG
- b. nə⁴² ŋə³⁵ a⁵⁵-tʃə³³ti³³-vi³⁵. 「おれを焦らさないでくれよ。」⁴
 2SG.NOM 1SG.OBL PROH-あせる-CAUS

3.2.3 接頭辞 2 類 (prefix₂, pref₂)

3.2.3.1 pi-

接頭辞 pi- は「～させる」という使役を表す。動詞 pi 「与える」に由来する。間接使役である。文脈に応じて容認使役にも強制使役にも解釈される。使役表現に関する詳細は 6.4 (p. 150) を参照のこと。

- (111) a. ʃao³³li³³ ja³⁵ lu⁵⁵tu⁴⁴ pi⁵⁵-tso⁴⁴-mɿ³⁵.
 李さん 鶏.OBL とうもろこし CAUS-食べる-PAST
 「李さんは鶏にとうもろこしを食べさせた。」
- b. nə⁴² ŋə³⁵ pi⁵⁵-le⁴⁴-la⁴²?
 2SG.NOM 1SG.OBL CAUS-行く-Q
 「(子供が母親に尋ねる感じで) 行ってもいい?」
 (= [直訳] 「あなたは私を行かせるのか?」)

3.2.3.2 khə-

接頭辞 khə- は「無理やり～させる」という強制度の極めて高い使役を表す。間接使役である。使役表現に関する詳細は 6.4 (p. 150) を参照のこと。

- (112) a. a⁵⁵mo⁴⁴ nə³⁵ khɿ³⁵ khə³³-le³³-nə⁴⁴.
 母 2SG.OBL そこ CAUS-行く-SFP
 「母はあなたにそこに無理やり行かせた。」

³チノ語では a³³phi⁵⁵ 「辛い」で「白酒」を指す。

⁴話者によると、この例では a- を tho- に置き換えられるが、あまり tho- では言わないようだ。

- b. $\text{jao}^{33}\text{li}^{33} \text{tse}^{33}\text{phu}^{55} \text{ma}^{33}\text{-tə}^{55}\text{-jo}^{33}\text{-mɿ}^{35}, \text{jao}^{33}\text{wan}^{33} \text{jao}^{33}\text{li}^{35} \text{tse}^{33}\text{phu}^{55}$
 李さん 酒 NEG-飲む+よい-PAST 王さん 李さん.OBL 酒
khə³³-tə³⁵-mɿ³⁵.
 CAUS-飲む-PAST

「李さんはお酒が飲めないのに、王さんは李さんに無理やり酒を飲ませた。」

この使役接辞は 被使役者 が人間でない場合は用いられない (113b)。

- (113) a. $\text{a}^{55}\text{mo}^{44} \text{ja}^{35} \text{me}^{33}\text{tu}^{44} \text{pi}^{55}\text{-tsɔ}^{44}\text{-mɿ}^{35}$.
 母 鶏.OBL とうもろこし 食べる-CAUS-PAST
 b. $*\text{a}^{55}\text{mo}^{44} \text{ja}^{35} \text{me}^{33}\text{tu}^{44} \text{khə}^{33}\text{-tsɔ}^{33}\text{-mɿ}^{35}$.
 母 鶏.OBL とうもろこし CAUS-食べる-PAST

「母は無理やり鶏にとうもろこしを食べさせた。」

3.2.3.3 ja-

接頭辞 ja- は「無理やり～させる」という強制度の極めて高い間接使役を表す。使役表現に関する詳細は 6.4 (p. 150) を参照のこと。

- (114) a. $\text{jao}^{33}\text{li}^{33} \text{jao}^{33}\text{wan}^{35}=\text{va}^{55} \text{jao}^{33}\text{tʃaŋ}^{55} \text{phu}^{33} \text{ja}^{35}\text{-pi}^{33}\text{-mɿ}^{35}$.
 李さん 王さん.OBL=VA 張さん お金 CAUS-与える-PAST

「李さんは王さんに無理やり張さんにお金を渡させた。」

(= [直訳] 李さんが王さんに命令して、王さんが張さんにお金を渡した)

- b. $\text{khy}^{42} \text{ŋɔ}^{35} \text{nə}^{35} \text{ŋw}^{55}\text{-lo}^{44} \text{pja}^{33}\text{-mɿ}^{44} \text{ja}^{35}\text{-ŋɔ}^{55}\text{-tə}^{55}\text{-nɔe}^{44}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL 2SG.OBL どのように 言う-COMP CAUS-聞く-EXP-SFP

「彼は私にあなたがどんな風にいうのか無理やり聞かせた。」

使役接辞 khə- と同様、被使役者 が人間でない場合は用いられない。

- (115) a. $\text{ŋɔ}^{42} \text{khw}^{33}\text{ŋi}^{55} \text{khy}^{35} \text{a}^{55}\text{khri}^{55} \text{phi}^{55}\text{-vi}^{33}\text{-mɿ}^{35}$.
 1SG.NOM 犬 そこ 糞 排泄する-CAUS-PAST
 b. $*\text{ŋɔ}^{42} \text{khw}^{33}\text{ŋi}^{55} \text{khy}^{35} \text{a}^{55}\text{khri}^{55} \text{ja}^{35}\text{-phi}^{55}\text{-mɿ}^{35}$.
 1SG.NOM 犬 そこ 糞 CAUS-排泄する-PAST

「私は犬にそこで排泄させた。」

また ja- のほうが khə- よりも強制度が高い。詳細は 6.4.1.1 (p. 151) を参照されたい。

3.2.4 接頭辞 3 類 (prefix₃, pref₃)

3.2.4.1 m-

接頭辞 m- は静態動詞に前接し、動詞の使役化を行う。4.1.1.1 (p. 94) で後述するように、形容詞は [a-静態動詞] の構造を持つため、形容詞を使役化するときも [m-静態動詞] の形式となる。使役のタイプとしては直接使役を表す。

- (116) a. a⁵⁵phi⁴⁴ m³³-thø³⁵. 「紐をねじ切りなさい。」
紐 CAUS-切れる
- b. ja⁵⁵ŋ⁴⁴ lao³³toŋ⁵⁵-mɛ⁵⁵. a⁵⁵prø⁴⁴ m³³-prø⁵⁵-khjo³⁵-xa⁴⁴.
今日 働く-PAST だろだろだ CAUS-だろだろだ-ACP-PFT
「今日は働いた。すっかりだろだろになってしまった。」
- c. jo³³ma⁵⁵=lœ⁴⁴ tso³³ thi⁵⁵=lœ⁴⁴ mo³³-m⁵⁵-jo⁵⁵+lu³³-a⁴⁴, pao³³koŋ³³txi³⁵-ma⁵⁵.
3PL.NOM=も 家 少し=も NEG-CAUS-よい+来る-PART 仕事請負人-PL
「(あの) 仕事請負人たちはちっとも家 (= アチェンの部屋) をきれいにしに來ない。」

(116) の例はいずれも動詞が静態動詞である。そのうち、(116a, b) は形容詞語根となるものである⁵。(116c) は形容詞ではないが、静態動詞である。

一方で、直接使役を表す場合であれば、m- は動態動詞にも前接しうる。

- (117) a. khw³³ni⁵⁵ pu⁵⁵tju⁵⁵ m³³-se⁵⁵-a⁴⁴-nœ⁴⁴.
犬 虫 CAUS-死ぬ-PFT-SFP
「犬が虫を殺した。」 (= [直訳] 犬が虫を死なせた)
- b. nœ⁴² kja³³sŋ⁵⁵ m³³-je³⁵-a⁴⁴ ŋw³³-xɔ⁴²,
2SG.NOM キャソン CAUS-行く-PFT COP-なら
tœ³³phw⁵⁵ prw³⁵+prw⁴⁴-a⁴⁴ thi⁵⁵-pe⁴⁴ tɔ³³=ɛ⁴⁴.
酒 満ちている+満ちている.RDP-PFT 1-CL 飲む=POSS
「お前がキャソンを酔いつぶしたら、たっぷり入った酒を 1 杯飲んでやる。」

使役表現にかんしては 6.4 (p. 150) を参照のこと。

3.3 動詞

3.3.1 語構成と動詞分類

3.3.1.1 語構成

3.3.1.1.1 基本形

チノ語において動詞を形態的に区別する標識はない。内容語の範疇として、名詞・形容詞・動詞を区別する基準は表 3.2 のとおりである。

⁵(116a) は a³³thø⁵⁵, (116b) は a⁵⁵prø⁴⁴ が形容詞基本形である。

表 3.2: 名詞・形容詞・動詞の判定基準

	名詞	形容詞	動詞
ma- で否定できる	－	＋	＋
基本形で主語等になれる	＋	＋	－

名詞・形容詞・動詞は表 3.2 の基準により、峻別できる⁶。

チノ語の動詞は、漢語からの借用語を含めて、1 音節語と 2 音節語の 2 種類がある。3 音節以上の動詞は現在のところ見当たらない。

- (118) a. [1 音節語] tso⁵⁵「食べる」、khø⁴⁴「恐れる」、w⁴²「笑う」、jo⁵⁵「よい」など。
 b. [2 音節語] ni³³ko⁵⁵「遊ぶ」、tɕ⁴⁴ni⁴⁴「座る」、khan³⁵piŋ³⁵「看病する」など。

3.3.1.1.2 重複

動詞の重複は非生産的である。自然発話においては臨機的に重複されることがあるが、その場合、語根を重複し、動作・状態の強調あるいは動作の反復を表すことが多い。

- (119) a. khɔ³⁵=ɛ⁵⁵lœ⁴⁴ a⁵⁵jo⁵⁵ tʃɔ³³+tʃɔ³³=ɛ⁴⁴.
 どこ.OBL=POSS=も リーダー いる+いる.RDP=POSS
 「どこにだってリーダーはいるもんだ。」
 b. a⁵⁵xua³⁵=lœ⁴⁴ tʃɕ³³-tʃhə⁵⁵+tʃhə⁵⁵-ko⁴⁴-nu³⁵-nœ⁴⁴.
 アホア.OBL=POSS もっと+かじる+かじる.RDP-PROG-AUX-SFP
 「アホアも (冬瓜の種を) とてもよくかじりたがる。」

ただし、「見る」を表す動詞 te⁵⁵ が試行を表すとき、重複することができる⁷。

- (120) a. khɕ⁴⁴-tsø⁵⁵ ko³³+te⁵⁵+te⁵⁵. 「その一足 (の靴) を持ってみてくれ。」
 あれ-CL 持つ+見る+見る
 b. tɔ⁴⁴+te⁵⁵+te⁵⁵. 「着てみて。」
 着る+見る+見る

3.3.1.2 動詞分類

チノ語の動詞はいくつかの基準により分類が可能である。統語的な基準では自動詞と他動詞に分かれる。形式的基準・意味的基準の両面から動態動詞と静態動詞に分かれる。また意味的な基準では意志動詞と無意志動詞に分かれる。

以下では、これらの動詞分類について整理しておく。

⁶4.1 (p. 94) で後述するように形容詞は形態的な基準が重要であるため、表 3.2 は余剰的とも言えよう。ただ、内容語の 3 つの大きな範疇を形態統語的に区別する基準を明示するため、ここでは名詞・動詞とともに並列しておく。

⁷この後者の te⁵⁵ は試行を表す接尾辞類として分析することも可能かもしれない。

3.3.1.2.1 自動詞/他動詞

チノ語の動詞は統語的基準により、自動詞と他動詞に分類できる。

表 3.3: 統語的要求項に基づいた動詞分類

自動詞	統語的要求項が 1。
他動詞	統語的要求項が 2 もしくは 3。

具体的に自動詞と他動詞の例を挙げておく。

- (121) a. [自動詞] zo⁵⁵「歩く」、le⁵⁵「行く」、xe⁵⁵「立つ」、ni³³ko⁵⁵「遊ぶ」
 b. [2 項他動詞] tsɔ⁵⁵「食べる」、tə⁴²「飲む」、te⁵⁵「見る」
 c. [3 項他動詞] pi⁵⁵「与える」

(121) のように動詞の大部分は自動詞と 2 項他動詞である。3 項他動詞であると認めることができるものは pi⁵⁵「与える」のみであろうと考えられる。また後述する移動系動詞である le⁵⁵「行く」や lo⁴²「来る」などが述語に置かれた場合、場所名詞を後置詞なしで文中に置くことができる。このとき表面的には場所名詞はこれら移動系動詞の目的語のように見えるため、移動系動詞は一見すると他動詞のようにも考えられる。しかし、本書では後置詞を伴わない場所名詞は副詞的要素の一種であると捉え、移動系動詞も自動詞に属すると考える。

このほか形容詞の語根 (4.1.1.1, p. 94 参照) も自動詞の一部であるとみなす。このことは動詞連続構造に関与する (詳細は 6.6, p. 160 を参照)。

それでは自動詞および他動詞が用いられている例を示しておこう。

まずは自動詞の例である。

- (122) a. khɿ⁴² ji⁵⁵n⁴⁴ lo³³-mɿ³⁵-la⁴²? b. khɿ⁴² u³³tha⁵⁵=jo⁴⁴ za⁵⁵+lu⁴⁴-ko⁴⁴-nce⁴⁴.
 3SG.NOM 昨日 来る-PAST-Q 3SG.NOM 山=から 下りる+来る-PROG-SFP
 「彼/彼女は昨日来ましたか?」 「彼/彼女は山から下りて来ている。」
 c. khɿ³⁵ vu⁵⁵khe⁵⁵ kjo³³-nce⁴⁴. 「彼/彼女は頭が痛い(ようだ)。」⁸
 3SG.OBL 頭 痛い-SFP

(122) ではいずれも動詞が主語のみを要求しうる⁹。目的語は要求しない。続いて、他動詞の例である。

⁸日本語では心理述語等が用いられている文で 1 人称以外の主語が現れている場合、動詞にモダリティ要素を付加しなければ非文になることが多い。しかし、チノ語では本例のようにたとえ 3 人称主語であっても、「ようだ」「らしい」のようなモダリティ要素を付加しなくても文法的であると判断される。

⁹チノ語では他の多くのアジア諸語と同様、重要度の低い情報に関しては省略する傾向にある。そのため、主語が語用論的・文脈的に明瞭であれば、明示されないことも多い。これについては 6.1.2.2 (p. 135) も参照されたい。

- (123) a. zɔ⁵⁵ku⁵⁵ pu⁵⁵na⁴⁴ʃɔ⁵⁵ tso⁵⁵-noe⁴⁴. b. ʃao³³li³³ tsha⁵⁵mo⁴⁴ pa⁵⁵-to⁴⁴.
 子供 牛肉 食べる-SFP 李さん 鋤 携える-EXP
 「子供が牛肉を食べる。」 「李さんは鋤を携えている。」

- c. ŋɔ⁴² nɔ³⁵ a⁵⁵me⁵⁵ thi⁵⁵-ki⁵⁵ ŋi⁵⁵-ki⁵⁵ pi⁵⁵=e⁴⁴.
 1SG.NOM 2SG.OBL 米 1-CL 2-CL 与える=POSS
 「私はあなたに米を1斤か2斤あげよう。」

(123)はいずれも動詞が主語以外に、目的語も要求しうる。(123c)の動詞 pi⁵⁵は上述のとおり(121c)、3項の名詞句を要求しうる¹⁰。しかし、すべての名詞句が文中に明示的に現れるとは限らない¹¹。

3.3.1.2.2 動態動詞/静態動詞

動詞は形式的・意味的に「動態動詞」と「静態動詞」に分けられる。前者は主に動作を表す動詞で、後者は主に状態を表す動詞と考えてよい。これらの区別は進行相接辞 -ko (3.4.3.1, p. 80)の付加条件と関係し、付加可能であれば動態動詞、不可能であれば静態動詞と認める。

- (124) kɾɔ⁵⁵-ko⁴⁴ (125) su⁵⁵ʃɔ⁴⁴ / *su⁵⁵ʃɔ⁴⁴-ko⁴⁴
 歌う-PROG 知っている 知っている-PROG
 「歌っている(最中である)」 「知っている」

(124)は動態動詞に、(125)は静態動詞に進行相の接辞 -ko が後接した例である。(124)は文法的であるが、(125)は非文法的である¹²。

3.3.1.2.3 意志動詞/無意志動詞

動詞は更に意味的に「意志動詞」と「無意志動詞」に分かれる。これら2種類の動詞の区別は、助動詞 -tɕhe「あえて～する」との共起が可能かどうかで判断する。共起が可能であればそれを意志動詞とし、不可能であれば無意志動詞とする。(126a)は意志動詞、(126b)は無意志動詞の例である。

¹⁰現時点ではチノ語において3項の名詞句を要求しうる動詞として pi⁵⁵「与える」しか見つかっていない。諸言語で3項の名詞句を要求できる動詞として登録される「教える」「貸す」「借りる」「見せる」「売る」などは、チノ語ではすべて受益接尾辞 -mo を伴うことが通常である。

¹¹主語の場合と同様、目的語も語用論的・文脈的に明瞭であれば明示されないことが多い。これについては 6.1.2.2 (p. 135) も参照されたい。

¹²なお、ʃi⁴²「死ぬ」も動態動詞に属すると考えられる。以下の i) のような自然発話が確認されている。

i) ʃi³⁵-ko⁴⁴-noe⁴⁴. 「(その子犬は)死にかけている。」
 死ぬ-PROG-SFP

ii) のように ʃi⁴²「死ぬ」も進行相接辞を後接させられるので、動態動詞の一つと考えられる。

(126) a. tso⁵⁵-tɕhe⁵⁵

食べる-AUX

「あえて食べる」

b. *phjə³³-tɕhe⁴⁴

吹く-AUX

「あえて(風が)吹く」

多くの意志動詞は上述した動態動詞に属し、多くの無意志動詞が静態動詞に属する。しかし、必ずしも意志/無意志動詞の分類と動態/静態動詞の分類が一致するわけではない。

例えば、「(雨が)降る」は無意志動詞に属するが、(127)のように進行相の接尾辞 -ko と結びつくため、静態動詞ではなく、動態動詞に属する。

(127) mi³³tha⁵⁵ xo³³-ko⁵⁵. 「雨が降っている。」

雨 降る-PROG

意志/無意志動詞の分類は動詞連続構造 (6.6, p. 160) のパターンと関係がある。
なお、意志動詞の基本形は命令にも用いられる。

(128) tso⁵⁵ 「食べる/食べなさい」、le⁵⁵ 「行く/行きなさい」など

3.3.1.3 注意すべき動詞

3.3.1.3.1 コピュラ動詞 ɣu⁵⁵

チノ語ではコピュラ ɣu⁵⁵ は動詞の一種であると考えられる。主に等位文に対して用いられるほか、モダリティーを導入する手法としてもよく用いられる。

まず等位文の例を挙げる。等位文では主にテンス・アスペクト・モダリティーの接辞を用いる必要がある場合に、コピュラを用いる (129b)。

(129) a. li³³jun⁴² tshə³³zo⁵⁵ la⁵⁵xɿ⁴⁴ ɣu³³-nə⁴⁴. 「李雲は大きい人である。」

李雲 人 大きい COP-SFP

b. kan⁵⁵tshao³³phjen³⁵ mo³³-ɣu⁵⁵-a⁴⁴. 「甘草片(咳止め的一种)ではない。」

甘草片 NEG-COP-PART

次にモダリティーを導入している例を示す。主に「おそらく～だろう」「～のようだ」といった、話者の推測・推定を表す。

(130) a. ki⁵⁵no⁵⁵=ɛ⁵⁵ ɣu⁵⁵=ɛ⁵⁵ tɕhɿ³³-a⁴⁴. 「(彼女は)チノ族のようだ。」

チノ族=POSS COP=POSS 似ている-PART

b. kho³³mja⁵⁵ thi³³-phu⁴⁴ ɣu³³=ɛ⁴⁴ ty⁵⁵-ɔ⁴⁴.

それでは 1-CL COP=POSS きっと-PART

「それではきっと(彼らは私と)同じ村だろう。」

また (131) のように自問を表す疑問文にも現れることが多い。

- (131) $l\phi^{35}$ $tj\phi^{33}-k\phi^{33}-n\alpha^{42}$ $m\phi^{33}-t\epsilon^{55}$, $t\epsilon i\eta^{33}$ $xo\eta^{44}=a^{44}$ $\eta\eta^{55}=\epsilon^{55}$ $j\phi^{44}$, $m\phi^{33}-t\epsilon^{55}$.
 あそこ.OBL いる-PROG-Q NEG-知っている 景洪=VA COP=POSS-PART NEG-知っている
 「(彼女は)あそこにいるのかしら、それとも景洪にいるのかしら?」

3.3.1.3.2 伝達系動詞

伝達を表す動詞としては以下のようなものがある。

表 3.4: チノ語の伝達系動詞

< 補文誘導タイプ >	m^{55} 「言う」、 pja^{42} 「話す」、 the^{44} 「伝える」、 $n\phi^{42}$ 「聞く、尋ねる」
< 非補文誘導タイプ >	$tjha^{55}$ 「語る」、 $x\phi^{42}$ 「しゃべる」

情報を伝達する動詞としては表 3.4 に掲げたように 2 種類が存在する。「補文誘導タイプ」は主に補文を誘導し、「『～』と言う」という文を形成することができる。「非補文誘導タイプ」は補文を通常誘導せず、「物語を語る」「チノ語をしゃべる」といった純粋な名詞句を目的語に取るタイプの動詞である。「補文誘導タイプ」のうち、 m^{55} 以外の動詞、すなわち pja^{42} , the^{44} , $n\phi^{42}$ については補文も名詞句も目的語として取ることができる¹³。 m^{55} は通常、名詞句を目的語として取ることは少ない。若干の例を (132) に掲げる。

- (132) a. a^{55} $n\phi^{55}$ $j\phi^{33}$ $t\epsilon^{55}$ lai^{35} $-a^{44}$ $-n\alpha^{44}$ m^{33} $-m\epsilon^{35}$.
 自分 (3) 携帯電話 壊れる-PFT-SFP 言う-PAST
 「彼女は携帯電話が壊れたと言った。」
- b. $n\phi^{42}$ $n\phi^{35}$ $khv^{35}=j\phi^{44}$ a^{55} $m\epsilon^{55}$ $ts\phi^{55}+ja^{55}$ $-n\alpha^{44}$ the^{33} $-vu^{55}$ $-l\phi^{44}$
 1SG.NOM 2SG.OBL 3SG.OBL=より ご飯 食べる+行く-SFP 伝える-のでも
 $m\phi^{55}$ $-sur^{55}$ $j\phi^{44}$ $-a^{44}$.
 NEG-知る-PFT
 「私は彼女にあなたは (外へ) ご飯を食べに行ったと伝えたのだけど、(彼女は聞いてもチノ語を) わからなかった。」
- c. n^{33} $t\phi^{55}$ $-a^{44}$ $-la^{33}=\epsilon^{44}$ $n\phi^{33}+lur^{55}$ $-vu^{55}$ $n\phi^{42}$ $tsai^{35}=\epsilon^{44}$ m^{33} $-m\epsilon^{35}$.
 いる-PART-Q=POSS 聞く+来る-ので 1SG.NOM いる (漢語)=POSS 言う-PAST
 「(彼女は電話であながそこに) いるのかと聞いてきたので、私は『zài (いる)』と (漢語で) 言った。」

3.3.1.3.3 思考・感情系動詞

思考・感情系動詞には表 3.5 のようなものがある。

¹³ただし、 pja^{42} については自然発話ではもっぱら単純名詞を目的語にとることが多く、補文を目的語としてとることは少ない。

表 3.5: チノ語の思考・感情系動詞

< 補文誘導タイプ >	kjo ⁵⁵ 「思う」、khø ⁴⁴ 「怖がる」、suw ⁵⁵ jo ⁴⁴ 「知っている」、 tɕe ⁴² 「知っている」
< 非補文誘導タイプ >	mxi ⁴⁴ 「うれしい」、ma ⁵⁵ ja ⁴² 「悲しい、かわいそうだ」、 kjo ⁵⁵ ɕo ⁴⁴ 「辛い」

思考・感情系動詞も表 3.5 に掲げたように 2 種類が存在する。「補文誘導タイプ」は補文を誘導することができ、「『～』と思う」といった文を形成することができる。「非補文誘導タイプ」は補文を通常誘導せず、話者の感情を表現する静態動詞であると考えられる。「補文誘導タイプ」はいずれも補文、名詞句ともに目的語としてとることができる。若干の例を (133, 134) に掲げる。

- (133) a. khø⁵⁵pu⁴⁴-thø⁴² ɲu⁵⁵ mo⁵⁵-suw⁵⁵jo⁴⁴-a⁴⁴.
どれくらい-多い COP NEG-知っている-PART
「(ゴムの値段は) どれくらいなのか、知らない。」
- b. ɲo⁴² nø³⁵ ku³³-ɲi⁵⁵ko⁴⁴+lɔ³³-mɤ⁵⁵ kjo⁵⁵-nœ⁴⁴.
1SG.NOM 2SG.OBL また-遊ぶ+くる-PAST 思う-SFP
「私はあなたがまた遊びに来たと思った。」
- (134) a. tɕe⁴²-mxi⁴⁴-a⁴⁴. 「とてもうれしいです。」
とても-うれしい-PART
- b. a⁵⁵la⁴², lø⁴⁴ ʃo³³-ma⁵⁵ja⁴². 「あらまあ、(彼女は) とてもかわいそうだ。」
あらまあ あれ とても-かわいそうだ

(133) は補文誘導タイプの例、(134) は非補文誘導タイプの例である。

(133) の各思考動詞は khø⁵⁵-pu⁴⁴-thø⁴² ɲu⁵⁵ 「どれくらいなのか」、ɲo⁴² nø³⁵ ku³³-ɲi⁵⁵ko⁴⁴+lɔ³³-mɤ⁵⁵ 「私はあなたがまた遊びに来た」を補文として誘導している。(134) の各感情動詞は補文を誘導せず、発話者の感情を表現している。

3.3.1.3.4 移動系動詞

移動系動詞は表 3.6 のようにまとめられる。

表 3.6 で見るように、移動系動詞は発話地点から離れるタイプ(あるいは発話の想定地点から離れるタイプ)と発話地点に近づくタイプ(あるいは発話の想定地点に近づくタイプ)に分かれる。更に動詞連続構造の観点から、V₁(動詞連続構造の先頭に現れる動詞)として出現できるものと V₁ としては出現することができないものに分かれる。後者の V₁ として出現できないものは一種の補助動

表 3.6: チノ語の移動系動詞

	V ₁ として出現可	V ₁ として出現不可
発話地点から 離れる	le ⁵⁵ 「行く」, je ⁵⁵ 「行く」	ja ⁵⁵ 「～いく、～して しまう」
発話地点に 近づく	lo ⁴² 「来る」, lu ⁵⁵ 「来る」	la ⁵⁵ 「～くる」

詞的な役割を果たしているとも考えることができる。とくに ja⁵⁵ は発話地点に近づくタイプの動詞とも動詞連続構造において共起することができ、そのときは「(こちらに)来てしまう」というようなニュアンスが生まれる (137b)。しかし、本書では V₁ として出現しない ja⁵⁵, la⁵⁵ についても動詞と同じ性格を持つものとして位置づけておく¹⁴。

以下で若干の例を挙げておく。

- (135) a. ŋɔ⁴² kai³³tsi⁵⁵ le⁴⁴-nɔ⁴⁴. 「私は市場に行く。」
1SG.NOM 市場 行く-SFP

- b. ŋɔ³⁵=lɛ⁴⁴ moŋ³³jaŋ³³ je³⁵+ja⁴⁴-mɛ⁵⁵. 「私もモンヤンに行った。」
1SG.OBL=も モンヤン 行く+いく-PAST

(135) は「発話地点から離れ」、かつ V₁ として出現できる動詞である。現在のところ、le⁵⁵ と je⁵⁵ に大きな意味・用法の差異は確認できない。

- (136) a. khɿ⁴² ma³³-lo⁵⁵-mɿ⁴², ŋɔ³⁵=lɛ⁵⁵ ma⁵⁵-lo⁵⁵=ɛ⁵⁵.
3SG.NOM NEG-来る-なら 1SG.OBL=も NEG-来る=POSS

「彼が来ないなら、私も来ない。」

- b. ŋɔ⁴² lu⁵⁵-vu⁴⁴, pao³³tʃhɔ⁵⁵=ɿ⁴⁴ ɕi⁴⁴-lo⁴⁴ mo⁵⁵-khæ³³-su⁵⁵-a⁵⁵.
1SG.NOM 来る-ので パオチャ=EMPH これ-ように NEG-作る-まだ-PFT

「私が来たころ、パオチャはこのような(家を)まだ建てていなかった。」

(136) は「発話地点に近づく」、かつ V₁ として出現できる動詞である。現在のところ、lo⁴² と lu⁵⁵ に大きな意味・用法の差異は確認できないが、後者は前者に比べて V₂ 以降に出現する傾向が強い。

¹⁴移動系動詞は V₂(動詞連続構造の先頭から 2 番目に現れる動詞)以降に現れた場合、一律「達成」を表す -khjo, 「受益」を表す -mɔ の後ろに現れることがある。この点に注意しなければならない。

i) lo³³-jai³⁵-khju³⁵-lu³³-ŋɔ⁴². 「(パナナの葉はあぶって使わないと)すべて破れてしまうよ。」
ずっと-破れる-ACP-来る-RCF

ii) khɿ³⁵ren⁵⁵ ja⁵⁵kho⁴² ko³³-mɔ⁵⁵-le⁴⁴.
客人 タバコ 持つ-BEN-行く

「客人にタバコを吸わせなさいよ。」(=[直訳] 客人にタバコを持たせてあげていきなさい。)

一方、(137) と (138) は V_2 以降にしか出現できない移動系動詞の例である。

- (137) a. $\eta\alpha^{42}$ $kh\gamma^{35}$ ma^{55} - pi^{55} - ko^{35} + ja^{42} .
1SG.NOM 3SG.OBL NEG-CAUS-持つ+いく

「私は彼に(それを)持って行かせなかった。」

- b. no^{42} ni^{33} ko^{55} + le^{55} + jo^{55} . $\epsilon\epsilon^{42}$ - na^{42} lo^{35} + ja^{33} - jo^{42} .
2SG.NOM 遊ぶ+行く+よい とても-早い来る+いく-OBLIG

「お前は遊びに行ってもよい。(しかし、)早く帰って来ちゃわないないといけない。」

(137) はいずれも「発話地点から離れ」、かつ V_2 以降に出現する動詞 ja^{55} の例である。しかし、(137b)のように V_1 に「発話地点に近づく」動詞がある場合はその意味が優先され、全体の意味は「来てしまう」のニュアンスを持ちうる。

- (138) li^{33} a^{33} $tsh\epsilon^{55}$ $phj\epsilon^{33}$ + la^{42} - $no\epsilon^{44}$. 「冷たい風が吹いてくる。」
風 冷たい 吹く+くる-SFP

(138) は「発話地点に近づき」、かつ V_2 以降に出現する動詞 la^{55} の例である。

3.3.1.3.5 $t\dot{f}h\gamma^{55}$ 「似ている」

動詞 $t\dot{f}h\gamma^{55}$ 「似ている」は単独で述語に用いられるほか、コピュラ $\eta\mu^{55}$ が現れた節や補文に後続し、「～のようだ」といった話者の推測を表すことが多い。まず単独で「A が B に似ている」という意味を表す例を挙げる。

- (139) $kh\gamma^{42}$ $kh\alpha^{55}$ mo^{44} $\epsilon\epsilon^{42}$ - $t\dot{f}h\gamma^{44}$.
3SG.NOM 女 すごく-似ている

「彼は女のようだ。」(= 彼は女に似ている)

(139) のような「似ている」の意味で用いる例は相対的には少ない。一方で、(140) のように事態を判断し、話者の推測を表す例のほうが相対的に多い。

- (140) a. ni^{55} ve^{55} ja^{55} ren^{44} $kh\epsilon\epsilon^{44}$ to^{33} = ϵ^{55} $t\dot{f}h\gamma^{33}$ - a^{44} .
2PL.OBL 砂仁林 刈る=POSS 似ている-PFT

「あなたたちの家はどうかやら砂仁林で(草を)刈ったようね。」

- b. a^{55} $t\dot{f}en^{44}$ te^{55} - to^{44} = ϵ^{44} $t\dot{f}h\gamma^{33}$ - a^{44} , ten^{35} ji^{35} .
アチェン 見る-EXP=POSS 似ている-PART テレビ

「アチェンは見てるようよ、テレビ。」

- c. si^{55} $t\dot{f}huan^{44}$ = ϵ^{55} $\eta\mu^{33}$ = ϵ^{55} $t\dot{f}h\gamma^{33}$ - a^{44} . 「多分四川人みたいだ。」
四川=POSS COP=POSS 似ている-PART

(140) の $t\dot{f}h\gamma^{55}$ は「～ようだ」のような事態判断の意味を表している。(140c) のようにコピュラ $\eta\mu^{55}$ と共起し、= ϵ^{55} $t\dot{f}h\gamma^{33}$ - a^{44} の形式で現れることが多い。

3.3.2 動詞連続構造

動詞語根がいかなる付属形式をも伴わないで直接結合した動詞連続構造が存在する。動詞連続構造の動詞語根結合部を表すと、表 3.7 のようになる。

表 3.7: 動詞連続構造の動詞語根部分

…[V₁+…+V_n]… (ただし 1≤n≤4 の整数)

意味的に異なる動詞が連続できるのは、現在確認されているところ、最大 4 つである。それ以上はまだ確認されていない¹⁵。

これらの動詞は基本的に V₁ ≤ V₂ ≤ V₃ ≤ V₄ の順に行為が実現する (A ≤ B は動作・状態 A の次に動作・状態 B が起こる、もしくは動作・状態 A と動作・状態 B が同時に起こることを意味する)。ただし動詞連続構造の最後の動詞 (V₂ あるいは V₃, V₄) が le⁵⁵「行く」あるいは lo⁴²「来る」といった移動系動詞の場合、図像的ではなくなる (行為実現は逆転する) ことも少なくない。

このように、動詞連続構造の動詞がどのような特徴をそれぞれ持ちえているかについては多くの問題がある。しかし、ここでは立ち入らず、詳細は 6.6 (p. 160) を参照されたい。

3.4 接尾辞・助詞類

3.4.1 「達成」

3.4.1.1 -khjo

接尾辞 -khjo は「～しきる」「～しつくす」といった、動作の完遂・達成を表す。-khju と同発音される。

- (141) a. juε³³syŋ⁵⁵ zo⁵⁵-khjo³⁵-ja⁴²-noε⁴⁴. 「学生はみな行ってしまった。」
学生 歩く-ACP-しまう-SFP

- b. ŋo⁴² zo⁵⁵ku⁵⁵ a⁵⁵mε⁵⁵ tso⁵⁵-khjo³⁵-vi³³-mɿ³⁵.
1SG.NOM 子供 ご飯 食べる-ACP-CAUS-PAST

「私は子供にご飯を食べせらせた。」

- c. lo³³-lai³⁵-khju³⁵-luw³³-no⁴².
ずっと-破れる-ACP-来る-RCF

「(バナナの葉はあぶって使わないと) すべて破れてしまうよ。」

¹⁵意味的に同じものも含めば、最初の動詞が重複していて、形式的に 4 つの動詞語根が連続している例も存在する (6.6 の注 17 [p. 161] 参照)。

- d. mi⁵⁵na⁴²la⁴² m³³-na³³-khju⁵⁵-nœ⁴⁴.
炭 CAUS-黒い-ACP-SFP

「鍋が焦げて黒くなってしまった。」([= 直訳](なべ底についた)炭は(鍋を)黒くしてしまった。)

3.4.2 受益・相互

3.4.2.1 -mə

接尾辞 -mə は、「～してあげる」「～してもらう」といった受益の意味を表す。-mə は動詞などの自立形式で用いられることはなく、その来源は不明である。他動詞語根に後接し、結合価を増加させる。

-mə はいわゆる benefactive を標示する。malefactive を標示することはない¹⁶。受益構文全体の詳細は 6.5 (p. 157) を参照のこと。

- (142) a. khɿ³⁵ren⁵⁵ ja⁵⁵kho⁴² ko³³-mə⁵⁵-le⁴⁴.
客人 タバコ 持つ-BEN-行く

「客人にタバコを吸わせなさいよ。」(=[直訳] 客人にタバコを持たせてあげていきなさい。)

- b. ŋo⁴² na³⁵ a⁵⁵xo³³mi⁵⁵ kjao³⁵-mə⁵⁵.
1SG.NOM 2SG.OBL 漢語 教える-BEN

「私はあなたに漢語を教えてあげる。」

- c. ŋo⁴² ŋo⁵⁵jo⁵⁵ sɔ³³-mə⁵⁵ sɔ³³-mə⁴² pho³³-mə³⁵-nœ⁴⁴.
1SG.NOM 魚 3-CL 3-CL.OBL 買う-BEN-SFP

「私は(猫に毎日)魚を3匹買ってやる。」

3.4.2.2 -fi

接尾辞 -fi は、「～しあう」といった相互の意味を表す。他動詞語根に後接し、結合価を減少させる機能を持つ。例は (143) に掲げる。

- (143) a. khɿ³³ma⁵⁵ tɕu³³-fi⁵⁵-ko⁴⁴. 「彼らは殴り合っている。」
3PL.NOM たたく-RCP-PROG

- b. khɿ⁴⁴ khur³³ni⁵⁵-ma⁵⁵ a⁵⁵nu⁴⁴ tho³³-fi⁵⁵-ko⁴⁴.
あれ 犬-PL 自分(3).OBL 咬む-RCP-PROG

「あれらの犬はお互いを咬みあっている。」

- c. tʃho⁵⁵+jo⁵⁵-fi⁵⁵-ko⁴⁴-mɿ⁴⁴, a⁵⁵no⁴² kha⁵⁵ε⁴⁴ lo³³-tʃhe⁴².PREF
話す+怒る-RCP-PROG-なら 後で なぜ 来る-AUX

¹⁶また-mə 以外に受益を標示するような形式はない。

「(お前たち2人はまた)けんかしたら、これから以降(彼らはここに)来るだろうか?」

(143)の動詞語根、 kw^{33} 「たたく」、 thə^{33} 「咬む」、 $\text{tʃhə}^{55}\text{tjə}^{55}$ 「話して怒る(=口げんかする)」はいずれも他動詞である。 $-\text{ji}$ はこれらの語根に後接し、結合価を減少させ、基本的に主語項のみを文中に置くことを許している¹⁷。

3.4.3 テンス・アスペクト1類

3.4.3.1 $-\text{ko}$

接尾辞 $-\text{ko}$ は動態動詞に後接し、動作行為の進行を表す。

- (144) a. $\text{a}^{55}\text{mɔ}^{44}\text{va}^{33}\text{tsɔ}^{55}\text{phu}^{55}\text{-ko}^{44}$. 「母は豚のえさを煮ている。」
 母 豚のえさ 煮る-PROG
- b. $\text{zɔ}^{55}\text{ku}^{55}\text{no}^{33}\text{tɔ}^{55}\text{kro}^{55}\text{-ko}^{35}$. 「子供が鼻をほじくっている。」
 子供 鼻 ほじくる-PROG
- c. $\text{tho}^{55}\text{-luan}^{35}\text{-ko}^{44}$. 「暴れるな。」
 PROH-乱す-PROG

完了助詞 $-\text{a}$ と結合して、「～してみよう」の意味を持つこともある。

- (145) $\text{ɲɔ}^{42}\text{khɿ}^{35}\text{ɕi}^{44}\text{thi}^{33}\text{-la}^{55}\text{fanj}^{35}\text{-ko}^{44}\text{-a}^{44}\text{-nœ}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL これ 1-CL 離す-PROG-PFT-SFP
 「私は今回は彼を大目にみよう。」

3.4.4 テンス・アスペクト2類

3.4.4.1 $-\text{to}$

接尾辞 $-\text{to}$ は、本質的には動詞の「状態の持続」を表している。動詞はその動作性に応じて「動態動詞」と「静態動詞」に分けられる。 $-\text{to}$ はそのどちらにも後接しうる。しかし、後接した形式の意味・用法は表面的には各動詞で異なる。

まず静態動詞に後接した場合の例である。静態動詞に後接すると、動詞の状態が発話参照時において継続していることを示す。静態動詞に後接した場合、経験の意味を表さない。

- (146) a. $\text{jao}^{33}\text{li}^{33}\text{ji}^{55}\text{thə}^{44}\text{-to}^{44}$. 「李さんは(今)寝ている。」
 李さん 寝る-EXP

¹⁷(143b)では $\text{a}^{55}\text{nu}^{44}$ 「自分(3).OBL」を目的語として解釈することも可能だが、 $-\text{ji}$ が他動詞語根の結合価を減少させる効果があることを考えれば、副詞的に動詞を修飾していると解釈するほうがよいだろう。

- b. $\eta\alpha^{42}$ $kh\gamma^{44}$ si^{55} $chij^{44}$ $\eta\alpha^{35}$ $-t\alpha^{44}$ $-n\alpha^{44}$. 「私はそのことを忘れている。」
 1SG.NOM あれ こと 忘れる-EXP-SFP

(146a)では「寝る」という状態が、発話参照時である「現在」においてもなお継続していることを示す。また(146b)では「忘れる」という状態が、発話参照時である「過去のある時点」について継続されていたことを示す。

次に動態動詞に後接した場合の例である。このとき動詞の表す動作がある時点で完了し、それによって生じた結果状態が発話参照時において継続していることを示している。表面的な意味・用法としては、動態動詞に後接した場合、一般的に言う「経験」を表すこともある。

- (147) a. $kh\mu^{33}$ ηi^{55} $j\alpha^{33}$ u^{55} thi^{55} $-l\alpha^{55}$ pa^{55} $-t\alpha^{44}$. 「犬が骨を一本^{くわ}齧えている。」
 犬 骨 1-CL 齧える-EXP
- b. a^{55} mo^{44} ji^{33} tfo^{55} phu^{55} $-t\alpha^{44}$. 「お母さんはお湯を沸かした。」
 母 水 煮る-EXP
- c. $n\alpha^{35}$ $=l\alpha^{55}$ pa^{55} kha^{35} le^{33} $-t\alpha^{55}$ $-a^{44}$ $-po^{42}$.
 2SG.OBL=も パカー.OBL 行く-EXP-PFT-RCF
 「あなたもパカーに行ったことがあるでしょう。」
- d. $j\alpha^{33}$ ma^{55} mo^{55} $-l\alpha^{55}$ $-t\alpha^{55}$ $-m\gamma^{35}$. 「彼らは(去年はここに)来ていない。」
 3PL.NOM NEG-来る-EXP-PAST

(147)はいずれもある動作がかつて行われ、その状態が発話参照時まで継続していることを表している。(147c)のように le^{55} 「行く」に $-t\alpha$ が後接した場合は「行ったことがある」といった経験を表す。

3.4.5 使役

3.4.5.1 -vi

接尾辞 -vi は「～させる」という容認性の高い使役を表す。間接使役である。

- (148) a. $j\alpha\alpha^{33}$ li^{33} $\eta\alpha^{33}$ $z\alpha^{55}$ pre^{35} $+ja^{55}$ $-vi^{44}$ $-m\gamma^{35}$. 「李さんは鳥を飛ばせた。」
 李さん 鳥 飛ば+行く-CAUS-PAST
- b. $kh\gamma^{42}$ $\eta\alpha^{35}$ ci^{35} $t\alpha^{35}$ $-t\alpha^{44}$ $-vi^{33}$ $-m\gamma^{35}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL ここ 待つ-CAUS-PAST

「彼は私を(無理やりにではなく)ここで待たせた。」

使役接辞と考えられる m- と -vi は同じスロットに入らないため、同一文中で共起できる。その際二重使役を表す。以下の(149b)は(149a)に使役接辞-viを加えた例である。

- (149) a. $\eta\alpha^{42}$ ci^{44} $a^{55}\text{ke}^{55}$ $m^{33}\text{-phi}^{35}\text{-n\ae}^{44}$. 「私はこのおかずを辛くした。」
 1SG.NOM この おかず CAUS-辛い-SFP

- b. $a^{55}\text{mo}^{44}$ $\eta\alpha^{35}$ ci^{44} $a^{55}\text{ke}^{55}$ $m^{33}\text{-phi}^{35}\text{-vi}^{33}\text{-n\ae}^{44}$.
 母 1SG.OBL この おかず CAUS-辛い-CAUS-SFP

「母は私にこのおかずを辛くさせた。」

使役接辞 *pi-* や *kh\alpha-*, *ja-* も同様の理由で使役接辞 *-vi* と同一文内で共起できる。しかし、*m-* と *-vi* の共起の例と異なり、二重使役を表さない。使役接辞が1個のみ付加された場合と同じ意味を表す。詳細は 6.4.1.2 (p. 153) を参照のこと。

3.4.6 「助動詞」1類

3.4.6.1 -khju

「助動詞」-khju は、動作の可能および可能性を表す。「～できる」の意味を表す。*-khju*⁴²~*-khju*⁵⁵ のように声調が交替する。

- (150) a. $j\alpha^{33}\text{me}^{55}$ $a^{33}\text{tsu}^{55}$ $\text{ta}^{33}\text{-khju}^{42}$. 「猫は木を登れる。」
 猫 木 登る-AUX

- b. $n\alpha^{42}$ $\eta\alpha^{35}$ $\text{th}\alpha^{55}\text{-pro}^{55}+\text{ko}^{35}$, ci^{44} $\text{ca}^{55}\text{l}\alpha^{44}$ $\text{ko}^{55}\text{to}^{44}$ $\text{ko}^{33}+\text{le}^{55}\text{-khju}^{42}$.
 2SG.NOM 1SG.OBL PROH-手伝う+持つ これ 荷物 自分 持つ+行く-AUX

「私が持つのを手伝わなくていいよ。この荷物は自分で持っていけるから。」

- c. $\text{ci}^{55}\text{-lo}^{44}$ $u^{33}\text{kh}\alpha^{55}\text{l}\alpha^{55}=\text{a}^{44}$ $\text{mo}^{33}\text{-tj}\alpha^{55}\text{-khju}^{55}\text{-a}^{44}$.
 これ-ように 山頂=VA NEG-生きる-AUX-PART

「(タイ族は) このように山の上で生きていくことができない。」

3.4.6.2 -tche

「助動詞」-tche は、「あえて～する」という、動作の敢行を表す。

- (151) a. $\text{kh}\alpha^{44}$ $\text{kh}\alpha^{55}\text{mo}^{44}$ $\text{mo}^{33}\text{th}\alpha^{55}$ $\text{tsu}^{55}\text{-tche}^{44}$. 「あの女の人はバイクにあえて乗った。」
 あの 女性 バイク 乗る-AUX

- b. ci^{44} $\text{zo}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{kh}\alpha^{33}\text{ni}^{55}$ $\text{tu}^{55}\text{-tche}^{44}$. 「この子供はわざと犬を殴る。」
 この 子供 犬 殴る-AUX

(151) の例文はいずれも動作主の積極的意志が反映されて、動作が敢行される。しかし、-tche が用いられている肯定文において、動作が必ずしも実現する必要はない。事象が仮定される場合においても -tche が用いられる。

- (152) a. $\text{thai}^{35}\text{jaj}^{33}\text{nyj}^{33}$ $\text{mo}^{55}\text{-tja}^{35}$, $\text{mo}^{33}\text{-tshi}^{55}\text{-tche}^{42}\text{-a}^{44}$.
 ソーラーシャワー NEG-ある NEG-洗う-AUX-PART

「ソーラーシャワーがなかったら、(体を) 洗わない。」

- b. a⁵⁵ko⁴⁴ puu⁵⁵+tshɛ³⁵-xo⁴², ɕa⁵⁵-tɕhe⁴⁴.
 扉 閉める+きつい-なら 住む-AUX

「扉をちゃんと閉めれば、(怖くないので)眠れる。」

(152a)では、「ソーラーシャワー」は実際には存在する。ここでは「ソーラーシャワーがない」という事態を想定し、もしそうであれば、水が冷たいので「体を洗うことはない」という事態が帰結されるわけである。現実にはソーラーシャワーのおかげで体を洗うことができているという解釈である。一方で、(152b)では、「扉がちゃんと閉められているかいなか」ということが現実の問題として起こっているのではない。問題は「ちゃんと扉を閉めるかどうか」が動作主の「安眠」に影響するということである。「眠る」事態が実現するかどうかは関係なく、諸条件が整うことで、「眠る」事態が敢行されうること示している。

3.4.7 「助動詞」2類

3.4.7.1 -ɲu

「助動詞」-ɲu は、「～したい」という希望・期待を表す。-ɲu⁴²～-ɲu³⁵～-ɲu⁵⁵の範囲で声調交替する。声調交替の条件は不明確な点が多いが、動詞が42調であるとき、-ɲu は35調であることが多い。

- (153) a. ɲo⁴² ji⁵⁵ji⁵⁵ ɕi⁵⁵-lo⁴⁴ ma⁵⁵-khœ⁴²-ɲu³⁵.
 1SG.NOM 昔 これ-ように NEG-する-AUX

「私は前はこんな風にしなくなかった。」

- b. ɲo⁴² na⁴² ji⁵⁵ɲ⁴⁴ khœ⁴²-mɣ⁴⁴ a⁵⁵ke⁵⁵ tsɔ³³-ɲu⁵⁵-nœ⁴⁴.
 1SG.NOM 2SG.NOM 昨日 作る-REL おかず 食べる-AUX-SFP

「私はあなたが昨日作ったおかずが食べたい。」

- (154) nœ⁴² tshœ³³so³⁵ je⁵⁵-ɲu⁵⁵, ma⁵⁵mo³³=la⁵⁵ je⁴⁴.
 2SG.NOM トイレ 行く-AUX あそこ=すなわち 行く

「もしトイレに行きたかったら、あそこに行くとたどり着きますよ。」

- (155) va⁵⁵khɣ³³ɲi⁵⁵ tsɔ³³-ɲu⁵⁵-nœ⁴⁴. 「豚が犬を食べたがっている。」
 豚 犬 食べる-AUX-SFP

(153)は1人称の希望を、(154)は2人称の希望を表している。このほか、(155)のように3人称の、しかも非人間の希望をも表しうる。特に肯定文において(154)や(155)のように2人称・3人称の希望を表す例は少ない。

3.4.7.2 -mɤ

「助動詞」 -mɤ は、「～するようだ」という、話し手の推定を表す。

- (156) a. ɕi⁴⁴ khur³³ni⁵⁵ ji³⁵+ja⁵⁵-mɤ³³-a⁴⁴. 「この犬は死んでしまうみたいだ。」
 この犬 死ぬ+しまう-AUX-PFT
- b. mi³³tha⁵⁵ xo⁴²-mɤ³³-no⁴⁴. 「雨が降るようだ。」
 雨 降る-AUX-SFP
- c. tshə³³zo⁵⁵ m³³-ɕi⁵⁵-se⁵⁵-mɤ³³-no⁴⁴.
 人 CAUS-焦る-死ぬほど-AUX-SFP

「はがゆいったらない。」 (= [直訳] 人を死ぬほど焦らすようだ。)

(156)で見るように、-mɤ は発話者が直接的に何らかの証拠を握っているか、状況証拠をもとに推定を行う際に用いられることが多い。

3.4.8 テンス・アスペクト 3 類

3.4.8.1 -mɤ

接尾辞 -mɤ は過去の時制を表す。より正確には、事態が現実にかつたことを表すと言った方がよいかもしれない。この接尾辞は動詞複合形式全体を名詞化する機能をもつ¹⁸。

- (157) a. jo³³kjə⁵⁵ khur³³ni⁵⁵ thə³⁵-mɤ³⁵. 「蚊が犬を咬んだ。」
 蚊 犬 咬む-PAST
- b. ŋə⁴² khɤ³⁵ thi⁵⁵-la⁵⁵ ɕur³⁵-mɤ⁵⁵. 「私は彼を 1 度殴った。」
 1SG.NOM 3SG.OBL 1-CL 殴る-PAST

(157)の例ではいずれも -mɤ が用いられている。いずれの動作・行為の発生も過去に行われたことが標示されている。

巴卡下位方言では -me とすることも多い。

- (158) a. khɤ⁴² moŋ³³jaŋ³³ je³⁵+ja³³-me⁴⁴. 「彼はモンヤンに行ってしまった。」
 3SG.NOM モンヤン 行く+しまう-PAST
- b. thi⁵⁵jo⁴⁴joŋ⁴⁴ thi⁵⁵ thjao³⁵-mjə⁴², lo³⁵+ja⁴²-me⁴⁴.
 しばらく すこし 踊る-して 来る+しまう-PAST

「しばらく踊って帰ってきた。」

¹⁸-mɤ は記述的には動詞複合形式において過去を表すが、動詞あるいは節全体を名詞化する機能を持つ。例えば、動詞を名詞化して「人」や「場所」を表すこともあれば、補文標識として節全体を名詞化することもある(林 2006b)。また -mɤ の後接した節は後続する名詞を修飾することもできる。

-m という形態素も自然発話中ではよく出現し、-mɤ と共通する特徴を持っていると考えられるが、詳細な検討は今後の課題とする。

-mɿ と -mɛ には意味・機能的な差異はない。いわゆる下位方言間の形式的な差異であろうと考えられる。(158)の -mɛ はいずれも -mɿ に交換可能である。

3.4.8.2 -me

接尾辞 -me は動作行為が未来に行われることを表す。より正確には、事態が未だ実現していないことを表すと言った方がよいかもしれない。この接尾辞も -mɿ 同様、動詞複合形式全体を名詞化する機能をもつ¹⁹。

- (159) a. khɿ³³ni⁵⁵ ɸe³³xun⁵⁵-me³⁵-nɔe⁴⁴. 「彼ら二人は結婚する予定だ。」
3DU.NOM 結婚する-FUT-SFP

- b. pa⁵⁵kha³⁵ tɸə³⁵-tɔ⁴⁴-me⁴⁴ m³³-mjə⁴².
パカー.OBL いる-EXP-FUT 言う-して

「(アホアは)パカーに続けるつもりだと言ったので。」

- c. khɔ⁵⁵le⁴⁴-me⁴⁴-a⁴⁴, nɔ³³+ja⁵⁵-me⁴⁴-xa⁵⁵?
どこ 行く-FUT-PART また+行く-FUT-PFT

「どこに行くの? また戻っていくの?」

「～してしまう」「行く」を表す動詞 ja⁵⁵ の後に -me が置かれると、「もうまもなく～してしまう」「～しかかっている」という発話直後の未来を表す。

- (160) a. khw³³ni⁵⁵ ʃi³⁵+ja⁵⁵-me⁴⁴-nɔe⁴⁴. 「犬はもうすぐ死ぬだろう。」
犬 死ぬ+行く-FUT-SFP

- b. ŋɔ³⁵ zɔ⁵⁵ku⁵⁵ a³³pjo⁵⁵ tu³⁵+ja⁴²-me³⁵-nɔe⁴⁴.
1SG.OBL 子供 本 読む+行く-FUT-SFP

「私の子供はもうすぐ学校に行ってしまいます。」

また自然発話においては一文中に何度も -me を用いることもある。(161)では3度用いられている。一番最後のコピュラに未来接辞が後接し、全体の事態が可能性としてありうることを示している。

- (161) zɔ⁵⁵khɔ⁵⁵-ma⁴² su⁵⁵-mɔ⁴⁴-me³⁵, a³³ʃi⁵⁵=lɔe⁴⁴tʃhə⁵⁵-mɔ⁴⁴-me⁴⁴, ŋu³³-me³⁵.
若い男性-PL.OBL 語る-BEN-FUT 物語=も 話す-BEN-FUT COP-FUT

「(もし私が白酒を飲んだら)若者たちに物語を語ってしまうだろう。」

¹⁹動詞複合形式全体を名詞化し、コピュラの直前位置に置く場合や節全体を名詞化し、補文標識として機能する場合がある。

3.4.9 「まだ」

3.4.9.1 -suu

接尾辞 -suu は動詞に後接し、肯定文では動作行為・状態の継続、すなわち「まだ～している」という意味を表す。

- (162) a. nə⁴² ja³³tshu⁵⁵ a⁵⁵mɛ⁵⁵ tʃhe⁴⁴ ko⁵⁵-suu⁴²-la⁴²?
2SG.NOM 今 米 売る-まだ-Q

「君は今もまだ米を売っているの?」

- b. nə⁴² mi⁵⁵ʃo⁵⁵ni⁴⁴ lo³³-suu⁴²=ɛ⁴⁴-la⁴²? 「あなたはまだ明日もくるの?」
2SG.NOM 明日 来る-まだ=POSS-Q

- c. pu⁵⁵tʃhe⁵⁵-ma⁵⁵=ɛ⁵⁵ tʃy³³-tʃo⁵⁵+so⁵⁵-suu⁵⁵-a⁵⁵.
タイ族-PL=POSS もっと-住む+心地よい-まだ-PART

「タイ族の家はずっと住みやすい。」

(162a) は -suu の基本的用法であるといえる。すなわち、ある状態が現時点もなお持続していることを表す用法である。(162a) は「売る」行為が今もなお継続して行われていることを表している。

(162b) は上記の2例と類似しているが、動作行為・状態が継続しているというよりも、動作が再度行われるという「反復」と捉えたほうがよいかもしれない。また -suu には、(162c) のように「ずっと」の意味を表現することも多い²⁰。

否定文に用いられた場合は動作行為・状態の未実現、すなわち「まだ～していない」という意味を表す。

- (163) a. a⁵⁵tʃy⁵⁵ mɔ³³-tʃo⁵⁵+lu⁴⁴-suu⁵⁵-a⁴⁴.
アチエン NEG-いる+来る-まだ-PFT

「アチエンは(そのころ)まだ生まれていなかったわ。」

- b. ɲo⁴² ɕi⁴⁴ ɲu⁵⁵lo⁴⁴ ɲu⁵⁵vu⁵⁵ ɕi⁵⁵-pu⁴⁴-phu⁴⁴ ma⁵⁵-suu⁵⁵jo⁴⁴-suu⁴².
1SG.NOM これなぜ これ-ほど-高い NEG-知る-まだ

「私はこれ(の値段)がなぜこれほどまでに高いのかいまだに分からない。」

また自然発話では、完了助詞 -a と融合し、-sa という形式で生起することも多い。この場合、(164) のように、融合した形式は基本的に否定文で用いられる。

- (164) a. a⁵⁵mɛ⁵⁵ mɔ⁵⁵-tsɔ⁵⁵-sa⁵⁵. 「まだご飯を食べていない。」
ご飯 NEG-食べる-まだ.PFT

- b. ɕi³⁵ mɔ⁵⁵-lu⁴⁴-sa⁵⁵. 「(彼/彼女は)ここにまだ(戻って)来ていない。」
ここ NEG-来る-まだ.PFT

²⁰ 漢語普通話の hái も似た現象がある。

3.4.10 テンス・アスペクト 4 類

3.4.10.1 -a

助詞 -a は動詞に後接し、動作行為の完了および結果状態の継続を表す。

- (165) a. $\text{kh}\gamma^{35} \text{mja}^{33} \text{phr}\alpha^{55} \text{th}\gamma^{55} + \text{n}\gamma^{35} - \text{a}^{44} - \text{n}\alpha^{44}$. 「彼の顔は赤くなった。」
 3SG.OBL 顔 あぶる+赤い-PFT-SFP
- b. $\text{jao}^{33} \text{li}^{33} \text{a}^{55} \text{ko}^{44} \text{phi}^{35} - \text{a}^{44} - \text{n}\alpha^{44}$. 「李さんは扉を閉めた。」
 李さん 扉 閉める-PFT-SFP
- c. $\text{tjo}\eta^{55} \text{ko}^{44} \text{kai}^{33} \text{k}\gamma^{35} - \text{a}^{44} - \text{n}\alpha^{44}$. 「中国は改革した。」
 中国 改革-PFT-SFP

巴卡下位方言では -xa ということも多い。-xa は通常 [xɛ] と発音されるが、個人または場合によっては -xa は [fɛ] のように発音されることもある。両者に有意味な差異はない。また、完了助詞 -a と -xa にも有意味な差異は認められない。

- (166) a. $\text{a}^{33} \text{kri}^{55} \text{juw}^{33} - \text{xa}^{44}$. 「きれいになった (清潔になった)。」
 きれいだ COP-PFT
- b. $\text{t}\text{hen}^{33} \text{pao}^{35} \text{m}^{33} - \text{phi}^{35} - \text{a}^{44} - \text{n}\alpha^{44}$. $\text{ma}^{33} - \text{jo}^{55} + \text{jo}^{55} - \text{khju}^{55} - \text{xa}^{44}$.
 財布 CAUS-なくす-PFT-SFP NEG-探す+よい-AUX-PFT
 「財布をなくしてしまった。もう探しようがなくなった。」

(166a) のように、形容詞 ($\text{a}^{33} \text{kri}^{55}$ 「きれいだ」) の状態が実現したことを表す場合、コピュラ juw^{55} の後に -xa を接続させることが一般的である。

過去接尾辞 -mɣ と共起するときは、「すでに～した (してしまった)」という完了過去を表す。

- (167) a. $\text{kh}\gamma^{42} \text{m}^{55} \text{pro}^{55} \text{zo}^{35} + \text{ja}^{42} - \text{m}\gamma^{42} - \text{a}^{44} - \text{n}\alpha^{44}$.
 3SG.NOM 明け方 歩く+行く-PAST-PFT-SFP
 「彼は明け方すでに行ってしまった。」
- b. $\text{kh}\gamma^{42} \text{t}\text{ho}^{55} \text{kh}\gamma^{55} \text{t}\text{ho}^{35} \text{kh}\alpha^{33} + \text{k}\alpha^{35} + \text{le}^{44} - \text{m}\gamma^{42} - \text{a}^{44} - \text{n}\alpha^{44}$.
 3SG.NOM 杭 田.OBL する+入る+行く-PAST-PFT-SFP
 「彼は杭をすでに田んぼに打ち込んだ。」

5.1.1.5 (p. 118) で後述するように、静態動詞などに後接する同音の形式 -a⁴⁴ は現段階では文終止助詞の一部とみなし、完了助詞と別個に取り扱っている²¹。この点に注意されたい。

²¹完了助詞 -a には疑問助詞 -na⁴² が後接しうるのに対し、文終止助詞 -a⁴⁴ は疑問助詞と同じ位置に入りうる要素であると考えられるからである。しかし、将来この二者の助詞を統一的に解釈できる可能性ももちろん残っている。

3.5 その他の動詞複合形式に生起する接辞類および後置詞

3.5.1 その他の接辞類

3.5.1.1 la-

la- は動詞複合形式の接頭辞のごとく、動詞語根に前接し、(168) に見るように、「すべて」「ずっと」の意を表す。la³³- ~la⁴⁴- ~la⁵⁵- のように、声調交替する。

- (168) a. mi⁵⁵khju⁵⁵ la³³-tsəŋ³⁵+ta³³-ŋɔ⁴². 「煙がずっと立ち昇ったのよ。」
 煙 ずっと-立ち上る+上がる-RCF
- b. mo³⁵=la⁵⁵, a⁵⁵ke⁵⁵ la⁵⁵-m³³-ke³⁵-ŋɔ⁴².
 NEG.COP=すなわち 濡れている ずっと-CAUS-濡れている-RCF
 「そうでなければ、(ズボンが)濡れてしまうよ。」
- c. ji⁵⁵ji⁵⁵ a⁵⁵xoa³⁵=e⁵⁵ mi⁵⁵khɔ⁵⁵=lɛ⁴⁴ a⁵⁵xɔ³⁵=e⁵⁵ la⁴⁴-tɔ⁴⁴-a⁴⁴ ŋu³³-mɛ³⁵.
 昔 アホア.OBL=POSS 若い女性=も 漢族.OBL=POSS ずっと-着る-PART COP-PAST
 「昔アホアの彼女も漢族の(服)をずっと着ていたの。」

3.5.1.2 -jo

-jo は動詞複合形式の接尾辞として動詞語根に後接し、(169) のように「～すべき」といった義務の意を表す。-jo⁴² ~-jo⁵⁵ のように声調交替する。

- (169) a. lɔ⁵⁵-pɔ⁵⁵ ɕa⁵⁵tu⁴⁴=e⁵⁵ pan³⁵+to⁴⁴-khju³⁵-lu⁴⁴-jo⁴².
 あれ-ほう 家=POSS 運ぶ+出る-ACP-くる-OBLIG
 「あっちの家の(荷物)は全部持ち出さないといけな。」
- b. ŋɔ³⁵=lɛ⁵⁵ lɔ⁴⁴ a³³tha⁵⁵-pɔ⁴⁴=a⁴⁴ a⁵⁵kəu⁵⁵ thi⁵⁵ jo³³+pɔ⁵⁵-jo⁵⁵.
 1SG.OBL=も あそこ 上-ほう=VA もの すこし 探す+整理する-OBLIG
 「私も上の方でものをすこし片付けなければならない。」
- c. jo³³kha³³ thu⁵⁵-lu⁴⁴=e⁴⁴ jo³³tʃha⁵⁵la⁴² phan³³+tsɔ⁵⁵-jo⁵⁵.
 年寄り あれ-ように=POSS 山の中 農作業する+食べる-OBLIG
 「年寄りになるまで山の中で農作業して食べなければならない。」

(169) はいずれも -jo が動詞複合形式に接辞化され、義務の意味を表している。

この -jo は名詞化の機能を持っているため、(169) はすべて名詞述語文の扱いとなる。そのため、テンス・アスペクト・モダリティの標示を行う際は ((170) では -xa および mo-)、コピュラ動詞 ŋu⁵⁵ を用いなければならない。

- (170) a. thu⁵⁵ phe³³-jo³³ ŋu³³-xa⁵⁵.
 3SG.NOM 刈る-OBLIG COP-PFT

「彼女は(ゴムの木を)刈らねばならなくなった。」

- b. kɔ³³-kɔ⁵⁵ kɔ³³ɕa⁵⁵=ɛ⁵⁵ ɕi³⁵tʃə⁴⁴ ʃaŋ³⁵xai³⁵-jɔ⁵⁵ mɔ³³-ŋu⁵⁵-a⁴⁴, khɤ³³-lo³³
 それぞれ-CL 国家=POSS 記者 傷つける-OBLIG NEG-COP-PART それのように
 tiŋ³⁵-tɔ⁴⁴-nɔɛ⁴⁴.
 決める-EXP-SFP

「それぞれの国の記者を傷つけることはできないというふうに決めている。」

3.5.1.3 -tsɤ

基本的には動詞語根の直後に置かれ、「～すぎる」の意味を表す。静態動詞ないし形容詞の語根部分に後接することが多い。否定文で用いられた場合「あまり～ではない」の意味になる。

- (171) a. jɔ⁵⁵kho⁵⁵ a⁵⁵lai⁵⁵ tho⁵⁵-tsɤ⁵⁵-nɔɛ⁴⁴. 「水溜り²²が多すぎる。」
 道 壊れている 多い-すぎる-SFP

- b. ŋɔ⁴² tɛ⁴⁴-mɤ⁵⁵ ma³³-mrɔ⁴²-tsɤ⁴².
 1SG.NOM 見る-PAST NEG-きれいだ-すぎる

「私は(それは)あまりきれいではないと思った。」

(171a) の tho⁵⁵ は形容詞として用いることが多く、基本形は la⁵⁵tho⁴² であるが、-tsɤ が後接するときは動詞語根の部分のみが用いられる。

また非常に少ないが、動態動詞に後接することもある。その場合、動作の行為の程度が過ぎることを表す。

- (172) tu³³+lu⁵⁵-mɤ⁵⁵-a⁵⁵, ji³³tʃho⁵⁵ ɕao⁴⁴-tsɤ³⁵-xɔ⁴², a³³ʃu⁵⁵ ʃu³⁵+ja⁴².
 出る+来る-PAST-PFT 水 撒く-すぎる-なら 黄色い 黄色い+いく

「(灰色の冬瓜は)芽が出たところに、水をあげすぎると、黄色くになってしまう²³。」

3.5.2 動詞複合形式に生起する後置詞の用法

ここでは動詞複合形式にも生起する後置詞について見ておく。後置詞は通常名詞句に後接する要素であるため、「動詞複合形式に後接する後置詞」とは一見矛盾する表現であるが、本書では以下に述べる後置詞も名詞句に後接する用法が基本であると捉え、便宜的に後置詞の特殊な用法として記述する。

より整理すれば、以下に述べる後置詞は名詞句にも動詞複合形式にも後接しうる「一般小辞」(あるいは「名詞句にも動詞複合形式にも後接しうる前倚辞」)として考えることもできるだろう。

²²jɔ⁵⁵kho⁵⁵a⁵⁵lai⁵⁵ は直訳すれば「壊れた道」であるが、自動車の往来によってでこぼこになった道や水溜りを指す、こともある。

²³この例の ʃu³⁵ は先行する a³³ʃu⁵⁵「黄色い」の重複された音節ではなく、単独で現れた動詞語根であると見なす。

3.5.2.1 =ɣ⁴⁴

後置詞 =ɣ⁴⁴ は動詞複合形式に後接した場合、条件を表したり、動詞複合形式を名詞句的に取り扱って、全体を強調する機能を持つ。例を (173) に掲げる。

- (173) a. mo³³-ŋu⁵⁵-a⁴⁴=ɣ⁴⁴, tɕhoŋ³³ʃi⁵⁵ʃi⁵⁵-a⁵⁵. 「そうでなければ(あの国は)貧しい。」
NEG-COP-PART=EMPH 貧しい-SFP
- b. ʃi⁵⁵ʃi⁵⁵=jə⁴⁴ ŋu³³+ja⁵⁵=ɣ⁵⁵, ɕi⁵⁵u⁴⁴=ɛ⁵⁵ liŋ³³tao³⁵ mo³³-ʃiŋ⁵⁵fu⁵⁵-khju⁵⁵=ɛ⁴⁴.
昔=から COP+いく=EMPH 今=POSS 政治指導者 NEG-処理する-AUX=POSS
「昔のことは今の政治指導者は処理できない。」
- c. ŋi⁵⁵vɛ⁵⁵ ri³³pen³³-ma⁵⁵-lɛ⁴⁴ noŋ³³min³³-ma⁵⁵ tɕɛ⁵⁵-fu⁵⁵-a⁴⁴=ɣ⁵⁵-po⁴².
2PL.OBL 日本-PL-も 農民-PL とても-裕福だ-PART=EMPH-RCF
「あなたたち日本人も農民たちはとても裕福なんですよ?」

(173a) の =ɣ⁴⁴ は条件を表す。特にこの例のように mo³³-ŋu⁵⁵-a⁴⁴=ɣ⁴⁴ 「そうでなければ」のような形式をとることが一般的である。mo³³-ŋu⁵⁵-a⁴⁴=ɣ⁴⁴ 自体で従属節を形成している。

(173b) の =ɣ⁴⁴ は直前要素を名詞句的に取り扱っている。ʃi⁵⁵ʃi⁵⁵=jə⁴⁴ ŋu³³+ja⁵⁵ 「昔に過ぎ去った」という節であるが、これに =ɣ⁴⁴ が後接することにより、直前要素を「昔のこと」のように名詞句と捉え、全体としては「昔のことは」という意味を表し、強調している。

(173c) も発話者の「日本人は裕福である」という知識を強調するために =ɣ⁴⁴ が置かれていると考えられる。

3.5.2.2 =ɛ⁴⁴

後置詞 =ɛ⁴⁴ は動詞複合形式の末尾に置かれ、その全体を名詞化する。名詞化しているという根拠は =ɛ⁴⁴ で終わる形式で補文になりうることに求める。後置詞 =ɛ⁴⁴ が動詞複合形式の末尾におかれた場合、(174) のように特に話者の判断や推測のニュアンスを表すことが多い。

- (174) a. kjo⁵⁵+khø³⁵=ɛ⁴⁴-mɣ⁵⁵, lo³³-pɔ⁵⁵ tshə⁵⁵+ta³³+lo⁵⁵-mɛ⁵⁵.
思う+恐れる=POSS-PAST あれ-方向 走る+上る+来る-PAST
「怖かったので、あそこのほうに走りあがった(逃げた)。」
- b. mja³³-to⁵⁵-nɛ⁴⁴, mo⁵⁵-suw⁴⁴-vu⁵⁵ ŋu³³=ɛ⁴⁴.
見える-EXP-SFP NEG-知る-ので COP=POSS
「会ったことはあるが、多分知らない。」
- c. ten⁵⁵ʃi⁵⁵ te⁵⁵+le⁵⁵. ʃi⁵⁵me⁵⁵ ʃi³³me⁵⁵ ten⁵⁵ʃi⁵⁵ te³³+so³⁵ ku⁵⁵-faŋ³⁵-ko⁴⁴=ɛ⁴⁴.
テレビ 見る+行く 昨晚 一昨晚 テレビ 見る+終わる また-放送する-PROG=POSS
「テレビを見に行きなさい。この幾晩か放送したものをまたやっているだろう。」

(174) はいずれも先行する動詞複合形式を名詞化している。(174a)は「恐ろしい」という話者の感想を述べるために=ε⁴⁴が補助的な役割をしているだけである。(174b, c)の=ε⁴⁴はいずれも先行する動詞複合形式が表す動作・状態の実現を話者が推測し、あるいは判断していることを表している。

更に=ε⁴⁴は節末に後接し、補文を構成することができる。

- (175) a. [a⁵⁵tʃen⁴⁴=va⁴⁴ a⁵⁵ŋo³⁵=ε⁵⁵ ma⁵⁵tʃhə⁴⁴-ma⁴² ki⁵⁵no⁵⁵mi⁴⁴ pja³³tshə⁵⁵]=ε⁴⁴
 アチエン=VA 自分 (3).OBL=POSS 友達-PL.OBL チノ語 しやべる=POSS
 m⁵⁵. 「(私は)アチエンに友達とはチノ語でしゃべりなさいと言うのだけど。」
 言う
- b. [m³³tsha⁵⁵=ε⁵⁵ tha⁵⁵la⁴² tshə³³zo⁵⁵ khə⁵⁵ ŋw⁵⁵-mɿ⁵⁵ thi³³tʃhə³⁵]=ε⁴⁴ kjo³³-mɿ³⁵.
 大地=POSS 上 人 どこ COP-NML 同じ=POSS 思う-PAST
 「(私は)地球上の人間はどこでも同じだと思っていた。」
- c. ŋo⁴² [“tsai³⁵, tsai³⁵”]=ε⁴⁴ m³³-mɿ³⁵.
 1SG.NOM “いる, いる (Ch.)”=POSS 言う-PAST
 「私は(そのとき漢語で)『(彼は)いるよ, いるよ』と言った。」

(175)はいずれも節末に後置詞=ε⁴⁴が後接し、補文を構成している。(175c)のように直接話法の文を導入することも多い。

3.5.2.3 =la⁵⁵<II>

後置詞=la⁵⁵<II>も動詞複合形式に後接し、「～ならば」といった条件や「～なので」といった原因・理由を表す従属節を形成する。例を(176)に掲げる。

- (176) a. ɕi⁵⁵vu⁴⁴=y⁴⁴ m⁵⁵-nœ⁴⁴-lœ⁴⁴, mɔ³³-luan³⁵=la⁵⁵ mɔ³³-luan³⁵-ŋo⁴².
 今=EMPH 言う-SFP-も NEG-乱れている=すなわち NEG-乱れている-RCF
 「今は言ってみれば、(政治・経済が)乱れていないったら乱れていない。」
- b. ɕi³⁵tʃə⁴⁴-ma⁵⁵=la⁵⁵ khəo⁴²=ε⁴⁴=lœ⁴⁴ tɛ⁵⁵+le⁵⁵-ɔ³³=la⁵⁵ tɛ⁵⁵+to³⁵-khju³⁵
 記者-PL=すなわち 何=POSS=も 見る+行く-PART=すなわち 見る+出る-AUX
 ŋw³³=ε⁴⁴. 「記者たちは何を見ても、すぐに見抜けるだろう。」
 COP=POSS
- c. ji⁵⁵mjo⁵⁵ ji⁵⁵mjo⁵⁵ ŋa⁵⁵vu⁴⁴ ʃo⁵⁵-ko³³=la⁵⁵ sm⁵⁵jo⁴⁴-no⁴².
 去年 一昨年 1PL.EXCL.NOM 集める-PART=すなわち 知る-RCF
 「去年も一昨年私たちは(税務署員として税金を)集めたから、(税金関係について)わかっているんだよ。」

(176) はいずれも動詞複合形式の末尾に後置詞 =la⁵⁵ <II> が後接し、それが含まれる節全体を従属節化している。(176a, b) は =la⁵⁵ <II> 以前の節が条件を表す従属節となっており、(176c) は原因・理由を表す従属節となっている。このように =la⁵⁵ <II> が動詞複合形式の末尾に単独で後接した場合は条件を表すことが多い。

また、原因・理由を表す従属節を構成する際、ŋur³³-vu³³=la⁵⁵ の形式をとることも多い。(177) の例を見ておこう。

- (177) a. ɕi⁴⁴ pjen⁵⁵ ɕaŋ⁵⁵ ŋur³³-vu³³=la⁵⁵ lo³³ xo³⁵-ŋo⁴².
 これ 辺境 COP-の=すなわち 遅れている-RCF
 「ここは辺境だから遅れているんだよ。」
- b. a⁵⁵ khrɔ⁵⁵ a⁵⁵ ɕe⁴² ŋur³³-vu³³=la⁵⁵. 「(家は) 川のそばだから (涼しい)。」
 川 そば COP-の=すなわち

(177) の例はいずれも =la⁵⁵ <II> の構成する従属節が等位文である。この等位関係が主節の状態を結果的に生み出していることを表現するために =la⁵⁵ <II> が用いられていると考えられる²⁴。(177b) では主節にあたる部分が言語表現としては省略されている。

3.5.2.4 =lœ⁴⁴

後置詞 =lœ⁴⁴ は動詞複合形式に後接し、「～しても」といった譲歩を表す従属節を構成する。例を (178) に掲げる。

- (178) a. ɕaŋ³⁵ phjen³⁵ tɕao³⁵-nœ⁴⁴=lœ⁴⁴, mɾə⁵⁵+mɾə⁴⁴ mo³⁵-a⁴⁴,
 写真 撮る-SFP=も 久しい+久しい.RDP NEG.COP-PART
 mo⁵⁵-ɕi³³+tu³³-khju⁴²-a⁴⁴.
 NEG-現像する+出る-AUX-SFP
 「写真を撮っても、長い時間待たなければ、現像して(写真が)出てこない。」
- b. ɕi⁵⁵ u⁴⁴ ɕo³³-jo⁵⁵+tɕe⁵⁵-a⁵⁵. no³³+lur⁵⁵ kja³³+lur⁵⁵-vu⁵⁵=lœ⁵⁵, ko³³ ɕa⁵⁵ pi⁵⁵-a⁵⁵.
 今 とても-よい+見る-PART 痛む+くる 痛む+くる-の=も 国家 与える-PFT
 「今は(状況が)よかった(=今は(状況が)よく見えるようになった)。病気になっても、国が(金を)くれる。」
- c. mi⁵⁵ khju⁵⁵ ɕo³³ khi⁵⁵ sa³³+so³⁵-ɕo⁵⁵=lœ⁴⁴, sa³³ xai³³ mo⁵⁵-tshu⁵⁵-ŋu⁵⁵-a⁴⁴.
 夜中 脚 洗う+終わる-PART=も サンダル NEG-履く-AUX-PART
 「夜中に脚を洗い終わっても、サンダルを履きたくない。」

²⁴形式的には原因・理由を表す接続助詞 -vu に後接しているため、=la⁵⁵ <II> は原因・理由の意味を持っていると考えなくてもよい可能性が高い。

多くの例では (178b, c) のように動詞複合形式の末尾に $=l\alpha^{44}$ を置くが、(178a) のように文末助詞 (この例では $-n\alpha^{44}$) の後ろに $=l\alpha^{44}$ を置くこともある。いずれにしても動詞複合形式を従属節化していると考えられる。

また (179) のように、動詞複合形式の末尾に $=l\alpha^{44}$ を置き、一種の条件構文を構成することもある。

- (179) a. $kh\alpha^{33}su^{55} m^{33}=l\alpha^{44} kh\alpha^{33}su^{55} pi^{44}$.
 誰 要る=も 誰 与える

「ほしい人にあげなさい。」 (= 誰がほしいのなら、誰に与えよ)

- b. $thjao^{35}=l\alpha^{44} m\alpha^{55}-thjao^{35}-khju^{42}$.
 踊る=も NEG-踊る-AUX

「踊ろうとしても踊れない。」 (= 踊るにも踊れない)

(179a) は $=l\alpha^{44}$ を含む節に疑問詞 $kh\alpha^{33}su^{55}$ 「誰」があり、後続する節内の $kh\alpha^{33}su^{55}$ と相関している。すでにこの疑問詞は疑問の意味を示さず、全体としては条件構文のごとき様相を呈している。すなわち、「ほしい人がいるのなら、その人に与えなさい」という意味となる。

(179b) は表面的には条件構文のようには見えないが、これも (179a) と同様、「踊るのなら、踊れない」のように捉え、そこから転じて「踊ろうとしても踊れない」の意味となっていると考える。

第4章 その他の範疇

本章では、名詞句にも動詞複合形式にも組み入れがたい範疇について個々に記述していく。すなわち、形容詞、副詞、疑問語、接続詞、および感嘆詞、擬態語等である。それぞれ順番に見ていく。

4.1 形容詞

4.1.1 語構成

4.1.1.1 基本形

チノ語の形容詞は表 4.1 に見えるように、接頭辞 a-, la-, jo- が動詞に前接した形式を持っている。

表 4.1: 形容詞の形式

接頭辞	動詞
a- la- jo-	[VERB]

表 4.1 のような形式を形容詞の「基本形」とみなす。チノ語において、形容詞の基本形は統語的には(修飾用法を除いて)名詞と同じ振る舞いを示す。しかし、接頭辞の部分に否定辞の ma- ~mo- が入った場合は、動詞的な振る舞いを見せる。また接頭辞 a-, la-, jo- と共起せず、上述した表 3.1 (p. 63), および (98) (p. 63) の前動詞がこの動詞に接続した場合、統語的には動詞あるいは副詞と同じ振る舞いを見せる。接頭辞 3 類 (m-, 3.2.4.1, p. 69) が接続した場合、統語的には動詞と同じ振る舞いを示す。

形容詞の語根は静態動詞と同じ振る舞いをするものと設定できるが、単独で現れることはない。また静態動詞として単独で現れるものは表 4.1 で挙げた接頭辞を付加することはできない。このことから形容詞が静態動詞とは異なる範疇として区別すべきであると考えられる。

以下、各接頭辞のついた形容詞の例を挙げる¹。a- の付いたものが最も多い。

(180) a. [a-] a³³tha⁵⁵ 「鋭い」、a⁵⁵kha⁴² 「硬い」、a³³ɲɤ⁵⁵ 「赤い」 など。

¹ la- と jo- が交替する例もある。la⁵⁵mjo⁴²~jo⁴⁴mjo⁴⁴ 「背が⁵⁵高い」、jo⁵⁵ɬur⁵⁵~la⁵⁵ɬur⁴² 「長い」 など。

(183), (184) で示した派生接辞類などが形容詞を修飾する際、やはり形容詞基本形の接頭辞を(表面的には)脱落させ²、派生接辞類をそのかわりに語根の直前に置く。(183)に関しては 3.2.1 (p.64) で述べたように、本来動詞複合形式の一部であり、接頭辞 a- との共起制限のために、a- が(183)の接辞類と置き換わると考えられる。また副詞は元來動詞を修飾し、名詞を修飾しない。形容詞基本形は統語的には名詞とも考えられる特徴を持つため、副詞で形容詞を修飾する場合には、やはり動詞語根そのものに前接するしかない。

それでは具体的に(183), (184)が動詞語根に前接するプロセスを(185)に示そう。ここでは [b] の声調交替パターン (p.27) のものを代表して例示する。

- (185) [b] a⁵⁵- xy⁵⁵ 「遠い」 → tf⁵⁵- xy⁵⁵ 「もっと遠い」
 PREF- 遠い もっと ~ 遠い
- thi⁵⁵- xy⁴⁴ 「すこし遠い」, tɕ⁴²- xy⁴⁴ 「すごく遠い」
 すこし- 遠い すごく ~ 遠い

4.1.1.4 重複と意味の強調

4.1.1.4.1 重複の基本的形式

形容詞の語幹(すなわち、動詞部分)が重複した場合、「非常に～」といった程度の強調を表す。

- (186) a. a⁵⁵-kha⁴² 「硬い」 → a⁵⁵-kha⁴²+kha⁴² 「非常に硬い」
 PREF-硬い PREF-硬い+硬い.RDP
- b. a³³-thu⁵⁵ 「厚い」 → a³³-thu⁵⁵+thu⁵⁵ 「非常に厚い」
 PREF-厚い PREF-厚い-厚い

上記のような語幹の完全重複のほか、PREF-CV-IVのごとく、語幹母音の部分重複に頭子音 l- をかぶせたような語構成もよく用いられる(「l- 重複」)。このときは「やや～」「かなり～」といった、基本形に比べてやや程度が増しているが、完全重複のときよりも弱い意味を持っている。

- (187) a. a⁵⁵-kha⁴²-/a⁴² 「かなり硬い」 b. a³³-pɿ⁵⁵-/ɿ⁵⁵ 「かなり赤い」

4.1.1.4.2 頭子音の部分重複

完全重複のほか、頭子音の部分重複とも解釈できる例がある。母音から見れば、母音交替であると解釈できる。このときの意味は上記の重複とは異なり、意味の強調もない。また「基本形」とされる形式も共時的には存在しない。さらにこのタイプの例は極めて少ない。(188)でこのタイプの形容詞を例示しておく。

²派生のプロセスとしてはおそらく動詞語根に直接(183), (184)の派生接辞類を付加すればよい。したがって本質的には形容詞基本形の接頭辞を脱落させるプロセスは必要ないだろう。

4.1.2.1.1 名詞修飾用法

名詞修飾用法の際、形容詞は名詞に後置される。モデル化すると表 4.2 のようになる。修飾語句である形容詞を**太字**で示す。

表 4.2: 名詞修飾用法の語順
[N-Adj]

具体例は以下の通りである。

- (193) a. $ko^{55}t\theta^{44}$ **$a^{33}n\chi^{55}$** 「赤い服」
服 赤い
b. $zo^{55}ku^{55}$ **$a^{33}ni^{55}$** 「小さい子供」
子供 小さい

文中で用いられている例も挙げておく (194)。

- (194) $ŋ\theta^{42}$ $ja^{55}ni^{44}$ $mu^{35}=l\alpha^{44}$ $xan^{35}ji^{44}$ **$a^{33}ni^{35}=a^{55}$** $mo^{44}-ne^{55}-a^{44}$, $ŋ\theta^{55}-khr\alpha^{44}$
1SG.NOM 今日 あそこ=も 防寒服 小さい.OBL=VA NEG-数える-PART 5-CL
 $t\theta^{33}-m\epsilon^{35}$.
着る-PAST

「私は今日あそこでは、小さな⁵防寒服を数えなければ、5枚(服を)着た。」

重複された場合も同様に後置されるのが一般的である (195)。

- (195) a. $ko^{55}t\theta^{44}$ **$a^{33}n\chi^{55}$** **$n\chi^{55}$**
服 赤々とした
「真っ赤な服」
b. $zo^{55}ku^{55}$ **$a^{33}ni^{55}$** **ni^{55}**
子供 すごく小さい
「すごく小さい子供」

しかし、ごくわずかながら、漢語の影響で関係節標識 **-mɣ** を伴って、名詞の前に置かれることもある。

- (196) $ŋ\theta^{42}$ $ja^{55}ni^{44}$ **$a^{33}n\chi^{55}$** **$-m\chi^{55}$** $ko^{55}t\theta^{44}$ $t\theta^{44}-n\alpha^{44}$.
1SG.NOM 今日 赤い-REL 服 着る-SFP

「私は今日赤い服を着ている。」

(196)の形容詞 **$a^{33}n\chi^{55}$** 「赤い」は基本形であるため、主名詞に対して後置されることが一般的であるが、この例では **-mɣ** を伴い、主名詞 $ko^{55}t\theta^{44}$ 「服」の前に置かれている。ただし、実際の自然発話では(196)のような例は少ない。

⁵この例では「防寒服」を修飾する「小さい」という形容詞までも斜格の声調となっている。形容詞「小さい」が「防寒服」を修飾し、全体として「小さな防寒服」という名詞句を形成してから、斜格の解釈を受け、名詞句末の形容詞の最終音節が斜格の声調となったと考えられる。

4.1.2.1.2 動詞修飾用法

形容詞は一般的には名詞のみを修飾すると考えられている。しかし、チノ語では語類としては形容詞に分類できる一方で、動詞(複合形式)を修飾していると考えられる例も少なくない。

例を(197, 198)に掲げる。

- (197) a. nə⁴² ɲi⁵⁵ja⁴⁴ thi³³-ɕo⁵⁵ a³³ju³⁵a⁵⁵kja⁴² ɲi³³to⁵⁵+le⁴⁴-nɕe⁴⁴.
2SG.NOM 自分(2) 1-CL 静かな いる+行く-SFP

「あなたは自分ひとりで静かに(過ごして)いるのね。」

- b. kho³³mja⁵⁵ a³³la⁴² tɕe³³phu⁵⁵ to⁵⁵-mja⁴².
それでは 遅い 酒 飲む-して

「それでは、遅く⁶まで酒を飲んでいたのね。」

(197)はいずれも名詞ではなく、動詞を修飾する例である。チノ語では時間や場所を表す名詞が時間副詞や場所副詞として動詞を修飾することが多い(詳細は4.2.2 [p. 103]を参照)。(197)のような形容詞の動詞修飾用法も、元来は形容詞自体を一旦名詞として解釈し、時間名詞などの動詞修飾と同様の解釈がなされて、動詞を修飾するようになっているのではないかと考えられる。

更に、tɕɣ-「もっと～」が付加された形容詞も動詞を修飾することが多い。

- (198) a⁵⁵tɕen⁴⁴ ɕa⁵⁵=le⁴⁴ tɕɣ⁵⁵-thə⁵⁵ a⁵⁵nə⁵⁵ ju⁵⁵+ɕa³³-me⁵⁵, a⁵⁵tɕe⁴⁴=a⁴⁴.
アチエン 住む=も もっと-多い 自分(3) 連れる+住む-PAST アチエ=VA

「アチエン自身はもっとたくさん(の時間)一緒に寝てた⁷のよ、アチエと。」

4.1.2.2 叙述用法

叙述用法は主語名詞を叙述する用法である。叙述用法の際も、名詞修飾用法と同じく、形容詞は名詞に後置される。このため、叙述用法と修飾用法は見かけ上、構造的あいまい性が生じる⁸。モデル化すると表4.3ようになる。叙述語句である形容詞を太字で示す。

表 4.3: 叙述用法の語順
N Adj.

それでは具体例を見ていこう。

⁶この例の a³³la⁴² は強調イントネーションがかかり、33-42 の声調連続となっている。

⁷この場合の ɕa⁵⁵ は「寝る」の意味である。

⁸表 4.2 (p. 98) のように形容詞基本形で修飾された名詞句と表 4.3 (p. 99) のように形容詞基本形が述語となった場合とは形式上同じであるため。

(199) a. a⁵⁵ma⁵⁵ a³³lo⁵⁵lo⁵⁵. 「体がすごく熱い。」
体 すごく熱い

b. ci⁴⁴ ko⁵⁵to⁴⁴ a⁵⁵lai⁵⁵, ma³³-mro⁴². 「この服は破れていて、きれいではない。」
これ服 壊れている NEG-きれい

(199)の例はいずれも表4.3のモデルに即している。しかし、表面的には表4.2 (p. 98)のモデルと同じであるため、構造的あいまい性を見せる。例えば、(199)の例で形容詞の現れている部分を取り出して考えると、(199a)では「すごく熱い体」、(199b)では「この破れた服」という名詞句であるとも解釈できる。しかし、一般にこのように[名詞-形容詞]の語連続が単独で一文として発話された場合、名詞修飾の解釈よりも叙述用法の解釈をとりやすい。ただし、もちろん名詞修飾の解釈も完全には退けられない。

また、一方で表4.3の名詞が具体的に現れない例も存在する。

(200) ɲo³⁵=y⁵⁵ mo³³-ju⁵⁵-ɲu⁵⁵-a⁴⁴, zo⁵⁵ku⁵⁵-a⁵⁵. a⁵⁵phu⁴⁴a⁵⁵pha⁴⁴.
1SG.OBL=EMPH NEG-連れる-AUX-PART 子供-VA 厄介だ

「私はね、連れるのはいやなのよ、子供を。厄介だし。」

(200)の例では「子供を連れること」が「厄介だ」という意味を表している。そのため、表4.3で言えば、Nの部分「子供を連れること」という名詞節であると想定できるが、具体的には現れていない。ここでは形容詞のa⁵⁵phu⁴⁴a⁵⁵pha⁴⁴「厄介だ」が述語として単独で現れ、事態を叙述している。

叙述用法の否定は基本的に接頭辞 a- の代わりに、否定辞 ma- ~mo- を置く。

(201) ki⁵⁵no⁵⁵mi⁴⁴ xo³³-my⁵⁵ kho³⁵ mo³³-thə⁵⁵=ɛ⁴⁴?
チノ語 話す-NML どこ NEG-多い=POSS

「チノ語を話す人がどこで少ないっていうのよ?」

(201)のmo³³-thə⁵⁵は動詞語根に否定辞が付いた形式であるため、形容詞というよりもむしろ動詞として考えた方がよい。

更に、(202)のように叙述用法であることを明示的に表現するため、形容詞の後にコピュラ(3.3.1.3.1, p. 73)を用いる場合も多い。形容詞基本形は名詞として解釈されるためコピュラ文が容易に形成される。

(202) a. ky³³li⁵⁵=y⁴⁴ mo⁵⁵-tso⁵⁵=ɛ⁵⁵-m⁵⁵, a⁵⁵kho⁴⁴ ɲu⁵⁵-vu⁵⁵.
苦涼菜=EMPH NEG-食べる=POSS-PART 苦い COP-ので

「苦涼菜は食べないわ。苦いから。」

b. fɛɲ⁵⁵fi³³ no⁵⁵-mjo⁴², a⁵⁵no⁵⁵a³³kjo⁵⁵ ɲu⁵⁵-vu⁵⁵, mo³³-tshi⁵⁵-tʰe⁴⁴-a⁴⁴.
リウマチ 痛い-して どこもかしこも痛い COP-ので NEG-洗う-AUX-PFT

「リウマチが痛くて、どこもかしこも痛いので、(体を)洗おうとは思わないわ。」

4.1.2.3 名詞的用法

形容詞は動詞語根に接頭辞 a-/ la-/ jo- を付加したものである。この接頭辞は機能上、名詞を標示するものと考えられる。そのため、形容詞の基本形は文中で名詞的な振る舞いをする場合も多い。

- (203) a. ɲo⁴² le⁵⁵-vu⁴⁴, a³³ɲi⁵⁵ ɲ³³-tsu⁵⁵ pra³⁵-mjə⁴², mɔ³³-pra⁵⁵+khu⁴⁴-vu⁴⁴, mɔ³³ɲaŋ⁵⁵
 1SG.NOM 行く-ので 小さい 2-CL 切る-して NEG-切る+至る-ので 墨江 (人)
 ma³³mɔ⁵⁵ ɲ³³-tsu⁵⁵ pra⁵⁵+krɔ⁴⁴-mɔ³³-mɛ³⁵.
 大きい 2-CL 切る+落ちる-BEN-PAST

「私が行ったときには、小さいの(木)を2本切ったのだけれど、(大きいのは)切れないので、墨江人に大きいのを2本切ってもらった。」

- b. thi³³-mɔ⁵⁵=ɣ⁴⁴ a³³phre⁵⁵=jə⁴⁴ lə³³-krɔ⁵⁵+se⁴²=ɛ⁴⁴-m⁵⁵.
 1-CL=EMPH 険しい=より ずっと-落ちる+殺す=POSS-PART

「1匹(のアヒル)は険しいところから落ちて死んだ。」

(203)の例はいずれも形容詞が名詞的に用いられていると考えられる例である。多くの例では(203a)のように、目的語として現れる。このような目的語として用いられる場合は、名詞修飾用法における主要部、すなわち名詞が省略された事例としても考えられようが、(203b)では後置詞が形容詞に直接後接していることから、形容詞が名詞的に用いられていると考えた方が適切であろう。

4.2 副詞

「副詞」は動詞の項構造に組み込まれず、動詞(複合形式)を修飾する範疇である。チノ語では意味的に「様態副詞」「時間副詞」「場所副詞」に分かれる。一般に、様態副詞は動詞複合形式の直前に置かれることが多い。時間副詞は文頭に置かれることが多い。

以下ではそれぞれについて記述していく。

4.2.1 様態副詞

様態副詞は動詞が表す行為がいかなる状態でなされるかを表す。様態副詞は最近に漢語から借用された語彙を含めて考えれば、相当数に上ると考えられる。動詞(複合形式)を修飾するが、形容詞に直接修飾するときは接頭辞 a- をとった語幹形式に直接前接する。

しかし、ここでは固有語ないしルー語からの借用語と考えられるものに限りて記述する。

チノ語の様態副詞の例は(204)の通りである。

- (204) $te^{42}mjo^{44}$ 「わざと、故意に」、 $m^{55}te^{55}(le^{55})$ 「無駄に、いたずらに、ただで」、 $to^{33}tce^{35}$ 「きつと、かならず」、 $ne^{33}khe^{35}$ 「とても、すごく」、 $to^{33}mo^{339}$ 「すべて、みな」、 zo^{55} 「やつと、～になつてはじめて、やはり」

これら様態副詞が用いられた文例を (205) に掲げる。

- (205) a. $te^{42}mjo^{44}$ $ci^{55}pu^{44}$ $so^{35}+khe^{33}-m\gamma^{35}$. 「わざとこんなにうるさくした。」
わざと これくらい 響く+する-PART
- b. $phru^{33}$ $ci^{55}-lo^{44}$ $m^{55}te^{55}$ $m^{33}-phi^{35}-a^{44}$.
金 これのように 無駄に CAUS-なくなる-PFT
「こうして金を無駄になくした。」
- c. $a^{55}ke^{55}$ $tho^{55}-ts\gamma^{55}-a^{44}-no^{44}$. $to^{33}tce^{35}$ $ma^{55}-tso^{55}-khjo^{33}-khju^{55}-e^{44}$.
おかず 多い-すぎる-ASP-SFP きつと NEG-食べる-ACP-AUX-PART
「おかずが多すぎるよ。きつと食べきれないだろう。」
- d. ci^{35} $ne^{33}khe^{35}$ $khø^{44}$. 「ここはとても薄気味悪い。」
ここ たいへん 恐れる
- e. $a^{33}tjhi^{55}$, $a^{33}tjhy^{55}$, $a^{55}kho^{55}$, $a^{55}phi^{55}$, ηo^{42} $to^{33}mo^{33}$ $tso^{33}-khju^{42}$.
甘い すっぱい 苦い 辛い 1SG.NOM すべて 食べる-AUX
「甘い、すっぱいの、苦いの、辛い、みんな食べられるよ。」
- f. $u^{55}so^{55}$ $si^{55}tjen^{33}$ pan^{42} zo^{55} $no^{33}-lo^{33}-me^{55}$.
さっき 4時半 やつと また-来る-PAST
「さっき4時半になってやつと帰ってきた。」

副詞 zo^{55} は上記 (205f) の他に比較表現の前において、より程度が強いこと (206a) や「やはり」の意味 (206b) を表す場合もある。

- (206) a. ci^{35} zo^{55} $tj\gamma^{55}-\zeta a^{33}+so^{55}-a^{44}$.
ここ やつと もっと-住む+心地よい-PFT
「ここは (前のところよりも) ずっと住み心地がよい。」
- b. $a^{55}la^{42}$, $sa\eta^{35}$ ζao^{44} zo^{55} ci^{35} $pi^{35}-mjo^{42}$, ci^{35} $phe^{33}-vi^{55}$.
あれまあ ゴムの木 やつと これ.OBL 与える-してこれ.OBL 切る-CAUS
「あれまあ、ゴムの木はやはりこの人にあげて、切らせなさい。」

⁹ルー語 $ta\eta^2$ からの借用語。ラオ語では $thágmót$ である。第1音節の頭子音が異なるが、全体としてはこちらのほうが現在のチノ語形に近い。

4.2.2 時間副詞・場所副詞

時間副詞・場所副詞は一般的に名詞から派生されたものであると考えられる。文中では動詞の項構造に組み込まれないため、統語範疇としては副詞と考えられる。しかし、形式的には名詞と考えられる場合と何ら変わらない。いわゆるゼロ派生(転成)がなされていると言ってよいであろう。一般的に地名などは場所副詞として解釈されやすい。また方向や距離を表す名詞も項構造に組み込まれない場合は場所副詞として解釈される。このような時間副詞・場所副詞は時間を表す名詞句が転成したものを含むため、開かれた集合をなすと言える。

時間副詞として捉えられる語彙は以下のようなものがある。

- (207) ja⁵⁵ni⁴⁴「今日」、mi⁵⁵jo⁵⁵ni⁴⁴「明日」、ji⁵⁵ni⁴⁴「昨日」、ji⁵⁵ni⁴⁴「おととい」、
tsh⁵⁵mjo⁵⁵「今年」、ne³³mjo⁵⁵「来年」、ji⁵⁵mjo⁵⁵「昨年」、ji⁵⁵mjo⁵⁵「一昨年」、
no³³fx⁵⁵「朝」、a⁵⁵no³³khj⁵⁵「午後」、mi⁵⁵khj⁵⁵「夜」、ja³³tshu⁵⁵「今」、u⁵⁵so⁵⁵
「さっき」、thi⁵⁵jo⁴⁴「しばらく」、tho⁵⁵nəu⁵⁵「しばらくのち」など

時間副詞と場所副詞の例を (208) に挙げる。

- (208) a. tho⁵⁵nəu⁵⁵ khx⁴⁴jo⁵⁵ nu⁵⁵-lo⁵⁵-mjo⁴², thi⁵⁵-phin⁴⁴ ku³³-to⁵⁵=ε⁴⁴.
しばらくのち あそこ=より また-来る-して 1-CL また-飲む=POSS
「しばらくしてあそこから(彼は)戻ってきて、更に1本(酒を)飲んだ。」
- b. khx⁴² fa³⁵fa³⁵ tx⁴⁴ni⁴⁴-mjo⁴², jaj³⁵jen⁵⁵-ko⁵⁵.
3SG.NOM ソファア 座る-して やすらぐ-PROG
「彼/彼女はソファアに座って、休んでいる。」

(208a) のように、時間副詞は通常文頭に置かれることが多い。

4.3 疑問語

「疑問を表す語」のグループが「疑問語」である。疑問語は「疑問代名詞」と「疑問副詞」に2種類に分かれる。前者は代名詞の、後者は副詞の下位範疇である。それぞれ所属する範疇の統語的振る舞いを見せる。それゆえ本来は文法記述の上では範疇として立てる必要はない。しかし本書では記述の便宜上ここで一括して述べておく。

表 4.4 はその一覧である。

巴卡下位方言では、† が付いた形式を主に用いる。以下では各疑問語が用いられている例を挙げておく。

表 4.4: 疑問語一覧

分類	疑問語	意味
疑問代名詞	khə ³³ su ⁵⁵ ɣw ⁵⁵ kxi ⁴⁴ / t̚khə ⁵⁵ ɕw ⁴⁴ / t̚khao ⁴² ɣw ⁴² / t̚khə ⁵⁵	「誰」 「何」 「どれ」
疑問副詞	ɣw ⁵⁵ mə ⁴⁴ / t̚khə ⁵⁵ mə ⁴⁴ ɣw ⁴² /ɣw ⁵⁵ va ⁴⁴ / t̚khə ⁵⁵ ɣw ⁵⁵ lo ⁴⁴ / t̚kha ⁵⁵ lo ⁴⁴ ɣw ⁵⁵ lo ⁴⁴ ɣw ⁵⁵ vu ⁵⁵ / t̚kha ⁵⁵ ɕ ⁴⁴ ɣw ⁵⁵ pu ⁴⁴ / t̚khə ⁵⁵ pu ⁴⁴ -	「いつ」 「どこ」 「いかにして」 「なぜ、どうして」 「どれくらい」

4.3.1 疑問代名詞

4.3.1.1 khə³³su⁵⁵ 「誰」

khə³³su⁵⁵ は下位方言間の差異はほぼなく、「誰」を指すのに用いられる。「誰」を表す khə³³su⁵⁵ が主語となる場合、文頭に立つこともあるが、文頭位置に立たない場合 (209b) もあることに注意しなければならない。文頭位置に立たない場合は、文頭位置が無生名詞であることが多い。

- (209) a. khə³³su⁵⁵ ten³⁵ t̚i³⁵ t̚e⁵⁵-kə⁴⁴-ŋa⁴²? 「誰がテレビを見ているの?」
誰 テレビ 見る-PROG-Q
- b. kao⁵⁵t̚oŋ⁵⁵ khə³³su⁵⁵ tu³³-tə⁵⁵? 「誰が高校に通ったことがあるの?」
高校 誰 通う-ASP
- c. a⁵⁵ŋə³⁵=ɕ⁵⁵=x⁴⁴ a⁵⁵ŋə⁴⁴ khə³³su⁵⁵ prɯ³³+t̚w⁴²+la⁴⁴=ɕ⁴⁴-jə⁴⁴?
自分 (3).OBL=POSS=EMPH 後で 誰 手伝う+連れる+くる=POSS-PART
「彼らの家でこの先誰に (子供を) 見てもらうのかしら?」 (= [直訳] 彼らではこの先誰が (子供を) 連れるのを手伝うのかしら?)

4.3.1.2 khə⁵⁵ɕw⁴⁴/ ɣw⁵⁵kxi⁴⁴/ khao⁴² 「何」

khə⁵⁵ɕw⁴⁴ と ɣw⁵⁵kxi⁴⁴ は「何」を表す疑問語である。それぞれの意味は同じである。方言的な差異であると考えられる。巴卡下位方言では主に後者を用いる。

- (210) a. nə⁴² khə⁵⁵ɕw⁴⁴ khə³³+le⁵⁵-ŋa⁴²? 「君は何をしに行くの?」
2SG.NOM 何 する+行く-Q
- b. nə⁴² khə⁵⁵ɕw⁴⁴ t̚sə⁴²-ŋa⁴²? 「あなたは何を食べるの?」
2SG.NOM 何 食べる-Q
- (211) a. khɤ⁴² ɣw⁵⁵kxi⁴⁴ jə³³+ju³³-mɤ⁵⁵-a⁴⁴? 「彼は何を探したの?」
3SG.NOM 何 探す+とる-PAST-ASP

- b. $\eta u^{55} k\dot{x}i^{44} a^{33} k\dot{e}^{55} \dot{c}i^{44}=j\dot{o}^{44} t\dot{s}^{55}-mr\dot{e}^{42}?$
 何 おかず これ=より もっと-おいしい

「どのおかずがこれよりもおいしいの?」

(210), (211a) のように他動詞文内では目的語として $kh\dot{o}^{55} t\dot{u}^{44}$, $\eta u^{55} k\dot{x}i^{44}$ が現れることがほとんどである。また (211b) のように、後続名詞を修飾し、「どの～」という意味を表すこともある。

また巴卡下位方言では $khao^{42}$ を用いることも多い。

- (212) $khao^{42} kh\dot{o}^{42}-me^{35}-j\dot{o}^{44}?$ 「(彼/彼女は) 何をするつもりなのか?」
 何 する-FUT-PART

巴卡下位方言では $khao^{42}$ と $\eta u^{55} k\dot{x}i^{44}$ の両方がよく用いられる。しかし、自然発話の頻度としては $khao^{42}$ のほうが多いようである。

さらに (213) のように、 $khao^{42}$ も名詞を修飾して「何の～」という疑問名詞句を形成することもある。

- (213) a. $a^{55} \eta^{44} tshu^{35}-mj\dot{o}^{42}$, $khao^{42} a^{55} \eta^{44}=(n)a^{44} kh\dot{o}^{55} m\dot{o}^{44} m^{55}-j\dot{o}^{44}?$
 日にち 数える-して 何 日にち=VA 女 得る-PART

「日にちを数えて (= 占って)、いつの日に娶るのかしら?」

- b. $kh\dot{y}^{44} t\dot{j}ao^{35} kuan^{44}-m\dot{y}^{44}$ $khao^{42} a^{55} m\dot{i}^{44} x\dot{o}^{55}=e^{55}-j\dot{o}^{44}?$
 あれ レントゲンを取る-NML 何 言葉 話す=POSS-PART

「あのレントゲンを取ってた人は何語を話していたのかしら?」

4.3.1.3 $\eta u^{42}/kh\dot{o}^{55}$ 「どれ」

ηu^{42} は (214) のように、類別詞に前接して、「どの～」の意味を表す。 $\eta u^{42} \sim \eta u^{55}$ のように声調交替する。

- (214) $\dot{c}i^{44} k\dot{o}^{55} t\dot{o}^{44}=j\dot{o}^{44} kh\dot{y}^{44} k\dot{o}^{55} t\dot{o}^{44}$, $n\dot{o}^{42} \eta u^{42}-khr\dot{e}^{42} m^{55}-\eta u^{42}?$
 これ 服=より あれ 服 2SG.NOM どの-CL 要る-Q

「この服とあの服なら、あなたはどちらがほしい?」

また (215) のように、名詞に前接して、「どの～」の意味を表す場合もある¹⁰。

- (215) $n\dot{o}^{42} \eta u^{55} \dot{p}hu^{44} l\dot{e}^{44}-n\dot{a}^{42}?$ 「あなたはどの村に行くの?」
 2SG.NOM どの 村 行く-Q

巴卡下位方言では $kh\dot{o}^{55}$ の方を用いることが多い。

- (216) $a^{55} xua^{44}=j\dot{o}^{44} kh\dot{o}^{33} s\dot{o} \eta^{55}+n\dot{o}^{55}=x^{44} kh\dot{o}^{55}+p\dot{o}^{55}=a^{55} m\dot{o}^{35}=e^{55}-j\dot{o}^{44}?$
 アホア=と コソソ+2=EMPH どの+ほう=VA 向かう=POSS-PART

「アホアとコソソの2人はどのあたりに向かったのかしら?」

¹⁰(215) の例は「どこの～」という解釈でもよいかもしれない。

4.3.2 疑問副詞

4.3.2.1 $\eta u^{55} m\alpha^{44} / k h o^{55} m\alpha^{44}$ 「いつ」

動作・状態の発生時間を問うとき、 $\eta u^{55} m\alpha^{44}$ を動詞の直前において疑問文を形成する。

- (217) $n\alpha^{42}$ $ja^{55} k h o^{42}$ $\eta u^{55} m\alpha^{44}$ $m u^{55} -k h j u^{44} -m y^{55} -a^{44}?$
 2SG.NOM タバコ いつ 吸う-AUX-PAST-Q

「君はいつタバコを吸えるようになったんだい?」

$\eta u^{55} m\alpha^{44}$ は基本的に動詞の直前に置かれなければならない。(218)のように、動詞から離された位置に置くと、非文となる。

- (218) $*n\alpha^{42}$ $\eta u^{55} m\alpha^{44}$ $ja^{55} k h o^{42}$ $m u^{55} -k h j u^{44} -m y^{55} -a^{44}?$
 2SG.NOM いつ タバコ 吸う-AUX-PAST-Q

「いつから」を表す際、後置詞 $=j\alpha^{44}$ を $\eta u^{55} m\alpha^{44}$ に後接させて用いる。

- (219) $n\alpha^{42}$ $\eta u^{55} m\alpha^{44} =j\alpha^{44}$ $\dot{c} i^{44} -l o^{44}$ $p r u^{33} + p e^{35} + j\alpha^{42} -m y^{42} -a^{44}?$
 2SG.NOM いつ=より これ-ように おろかだ+なる+行く-PAST-Q

「お前はいつからそんなにバカになってしまったのか?」

巴卡下位方言では $k h o^{55} m\alpha^{44}$ のほうがより好まれて用いられるようである。

- (220) a. $k h o^{55} m\alpha^{44}$ $t j e n^{44}$ $\eta u^{33} -x a^{55}?$ 「今何時?」¹¹
 いつ 時 COP-PFT

- b. $k h o^{44}$ $k h o^{55} m\alpha^{44}$ $l o^{35} -m e^{35} \eta e^{55} -m a^{42}?$
 それでは いつ 来る-FUT COP.POSS-NML.PART

「それではいつごろやってくるの?」¹²

さらに回数や年齢、日数などの類別詞を修飾し、「いくつ～」という意味を表すことも多い¹³。

¹¹ この例では $t j e n^{44}$ に修飾しているので、表面的には疑問副詞が名詞に修飾しているように見える。しかし、 $t j e n^{44}$ 自体も時間副詞の一部であると捉えれば、疑問副詞が副詞に修飾しているという構造であると解釈できる。

¹² 文末に置かれている $\eta e^{55} -m a^{42}$ は $\eta u^{55} = e^{55}$ $m y^{55} -a^{44}$ が2音節に融合したものであると考えられる。

¹³ この点から考えれば $k h o^{55} m\alpha^{44}$ は疑問代名詞と疑問副詞の両方の性質を有しているのではないかと考えられる。通常、疑問副詞は動詞を修飾し、名詞句構造とは関わりがない。しかし、これらの(221)の例に見るように類別詞が後続していることから、 $k h o^{55} m\alpha^{44}$ が名詞句構造の主要部の位置を占めているとも考えられる。

- (221) a. $khə^{33}mjə^{55} moŋ^{33}jaŋ^{33} je^{55}-mjə^{42}, a^{33}nə^{55}+ŋ^{55} khə^{55}mə^{44}-la^{55}=ɣ^{44}$
 これから モンヤン 行く-して 自分 (3)+2 いつ-CL(回)=EMPH

$tʃhu^{33}si^{55}-na^{42}-jo^{44}?$

問題が発生する-Q-PART

「これからモンヤンへ(酔払い運転して)行ったら、彼ら二人はどれだけ問題を起こすかしら?」

- b. $ri^{33}pen^{35} pu^{55}lo^{44} khə^{55}mə^{44}-ça^{42}?$ c. $khə^{55}mə^{44}-mjə^{55} prw^{33}+lw^{33}-me^{55}-jo^{44}?$
 日本.OBL 月 いつ-CL(夜) いつ-CL(年) 満ちる+来る-PAST-PART

「日本の一ヶ月は何日かい?」

「満何歳になったの?」(=[直訳] 何歳に満ちてきたの?)

4.3.2.2 $ŋw^{42}/ŋw^{55}va^{44}/khə^{55}$ 「どこ」

$ŋw^{42}$ 自体は名詞に属するため、後置詞をとることができる。よって後者は $ŋw^{55}=va^{44}$ [どこ= va^{44}] と分析できる。 $ŋw^{42}$ と $ŋw^{55}va^{44}$ は同じ意味で用いられる。本書では形態素分析せず、1 語として表記する。

$ŋw^{42}$ は本来は名詞由来であるが、項解釈に関与せず、動詞複合形式を修飾するため、疑問副詞に属すると考えられる。

- (222) a. $nə^{42} ŋw^{55}va^{44} ten^{35}jin^{33} tɛ^{55}+le^{44}-na^{42}?$
 2SG.NOM どこ 映画 見る+行く-Q

「あなたはどこへ映画を見に行くのですか?」

- b. $a^{55}san^{44} khɤ^{44} jin^{35} ŋw^{42} jo^{33}+ju^{33}-mɤ^{55}-a^{44}?$
 アサン その 手紙 どこ 探す+とる-PAST-Q

「アサンはどこでその手紙を見つけたのですか?」

また $ŋw^{42}$ が後置詞 $=jo^{44}$ をとったとき、「どこから」を意味する。

- (223) $nə^{42} ŋw^{55}=jo^{44} lo^{55}-na^{42}?$ 「あなたはどこから来たの?」
 2SG.NOM どこ=より 来る-Q

巴卡下位方言の自然発話では $khə^{55}$ という形式もよく用いられる。 $khə^{35}$ のように声調交替することも多い¹⁴。

- (224) a. $khə^{55} ta^{33} m^{33}=e^{55}, nə^{42}?$ 「あなたはどこへ行くと言うの?」
 どこ 上る 言う=POSS 2SG.NOM

¹⁴おそらくは $khə^{55}$ は元来は名詞で 55 調が基本的声調であろう。疑問副詞として用いられる際に斜格形となり、通常の名詞の斜格と同じく 35 調で発音されることも多いと考えられる。

- b. ki⁵⁵no⁵⁵mi⁴⁴ xo³³-mɣ⁵⁵ kɰ³⁵ mo³³-thə⁵⁵=ɛ⁴⁴?
チノ語 話す-NML どこ NEG-多い=POSS

「チノ語を話す人はどこが少ないのか?」

また、後置詞=jə⁴⁴「～より」が後接する例も多い。しかし、「どこより」「どこから」という意味ではなく、単純に「どこに」といった場所を表すことが多い。

- (225) a. ni⁵⁵ju⁴⁴ kɰ³⁵=jə⁴⁴ tɔ³³-ko⁴⁴-mɛ⁵⁵-a⁴⁴?
2PL.NOM どこ=より 飲む-PROG-PAST-PFT

「あなたたちはどこで酒を飲んでいたの?」

- b. ɕi⁴⁴=ɛ⁵⁵ kɰ³⁵=jə⁴⁴ pju³³=ɛ⁵⁵-jə⁴⁴? 「これはどこで書かれたものかしら?」
これ=POSS どこ=より 書く=POSS-PART

さらに、後置詞=ɛ⁴⁴が後接し、「どこの人」という意味を表すこともある。

- (226) kɰ³⁵=ɛ⁵⁵-jə⁴⁴, ŋ⁵⁵-lai³⁵ tɕ³³-tɔ³³-mɛ³⁵.
どこ=POSS-PART 2-CL いる-EXP-PAST

「どこの人かしら、二人(あそこに)住んでいたわ。」

4.3.2.3 ŋu⁵⁵lo⁴⁴/kha⁵⁵lo⁴⁴ 「いかにして」

動作の様態を尋ねる際、動詞の直前に ŋu⁵⁵lo⁴⁴「いかにして、どのように」を置く。語構成としては ŋu⁵⁵「どれ」-lo⁴⁴「ように」である。

- (227) a. nɔ⁴² khun³⁵min³⁵ ŋu⁵⁵lo⁴⁴ le³⁵-mɛ³⁵?
2SG.NOM 昆明 いかにして行く-FUT

「あなたは怎么样って昆明に行くの?」

- b. ʃan³³tao³⁵ ki⁵⁵no⁵⁵mi⁴⁴ ŋu⁵⁵lo⁴⁴ pja³⁵-ŋa⁴²?
バナナ チノ語 いかにして言う-Q

「「バナナ(漢語)」ってチノ語でどう言うの?」

巴卡下位方言では kha⁵⁵lo⁴⁴と言うことのほうが多いようである。語構成としては kha⁵⁵「何」-lo⁴⁴「ように」である。

- (228) kha⁵⁵lo⁴⁴ ʃɔ³³+pan⁵⁵+u⁵⁵+lu⁵⁵=ɛ⁴⁴? 「どうやったら運んでこられる?」
いかにして 探す+運ぶ+入る+来る=POSS

khe⁴⁴「頃」という名詞を修飾し、「いつごろ」という意味を表すこともある。

- (229) a. a⁵⁵tʃen⁴⁴=lə⁴⁴ kha⁵⁵lo⁴⁴+khe⁴⁴ lo³⁵=ɛ⁵⁵-jə⁴⁴?
アチエン=も いかにして+ころ 来る=POSS-PART

「アチエンはいつごろ帰ってくるのだろうか?」

- b. kha⁵⁵lo⁴⁴+khe⁴⁴, ŋɔ³⁵=lə⁵⁵ mo⁵⁵-su⁵⁵jə⁴⁴-a⁴⁴, lo³³-mɣ⁵⁵-a⁴⁴.
いかにして+ころ 1SG.OBL=も NEG-知る-PFT 来る-PAST-PART

「いつごろ(彼が)帰ってきたのか知らないわ。」

4.3.2.4 $\eta u^{55} lo^{44} \eta u^{55} v u^{55} / kha^{55} \epsilon^{44}$ 「なぜ」

$\eta u^{55} lo^{44} \eta u^{55} v u^{55}$ は $\eta u^{55} lo^{44} \eta u^{55}$, あるいは $\eta u^{55} lo^{44}$ として用いられることも多い。理由を尋ねる際の疑問語である。形態素分析をすると、 $\eta u^{55} lo^{44} - \eta u^{55} v u^{55}$ [どれ-ように-COP-ので] となる。すなわち、この形式のみで一つの従属節を形成している。

- (230) a. $n\alpha^{42}$ $\eta u^{55} lo^{44} \eta u^{55} v u^{55}$ $ma^{33} - no^{55} + ph\alpha^{33} + l\alpha^{35}?$
2SG.NOM なぜ NEG-また+帰る+来る

「あなたはなぜ帰ってこない?」

- b. $kh\chi^{42}$ $\eta u^{55} lo^{44} \eta u^{55}$ $ja^{55} \eta i^{44}$ $\epsilon e^{33} ph u^{55}$ $ma^{33} - t\alpha^{55} + l\alpha^{55} - \eta a^{42}?$
3SG.NOM なぜ 今日 酒 NEG-飲む+来る-Q

「彼は今日なぜ酒を飲みに来ないのか?」

また巴卡下位方言では $kha^{55} \epsilon^{44}$ ということも多い。

- (231) a. $kha^{55} \epsilon^{44}$ $\epsilon u^{33} p e^{55}$ $\epsilon i^{55} - lo^{44}$ $ko^{33} u^{55} - t\alpha^{55} - le^{55}$ $\epsilon e^{33} ph u^{55}$ $m\alpha^{55} - kh\alpha^{33} - vi^{55} - a^{44}?$
なぜ 酒のグラス これ-ようにもつ-ASP-行く 酒 NEG-盛る-CAUS-Q

「どうして酒のグラスを盛ったまま、私に酒を注がせないのか?」

- b. $kh\alpha^{33} m j\alpha^{55}$ $t\alpha^{33} + m\alpha^{33} - m j\alpha^{42}$, $kha^{55} \epsilon^{44} = \chi^{44}$ $ku^{33} ku^{33} ka^{33} ka^{33}$ $kh\alpha^{33} + l\alpha^{33} = \epsilon^{33} - j\alpha^{33}?$
それから 飲む+酔う-して なぜ=EMPH ごそごそ する+来る=POSS-PART

「それから(彼は)酔っ払ってどうして(真夜中に) ごそごそとしに来るのかしら?」

$kha^{55} \epsilon^{44}$ の語構成は kha^{55} 「何」= ϵ^{44} 「=POSS」である。そのため、「なぜ」というよりも「何」の意味合いが強い例もある。

- (232) $kha^{55} \epsilon^{44} = \chi^{44}$ $j\alpha^{33} + t j h\alpha^{33} - m\alpha^{55} = \epsilon^{55} - j\alpha^{44}?$
なぜ=EMPH 探す+語る-BEN=POSS-PART

「(あの老人たちは)何を(どこまで)語っているのかしら?」

4.3.2.5 $\eta u^{55} p u^{44} - / kh\alpha^{55} p u^{44} -$ 「いくつ」

$\eta u^{55} p u^{44} -$ は「どれくらい」など、程度を問う疑問に用いられる。 $\eta u^{55} p u^{44} -$ には数量詞も動詞も後接できる。いずれが後接した場合も、全体としては疑問副詞として振舞う。

数量詞が後接した場合の例は(233)の通りである。

- (233) $kh\chi^{35}$ $a^{33} p j\alpha^{55}$ $\eta u^{55} p u^{44} - pen^{33}$ $t j a^{35} - a^{55}?$
3SG.OBL 本 どれくらい-CL ある-PART

「彼/彼女には本がどれくらいあるの?」

動詞が後接した場合の例は以下の通りである。特に $\eta u^{55} p u^{44} t h \partial^{42}$ は $\eta u^{55} p u^{44} t h \partial^{42}$ [どれくらい-多い] と分析でき、「いくつ」といった数量を問う疑問語として用いられる。

- (234) a. $\dot{c} i^{35} j \partial^{55} k h \partial^{55} \eta u^{55} p u^{44} - f u^{35} ?$ 「この道はどれくらい長いですか?」
 これ.OBL-道 どれくらい-長い

- b. $j \partial^{33} m a^{35} f u e^{33} f a \partial^{35} f u e^{33} s \eta^{55} \eta u^{55} p u^{44} - t h \partial^{42} t f \partial^{33} - a^{44} ?$
 3PL.OBL 学校.OBL 学生 どれくらい-多いいる-PART

「彼らの学校はどれくらいの学生がいるの?」

巴卡下位方言では $k h \partial^{55} p u^{44} -$ の方がよく用いられる。巴卡下位方言では (233, 234) の $\eta u^{55} p u^{44} -$ を $k h \partial^{55} p u^{44} -$ に置き換えることが多い。

4.3.3 疑問語における注意すべき特徴

ここでチノ語の疑問語における注意すべき特徴をまとめておく。

4.3.3.1 統語的位置による解釈の差異

疑問語 $k h \partial^{33} s u^{55}$ 「誰」は表面的な統語位置で解釈に差異が生じることがある。

- (235) a. $l i^{33} m i \eta^{35} k h \partial^{33} s u^{55} - a^{44} ?$ b. $k h \partial^{33} s u^{55} l i^{33} m i \eta^{35} - a^{44} ?$
 李明 誰-Q 誰 李明-Q
 「李明って誰のことですか?」 「どの李明のことですか?」

(235) の例を見ると、 $k h \partial^{33} s u^{55}$ の位置が文頭にあるか、文中にあるかで解釈が異なることが分かる。

(235a) では、発話の直前にはじめて「李明」という人名が文脈に登場したため、 $l i^{33} m i \eta^{35}$ が文頭に置かれ、 $k h \partial^{33} s u^{55}$ が述語に置かれている。

一方、(235b) では、発話者も聞き手も「李明」という人名を知っている。そこで聞き手側が「李明」という人名を話題に出す。しかし、(235b) の発話者側は「李明」という人名は何人か心当たりがあるため、そのうちの誰を指しているのか選択してほしいと思い、(235b) のような文が発話される。

(235a) と (235b) の違いは、おそらく構造的な差異に依拠していると考えられる。(235a) では $l i^{33} m i \eta^{35}$ と $k h \partial^{33} s u^{55}$ の 2 つの名詞句が文中に存在し、いわば等位文の構造である。一方、(235b) では $k h \partial^{33} s u^{55} l i^{33} m i \eta^{35}$ は 1 つの複合名詞句であり、構造的には $k h \partial^{33} s u^{55}$ が $l i^{33} m i \eta^{35}$ を修飾している、と考えられる。

(236) のように $k h \partial^{33} s u^{55}$ が一般名詞を修飾する例もある。

- (240) a. $ki^{55}no^{55}mi^{44}kho^{55}pu^{44}-thə^{42}$ $jue^{33}-nə^{44}$, $mo^{33}-joŋ^{35}-a^{44}$, $ni^{55}ju^{44}$.
チノ語 どれくらい-多い 学ぶ-SFP NEG-使える-PART 2PL.NOM

「チノ語をどんなにたくさん学んだって、無駄だよ、あなたたちは。」

- b. $khao^{42}khao^{42}$ $seŋ^{33}ji^{55}$ $tso^{55}-nə^{44}$, $tɕ^{42}-mo^{55}-jo^{44}+tsɔ^{55}-a^{44}$.
何 何 商売 する-SFP すごく-NEG-よい+食べる-PART

「どんな商売をしたとしても、(ゴムの樹液採集作業より)いい仕事はない。」
([直訳]= どんな商売をしても、よく食べられはしない。)

「疑問語 …- $nə^{44}$ 」は譲歩を表す一種の従属節と考えられる。(240) では、 $ki^{55}no^{55}mi^{44}kho^{55}pu^{44}thə^{42}$ $jue^{33}-nə^{44}$ 「チノ語をどれくらい学んでも」などは疑問を表さず、譲歩の従属節である。

4.4 接続詞

チノ語にはわずかに接続詞と考えられる語彙が存在する。接続詞は通常文頭に現れ、直前の文ないし節との関係を表す。代表的な接続詞を表 4.5 に掲げる。

表 4.5: 接続詞一覧

形式	機能	意味
$khə^{33}me^{55}$	順接ないし逆接	「よって」「しかし」「それなら」
$khə^{33}mjo^{55}$	発話の継続	「それでは」
$khə^{44}$	発話の継続	「それでは」「というもの」
$khə^{33}(ɛ^{55})nə^{44}$	逆接	「しかし」

やや注意すべきは、 $khə^{33}me^{55}$ が逆接を表す例は少ない。

表 4.5 に掲げられた接続詞が用いられた例を以下に掲げる。

- (241) a. $khə^{33}me^{55}$ $çi^{55}u^{44}$ $ŋ^{55}ku^{55}$ $ŋw^{33}-na^{42}-po^{42}?$
それなら 今 昼 COP-Q-RCP

「それなら(地球の裏側では)今は昼なの?」

- b. $a^{55}xua^{35}=lə^{44}$ $khu^{33}+lɿ^{33}-me^{55}$, $a^{55}san^{44}$. $khə^{33}me^{55}$ $mo^{55}-lə^{44}-me^{35}$.
アホア.OBL=も 呼ぶ+来る-PAST アサン しかし NEG-行く-PAST

「アホアも呼びにきたのよ、アサンは。しかし、彼(アホア)は行かなかった。」

- (242) a. $khə^{33}mjo^{55}$ $lo^{33}=ɛ^{55}=lə^{44}$ $thi^{33}tʃhə^{55}$ $ŋw^{33}-a^{55}-m^{55}-la^{42}?$
それでは あそこ=POSS=も 同じ COP-PART-PART-Q

「それではあそこも同じだよね?」

- b. $kh\theta^{33}mjo^{55}n\alpha^{42}$ $ni^{55}v\epsilon^{55}m\alpha^{55}-tjhu^{33}-a^{44}$, $jo^{33}ma^{55}=\epsilon^{55}$ $pro^{55}+tjhu^{33}=\epsilon^{44}?$
 それでは 2SG.NOM 2PL.OBL NEG-摘む-PART 3PL.NOM=POSS 手伝う+摘む=POSS

「それでは(どうして)あなたは自分の家の(砂仁)を摘まないで、よその家の
 を摘むの手伝うの?」

- (243) a. $kh\theta^{44}$ $kh\alpha^{55}m\alpha^{44}$ $lo^{35}-me^{35}$ $\eta e^{55}-ma^{42}?$
 それではいつ 来る-FUT COP.POSS-PAST.PFT

「それではいつごろになったら来るの?」 (= 220c)

- b. $kh\theta^{44}$ $\eta a^{55}\eta^{55}=(n)\epsilon^{55}=la^{55}$ $\eta^{55}-lai^{33}-lai^{35}=l\alpha^{44}$ $ki^{55}no^{35}=\epsilon^{55}$
 というのも 1DU.NOM=POSS=すなわち 2-CL-CL.RDP=も チノ.OBL=POSS
 $\eta u^{33}-vu^{33}=la^{55}$.
 COP-ので=すなわち

「というのも、私たち二人の両親は(ともに)チノ族だから(チノ語が自由に話
 せるようになってる)。」

- (244) a. $kh\theta^{33}n\alpha^{44}$ $jo^{33}ma^{55}=\epsilon^{55}$ $lo^{35}=\epsilon^{55}$ $va^{55}a^{33}phru^{55}lu^{55}=\epsilon^{55}$ $\eta u^{33}=\epsilon^{44}$.
 しかし 3PL.NOM=POSS あそこ.OBL=POSS 豚 白い=POSS COP=POSS

「しかし、あそこの彼らのは(私たちのところのような黒い豚の肉ではなく)
 白豚の(肉)でしょう。」 (= 29c)

- b. $kh\theta^{33}\epsilon^{55}n\alpha^{44}$ $\eta\alpha^{42}$ $faj^{35}cao^{44}$ $thi^{55}-khe^{55}$ $lo^{44}-pi^{42}-me^{35}$, $a^{55}tjen^{44}$.
 しかし 1SG.NOM ゴムの木 1-CL ずっと-与える-PAST アチエン

「たとえどんなことがあっても、私はやはりアチエンにゴム林を一つ与えるわ。」

4.5 感嘆詞と擬態語等

チノ語にも感嘆詞や擬態語と考えられる語彙が存在する。これらは文の項構
 造に組み込まれることはなく、発話者の心理や事態・状況を如実に生き生きと
 描写する効果をもたらす。

4.5.1 感嘆詞

発話者が特に発話初頭で自らの心理状態を如実に表現する効果をもたらす。
 自然発話では主に (245) のようなものが用いられる。

- (245) a. [驚きを表す] $tja^{55}l\alpha^{55}$ 「あらまあ、なんとまあ」、 $a^{55}la^{42}$ 「あらまあ、なんて
 こと」、 e^{42} 「あら、違う」、 $e^{33}te^{42}$ 「あれまあ、違うわ」

- b. [応答を表す] $\alpha^{42}\sim\alpha^{33}$ 「おお」、 ϵ^{55} 「えー」(驚きも混じる)、 le^{42} 「ほら」

- c. [怒りを表す] kha^{55} 「こら!(家畜に対して)」、 jo^{55} 「こら、出て行け!(家畜に対
 して)」、 we^{42} 「こら(人に対して)」

若干の例を (246) を挙げる。

- (246) a. a⁵⁵na⁵⁵tu³³-a⁴⁴. e⁴², pu⁵⁵lo⁴⁴ pro⁵⁵+pro⁴⁴-a⁴⁴, le⁴².
暗がり-VA あら、違う 月 明るい+明るい.RDP-PFT ほら

「真っ暗だわ。あら、違う。月がすごく明るいわ、ほら。」

- b. nə⁴² ɕi³⁵=a⁴⁴ ta³³+le³³-mjə⁴², ji⁵⁵-to⁴⁴-me⁵⁵-la⁴²?
2SG.NOM ここ=VA 上る+行く-して 寝る-EXP-PAST-Q

e³³te⁴², a⁵⁵la³⁵ ta³³+le³³-me³⁵.
あら、違う 遅い 上る+行く-PAST

「あなたはここから上がって寝たの? あら、違うわ、あなたは(たしか)遅く
に上がって行ったわ。」

4.5.2 擬態語

事態や状況を如実に描写する効果をもたらす。自然発話では主に以下のような語が用いられる。

- (247) tshij⁵⁵tsi⁵⁵tsi⁵⁵16 「キンキン(頭が痛む様子)」、tɕ³³tɕ³³tɕ³³ 「ドクドク(心臓が
動く音)」、ke⁴⁴le⁴⁴ke⁴⁴le⁴⁴ 「キョロキョロ(と見る)」、ko³³lo³³ko³³lo³³ 「(のどが)
ゴロゴロ」、ku³³ku³³ka³³ka³³ 「ごそごそ」、phon³³phon³³ 「(タバコを)プカプカ
(吸う)」

¹⁶筆者が聞いた自然発話では [tɕ^h55 tsi⁵⁵ tsi⁵⁵] のように発音された。

第5章 文末および節末を表す範疇

本章では文末を表す範疇として 5.1 (p. 115) で「文終止助詞」「モーダル助詞」を、節末を表す範疇として 5.2 (p. 123) で「接続助詞」を記述する。

5.1 文末を表す範疇

文終止助詞は文が終止していることを表す助詞である。以下の理由により、文終止助詞は動詞複合形式における接尾辞類の一種であるとはみなされない。

- (248) a. 動詞複合形式における接尾辞類は動詞述語文の末尾にのみ置かれる。一方、文終止助詞の多くは動詞述語文、名詞述語文のいずれにも付きうる。
- b. 動詞複合形式における接尾辞類は環境に応じて声調が大きく交替する。一方、文終止助詞は基本的に環境による声調交替を起こさない。

(248) の理由により、動詞複合形式における接尾辞と文終止助詞は峻別される。文終止助詞は「陳述文」「疑問文」「確認文」といった、いわば文のモダリティの一部をなすと考えられる。しかし、文終止助詞の直後に更に「確認」「希求」等を表す助詞が付くことがある。これを「モーダル助詞」と呼ぶ。

文と文終止助詞、モーダル助詞からなる構造をモデル化すると、表 5.1 のごとくになる。

表 5.1: 文、文終止助詞とモーダル助詞の構造
[文]-[文終止助詞]-[モーダル助詞]

文終止助詞とモーダル助詞には共起制限がある¹。それについては各助詞の解説を参照されたい。

5.1.1 文終止助詞

それでは、具体的に文終止助詞を見ていきたい。なお、本書では以下で示す文終止助詞のうち、グロスにおいて *-no*⁴⁴ のみを *-SFP* で表し、その他の助詞は *-Q*, *-RCF*, *-PART* など で表す。

¹このことから、文終止助詞とモーダル助詞の一部が同じスロットに入るのではないかと考えられるかもしれない。しかし、筆者は 5.1.1.1 から始まる解説のとおり解釈していく。

5.1.1.1 -nœ⁴⁴

文終止助詞 -nœ⁴⁴ は陳述文が終止していることを示す。主に動詞述語文に後接する。名詞述語文に後接することもまれにあるが、等位文を表す場合でもほとんどはコピュラ ɣw⁵⁵ を伴っている。さらにコピュラ ɣw⁵⁵ を伴う場合、他の動詞接尾辞類が接続しない場合は、-nœ⁴⁴ が通常文末に現れる。しかし、陳述文標示に -nœ⁴⁴ が義務的であるとまではいえない。

具体的に見ていこう。

- (249) a. ɲo⁴² le⁴⁴-mœ³⁵-nœ⁴⁴. b. ɲo⁴² vu⁵⁵khɛ⁵⁵ nœ³³-nœ⁴⁴.
 1SG.NOM 行く-FUT-SFP 1SG.NOM 頭 痛い-SFP
 「私はもう行きますよ。」 「私は頭が痛い。」

- c. ɲo⁴² ɲo⁵⁵ɔ⁵⁵ sœ³³-mœ⁵⁵ sœ³³-mœ⁴² phœ³³-mœ⁵⁵-nœ⁴⁴.
 1SG.NOM 魚 3-CL 3-CL.OBL 買う-BEN-SFP
 「私は(猫に毎日)魚を3匹買ってやっている。」

(249) の例はいずれも動詞述語文に後接している。いずれの例も -nœ⁴⁴ は義務的ではない。しかし -nœ⁴⁴ があることによって陳述文の終止がより明確になっている。また、コピュラ ɣw⁵⁵ を用いた文は基本的に -nœ⁴⁴ が用いられる。

- (250) a. ɕi⁴⁴ a⁵⁵pu⁵⁵lœ⁴⁴ ɲw³³-xœ⁵⁵-nœ⁴⁴. 「これ(果実)は軟らかくなってしまった。」
 これ 軟らかい COP-PFT-SFP
 b. kœ⁵⁵to³⁵=e⁵⁵ a⁵⁵pu⁴⁴+a⁵⁵mœ⁴⁴ ma³³mœ³⁵ ɲw³³-xœ⁴², ma³³mœ³⁵ ɲw³³-nœ⁴⁴.
 自分.OBL=POSS 父+母 大きい COP-なら 大きい COP-SFP
 「両親(の体)が大きかったら、その子(の体)も大きい。」

コピュラの直前が (250a) では a⁵⁵pu⁵⁵lœ⁴⁴ 「軟らかい」、(250b) では ma³³mœ³⁵ 「大きい」といういずれも形容詞あるいは名詞²である。コピュラ ɲw⁵⁵ は単独で文末に現れることはほぼない。何らかの文末助詞を伴うことがほとんどである。陳述文としては -nœ⁴⁴ がほぼ義務的に生起する。

5.1.1.2 -la⁴²

文終止助詞 -la⁴² は真偽疑問文が終止していることを示す。動詞述語文にも名詞述語文にも後接しうる。基本的に真偽疑問文を表示する際、-la⁴² が義務的に用いられる。-la⁴² が用いられなければ、陳述文と区別がつかないからである。

²ma³³mœ³⁵ 「大きい」は表4.1で示した基本形の形式に入らない。一種の「修飾・叙述機能を持った特殊な名詞」と考えられる。(250)の2つの例ではコピュラの直前の語彙はいずれも名詞相当語句と考えてよい。コピュラの直前は統語的位置として名詞が入りうる場所だからである。

- (251) a. $\text{ci}^{44} \text{ tshə}^{33} \text{ zo}^{55} \text{ jo}^{42} \text{ -la}^{42}?$ b. $\text{khv}^{42} \text{ to}^{33} \text{ tho}^{35} + \text{to}^{44} + \text{lo}^{42} \text{ -la}^{42}?$
 これ人 よい-Q 3SG.NOM 起きる+出る+来る-Q
 「この人はいいいですか?」 「彼は起きましたか?」

- (252) a. $\text{ci}^{44} \text{ ci}^{44} = \epsilon^{55} \text{ khjo}^{33} \text{ tshv}^{55} \text{ jen}^{44} \text{ -la}^{42}?$ 「これは 60 元もするの?」
 これこれ=POSS 60 元 -Q
 b. $\text{n}^{55} \text{ ku}^{35} = \epsilon^{55} \text{ -la}^{42}$ 「昼間なの?」
 昼.OBL=POSS -Q

文末助詞 -la^{42} の直前が、(251) では動詞述語、(252) では名詞述語³である。いずれの場合もそれが真偽疑問文であれば生じうる。

-la^{42} の疑問表現内での詳細な用法については 6.3 (p. 143) を参照されたい。

5.1.1.3 -na^{42}

文終止助詞 -na^{42} は一部の真偽疑問文と一部の疑問語疑問文が終止していることを示す。

まずは真偽疑問文の例を挙げる。(253) の例は -la^{42} , -na^{42} のいずれでも文法的である。真偽疑問文でも -na^{42} が用いられるのは、 -na^{42} が置かれる直前位置までが動詞述語で、被発話者(尋ねられた側)がその文の動作主であるときである (p. 145 参照)。

- (253) a. $\text{mi}^{55} \text{ jo}^{55} \text{ ni}^{44} \text{ na}^{42} \text{ khai}^{33} \text{ xui}^{35} + \text{le}^{55} + \text{jo}^{44} \text{ -la}^{42} / \text{-na}^{42}?$
 明日 2SG.NOM 集まる+行く+よい-Q
 「明日あなたは会議に出ないといけないのですか?」
 b. $\text{a}^{55} \text{ mo}^{44} \text{ a}^{55} \text{ me}^{55} \text{ tso}^{55} \text{ -ko}^{44} \text{ -la}^{42} / \text{-na}^{42}?$
 母 ご飯 食べる-PROG-Q
 「お母さんはご飯を食べているの?」

次に疑問語疑問文の例を挙げる。疑問語疑問文で -na^{42} が用いられるのは、疑問助詞の直前部分までが動詞の範疇に属するものでなければならない。疑問語疑問文でも -na^{42} が用いられない例が存在する⁴が、その詳細については 6.3 (p. 143) を参照されたい。

³(252b) は後置詞 $=\epsilon^{44}$ が名詞に後接している。これも一種の名詞述語と考えられる。

⁴疑問語疑問文でも、文終止助詞の前までが名詞述語文であるときなどは、 -a を疑問助詞として用いなければならない。

i) $\text{ci}^{44} \text{ kho}^{33} \text{ su}^{55} \text{ -a}^{44}?$ 「この人は誰ですか?」
 これ誰 -Q

- (254) a. $\text{kho}^{33}\text{su}^{55}\text{-ma}^{55}\text{ɕu}^{33}\text{-fi}^{55}\text{-ko}^{44}\text{-na}^{42}?$ 「誰がけんかしているの?」
 誰-PL 殴る-RCP-ASP-Q

- b. $\text{nə}^{42}\text{ŋu}^{55}\text{ɔ}^{44}\text{ŋu}^{55}\text{vu}^{55}\text{ma}^{55}\text{-te}^{55}\text{+le}^{55}\text{-na}^{42}?$
 2SG.NOM なぜ NEG-見る+行く-Q

「あなたはどのようにして見に行かないの?」

5.1.1.4 - nə^{42}

文終止助詞 - nə^{42} は文末に置いて、詠嘆あるいは軽い確認などを示す。

- (255) a. $\text{na}^{55}\text{-tsɿ}^{55}\text{-a}^{44}\text{-nə}^{42}$. 「早すぎるなあ。」
 早い-過ぎる-PFT-RCF

- b. $\text{thi}^{55}\text{-ɕu}^{44}\text{ŋu}^{33}\text{-vu}^{33}\text{-la}^{55}$, $\text{thi}^{55}\text{ kjo}^{44}\text{+khə}^{44}\text{-nə}^{42}$.
 1-CL COP-ので-すなわち 少し 思う+怖がる-RCP

「一人だから、すこし怖いよ。」

- c. $\text{çi}^{44}\text{ tjoan}^{44}\text{ tə}^{55}\text{mo}^{44}\text{ a}^{33}\text{phru}^{55}\text{ ŋu}^{33}\text{-mɛ}^{55}\text{. mi}^{55}\text{khju}^{55}\text{ mro}^{55}\text{+na}^{44}\text{-khjo}^{35}\text{-nə}^{42}$.
 これ レンガ 全部 白い COP-PAST 煙 立ち上る+黒い-ACP-RCF

「このレンガは以前すべて白かった。煙が立ち昇って黒くなったのよね。」

(255)の例を見ても分かるように、強い詠嘆というわけではなく、いずれも軽い詠嘆、あるいは確認、もしくは軽く語調を整える程度のものである。またほぼ動詞複合形式の後に置かれると考えるとよい。名詞述語文の末尾に置かれることはほとんどない。動詞複合形式との間では特に共起制限などは見当たらない。

5.1.1.5 - a^{44}

文終止助詞 - a^{44} は文末に置いて、名詞述語文の終止、あるいは静態動詞が用いられた「状態を表す文」の終止に用いられる。文終止助詞 - a^{44} は完了を表す助詞 - a と表面的には同位置に入るように見えるため、両者は同一の形態素であるとの分析も取りうるが、現段階では両者を異なる形態素と捉えて記述する。

まずは名詞述語文の終止に用いられる例を挙げる。

- (256) a. $\text{çi}^{44}\text{ kho}^{55}\text{ɕu}^{44}\text{-a}^{44}?$ 「これは何ですか?」
 これ 何-Q

- b. $\text{u}^{55}\text{sə}^{55}\text{ nə}^{35}\text{ tjen}^{35}\text{xua}^{35}\text{ ta}^{33}\text{-mɔ}^{33}\text{-mɿ}^{35}\text{ kho}^{33}\text{su}^{55}\text{-a}^{44}?$
 たった今 2SG.OBL 電話 かける-BEN-COMP 誰 -Q

「たった今あなたに電話をかけてきたのは誰ですか?」

- c. nə⁴² ji⁵⁵ni⁴⁴ kai³³tsi³⁵ ɲu⁵⁵kɿ⁴⁴ lu⁵⁵ ju⁴⁴-mɿ⁵⁵ -a⁴⁴?
 2SG.NOM 昨日 市場 何 すべて 買う-PAST-Q

「あなたは昨日市場で何を買ったの?」

(256) のように疑問語疑問文で名詞述語文の文末に文終止助詞 -a⁴⁴ が置かれるのが最も一般的である⁵。疑問は疑問語が存在することによって表されていると考えると、-a⁴⁴ 自体は疑問を標示するというよりも、文末であることを標示していると考えのほうがよい。疑問表現におけるこの助詞の振る舞いについては 6.3.1.1.2 (p.146 の「名詞述語」の項目) を参照されたい。

次に「状態を表す文」の終止を表す例を挙げよう。

- (257) a. a⁵⁵tʃen⁴⁴ lə⁵⁵=lɛ⁴⁴ n³³tɔ⁵⁵-a⁴⁴. 「アチエンはあそこにもいる。」
 アチエン あれ=も いる-PART

- b. ɲa⁵⁵vu⁴⁴ pa⁵⁵kha⁴⁴-ɲa⁵⁵ thi⁵⁵ mɔ⁵⁵-thoŋ³⁵-a⁴⁴.
 1PL.EXCL.NOM パカー-PL 少し NEG-同じだ-PART

「我々パカー人たちは少し違う。」

- c. ʃi⁵⁵u⁴⁴ n⁵⁵ku⁴⁴ ɲu³³-xɔ⁴², ɲo³³ɔ⁵⁵ tɔ³³-a⁵⁵-la⁴²?
 今 昼 COP-なら 太陽 出る-PART-Q

「今昼なら、(そっちのほうでは) 太陽は出ているのか?」

(257) ではいずれも述語の動詞複合形式内の動詞語根が静態動詞である。完了助詞 -a とは異なり、この文終止助詞 -a⁴⁴ は単に状態を表す文が終止していることを示している。(257c) を見ると、真偽疑問文の助詞 -la⁴² が後接している。6.3.1.1.2 の表 6.4 (p. 146) で後述するように、完了助詞 -a の場合、真偽疑問文においては疑問文末助詞 -la⁴² が後接できず、-ɲa⁴² のみが後接できる。このことからやはり (257c) の助詞は完了助詞 -a ではなく、文終止助詞 -a⁴⁴ であると解釈すべきだろう。

5.1.2 モーダル

文終止助詞の後ろに現れうるモーダルに関わる助詞について説明する。

5.1.2.1 -po⁴²

助詞 -po⁴² は「～だろう」といった確認の意味を表す。先行する文が名詞述語文でも動詞述語文であってもよい。(258a) は動詞述語文の後ろに -po⁴² が来ているが、(258b) は名詞述語文の後ろに来ている。また (258c) は文終止助詞 -nɛ⁴⁴ の後に来ている。

⁵接尾辞 -mɿ は動詞複合形式全体を名詞化する機能を持っている。

- (258) a. nə³⁵ zə⁵⁵ku⁵⁵ tɕɛ⁴²-kuai⁴²-po⁴².
2SG.OBL 子供 とても-おとなしい-RCF

「あなたの子供はとてもおとなしいでしょう。」

- b. ɕi⁴⁴ kə⁵⁵e⁵⁵ a⁵⁵kha⁴²kha⁴²-po⁴². 「この肉は硬いでしょう。」
この肉 硬い.RDP-RCF

- c. khɿ³³=lə⁵⁵ jo³³ma⁵⁵ a⁵⁵mi⁵⁵ ʃue³³-nə⁴⁴-po⁴².
3SG.NOM=も 3PL 言葉 学ぶ-SFP-RCF

「彼女も彼らの言葉を学んでいるのでしょう。」

更に後置詞に後接して、確認を表すこともできる。

- (259) a. a⁵⁵nə⁵⁵ thi³³-tsu⁵⁵=a⁵⁵=ɿ⁵⁵-po⁴². 「あそこは一軒家でしょう。」
自分 (3) 1-CL=VA=EMPH-RCF

- b. kə⁵⁵to⁴⁴+kə⁵⁵to⁴⁴ thi³³-ɛ⁵⁵=ɿ⁴⁴-po⁴².
自分+自分.RDP 1-CL=EMPH-RCF

「自分たちで一軒でしょう。」 (= 「自分たちだけで一軒家に住んでいるの
でしょう。」)

(259a) では、後置詞 =va⁵⁵ と後置詞 =ɿ⁵⁵ に、(259b) では、後置詞 =ɿ⁵⁵ に -po⁴² が後接している。いずれも名詞述語文に後接する例の一部と考えられる。

後置詞 (前倚辞) =la⁵⁵ <II> と共起することができる。

- (260) a. tɕɿ⁵⁵-maj³⁵=la⁵⁵-po⁴²? b. a⁵⁵ʃe³⁵ ŋu⁵⁵-vu⁵⁵=la⁵⁵-po⁴²?
もっと-忙しい=すなわち-RCF 近い COP-ので =すなわち-RCF

「もっと忙しいのしょう?」

「(彼らの家がお互い) 近いから
しょう?」

(260) の例は発話者の理解が正しいことを強調しながら、確認するニュアンス
があると考えられる。

未来接辞 -me と -po⁴² は共起しにくい。

- (261) ɕi⁵⁵-pu⁴⁴-la⁴² lə⁵⁵-mɿ⁵⁵, a⁵⁵pu⁴⁴ nə³⁵ tə³³ tɕe³⁵ jo⁵⁵-me⁴⁴-nə⁴⁴-*po⁴².
これ-くらい-遅い 来る-NML 父 2SG.OBL きっと 叱る-FUT-SFP-RCF

「こんなに遅く帰ってきては、お父さんはきっとあなたを叱るでしょ?」

- (262) a. *khɿ⁴² tə³³ tɕe³⁵ le⁴⁴-me⁴⁴-po⁴²? b. khɿ⁴² tə³³ tɕe³⁵ le⁴⁴=e⁴⁴-po⁴²?
3SG.NOM きっと 行く-FUT-RCF 3SG.NOM きっと 行く=POSS-RCF

「彼はきっと行くでしょ?」

(261)では確認助詞 $-po^{42}$ がなければ文法的であるが、 $-po^{42}$ が生起すれば非文となる。更に (262)を見ると、(262a)は非文であるが、(262b)は文法的である。これは $-po^{42}$ と未来接辞 $-me$ の共起制限が関与している。

5.1.2.2 $-jo^{44}$

助詞 $-jo^{44}$ は基本的に自問を表す。文末に現れ、疑問イントネーションがかかり $-jo^{42}$ と声調が交替することもある。

- (263) a. $kha^{55}e^{44} khoe^{44}.me^{55} \eta u^{33}=e^{55}.jo^{44}?$ 「どうすればよいのかしら?」
 どうして する-NML COP=POSS-Q

- b. $jo^{33}ma^{55} kha^{55}=e^{44} a^{55}mi^{44} pja^{33}.jo^{42}? tjo\eta^{55}ko^{44} a^{55}mi^{44} pja^{33}=e^{55}.jo^{42}?$
 3PL.NOM どれ=POSS 言葉 話す-Q 中国 言葉 話す=POSS-Q

「彼らは何語を話しているのかしら? 中国の言葉を話しているのかしら?」

(263b)では2文とも $-jo^{44}$ が生起している。最初の文は疑問語疑問、次の文は真偽疑問であることから、 $-jo^{44}$ は自問を表す文であれば生起できる。

5.1.2.3 $-tə^{42}(-tu^{42})$

助詞 $-tə^{42}$ は主に2つの用法がある。すなわち、勧告的用法(「～しましょう、～してくれ」)と詠嘆的用法(「～だなあ」)である。形式としては $-tu^{42}$ ⁶ も用いられ、 $-tə^{42}$ との意味用法的差異はない。

まずは勧告的用法の例を示す。

- (264) a. $no^{42} le^{55}+jo^{44} ma^{33}.\eta u^{42}.tə^{42}$. 「あなたは絶対来ないでね。」
 2SG.NOM 行く+よい NEG-COP-HORT

- b. $a^{33}pjo^{55} m^{33}.phre^{35}.tu^{42}$. 「手紙を破ってしまいなさい。」
 手紙 CAUS-ちぎれた-HORT

次に詠嘆的用法の例を示す。

- (265) $khɿ^{42} thi^{55}.ni^{44} no^{44} su^{55}jo^{44}+lu^{55}.e^{44}.tə^{42}$.
 3SG.NOM 1-CL まるまる 知る+来る-POSS-HORT

「彼もまるまる一日たってはじめてわかった。」

5.1.2.4 $-ka^{42}$

助詞 $-ka^{42}$ は主に2人称主語の文に現れ、聞き手に対する軽い命令を表す。

⁶- to^{42} という形式で現れることもある。

- (266) a. $kh\theta^{33}mj\theta^{55} m\theta^{33}-ku^{55}-nu^{33}+ku^{33}-m\theta^{33}-l\theta^{55}-ka^{42}$, $\eta\theta^{35}=a^{55}$.
 それでは NEG-また-帰る+持つ-BEN-来る-PART 1SG.OBL=VA

「それでは(残ったものは)私に持って帰ってこないで。」 (= 48b)

- b. $n^{42} n^{55}t\theta^{44}-ka^{42}$. 「あなたはここにいなさいね。」
 2SG.NOM いる-PART

(266) はいずれも 2 人称主語に対する軽い命令を表している。(266a) では明示的に主語が現れていないが、主語は 2 人称単数である。

また無生名詞が主語となるときは軽い疑問のニュアンスが生じることがある。

- (267) $ji^{33}tjho^{55} n^{55}t\theta^{44}-ka^{42}$? 「(コップの中に) 水はあるの?」
 水 ある-PART

(267) は聞き手の持っているコップの中に水が入っているかを軽く尋ねる文である。これも背景には「もしコップに水が入っていなければ、入れておきなさいね」という命令が関係している可能性がある。

5.1.2.5 -te⁴²

助詞 -te⁴² は文末に現れ、(268) のように「もちろん～だ」といった、基本的に発話者の主張の正当性を強調するために用いられる。

- (268) a. $\theta^{42}, \eta\theta^{33}-a^{44}-te^{42}$. 「おお、そのとおりだ。」
 おお COP-PART-PART
- b. $thi^{33}-k\theta^{55} k\theta^{33}-\theta a^{55}=\gamma^{55} tjhy\eta^{33}ji^{35}=\gamma^{44} \eta\theta^{33}=\epsilon^{55}-te^{42}$.
 1-CL 国家=EMPH 町=EMPH COP=POSS-PART
- 「一つの国家はもちろん町だぞ。」

一方で、疑問文末助詞 -la⁴², -na⁴² の後に生起し、(269) のように確認的な疑問を表すこともある。-la⁴² の後に -te⁴² が生起する際、-la⁴² は (269a, b) のように -la³³ のように声調交替することが多い。

- (269) a. $\theta^{42}, kh\gamma^{44}-la^{33}-te^{42}$? b. $kh\alpha^{42}-j\theta^{33}-la^{33}-te^{42}$?
 おお あれ -Q-PART 植える-OBLIG-Q-PART
- 「おお、(別の) あれのことか?」 「(ゴムの木を) 植えるべきなの?」

5.1.2.6 -je⁴⁴

助詞 -je⁴⁴ は文末に生起し、「～だね」「～だよ」といった、文の語調を整える機能を持つ。発話者が他者から聞いたことを述べる「伝聞」のニュアンスをもつことも多い。

- (270) a. $kh\gamma^{44}-ku^{44}=a^{55}ja^{33}+m\gamma^{35}+j\omega^{44}-a^{44}-je^{44}$.

あれ-CL=VA 治す+よい+よい-PART-EUP

「あれ(梅毒)は治るもんだってね。」

- b. $ja^{55}khu^{44}=a^{55}=l\alpha^{44}m^{33}-n\alpha^{35}-m\alpha^{35}-a^{44}-je^{44}$.

タバコ=VA=も CAUS-くつつく-BEN-PART-EUP

「(街中の悪い連中と遊んで油断してたらあいつらは)タバコの上に(ヘロインを)載せて吸わせるらしいね。」

5.2 従属節末を表す範疇 —接続助詞—

主節と従属節からなる複文を形成する際、従属節末に置かれる助詞が「接続助詞」である。チノ語には表 5.2 のように接続助詞が存在する。

表 5.2: 接続助詞一覧

種類	(典型的) 用法	種類	(典型的) 用法
-mjə ⁴²	継起	-mɣ ⁴²	条件
-vu ⁵⁵	原因、理由	-təu ³³	時
-xɔ ⁴²	条件	-ɛ ⁵⁵ nɔɛ ⁴⁴	逆接

いずれの接続助詞も動詞複合形式の末尾に置かれるのが普通である。そのため、従属節は基本的に動詞述語文の形式を取っていると考えられる。

また従属節をもつ文構造は通常以下のようにになっている。

[従属節-接続助詞], 主節

接続助詞に後続された従属節は基本的に主節に先行する。

以下、各接続助詞の例を掲げる。

5.2.1 -mjə⁴²

接続助詞 -mjə⁴² は「～したら」「～した後」といった、動作の継起関係を表す。

- (271) a. $mi^{33}tha^{55}x\alpha^{42}-mjə^{42}, t\gamma^{55}-tsh\alpha^{42}$.

雨 降る-したら もっと-寒い

「雨が降ったらもっと寒くなった。」

- b. $kh\gamma^{42} \quad \eta\alpha^{35} \quad na^{33}k\alpha^{42} \quad f\omega^{55}-mjə^{42}, \quad \eta\alpha^{35} \quad khu^{33}+th\alpha^{35}-m\gamma^{55}$.
3SG.NOM 1SG.OBL 耳 引っ張る-したら 1SG.OBL 呼ぶ+起きる-PAST

「彼は私の耳を引っ張って、起こした。」

事態の継起関係を表す場合なら、一文中に何度でも -mjə⁴² は生起できる。

- (272) a. tɕe³³phu⁵⁵ tɔ³³+mo³⁵-mjə⁴², tɔ³³-mjə⁴², ʃo³³ɕi⁴⁴ m³³-phi³⁵-mjə⁴²,
 酒 飲む+狂う-して 打つ-して 携帯電話 CAUS-なくなる-して
 mo⁵⁵-ta³³+le⁴⁴-xa⁴⁴.
 NEG-打つ+行く-PFT

「酒に酔っ払って、(マージャンを)打って、携帯電話をなくしてから、(マージャンを)打たなくなった。」

- b. lə³³=jə⁵⁵ no³³-lə⁵⁵-mjə⁴² ʃao³³xoŋ³⁵-ma⁵⁵=ɛ⁵⁵ tso³³ no³³-lə⁵⁵-mjə⁴² va³³tsə⁵⁵
 あれ=より また-来る-して シャオホン-PL=POSS 家 また-来る-して 豚のえさ
 phu⁵⁵, ɲo⁴² tɕao⁵⁵tao⁵⁵ su⁵⁵+sə³³-mjə⁴², ji⁵⁵the⁴²+ja³³m³⁵.
 煮る 1SG.NOM ゴム樹皮用ナイフ 研ぐ+終わる-して 眠る+いく 言う

「あそこから帰ってきて、シャオホンの家から帰ってきて、豚のえさを煮て、私はゴム樹皮用ナイフを研ぎ終わってから、眠りにいくつもりだった。」

否定接辞と共に起しない。そのため、肯定文のときには -mjə⁴² が義務的であるような場合でも、否定文にすると表面的には動詞連続構造をとっているように見える場合がある。この点は注意が必要である。

なお、動詞連続構造との関係については 6.6.3 (p. 170) を参照されたい。

また (273) のように、-mjə⁴² は必要条件を表すこともできる。

- (273) a. tɕe³³xun³⁵-mjə⁴², zə⁵⁵ku⁵⁵ tʃə³³+jə³³.
 結婚する-して 子供 産む+よい

「結婚してはじめて、子供を産んでもよい。」

- b. ji³³jen⁴² le⁵⁵-mjə⁴², ja⁵⁵+mɿ⁵⁵-khju⁴².
 病院 行く-して 治す+よい-AUX

「病院に行ってはじめて、(あなたの病気は) 治るだろう。」

5.2.2 -vu⁵⁵

接続助詞 -vu⁵⁵ は「～するので」という原因・理由の用法と、「～するなら」という条件の用法、「～して」という継起関係の用法がある。

まずは原因・理由用法の例である。

- (274) a. tʃhi⁵⁵ tso³³-mɿ³⁵ ŋu⁵⁵-vu⁵⁵, a⁵⁵vu⁴⁴a⁵⁵va⁴⁴ ji⁵⁵the³⁵-mɿ⁵⁵.
 薬 食べる-NML COP-ので 昏々と 寝る-PAST

「薬を飲んだので昏々と寝た。」

- b. a⁵⁵pu⁴⁴a⁵⁵mo⁴⁴ a⁵⁵krɔ⁴⁴ ŋu⁵⁵-vu⁵⁵, zə⁵⁵ku⁵⁵ a³³pjo⁵⁵ ma⁵⁵-jə⁴⁴+tu³³-mɿ³⁵.
 両親 貧しい COP-ので 子供 本 NEG-よい+読む-PAST

「両親が貧しかったので、子供は学校に通えなかった。」

次に条件の用法である。-vu⁵⁵ は十分条件を表す。

- (275) a. nɔ⁴² khun³³miŋ³³ le⁵⁵-vu⁵⁵, lao³³si⁵⁵ a⁵⁵fu⁵⁵ the³⁵+le⁴⁴.
 2SG.NOM 昆明 行く-ので 先生 先に 伝える+行く
 「あなたは昆明に行くなら、先に先生に伝えに行きなさい。」
- b. ŋɔ⁴² kai³³tsi⁵⁵ le⁴⁴-nɔɛ⁴⁴. ɕa⁵⁵lo⁴⁴ phjen³⁵ji³³ ŋu⁵⁵-vu⁵⁵, la⁵⁵thə⁴² ju³³-ɛ⁴⁴.
 1SG.NOM 市場 行く-SFP もの 安い COP-ので 多い 買う-PART
 「私は市場に行くよ。ものが安かったら、たくさん買って来る。」
- c. ja⁵⁵ŋ⁴⁴ vu³³xao³⁵ ŋu⁵⁵-vu⁵⁵, mi⁵⁵ɕo⁵⁵ŋ⁴⁴ lu³³xao³⁵ ŋu³³-nɔɛ⁴⁴.
 今日 5日 COP-ので 明日 6日 COP-SFP
 「今日5日なら、明日は6日である。」

(275c) のような例では「今日5日なので、明日6日である」とも解釈できることから、原因の用法とも区別が付きにくい場合もある。

また継起関係を表すこともある。継起関係に -vu⁵⁵ を用いた場合、前件と後件の間の意味的なつながりは弱い。更に前件と後件の主語が異なってもよい。

- (276) a. lao³³toŋ⁵⁵+sɔ³⁵-vu⁵⁵, mi³³tha⁵⁵ ma³³-xo⁵⁵-mɤ⁴²-a⁴⁴-nɔɛ⁴⁴.
 働く+終わる-ので 雨 NEG-降る-PAST-PFT-SFP
 「仕事を終えたら、雨がやんだ。」
- b. fao³³waŋ³³ ɕi⁴⁴ tɕɤ⁵⁵-tɛ⁴⁴-vu⁵⁵, tɕɤ⁵⁵-me⁵⁵.
 王さん これ もっと-見て-のもっと-泣く
 「王さんもこれを見て、泣いた。」
 (= 王さんはこれを見れば見るほど、泣いた。)
- c. ji⁵⁵ŋ⁴⁴ ji⁵⁵ŋ⁴⁴ tjen³⁵xua³⁵ ta³³+lu³⁵-vu⁴⁴, a⁵⁵nɔ⁵⁵ ɕo³³ɕi⁵⁵ lai³⁵-a⁴⁴-nɔɛ⁴⁴
 昨日 おととい電話 かける+来る-ので 自分(3)携帯電話 壊れる-PFT-SFP
 m³³-me³⁵.
 話す-PAST
 「昨日おとといに(彼女は)電話してきて、携帯電話が壊れたと言った。」

5.2.3 -xo⁴²

接続助詞 -xo⁴² は「～ならば」「～すると」という条件の意味を表す。ただしほとんどの場合、コピュラ ŋu⁵⁵ と共起し、ŋu³³-xo⁴² の形式で用いられる。

- (277) a. jo⁵⁵-a⁵⁵ ŋu³³-xo⁴², ŋɔ⁴² tɕɛ⁴²-na⁴² no³³+lo⁵⁵=ɛ⁴⁴.
 よい-PART COP-なら 1SG.NOM とても-早い また+来る=POSS
 「可能ならば、私は早く帰ってきますよ。」

- b. a⁵⁵pu⁴⁴ tɕe³³phw⁵⁵ tɔ³³ ɲw³³-xɔ⁴², phø⁵⁵-a⁴⁴.
父 酒 飲む COP-なら 吐く-PFT

「父が酒を飲むと、吐きます。」

- c. jo³³phø⁵⁵ lo³⁵+ja⁴⁴-vu⁵⁵ khɿ⁵⁵-pu⁴⁴-thə³⁵ tɔ³³ ɲw³³-xɔ⁴², ji³³tshe⁵⁵
年寄り 来る+行く-ので あれ-くらい-多い 飲むCOP-なら 小便
mɔ³³-phi⁵⁵+to³³-khju⁴².
NEG-排泄する+出る-AUX

「年老いてしまったので、そんなに(酒を)飲むと、おしっこが出せなくなってしまう。」

(278) の例は、コピュラ ɲw⁵⁵ がなく、動詞に直接後接している例である。

- (278) a. ja⁵⁵ni⁴⁴ tɕe³³phw⁵⁵ ɕi⁵⁵-pu⁴⁴-thə⁴² tɔ³³-xɔ⁴², mi⁵⁵jo⁵⁵ni⁴⁴ ma⁵⁵-to⁵⁵tho³³-khju⁴²=ɛ⁴⁴.
今日 酒 これ-くらい-多い 飲む-なら 明日 NEG-起きる-AUX=POSS

「今日こんなに酒を飲んだら、明日は起きられないよ。」

- b. tshɿ⁵⁵mjo⁵⁵ mɔ⁵⁵-tə³⁵+le⁴⁴-xɔ⁴², ne³³mjo⁵⁵ mɔ⁵⁵-tə³³-khju⁵⁵-xa⁴⁴.
今年 NEG-刈る+行く-なら 来年 NEG-刈る-AUX-PFT

「今年(薪を)刈りに行かなかったら、来年は刈れなくなってしまうだろう。」

5.2.4 -mɿ⁴²

接続助詞 -mɿ⁴² 「～なら」という条件の意味を表す。-xɔ⁴² に対して、条件表現に現れる -mɿ⁴² の割合は低い。

- (279) a. khɿ⁴² ma⁵⁵-ɲw⁵⁵-mɿ⁴², ja⁵⁵ni⁴⁴ ɲɔ⁴² ma⁵⁵-tu⁵⁵-khjo³³-khju⁵⁵-suw⁴⁴.
3SG.NOM NEG-COP-なら 今日 1SG.NOM NEG-掘る-ACP-AUX-まだ

「彼でなければ、今日私は掘り終わらなかっただろう。」

- b. nə⁴² a⁵⁵mɛ⁵⁵ mɔ³³-mɿ⁴², a⁵⁵mɛ⁵⁵ tso⁵⁵+lo⁴²-to⁴².
2SG.NOM ご飯 飢える-なら ご飯 食べる+来る-HORT

「あなたはおなか为空いているなら、ご飯を食べに来なさいよ。」

5.2.5 -təu³³

接続助詞 -təu³³ は「～したとき」という意味を表す。-təu³³ ～-təu⁴⁴～-təu³⁵ の異形態が自然発話中に見られる。元来は「～とき」という意味の名詞であったと考えられる。現在はそれが文法化して、時を表す従属節を表す標識となった。

(280) はいずれも -təu³³ の前に動詞複合形式が置かれている例である。多くの場合、関係節標識である -mɿ が置かれている。-təu³³ が名詞であった根拠は動詞複合形式に -mɿ が置かれた形で用いられているところにある。しかし、(280a) のように、-mɿ が置かれない場合も許されている。

- (280) a. ɲo⁴² tso³³ to³³+le³³-(mɿ⁴⁴)-təu³⁵, tʃen³⁵xua³⁵ mɿ³³+lu³³-mɿ³⁵.
 1SG.NOM 家 出る+行く-(REL)-PART 電話 鳴る+来る-PAST

「私が家を出ようとしたとき、電話がかかってきた。」

- b. ɲo⁴² tʃon⁵⁵ʃue⁴⁴ tu³³-mɿ³³-təu³⁵, si⁵⁵mao⁴⁴ thi³³la⁵⁵ le³³-to⁴⁴.
 1SG.NOM 中学 読む-REL-とき 思茅 1度 行く-EXP

「私が中学に行っているとき、思茅に1度行ったことがある。」

(281) のように、-təu の直前が名詞句である場合もある⁷。

- (281) pao⁵⁵tʃy⁵⁵ ɲa⁵⁵vu⁵⁵ non³³ʃao³⁵ -təu⁴⁴ thon³³ʃo³⁵ ɲu³³-mɿ³⁵.
 パオチャ 1PL 農業学校 -PART 同級生 COP-PAST

「パオチャが農業学校のとき、私の同級生であった。」

5.2.6 -ɛ⁵⁵nɛ⁴⁴

接続助詞 -ɛ⁵⁵nɛ⁴⁴ 「～であるが、しかし」という逆接的な意味を表す。この接続助詞は意味的には主節につながる役割がある。しかし、この接続助詞は所有格を表す後置詞 -ɛ⁴⁴ と文終止助詞 -nɛ⁴⁴ から成り立っている。よって形式的には文終止助詞 -nɛ⁴⁴ があるため、この接続助詞で一つの文を形成していると考えられる。

- (282) a. ɲo⁴² a⁵⁵xo³³mi⁵⁵ pja³³-khju⁵⁵-ɛ⁵⁵nɛ⁴⁴, a³³pjo⁵⁵ ma³³-pjo⁵⁵-khju⁴².
 1SG.NOM 漢語 話す-AUX-だが 文字 NEG-書く-AUX

「私は漢語を話すことができるけれども、文字を書くことができない。」

- b. tsu⁵⁵ku⁵⁵lu⁵⁵=jə⁴⁴ tʃə⁴⁴+zu⁵⁵-ko⁴⁴-ɛ⁵⁵nɛ⁴⁴, pa⁵⁵tsu⁵⁵-to⁴⁴-a⁴⁴.
 外=から いる+歩く-PROG-だが 抱く-EXP-PART

「(今の若いカップルは)外を歩いているときも抱きついたりしている。」([直訳]= 外を歩いているのに抱きついたりしている)

疑問語に後接して、「～であろうと」の意味を表すこともある。

- (283) kho³⁵-ɛ⁵⁵nɛ⁴⁴, kho⁵⁵mo⁴⁴-ma⁵⁵ tʃə⁵⁵+to⁴⁴-ko⁴⁴-mɿ⁵⁵-xa⁴⁴.
 どこ-だが 女-PL いる+飲む-PROG-PAST-PFT

「(今は)どこ(の村)であろうと、女たちは酒を飲むようになっている。」

⁷この例は洛特下位方言話者の自然発話から採集した。

第6章 文法現象における諸問題

チノ語における文法現象における諸問題は多い。本章では基本語順など統語論的な問題をはじめとして、チノ語の文法現象として特筆すべき問題を扱う。

6.1 語順と情報構造

6.1.1 語順と格標示システム

6.1.1.1 基本語順

チノ語の基本語順は SOV である。以下の例を見られたい。

- | | |
|---|---|
| <p>(284) a. $\eta\phi^{42}$ $kh\gamma^{35}$ $khu^{33}-n\alpha^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 呼ぶ-SFP
 「私は彼/彼女を呼ぶ。」</p> <p>b. $kh\gamma^{42}$ $\eta\phi^{35}$ $khu^{33}-n\alpha^{44}$.
 3SG.NOM 1SG.OBL 呼ぶ-SFP
 「彼/彼女は私を呼ぶ。」</p> | <p>(285) a. $ki^{55}ki^{44}$ $\epsilon u^{35}ma^{44}$ $j\alpha^{35}-m\gamma^{35}$.
 叔父 叔母 叱る-PAST
 「叔父が叔母を叱った。」</p> <p>b. $\epsilon u^{35}ma^{44}$ $ki^{55}ki^{44}$ $j\alpha^{35}-m\gamma^{35}$.
 叔母 叔父 叱る-PAST
 「叔母が叔父を叱った。」</p> |
|---|---|

(284) は主語・目的語ともに代名詞が用いられた場合、(285) は主語・目的語ともに普通名詞が用いられた場合である。

(284a) は主語「私」が文頭に、目的語「彼/彼女」がその次の位置に置かれている。一方で (284b) は主語「彼/彼女」が文頭に、目的語「私」がその次の位置に置かれている。更に (285a) では主語「叔父」が文頭に、目的語「叔母」がその次の位置に、(285b) では主語「叔母」が文頭に、目的語「叔父」がその次の位置に置かれている。

このことからチノ語では特に指定がない限り SOV の語順で要素が並べられる。代名詞が主語あるいは目的語の位置に置かれた場合、声調による交替が義務付けられる。主語に置かれた場合は主格の声調 ((284) ではそれぞれ 42 調)、目的語に置かれた場合は斜格の声調 ((284) ではそれぞれ 35 調) となる。普通名詞にはそのような義務性はない。ただし、時に普通名詞が目的語に置かれた場合、代名詞のように、語末音節の声調が 35 調となることがある。

例えば、(285a) は (286) のようにも発音される。

- (286) $ki^{55}ki^{44}$ $\epsilon u^{35}ma^{35}$ $j\alpha^{35}-m\gamma^{35}$. 「叔父が叔母を叱った。」
 叔父 叔母.OBL 叱る-PAST

(286)では目的語である「叔母」の最終音節が35調となっており、斜格を表している。しかし、これは2.2.1 (p. 38)で述べたように基本的に随意的な現象である。

普通名詞が無標の形式で2つ並べられた場合、その文法関係は基本的に[主語-目的語]であると解釈されるため、基本語順はSOVであると考えてよい。

更に二重目的語をとる場合、[間接目的語-直接目的語]の順序で名詞句が並べられる。

- (287) khv³⁵ren³⁵ ja⁵⁵kho⁴² ko³³-mə⁵⁵-le⁴⁴. 「客人にタバコを渡しなさい。」
客人 タバコ 持つ-BEN-行く

(287)では間接目的語である「客人」が前に置かれ、直接目的語である「タバコ」が後に置かれている。

チノ語では目的語が有生名詞であるとき、後置詞=va⁵⁵を後接することによって格標示することもできる。

- (288) a. fao³³li³³ fao³³waŋ³⁵=Ø/ =va⁵⁵ ɬa³⁵-mə⁴⁴-no⁴⁴. 「李さんは王さんに嫁ぐ。」
李さん 王さん=VA 嫁ぐ-BEN-SFP

- b. fao³³li³³ khur³³ŋi⁵⁵=Ø/ =va⁵⁵ ka⁵⁵+zo³⁵+ja⁴²-no⁴⁴.
李さん 犬=VA 追う+歩く+行く-SFP

「李さんは犬を追い払った。」

- (289) a. ŋɔ⁴² zo⁵⁵ku⁵⁵=Ø/ =va⁵⁵ ko⁵⁵tø⁴⁴ thi⁵⁵-khrœ⁴²=jə⁴⁴a³³pjo⁵⁵ thi⁵⁵-pen⁴⁴
1SG.NOM 子供=VA 服 1-CL=と 本 1-CL

ju³³+la³⁵-mɿ³⁵.
買う+来る-PAST

「私は一枚の服と一冊の本を子供に買ってきた。」

- b. khv⁴² nə³⁵=Ø/ =va⁵⁵ [ŋi⁵⁵ju⁵⁵ tso³³ ja³⁵ ɕu⁵⁵ ma³³-ɕu⁵⁵] ŋɔ³³-no⁴⁴.
3SG.NOM 2SG.OBL=VA 2PL.NOM 家 鶏.OBL 育てる NEG-育てる 聞く-SFP

「彼はあなたに自宅で鶏を飼っているかどうかを聞いた。」

(288)は直接目的語に=va⁵⁵が後接した例で、(289)は間接目的語に=va⁵⁵が後接した例である。いずれの例でも基本語順どおりに名詞句が配置されているため、=va⁵⁵の後接は随意的になされる。逆に言えば、一般に無標の名詞句が並列されていれば、基本語順に従っていると解釈される。

ただし、無標であるからといって、必ずしもすべての連続して並べられた普通名詞が[主語-(間接目的語)-直接目的語]の順序であると解釈されるわけではない。これには文脈ないし言語外的知識による判断などの問題が関与する。

6.1.1.2 文脈ないし言語外的知識による判断

文脈ないし言語外的知識による判断が意味解釈に関与している場合がある。

- (290) a. $\eta a^{33} z o^{55} = \emptyset / = v a^{55} j a o^{33} l i^{33} m^{33} - p r e^{35} + j a^{42} - n o e^{44}$.
鳥=VA 李さん CAUS-飛ぶ+行く-SFP

「鳥は李さんが飛ばした。」

- b. $j a o^{33} w a n j^{35} = \emptyset / = v a^{55} l a o^{33} s i^{55} j o^{35} - m y^{35}$.
王さん=VA 先生 叱る-PAST

「先生は王さんを叱った。」

(290a) では $\eta a^{33} z o^{55}$ 「鳥」と $j a o^{33} l i^{33}$ 「李さん」の2つの名詞句が連続している。この例においてはより詳細なレベルの有生性が文脈ないし言語外的知識による判断に関与している。すなわち、動物名詞と人間名詞が連続した場合、人間名詞のほうが動作主として解釈されやすい、という傾向¹が存在する。もしこの文を SOV 語順に従っている文であると解釈すれば「鳥が李さんを飛ばした」という意味になる。しかし、現実にはそのような解釈を取ることは難しい。むしろ、チノ語においては「李さん」のほうを動作主と判断し、この文は「鳥を李さんが飛ばした」という目的語前置の解釈を取るほうが容易であると考えられる²。このようにチノ語では人間名詞と動物名詞が連続した場合は、基本的に人間名詞を動作主として解釈する傾向にある。そのため、たとえ無標の動物名詞が人間名詞の前に置かれたとしても、人間名詞のほうを動作主として解釈することが多い。よって、このような場合には動物名詞に後置詞 $=v a^{55}$ を置かなくてもよい。特に(290a)の例ではむしろ $=v a^{55}$ を置かないほうが自然であるとの判断が話者から示された。

チノ語では更に詳細な社会的な地位などが意味解釈に関与する。(290b)では $l a o^{33} s i^{55}$ 「先生」と $j a o^{33} w a n j^{35}$ 「王さん(学生)」の2つの名詞句が連続している。この2つの名詞句では「先生」のほうが「王さん」よりも社会的には高い位

¹ この傾向はすでに Silverstein (1976) がオーストラリア原住民諸語の研究において提示した、いわゆる「シルバースティーンの名詞句階層」に沿っている。これは多くの言語で名詞句がある一定の階層をなしていることを提案している。具体的には以下のような階層である。

代名詞 (1人称 > 2人称 > 3人称) > 名詞 (親族名詞・固有名詞 > 人間名詞 > 動物名詞 > 無生物名詞 (自然の力の名詞 > 抽象名詞・地名))

この階層は「動作主のなりやすさ」や「動作対象のなりやすさ」などを示すと考えられた。この階層に関してはこれまで多くの研究者によって様々な検討が加えられ、また利用されている (Dixon 1979, Zubin 1979, Wierzbicka 1981 など)。

チベット・ビルマ諸語では孫・石 (2002) がツァオデン・ギャロン語の記述にこの階層を利用している。ツァオデン・ギャロン語では

発話者 > 被発話者 > 第3者 > その他の動物 > 非動物

の5つの階層が存在する (孫・石 2002: 96)。

² 「鳥は李さんによって飛ばされた」と受動的な意味で解釈することも可能であろう。しかし、本書での立場として、チノ語において文法的装置としての受動態は存在しないと考える。

置にある。そのため、「叱る」行為を行う可能性は「王さん」よりも「先生」のほうが高いと判断される。よって、たとえ「王さん」が文頭に置かれ、「先生」がその後に置かれるという基本語順を破った文であっても、「王さん」は主語ではなく、目的語であるとの確に解釈される。したがって、(290b)において=va⁵⁵の生起は随意的である。

他方で、もし言語外的知識のみでは判断できず、文法関係にあいまい性が生じた場合、後置詞=va⁵⁵は義務的に生起する。(291)を見られたい。

- (291) ki⁵⁵ki⁴⁴ʔ=0/ =va⁵⁵ ʈu³⁵ma⁴⁴ jo³⁵-mɣ³⁵.
叔父=VA 叔母 叱る-PAST

「叔父は叔母に叱られた。」(= 叔父は叔母が叱った)

(291)ではやはり ki⁵⁵ki⁴⁴ 「叔父」と ʈu³⁵ma⁴⁴ 「叔母」の2つの名詞句が連続している。しかし、(291)における名詞句の解釈は(290)の場合と異なっている。この例では「叔父は叔母に叱られた」、すなわち「叔母が叔父を叱った」という意味において、「叔父」に=va⁵⁵が後接しなければならない。後接してはじめて「叔父」が対象を表す名詞で、「叔母」が動作主であると解釈される。

関連する例として(292)を見られたい。これは(285)を再掲したものである。

- (292) a. ki⁵⁵ki⁴⁴ ʈu³⁵ma⁴⁴ jo³⁵-mɣ³⁵. b. ʈu³⁵ma⁴⁴ ki⁵⁵ki⁴⁴ jo³⁵-mɣ³⁵.
叔父 叔母 叱る-PAST 叔母 叔父 叱る-PAST

「叔父が叔母を叱った。」(= 285a)

「叔母が叔父を叱った。」(= 285b)

(292)の例では、いずれの名詞句も後置詞=va⁵⁵を伴っていない。通常、無標の名詞句が(292)のように並列している場合、基本語順に従い、最初に置かれた名詞句が主語で、2つ目に置かれた名詞句が目的語であると解釈される。

(292a)は上記(291)の「叔父」を含む名詞句から後置詞=va⁵⁵を取り除いた文である。「叔父」と「叔母」はチノ語においては社会的地位において等しい。そのため、「叱る」行為がどちらにより起こりやすいかという問題を基本語順以外の方法で解釈することはできない。よって、後置詞が文頭名詞句の「叔父」にない場合は、基本語順どおり「叔父」をその文の主語と解釈しなければならない。

もし「叔母」を主語と解釈させるためには、(291)のように、文頭名詞句である「叔父」に後置詞=va⁵⁵を置か、(292b)のように、基本語順どおりに「叔母」を文頭に置かねばならない。

もちろん厳密に言えば、「言語外的知識」と有生性などの名詞句階層とは異なる次元に属すると考えなければならないが、有生性や社会的地位などの名詞句内の階層が言語外的知識として意味解釈に利用されていることは明らかである。

6.1.1.3 二重斜格名詞句と二重 =va⁵⁵ 制約

これまでは主に斜格名詞句が1文に1つ存在する例を考えてきた。しかし、実際には斜格名詞句が1文に2つ存在する例も少なくない。

もし、1文に有生の斜格名詞句が2つ並列する場合、通常は無標(代名詞の場合は斜格形)のまま、語順により文法関係を標示する。これに後置詞 =va⁵⁵ を後接する場合でも、2つのうちいずれか一方の斜格名詞句に後置詞 =va⁵⁵ を置くことはできるが、両方ともに後接することはできない(これを「二重 =va⁵⁵ 制約」³と呼ぶ)。

(293)に代表例として被使役者と対象の2つの斜格名詞句が共起している例を挙げる。

- (293) a. a⁵⁵mo⁴⁴ŋo³⁵ khɿ³⁵ pro⁵⁵khœ⁴²-vi³⁵-mɿ³⁵.
母 1SG.OBL 3SG.OBL 手伝う-CAUS-PAST
- b. a⁵⁵mo⁴⁴ŋo³⁵=va⁵⁵ khɿ³⁵ pro⁵⁵khœ⁴²-vi³⁵-mɿ³⁵.
母 1SG.OBL=VA 3SG.OBL 手伝う-CAUS-PAST
- c. a⁵⁵mo⁴⁴ŋo³⁵ khɿ³⁵=va⁵⁵ pro⁵⁵khœ⁴²-vi³⁵-mɿ³⁵.
母 1SG.OBL 3SG.OBL=VA 手伝う-CAUS-PAST
- d. *a⁵⁵mo⁴⁴ŋo³⁵=va⁵⁵ khɿ³⁵=va⁵⁵ pro⁵⁵khœ⁴²-vi³⁵-mɿ³⁵.
母 1SG.OBL=VA 3SG.OBL=VA 手伝う-CAUS-PAST
- 「母は私に彼/彼女を手伝わせた。」

この例では(293a)が最も自然である。一方、(293d)は非文である。文頭から数えて最初の斜格名詞である「私」は基本的に被使役者の解釈となり、二番目の斜格名詞である「彼/彼女」は被使役者の動作・行為の対象(被動者)となる。このような斜格名詞が並列した場合、[使役者-被使役者-被動者]の語順は極めて厳格に守られ、それ以外の語順が現れることはほぼない。加えて、被使役者と被動者は(293b)および(293c)に見るように、=va⁵⁵ で標示される。そのため、こ

³現代口語ビルマ語にもこれと類似の制約があるようである。

岡野(1994)では現代口語ビルマ語で対格を表す後置詞 -ko...go_ は1文に2回以上用いることが出来ない、と述べている。

i) *louN.ji. -go_ mauN.mauN. -go_ le'shauN.pe:- dE||
ロウンジー ACC マウンマウン ACC 贈り物 与える SFP

「私はマウンマウンにロウンジー(ビルマ式スカート)をあげた。」

一方で、Matisoff(1976)ではラフ語で文法関係の明示化のためならば、目的語を標示する tha[?] を文中に2回ないし3回置くことが可能であると述べている。

ii) ð-e yâ -mì tha[?] ð-yâ-pā tha[?] sālā tha[?] li[?] pō ci tū te tu yo.
母 娘 THA[?] 息子 THA[?] 先生 THA[?] 本 送る CAUS PART CAUS PART PART

「母は娘をして息子に先生へ本を送らせしめるだろう。」

(グロス等は本書筆者により改変されている)

れらが正しく解釈されるためには語順に依拠せざるをえない。よって、=va⁵⁵による格標示は語順による格標示に比べて二義的な意味しかもたない。したがって、語順の格標示に基本的に依拠した(293a)が最も自然な文となる。(293b)および(293c)はいわば余剰的な格標示が行われていると考えてよい。

しかし、最も問題があるのは(293d)である。これはチノ語話者にとって極めて余剰的な格標示であり、容認されない。この点でチノ語は語順による格標示をやはり重視し、=va⁵⁵による格標示は二義的であると言えるだろう。

この二重 =va⁵⁵ 制約は有生の斜格名詞が並列した事例にとどまらず、方向を表す名詞が現れた事例⁴にも適用される。

6.1.2 情報構造と言語表現

チノ語も他の言語と同様、言語表現が情報構造と深く関係している。ここでは文構造がいかにして情報構造と結びつき、表現を形成しているか記述する。

6.1.2.1 情報の流れ

一文における情報は基本的に重要度の低い情報から高い情報へと流れる。

まず、(294)から見ていこう。

- (294) a. a³³tshx³⁵=jə⁴⁴=ε⁵⁵ a³³çə⁴², a³³çə³⁵=jə⁴⁴=ε⁵⁵ a⁵⁵tshen⁴⁴, a⁵⁵tshen⁴⁴=jə⁴⁴=ε⁵⁵
 10.OBL=より =POSS 100 100.OBL=より =POSS 1000 1000=より =POSS
 a⁵⁵van³⁵.
 10000.OBL
 a⁵⁵van³⁵=jə⁵⁵=ε⁴⁴=ɣ⁴⁴ n̩⁵⁵tshen⁴⁴ sɔ̃⁵⁵tshen⁴⁴van³⁵ khɤ³³-lo³³
 10000.OBL=より =POSS=EMPH 2000 3000 万.OBL あれ-ように
 ŋu³⁵+ja⁵⁵-ɔ̃⁴⁴-nce⁴⁴.
 COP+いく -PART-SFP

「十から百、百から千、千から万だ。万からは2000万、3000万という風になるんだ。」

⁴例えば以下のようなものである。

- i) a. a⁵⁵mɔ⁴⁴ ŋɔ³⁵(=va⁵⁵) tɕij³³xoŋ⁴⁴(=va⁵⁵) khə³³-le³³-mɤ³⁵.
 母 1SG.OBL(=VA) 景洪(=VA) CAUS-行く-PAST
 b. *a⁵⁵mɔ⁴⁴ ɔ̃³⁵=va⁵⁵ tɕij³³xoŋ⁴⁴=va⁵⁵ khə³³-le³³-mɤ³⁵.
 母 1SG.OBL=VA 景洪=VA CAUS-行く-PAST

「母は私に景洪に行かせた。」

(ia)のように被使役者のŋɔ³⁵の直後、あるいは方向の名詞句であるtɕij³³xoŋ⁴⁴の直後のいずれかに=va⁵⁵を置くか、もしくは全く置かなければ文法的である。しかし、(ib)のように両斜格名詞句に=va⁵⁵を置けば、二重=va⁵⁵制約に反し、非文となる。

斜格名詞句に対し一切後置詞=va⁵⁵を後接していない場合が最も自然に用いられることから、後置詞=va⁵⁵がもたら文法関係の非あいまい化の機能を果たしていると考えられる。

b. A: thi⁵⁵ma⁵⁵ mo⁵⁵-su⁵⁵-a⁵⁵. ji⁵⁵ji⁵⁵ jo³³kha³³-ma⁵⁵ tʃhə⁴⁴-mə⁴⁴=ɛ⁵⁵-no⁴⁴,
 多い NEG-知る-PART 昔 老人-PL 語る-BEN=POSS-SFP

ko³³.tɕi⁵⁵ ko³³.tɕi⁵⁵ su⁵⁵-a⁵⁵.
 それぞれ-少し それぞれ-少し 知る-PART

B: pa⁵⁵kha⁴²=ɣ⁴⁴ thi⁵⁵-ɕo⁴⁴ ŋ⁵⁵-ɕo⁴⁴ tʃhə⁴⁴-khju⁵⁵-a⁴⁴ tʃə³³-su⁵⁵=ɛ⁴⁴.
 パカー=EMPH 1-CL 2-CL 語る-AUX-PART いる-まだ=POSS

A: 「(昔話の) 多くは分からない。昔の老人たちが (私たちに) 語ってくれたけど、少しだけ理解したわ。」

B: 「パカーは 1 人 2 人 (昔話を) 語ることができるのがまだいるよ。」

(294a) では「チノ語での数の数え方 (十進法の提示)」について 2 文が示されている。第 1 文では「十から万」まで、順送りに数が示され、第 2 文では「万以上」の数字について説明している。

ここでは第 2 文について注目する。第 2 文では「万」を表す a⁵⁵van³⁵ という名詞句の末尾に強調 (話題化) を表す後置詞 =ɣ⁴⁴ が後接している。この「万」についてはすでに第 1 文の末尾に現れており、情報としては話者・聞き手ともに第 2 文においては旧情報で、かつ重要度が低い情報として見なされる。

それに比べ、第 2 文の後半部における「2000 万、3000 万」という語句は、少なくとも聞き手にとっては新情報となり、第 2 文においては冒頭の「万」よりも重要度の高い情報として扱われる。

次に、(294b) を見てみよう。ここでは A と B が本書の筆者に対して「昔話ができる者」について説明した発話である。言語形式としては現れていないが、A も B もパカー (巴卡) 村出身の話者である。

話者 A は「昔、パカーにいたころ、老人たちの語る昔話は少しだけしか理解できなかった」ことが提示されている。それに対し話者 B は「現在でもパカー村において語ることができる人が存在する」と述べている。そこで話者 B の発話の冒頭で、「パカー」 pa⁵⁵kha⁴² の末尾にやはり話題化を表す =ɣ⁴⁴ が置かれている。これは話者 B の発話においては旧情報で、重要度が低い。それに対し、「昔話を語れるのが 1 人でも 2 人でも存在する」という情報は少なくとも筆者に対しては新情報で、かつ「パカー」よりも重要度が高いと見なすことができるだろう。

このようにチノ語では重要度の低い情報から高い情報へと文が構成される。

更に、以下の (295) では、重要度が低い情報が基本語順を破って、いわば「補足」として文末に置かれていることが示される。

(295) a. li³³pai³⁵thjen⁴⁴-a⁴⁴ kai⁵⁵tsi⁵⁵=a⁴⁴ lə⁴⁴ je³⁵-a⁴⁴ ŋu³³-me⁵⁵, ŋa⁵⁵vu⁴⁴.
 日曜日-PART 市場=VA ずっと行く-PART COP-PAST 1PL.EXCL.NOM

「日曜部にはね、市場にいつも行ってたよ、私たち。」

- b. $\text{kh}\gamma^{44} \text{tjao}^{35} \text{kua}\eta^{44} - \text{m}\gamma^{44}$ $\text{khao}^{42} \text{a}^{55} \text{mi}^{44} \text{xo}^{55} = \epsilon^{44} - \text{jo}^{44}?$
あれ レントゲンを撮る-NML 何 言葉 しゃべる=POSS-PART

$\text{mo}^{33} - \eta\text{o}^{55} + \text{su}^{55} - \text{khju}^{55} - \text{a}^{44}, \eta\text{o}^{42}$.
NEG-聞く+知る-AUX-PFT 1SG.NOM

「あのレントゲン撮影をした人は何語をしゃべっていたのかしら? 聞いても分からなかったわ、私。」

- c. $\text{m}\eta^{55} - \text{a}^{44} = \gamma^{44}$, $\text{ja}^{55} \text{khu}^{44}$. $\text{pa}^{55} \text{kha}^{44} - \text{ma}^{55}$ $\text{pa}^{55} \text{lai}^{44} - \text{ma}^{55}$ $\text{kh}\text{o}^{55} \text{mo}^{44} - \text{ma}^{55} = \text{le}^{44}$
吸う-PART=EMPH タバコ パカー-PL パライ-PL 女-PL=も

$\text{m}\eta^{55} - \text{a}^{44}$.
吸う-PART

「吸うよ、タバコ。パカーやパライの女たちも吸うよ。」

- d. $\text{a}^{55} \text{tjen}^{44}$ $\text{te}^{55} - \text{to}^{44} - \epsilon^{44}$ $\text{tjhy}^{33} - \text{a}^{44}$, $\text{ten}^{35} \text{ji}^{35}$.
アチェン 見る-EXP-POSS 似ている-PART テレビ

「アチェンは見てるみたいね、テレビを。」

(295)の各例で下線を引いた「私たち」 $\eta\text{a}^{55} \text{vu}^{44}$ 、「私」 ηo^{42} 、「タバコ」 $\text{ja}^{55} \text{khu}^{44}$ 、「テレビ」 $\text{ten}^{35} \text{ji}^{35}$ はいずれも基本語順を破っている。本来なら、(295a)の「私たち」および(295b)の「私」は当該文中では主語であるため、文頭に置かれなければならない。また(295c)の「タバコ」および(295d)の「テレビ」は当該文中では目的語であるため、それぞれ述語動詞の直前に置かれるべきである。しかし、いずれも述語よりも後に置かれている。

(295)の下線部の語句はいずれも「補足的な情報」である。言い換えれば、発話参与者にとってはすでに暗黙の了解となっている事項について発話者により更に確認が取られただけに過ぎない情報である。

よって、(296)のようにまとめなおせるであろう。

- (296) チノ語では、基本語順を守った文中では、重要度の低い情報から高い情報へ情報が流れる。それに対し、基本語順を破った文中では、文末において「補足的な情報」が提示される⁵。

6.1.2.2 重要度の低い情報の省略

(296)では補足的情報が文末に示されると述べた。しかし、補足的情報を含め、重要度が極めて低い情報については発話参与者にとっては確認する必要がないことももちろん多い。

(297)を見られたい。

- (297) a. $\text{mo}^{55} - \text{pi}^{55} - \text{le}^{44} - \text{a}^{44}$. 「(私は彼女を)行かせなかった。」
NEG-CAUS-行く-PFT

⁵この傾向は久野(1978)が提出した結論に沿うものである。

b. ji³³me⁵⁵ a⁵⁵ma⁵⁵ no³³-se⁵⁵. to³⁵fu³³phi³⁵=ja⁴⁴ ka⁵⁵mo⁴⁴ tʃha⁵⁵+tso⁴⁴-vu⁴⁴.
 昨晚 体 痛い-死ぬほど 湯葉=より 青菜 煮る+食べる-ので

「昨晚は体がとても痛かった。(私は)湯葉と青菜を食べたからね。」

(297a)は使役文である。しかし、述語しか言語形式としては存在していない。本来なら「使役者」ならびに「被使役者」が述語の前に言語形式として生起するはずである。この文ではすでに発話参与者にとって使役者である「私」ならびに被使役者である「彼女」の2者が当該発話の前提となっていると判断されているため、これら2者の情報の重要度は当該発話内においてはすこぶる低い。そのため、省略されている。

(297b)は第2文で主語の「私」 $\eta\phi^{42}$ が示されていない。第1文においてすでに聞き手に対して発話者は「私の身体状況の悪さ」を報告している。第2文においてはその理由について示されているが、動作主が「私」であることは明らかであるため、その情報の重要度は極めて低い。よって、省略されている。

6.2 名詞修飾

チノ語の名詞修飾は大きく3種類に分かれる。すなわち、名詞句による修飾、形容詞による修飾、関係節による修飾である。それぞれの主名詞との位置関係などをまとめると表6.1のとおりである。

表 6.1: 名詞修飾の位置関係

	修飾要素	主名詞に対する位置
i)	名詞・代名詞	前置
ii)	形容詞	後置
iii)	関係節	前置 or 後置

以下では、修飾要素の種類に従って、名詞修飾を記述していこう。

6.2.1 名詞句による修飾

名詞句の修飾とは、すなわち、名詞・代名詞による修飾である。これらは主名詞となる被修飾名詞に対して前置される。

まず、修飾名詞・被修飾名詞がともに名詞である場合を見ておく。

(298) a. ki⁵⁵no⁵⁵ + a⁵⁵mi⁴⁴ → ki⁵⁵no⁵⁵mi⁴⁴
 チノ 言葉 チノ語

b. jao³³hoŋ⁴⁴-ma⁵⁵ + tso³³ → jao³³hoŋ⁴⁴-ma⁵⁵tso³³
 シャオホン-PL 家 シャオホンの家

(298) のように、修飾語が被修飾語の前に置かれる。(298a) のように、被修飾語が接頭辞 *a-* を含む場合、複合語形成の段階で、*a-* は脱落する。

また名詞の斜格、および代名詞の斜格は前置される。

- (299) a. *ʃao*³³*li*³⁵ *a*⁵⁵*mo*⁴⁴ 「李さんの母」
 李さん.OBL 母

- b. *nə*³⁵ *tso*³³
 2SG.OBL 家
 「あなたの家」

- c. *çi*⁴⁴ *khɯ*³³*ni*⁵⁵
 この犬
 「この犬」

名詞が修飾語となる際、斜格形をとることがある。その際、修飾名詞の最終音節が 35 調となる。一般に、修飾名詞の斜格形は義務的であるとまでは言えない。(299a)を見ると、*ʃao*³³*li*³⁵ の最終音節はやはり 35 調となっており、被修飾名詞である *a*⁵⁵*mo*⁴⁴ を修飾している。

一方、人称代名詞が修飾名詞となる場合は、基本的に斜格形となる。斜格形は各人称・数によって異なるため、詳細は 2.3.1 の表 2.3 (p. 41) を参照されたい。(299b)を見ると、人称代名詞が被修飾名詞の前に置かれ、斜格形を取っていることが分かる。

指示詞にも斜格形が存在するが、修飾する際には、斜格形にする必要はない。一般に、(299c) のように、被修飾名詞に前に置くだけでよい。

以上が修飾名詞の基本的特徴であるが、若干の注意点がある。それは主名詞(被修飾名詞)が親族名詞であるときである。

修飾名詞が固有名詞で、主名詞が「おばさん」などの親族名詞であるとき、修飾名詞が斜格形か否かで意味が異なる。

- (300) a. *ʃao*³³*ʃaŋ*⁵⁵ *a*⁵⁵*ji*⁴⁴
 チャンさん おばさん
 「チャンおばさん」

- b. *ʃao*³³*ʃaŋ*³⁵ *a*⁵⁵*ji*⁴⁴
 チャンさん.OBL おばさん
 「チャンさんのおばさん」

(300a) は両名詞が修飾・被修飾の関係に解釈されない。いわば、一つの呼称として用いられている。このとき、前部要素である「チャンさん」は斜格形を取らない。

一方、(300b) は修飾・被修飾の関係に解釈される。このとき、修飾名詞である「チャンさん」は斜格形を取り、主名詞である「おばさん」を修飾している。

また、修飾名詞が代名詞で、主名詞が「母」などの接頭辞 *a-* で始まる親族名詞であるとき、代名詞が斜格形を取らず、かつ接頭辞 *a-* が脱落することも多い。

- (301) a. $\eta\text{ɔ}^{35}$ $\text{a}^{55}\text{pu}^{44}$ $\sim \eta\text{ɔ}^{33}\text{pu}^{55}$ b. nə^{35} $\text{a}^{55}\text{mo}^{44}$ $\sim \text{nə}^{33}\text{mo}^{55}$
 1SG.OBL 父 私の父 2SG.OBL 母 あなたの母
 「私の父」 「あなたの母」

(301)の各例の後半は修飾・被修飾の関係を内在しつつも、前半の分析的な例と異なり、全体としては一語と解釈した方が適切である。

6.2.2 形容詞

形容詞が名詞を修飾する際は 4.1.2.1.1 (p. 98) で上述したように、形容詞が主名詞に対して後置される。

- (302) a. $\text{kə}^{55}\text{tə}^{44}$ $\text{a}^{33}\text{ŋ}^{55}$ 「赤い服」 b. $\text{a}^{33}\text{pjo}^{55}$ $\text{a}^{33}\text{ji}^{55}$ 「新しい本」
 服 赤い 本 新しい

形容詞は語根が動詞であると 4.1.1.1 (p. 94) で述べた。そのため、否定辞がついた形式は動詞複合形式と考えられる。よって形容詞の否定形は関係節標識 *-mɣ* を伴って、名詞を修飾する。ただし形容詞の否定形は通常の関係節 (6.2.3, p. 138) のように前置修飾のみならず、後置修飾も可能である。

- (303) a. $\text{a}^{33}\text{tsu}^{55}$ $\text{ma}^{33}\text{-mjo}^{55}\text{-mɣ}^{55}$ $\text{thə}^{55}\text{-tə}^{42}$. 「背が高くない木は伐るな。」
 木 NEG-高い-REL PROH-伐る
 b. $\text{ma}^{33}\text{-mjo}^{55}\text{-mɣ}^{55}$ $\text{a}^{33}\text{tsu}^{55}$ $\text{thə}^{55}\text{-tə}^{42}$.
 NEG-高い-REL 木 PROH-伐る
- (304) a. $\text{mi}^{55}\text{sə}^{42}$ $\text{ma}^{55}\text{-tha}^{44}\text{-mɣ}^{44}$ $\text{thə}^{33}\text{-joŋ}^{35}$. 「鋭くないナイフは使うな。」
 ナイフ NEG-鋭い-REL PROH-使う
 b. $\text{ma}^{55}\text{-tha}^{44}\text{-mɣ}^{44}$ $\text{mi}^{55}\text{sə}^{42}$ $\text{thə}^{33}\text{-joŋ}^{35}$.
 NEG-鋭い-REL ナイフ PROH-使う

(303), (304) ともに形容詞の否定形による名詞修飾の例である。いずれも修飾部を *italic* で示している。それぞれ $\text{la}^{55}\text{mjo}^{42}$ 「高い」、 $\text{a}^{33}\text{tha}^{55}$ 「鋭い」という形容詞から派生されている。両例とも修飾部が前置されても後置されてもよい。

6.2.3 関係節

チノ語において名詞修飾を行う節は関係節と考えられる。関係節による名詞修飾のモデルは表 6.2 のように表すことができる。

表 6.2 に示すように、関係節が主名詞に先行する場合と後続する場合の2パターンがある。しかし、基本的には先行する語順が取られ、後続する場合の語順は先行する場合とは何らかの意味的な違いを表しうると考えられる。チノ語の関係節は以下の例で示すように、節内で主語・目的語に相当する名詞を修飾することができるほか、場所名詞なども修飾することができる。

表 6.2: 関係節による名詞修飾

[節- mɿ ~- mɛ] 主名詞 or 主名詞 [節- mɿ ~- mɛ]
--

6.2.3.1 用法

本節では関係節の用法を具体的に見ていく。以下の各小節で挙げられる例では主名詞を *slant* 体で、関係節は [] を用いて表す。

6.2.3.1.1 主語

関係節内で主語に相当する例から見ていく。

- (305) a. [çi³⁵ lo⁴⁴-n³³ to⁴⁴-**mɿ**⁴⁴] mɾo³³ tɕhe³⁵ kho⁵⁵ mo⁴⁴-ma⁵⁵, khɿ⁴⁴ mo³³-ŋu⁵⁵-a⁴⁴=ɿ⁵⁵
 こ ずっと-いる-REL ムラチエ.OBL 妻-PL あれ NEG-COP-PART=EMPH
 zo⁵⁵ ku⁵⁵ a⁵⁵ lai⁵⁵.
 子供 ばかり

「ここに長い間座っていたムラチエの妻たちを除けば、子供たちばかりだ。」

- b. a⁵⁵ mo⁴⁴ [ma³³-ŋo⁵⁵-to⁴⁴-**mɿ**⁴⁴] zo⁵⁵ ku⁵⁵ jo³³-mɿ³⁵.
 母 NEG-聞く-EXP-REL 子供 叱る-PAST

「母は言うことを聞かぬ子供を叱った。」

- c. khɿ⁴⁴ [ko⁵⁵ to⁴⁴ a³³-ŋɿ⁵⁵ to⁴⁴-**mɿ**⁴⁴] mɿ⁵⁵ kho⁵⁵, no⁴² tɕu⁵⁵-to⁴⁴-la⁴²?
 あれ 服 赤い 着る-REL 若い女性 2SG.NOM 憶えている-EXP-Q

「あの赤い服を着た女の子を憶えているか?」

(305) はいずれも関係節内では主語に相当する名詞句を修飾する例である。(305a) の mɾo³³ tɕhe³⁵ kho⁵⁵ mo⁴⁴ 「ムラチエの妻」、(305b) の zo⁵⁵ ku⁵⁵ 「子供」、(305c) の mɿ⁵⁵ kho⁵⁵ 「若い女性」はすべて関係節内では主語に相当する。これらの名詞を関係節内部の主語位置に置けば、文を形成することができる。

(305a) では実際に修飾しているのは mɾo³³ tɕhe³⁵ kho⁵⁵ mo⁴⁴ であり、mɾo³³ tɕhe³⁵ kho⁵⁵ mo⁴⁴-ma⁵⁵ 全体を修飾してはいない。このように主名詞句全体ではなく、主名詞句の主要部のみを修飾するという現象も存在する。ただし、(305a) のような例は実際には少ない。

6.2.3.1.2 目的語

次に関係節内で目的語に相当する例を見ておこう。

- (306) a. [tjao³⁵-ju⁴⁴-**mɿ**⁴⁴] ŋo⁵⁵ tɿ⁵⁵ to³³ mo³³ a³³-ŋi⁵⁵. 「釣ってきた魚はみな小さい。」
 釣る+とる-REL 魚 みな 小さい

- b. [nə⁴² ju³³-mɿ⁵⁵] kɔ⁵⁵ tɕ⁴⁴ a³³ thi⁵⁵ ʃu⁵⁵-tsɿ⁴².
2SG.NOM 買う-REL 服 少し 長い-すぎる

「あなたが買った服は長すぎる。」

- c. a⁵⁵ mɛ⁵⁵ [a⁵⁵ mɔ⁴⁴ tʃha³⁵-mɿ⁵⁵] nɛ⁵⁵+sɔ⁵⁵-nɔɛ⁴⁴.
ご飯 母 ゆでる-REL におう+心地よい-SFP

「母が炊いたご飯はいい匂いがする。」

(306) はいずれも関係節内では目的語に相当する名詞句を修飾する例である。(306a)の ɲɔ⁵⁵ ts⁵⁵ 「魚」、(306b)の kɔ⁵⁵ tɕ⁴⁴ 「服」、(306c)の a⁵⁵ mɛ⁵⁵ 「ご飯」はすべて関係節内の目的語に相当する。これらの名詞を関係節内部の目的語位置に置けば、文を形成することができる。

6.2.3.1.3 場所

次に関係節内で場所に相当する例を見ておこう。

- (307) a. lə³³=jə⁵⁵ [nə⁴² ɕa³³-mɿ⁵⁵] tʃai³⁵ tsɿɲ³⁵ so³³ thi³³-ɕo³⁵=lɔɛ⁴⁴ xɔ⁵⁵ pɔ⁴⁴
あれ=より 2SG.NOM 住む-REL 財政所 1-CL.OBL=も 声

mɔ⁵⁵-kjo⁵⁵-a⁵⁵.
NEG-聞こえる-PART

「あなたがいる財政所では人っ子一人の声も聞こえない。」

- b. [pa⁵⁵ kha⁴² lɛ⁴⁴-mɿ⁴⁴] jo⁵⁵ kho⁵⁵ ʃu³³-mɿ⁴²-a⁴⁴-nɔɛ⁴⁴.
パカー 行く-REL 道 修理する-PAST-PFT-SFP

「パカーにつながる道はすでに直っている。」⁶

- c. si⁵⁵ tʃhuan⁴⁴ [ɲi⁵⁵ ju⁴⁴ tʃɔ⁴⁴-mɿ⁴⁴]-a⁴⁴ lao³³ pɔ³⁵ ʃiɲ⁵⁵-ma⁵⁵ lɔ⁵⁵
四川 2PL.NOM いる-REL-VA 庶民-PL あそこ

thi⁵⁵ ma⁵⁵ tʃɔ³³=ɛ⁴⁴-pɔ⁴².
多い いる=POSS-RCF

「あなたがいた四川では庶民がたくさんいるのでしょう。」

(307) はいずれも関係節内では場所に相当する名詞句を修飾する例である。(307a)の tʃai³⁵ tsɿɲ³⁵ so³³ 「財政所」、(307b)の jo⁵⁵ kho⁵⁵ 「道」、(307c)の si⁵⁵ tʃhuan⁴⁴ 「四川」はいずれも関係節の場所を示している。しかし、関係節内の項構造とは無関係であるため、主語や目的語のように関係節内部に主名詞を置いて文を形成できるとは限らない⁷。

⁶ ʃu³³ 「修理する」は漢語 xiū からの借用語である。そのため、[ɕiu⁵⁵] と発音されることが多い。

⁷ 例えば、(307b)は関係節内部に主名詞を戻しても文は形成できない。

6.2.3.1.4 その他

続いてその他の名詞句が主名詞となっている場合を見ていく。

- (308) a. [ŋo⁴² xe³³-mɿ⁵⁵] ʃo³³ khr⁵⁵ me³³-se⁵⁵-lu⁴²-a⁴⁴.
1SG.NOM 立つ-REL 足 疲れている-死ぬほど-くる-PFT

「私は立っていたので足が極めて疲れた。」

- b. [a⁵⁵pu⁴⁴+a⁵⁵mo⁴⁴ ʃi³⁵-mɿ⁵⁵] a⁵⁵ŋ⁴⁴=lɔ⁴⁴ mo³³-m⁵⁵-a⁴⁴.
父+母 死ぬ-REL 日=も NEG-要る-PART

「両親が死んだ日も (妻を) 娶ることはできない。」

- c. tsi³³ tai³⁵ [ki⁵⁵ŋo⁵⁵ krɔ³³-me⁵⁵] thi⁵⁵-lɔ⁵⁵ tʃa³⁵.
カセットテープ チノ 歌う-REL 1-CL ある

「チノ族が歌った (ものを録音した) カセットテープが一つある。」

(308) はいずれもその他の名詞句が主名詞となっている例である。これらの例では主名詞を関係節内部においてもいずれも文を成立させることはできない。

(308a) は主名詞である ʃo³³khi⁵⁵ 「足」は関係節内の動詞 xe³³ 「立つ」と意味的な関連はあるが、「足が立つ」もしくは「足を立たせる」などの文を関係節内で作ることはできない。そのため、この場合の主名詞は関係節に対して主語や目的語の役割を果たさない。また場所とも考えられない。よって、主名詞は意味的関連においてのみ関係節とつながっている。

(308b) の主名詞はともに時間を表す名詞である。(308b) の a⁵⁵ŋ⁴⁴ の「日」は関係節に対して主語・目的語の役割を果たさない。よって、これらの主名詞も意味的関連においてのみ関係節とつながっている。

(308c) の主名詞はともに tsi³³tai³⁵ 「カセットテープ」である。しかし、この主名詞も (308c) の関係節内動詞 krɔ³³ 「歌う」に対して主語・目的語の役割を果たさない。やはり意味的関連においてのみ関係節とつながっている。

6.2.3.2 語順と意味

チノ語の関係節は基本的に主名詞に先行する。しかし、一方で主名詞に後接する場合も少なくない。

まずは 6.2.3.1 (p. 139) で見た、関係節が主名詞に先行する例から見ていく。

- (309) a. a⁵⁵mo⁴⁴ [ma³³-ŋo⁵⁵-tɔ⁴⁴-mɿ⁴⁴] zo⁵⁵ku⁵⁵ ʃo³³-mɿ³⁵.
母 NEG-聞く-EXP-REL 子供 叱る-PAST

「母は言うことを聞かぬ子供を叱った。」 (= 305b)

- b. [tʃao³⁵+ju⁴⁴-mɿ⁴⁴] ŋo⁵⁵ts⁵⁵ tɔ³³mo³³ a³³ni⁵⁵.
釣る+とる-REL 魚 みな 小さい

「釣ってきた魚はみな小さい。」 (= 306a)

- c. $l\theta^{33}=j\theta^{55}$ [$n\theta^{42}$ $\text{ca}^{33}\text{-m}\text{x}^{55}$] $t\text{shar}^{35}t\text{sv}\eta^{35}so^{33}thi^{33}\text{-}\text{co}^{35}=l\alpha^{44}$ $x\theta^{55}p\theta^{44}$
 あれ=PART 2SG.NOM 住む-REL 財政所 1-CL.OBL=PART 声
 $m\theta^{55}\text{-}kjo^{55}\text{-}a^{55}$.
 NEG-聞こえる-PART

「あなたがいる財政所では人っ子一人の声も聞こえない。」 (= 307a)

(309)の例はいずれも関係節よりも主名詞のほうがより重要な意味を担っている。すなわち、(309a)では「子供」、(309b)では「魚」、(309c)では「財政所」がそれぞれの関係節、すなわち「言うことを聞かぬ」、「釣ってきた」、「あなたがいる」よりも重要である。つまりは、関係節は主名詞の内容を限定する修飾語句に過ぎない。話者が問題としているのは、関係節よりもむしろ主名詞であると考えられる。

それでは次に関係節が主名詞に後続する場合を見ていく。

- (310) a. $a^{55}me^{55}$ [$a^{55}m\theta^{44}t\eta a^{35}\text{-m}\text{x}^{55}$] $n\theta^{55}+s\theta^{55}\text{-}n\alpha^{44}$.
 ご飯 母 ゆでる-REL におう+心地よい-SFP

「母が炊いたご飯はいい匂いがする。」 (= 306c)

- b. $sr^{55}t\eta huan^{44}$ [$n\eta^{55}ju^{44}t\eta\theta^{44}\text{-m}\text{x}^{44}$]- a^{44} $lao^{33}p\theta^{35}j\eta\eta^{55}\text{-}ma^{55}$ $l\theta^{55}$ $thi^{55}ma^{55}$
 四川 2PL.NOM いる-REL-VA 庶民-PL あそこ 多い
 $t\eta\theta^{33}=\epsilon^{44}\text{-}p\theta^{42}$.
 いる=POSS-RCF

「あなたがいた四川では庶民がたくさんいるのでしょう。」 (= 307c)

- c. $tsr^{33}tar^{35}$ [$ki^{55}n\theta^{55}kr\theta^{33}\text{-}me^{55}$] $thi^{55}\text{-}l\alpha^{55}$ $t\eta a^{35}$.
 カセットテープ チノ 歌う-REL 1-CL ある

「チノ族が歌った(ものを録音した)カセットテープが一つある。」 (= 308e)

(310)はいずれも主名詞よりも関係節の方が重要な意味を担っている。(310a)は「ご飯とはいってもとりわけ母が炊いたご飯がよい匂いがする」ということを表している。「母が炊く」ということが「ご飯」そのものよりも重要である。また(310b)では「四川とはいってもあなたがいたところには庶民がたくさんいたのではないか」ということであり、「四川全体」ということよりもむしろ「あなたがいた場所」ということに力点が置かれている。更に(310c)では「テープとはいってもチノ族が歌ったのが一つある」ということである。「テープの中でもとりわけチノ族の歌ったもの」ということに力点が置かれている。

一般に関係節は主名詞を限定する目的があると考えられるため、チノ語の関係節の基本語順は主名詞に先行するタイプであると言える。一方、関係節が主名詞に後続するタイプでもやはり主名詞の内容を限定しているとは言えるので

あるが、関係節の方が主名詞よりも重要な情報を担う点で関係節先行タイプと異なる。関係節自身は *-mx ~-me* で標示されているが、これは名詞化標識である *-mx ~-me* と同一である。よって、特に関係節後続タイプでは関係節自身が名詞節の一種となっていると考え、先行する主名詞と同格の振る舞いを見せていると捉えられる。

6.3 疑問表現

本節では文におけるモダリティーの中でも疑問について記述していく。疑問表現には直接疑問文と間接疑問文の2種類がある。チノ語では両者において形式的な違いが明確に現れる。以下、それぞれの記述を行う。

6.3.1 直接疑問文

直接疑問文は大きく発話者が聞き手に対して回答を要求する場合(以下、「回答要求」⁸⁾)と発話者自身が自問するような場面の2種に分けられる。

6.3.1.1 回答要求

回答要求の場面では発話者が聞き手に対している。回答要求の文では *-la⁴²*, *-na⁴²*, *-a⁴⁴*, \emptyset の文末助詞が現れる。ここでは疑問文の種類別に前三者の生起条件を見ていく⁹⁾。

-la⁴² と *-na⁴²* にはそれ自体に意味・機能的な差異がある。結論を先んずれば、*-la⁴²* は文全体の命題が疑問の焦点となるのに対し、*-na⁴²* は文の命題の一部が疑問の焦点となる。

以下の例では *-la⁴²*, *-na⁴²*, *-a⁴⁴* の話者による文法性判断を示していく。

6.3.1.1.1 真偽疑問文

真偽疑問文では疑問文末助詞として *-la⁴²* と *-na⁴²* の2つが用いられる。真偽疑問文におけるこれらの疑問文末助詞の性格を表6.3にまとめておこう。

表 6.3: 真偽疑問文における *-la⁴²* と *-na⁴²* の性格

疑問文末助詞	後接できる述語	疑問の焦点
<i>-la⁴²</i>	名詞述語・動詞述語の両方	文全体の真偽
<i>-na⁴²</i>	動詞述語のみ	文の一部

⁸⁾ 日本の国語学・日本語学で従来呼ばれている「回答要求」という用語から倣ったものであるが、用語の使用法でやや違いがあるかもしれない。

⁹⁾ \emptyset は積極的に用いられる事例は極めて限定的である。現時点では「論理的主語が「誰」で名詞述語文のとき」(林 2007)などに生起するが、その厳密な生起条件は未だに不明な点が多い。今後の課題としたい。

ただ、真偽疑問文でも疑問文末助詞が用いられないこともある。聞き手の発言に対して聞き返す場合や、話し手が文脈上聞き手に対して回答を要求する場合などである。疑問文は元来、聞き手に対して情報を求める文であると考えられる。そのため、「疑問文は『回答を要求する文』である」と考えれば、当然-0も生じうると述べねばならない。

答え B: (-ŋa⁴² の場合の答え) a⁵⁵to⁵⁵. 「短いほう。」 / jo⁵⁵ʃw⁵⁵. 「長いほう。」
 短い 長い

(312)の問いかけの部分は真偽疑問文である。このとき、答えA、すなわち -la⁴² を用いたときの答えは「要る」もしくは「要らない」となる。一方、答えB、すなわち -ṇa⁴² を用いたときの答えは「短い」あるいは「長い」となる。これを整理すると、-la⁴² を用いた真偽疑問文では「(聞き手が) 薪を必要としているか否か」が問われているに対し、-ṇa⁴² を用いた真偽疑問文では話し手はすでに聞き手が薪を必要としていることを前提として、更に「必要としているのは長い薪なのか、短い薪なのか」が問われている。このように -la⁴²/ -ṇa⁴² で疑問の内容が異なっていることが分かる。

これもやはりそれぞれがどの部分を疑問の焦点として捉えているかという問題と関わっている。-la⁴²は「聞き手が薪を必要としているか否か」という、いわば文全体の内容を疑問の焦点として捉えている。一方で、-na⁴²は-la⁴²で問われる内容はすでに前提として捉え、更に「必要としている薪の長短」を問題としている。つまり、-na⁴²は文内容の一部に疑問の焦点を当てていると言えよう。

■ 聞き手に対する質問の姿勢

-la⁴²/ -ŋa⁴²の両方が真偽疑問文でともに形式的に文法的になる事例で聞き手に対する質問の姿勢が関連することがある。それは主に進行相のときに可能である。以下、具体例として(313)を見る。

- (313) a. a⁵⁵mo⁴⁴ji³³tʃho⁵⁵tʃhi⁵⁵-ko⁴⁴-la⁴²/_{-na}⁴²? 「お母さんは水浴びしているの?」
 母 水 洗う-PROG-Q
- b. fao³³li³³ja³³pja³³ja³³-ko⁵⁵-la⁴²/_{-na}⁴²? 「李さんは箒を掃いているの?」
 李さん 箒 掃く-PROG-Q

これらの例はいずれも形式上 $-la^{42}/-ŋa^{42}$ の両方が可能である。しかし、どちらの疑問文末助詞が生起するかによって、その論理的主語の解釈に相違点が出る。

すなわち、(313)では $-la^{42}$ を使えば、「お母さん」「李さん」は(今ここにはいない)「話し手でも聞き手でもない第三者」の解釈であるが、 $-na^{42}$ を使えば、「お母さん」「李さん」は(今日の前にいる、あるいは声の聞こえる範囲にいる)「聞き手」を指す。これらをまとめれば、 $-na^{42}$ を用いた場合、「お母さん」「李さん」が2人称的(呼格的)に用いられていると言えるだろう。特に進行相の場合の $-na^{42}$ はテノ語話者の意見を整理すると、話し手が動作・行為の行われている現場にいることを表しているようだ。

6.3.1.1.2 疑問語疑問文

疑問語疑問文では疑問文末助詞として $-na^{42}$ と $-a^{44}$ の2つが用いられる。疑問語疑問文におけるこれらの疑問文末助詞の性格を表 6.4 にまとめておこう。

表 6.4: 疑問語疑問文における $-na^{42}$ と $-a^{44}$ の性格

疑問文末助詞	後接できる述語
$-na^{42}$	動詞述語のみ
$-a^{44}$	名詞述語のみ

疑問語疑問文は基本的に疑問語自体に疑問の焦点が当たることから、 $-na^{42}$ と $-a^{44}$ には真偽疑問文で見たような疑問の焦点による違いはないと考えられる。問題は後接できる述語である。 $-na^{42}$ は真偽疑問文で見たように、動詞述語の直後しか後接できない。一方、 $-a^{44}$ は名詞述語の直後に後接する。

以下では具体例を見ていこう。

■ 動詞述語

疑問語疑問文で動詞述語が直前に存在している場合、疑問文末助詞として $-na^{42}$ が生起しうる。(314)を見てみよう。

- (314) a. $kh\partial^{33}su^{55} to^{33}th\partial^{35}+to^{44}+l\partial^{42} * -la^{42} / -na^{42} / * -a^{44}?$
 誰 起きる+出る+来る-Q

「誰が起きましたか?」

- b. $n\partial^{42} \eta u^{55}k\partial^{44} m^{33} * -la^{42} / -na^{42} / * -a^{44}?$
 2SG.NOM 何 要る-Q

「あなたは何が要りますか?」

(314)の例はいずれも疑問語疑問文で、かつ動詞述語が文末に現れている。このとき、疑問文末助詞としては $-na^{42}$ のみが生起しうる。表記はしていないが、疑問語疑問文では疑問語が存在するため、疑問文末助詞が生起しない場合も非常に多い。

■ 名詞述語

次に名詞述語に疑問文末助詞が後接する場合について見ておく。

- (315) a. $ni^{55}ju^{55} tso^{33}=j\partial^{55} t\partial^{33}x\partial^{44} le^{44}-m\partial^{44} \eta u^{55}pu^{44} ko\eta^{33}li^{33} * -la^{42} / * -na^{42} / -a^{44}?$
 2PL 家から 景洪 行く-NML どのくらいキロメートルQ

「あなたの家から景洪に行くには何キロメートルありますか?」

- b. $n\partial^{42} khun^{33}mi\eta^{33} \eta u^{55}m\partial^{44} le^{35}-m\partial^{42} * -la^{42} / * -na^{42} / -a^{44}?$
 2SG.NOM 昆明 いつ 行く-PAST-Q

「あなたはいつ昆明に行ったの?」

- c. $n\partial^{42} \eta\partial^{35} phru^{33} tse^{35}-mj\partial^{42}, khao^{42} ph\partial^{44}-me^{42} * -la^{42} / * -na^{42} / -a^{44}?$
 2SG.NOM 1SG.OBL お金 借りる-して 何 買う-FUT-Q

「あなたは私からお金を借りて、何を買うの?」

- d. nə⁴² ɲw⁵⁵mə⁴⁴ zə³³-jə⁵⁵*-la⁴²/ *-na⁴²/ -a⁴⁴?
 2SG.NOM いつ 歩く-OBLIG-Q

「あなたはいつ行かねばならないの?」

(315)の例はいずれも疑問文末助詞が名詞述語に後接した場合である。(315a)では名詞句に直接後接したことが明白である。他の例は一見不明確に見えるが、過去接尾辞 -mɿ, 未来接尾辞 -me, 義務を表す接尾辞 -jə はいずれも直前の要素を名詞化する機能を有する。そのため、疑問文末助詞も -na⁴²を許さず、-a⁴⁴のみが容認される。

6.3.1.1.3 選択疑問文

選択疑問文の例を見ていこう。(316)を見られたい。

- (316) a. nə⁴² le⁵⁵-la⁴²/ -na⁴², ma⁵⁵-le⁵⁵-la⁴²/ -na⁴²?
 2SG.NOM 行く-Q NEG-行く-Q
 「あなたは行くの、それとも行かないの?」
- b. nə⁴² le⁵⁵-la⁴²/ -na⁴², khɿ⁴² le⁵⁵-la⁴²/ -na⁴²?
 2SG.NOM 行く-Q 3SG.NOM 行く-Q
 「あなたが行くの、それとも彼/彼女が行くの?」
- c. pwi⁵⁵na⁴⁴jə⁵⁵=jə⁴⁴ khœ⁴²*-la⁴²/ -na⁴², va⁵⁵jə⁴⁴=jə⁴⁴ khœ⁴²*-la⁴²/ -na⁴²?
 牛肉=から 作る-Q 豚肉=から 作る-Q
 「(今日の料理は)牛肉から作るの、それとも豚肉から作るの?」

(316)の例はそれぞれ選択肢の内容が異なっている。(316a)では「行く」もしくは「行かない」という述語の部分が、(316b)では「あなた」もしくは「彼/彼女」という主語の部分が、(316c)では「牛肉から」もしくは「豚肉から」という斜格名詞句の部分が選択肢となっている。これら選択肢の内容によって、生起しうる疑問文末助詞も異なる。

チノ語では通常「それとも」にあたるような接続語は用いず¹¹、選択肢となる句(あるいは節)を並列することで選択疑問文を形成する。

¹¹ 蓋(1986)では以下の i) のように ku⁵⁵khœ⁴²vu⁴²lœ³³「それとも」が選択疑問文で用いられている。

i) nə⁴² ɕə⁴²svɛ³³ lə⁴², ku⁵⁵khœ⁴²vu⁴²lœ³³ lə⁴²si³³ lə⁴²?
 2SG 学生 Q それとも 先生 Q

「あなたは学生ですか、それとも先生ですか?」(蓋 1986: 118, 太字による強調は筆者)しかし、筆者の調査で得たデータではこのような語は用いられなかった。

選択疑問文では基本的に疑問語は現れない。それゆえに、形式的には疑問語疑問文よりも真偽疑問文により近いと言える。それゆえに、(316a, b) では $-la^{42}$ の生起が可能である。しかし、(316c) では不可能である。

一方で、(316) のいずれの例でも $-na^{42}$ が生起できる。これはどういうことであろうか。

選択疑問文では話し手が聞き手に対して解答の候補を提示する方法を取っている。このとき、疑問文全体が表す命題の真偽よりもむしろ、疑問文の一部(つまり、解答の候補)に焦点を当てていると考えられよう。そのため、選択疑問文では(316)の各例のように $-na^{42}$ が生起しようと考えられる。

また(316c)では(316a, b)とは異なり、 $-na^{42}$ のみが生起可能で、 $-la^{42}$ が生起不可能であるのは以下の理由からであろう。すなわち、(316a, b)では見方によっては、2つの真偽疑問文の並列と見ることもできるが、(316c)では1つの選択疑問文の中で後置詞 $=jo^{44}$ を含む斜格名詞句が選択肢として置かれ、その斜格名詞句に焦点を当てていると通常考えられるからである。話し手の提示する解答の候補が斜格名詞句であることにより、2つの真偽疑問文の並列ではなく、1つの選択疑問文としての解釈が優先されるということである。

以上のように考えれば、 $-la^{42}$ と $-na^{42}$ の生起条件は疑問の焦点に対する解釈にもっぱら依拠しており、形式的な生起条件は不要なのではないかとの疑問が生じるかもしれない。しかし、表 6.4 で見たとおり、 $-na^{42}$ は動詞述語にしか後接できない。よって、たとえ選択疑問文でも、(316b) とほぼ同じ意味である(317)では $-la^{42}$ のみが生起可能である。

- (317) no^{42} $lc^{55}-me^{55}-la^{42}/ *-na^{42}$, khx^{42} $lc^{55}-me^{55}-la^{42}/ *-na^{42}?$
 2SG.NOM 行く-FUT-Q 3SG.NOM 行く-FUT-Q

「あなたが行くの、それとも彼/彼女が行くのか?」

(317)では疑問文末助詞が未来接辞 $-me$ の直後に生起している。3.4.8.2 (p. 85) でふれたように、未来接辞 $-me$ は名詞化の機能を持っている。よって、(317)では $-na^{42}$ は生起できず、 $-la^{42}$ のみが生起する。 $-a^{44}$ が通常ここで問題にならないのは、選択疑問文内に疑問語が現れないためである。

6.3.1.2 自問・不確定ニュアンスの表明

自問ないし不確定ニュアンスの表明には、モーダル助詞 $-jo^{44}$ を文末に置く。5.1.2.2 (p. 121) で述べたように、自問を表す助詞 $-jo^{44}$ は文末で疑問を表す下降イントネーションがかぶさり、 $-jo^{42}$ となることもある。真偽疑問の例を(318)に、疑問語疑問の例を(319)に掲げる。

全体として、自問を表す助詞 $-jo^{44}$ が現れる例は疑問語疑問の場合が多い。(318a)や(319a)のようにコピュラ ηu^{55} との共起も多い。更に、助詞 $-jo^{44}$ の直前は後置詞 $=e^{44}$ で動詞複合形式全体を名詞化していることも少なくない。

- (318) a. $\text{cin}^{33}\text{xon}^{44}=\text{j}\text{ə}^{55}\text{ŋu}^{55}=\text{e}^{44}\text{-j}\text{ə}^{42}?$ 「(その商売は)景洪にあるのじゃないかしら?」
 景洪=より COP=POSS-Q
- b. $\text{l}\text{ə}^{44}\text{khur}^{33}\text{mi}^{55}=\text{l}\text{ə}^{44}\text{n}\text{ə}^{35}\text{lu}^{55}=\text{e}^{44}\text{-j}\text{ə}^{44}?$
 あれ 犬=も 2SG.OBL 吼える=POSS-Q
 「あの犬もあなたに対して吼えるのかしら?」
- (319) a. $\text{a}^{55}\text{n}\text{ə}^{55}+\text{n}\text{ə}^{55}\text{kh}\text{ə}^{33}\text{su}^{55}\text{ŋu}^{55}=\text{e}^{44}\text{-j}\text{ə}^{42}?$ 「彼ら 2 人は誰なのかしら?」
 自分 (3)+2 誰 COP=POSS-Q
- b. $\text{ŋ}\text{ə}^{42}\text{f}\text{i}^{35}+\text{j}\text{a}^{55}\text{-x}\text{ə}^{42}, \text{kha}^{55}\text{e}^{44}\text{t}\text{f}\text{ə}^{55}+\text{kh}\text{ə}^{33}+\text{k}\text{ə}^{33}+\text{l}\text{a}^{33}=\text{e}^{55}\text{-j}\text{ə}^{44}?$
 1SG.NOM 死ぬ+いく-なら どうして 生きる+する+過ぐす+くる=POSS-Q
 「私が死んでしまったら、(彼ら子供たちは) どうして生きていったらいいの
 かしら?」

6.3.2 間接疑問文

「『…』と尋ねた」などの文を表す場合に、チノ語でも直接疑問¹²的な手法と間接疑問的な手法がある。

- (320) a. $\text{kh}\text{v}^{42}\text{ŋ}\text{ə}^{35}\text{'a}^{33}\text{t}\text{f}\text{a}^{55}\text{m}^{33}+\text{t}\text{f}\text{a}^{55}+\text{s}\text{ə}^{35}\text{-}\text{j}\text{ə}^{44}\text{-l}\text{a}^{42}, \text{ŋ}\text{ə}^{33}\text{-m}\text{x}^{35}.$
 3sg.NOM 1sg.OBL 料理 作る+料理する+終わる-PFT-Q 聞く-PAST
 「彼は私に『ご飯を作ったのかい?』と尋ねた。」
- b. $\text{ŋ}\text{ə}^{42}\text{kh}\text{v}^{35}\text{l}\text{ə}^{55}\text{p}\text{ə}^{44}\text{t}\text{sh}\text{i}^{55}\text{m}\text{a}^{33}\text{-t}\text{sh}\text{i}^{55}+\text{l}\text{e}^{44}\text{ŋ}\text{ə}^{33}\text{-m}\text{x}^{35}.$
 1sg.NOM 3sg.OBL 茶 摘む NEG-摘む+行く 聞く-PAST
 「私は彼/彼女にお茶を摘みに行くかどうか聞いた。」

(320a) は被質問者である「私」に対して「ご飯を作りましたか?」と直接疑問的に聞いている。一方、(320b) は「彼/彼女」に対して「お茶を摘みに行くか否か」を間接疑問的に聞いている(間接疑問文は **sans serif** 体で表示している)。それらの違いは疑問文末助詞が現れているか否かである。直接疑問的にある文の中に埋め込まれている場合、単文で問われる直接疑問文と同様、疑問文末助詞((320a)の例では $-\text{la}^{42}$) が現れるが、間接疑問的¹³である場合は、(320b)のように疑問文末助詞が現れず、「動詞語根-**ma**(否定辞)-動詞語根」の形式が用いられる。

すなわち、間接疑問文であるとき、疑問文末助詞を付けると(321b)のように非文となる。

¹²直接疑問が従属節的に埋め込まれている場合、それを *italic* にしている。

¹³現時点でのデータでは直接疑問的なのは質問者あるいは被質問者のいずれかが 1 人称または 2 人称である場合が多く、間接疑問的なのは被質問者あるいは質問内容の当事者が 3 人称である場合が多い。

(321) a. nə⁴² pja⁴² khɿ⁴² ɭ³³ ma³³-ɭ³³. 「彼が来るかどうか言いなさいよ。」
 2sg.NOM 言う 3sg.NOM 来る NEG-来る

b. *nə⁴² pja⁴² khɿ⁴² ɭ³³-la⁴² ma³³-ɭ³³-la⁴².
 2sg.NOM 言う 3sg.NOM 来る-Q NEG-来る-Q

6.4 使役構文

チノ語の使役構文は基本的に動詞複合形式の使役接辞付加という形態的手法か、動詞 m⁵⁵「言う」を用いる統語的(迂言的)手法のいずれかを用いる。

ここでは構文上の問題を中心に、形態的手法・統語的手法のそれぞれについて使役の種類や強制度などの点から記述していきたい。

6.4.1 使役接辞を用いる形態的手法

第3章の冒頭、表 3.1 (p. 63) で示した動詞複合形式によると、以下の使役接辞が使役構文に関与する。

(322) pi-, khø-, ja-, m-, -vi

(322)の概観については、それぞれ 3.2.3.1 (p. 67), 3.2.3.2 (p. 67), 3.2.3.3 (p. 68), 3.2.4.1 (p. 69), 3.4.5.1 (p. 81) で述べた。

動詞複合形式において使役接辞が前接ないし後接した形式を「使役動詞」と呼ぶことにする。

使役動詞は2種類に分かれる。自動詞を含む動詞複合形式に使役接辞が前接ないし後接した使役動詞を「使役自動詞」と呼び、他動詞を含む動詞複合形式に使役接辞が前接ないし後接した使役動詞を「使役他動詞」と呼ぶことにする。

以上の用語を用いれば、使役構文は基本的に以下のような構文パターンを取る。

- | | | | |
|-----|-------|--------|---------------|
| i) | [使役者] | [被使役者] | [使役自動詞] |
| ii) | [使役者] | [被使役者] | [被動者] [使役他動詞] |

(323) a. pe⁵⁵tsi⁴⁴ a⁵⁵lai⁵⁵-mɿ⁴⁴.
 コップ 壊れている-PAST
 「コップが壊れている。」

b. khɿ⁴² pe⁵⁵tsi⁴⁴ m³³-lai⁵⁵-mɿ⁵⁵.
 3SG.NOM コップ CAUS-壊れている-PAST
 「彼はコップを壊した。」

(324) a. ŋɔ⁴² a⁵⁵mɛ⁵⁵ tso⁵⁵. 「私はご飯を食べる。」
 1SG.NOM ご飯 食べる

b. nə⁴² ŋɔ³⁵ a⁵⁵mɛ⁵⁵ tso⁵⁵-vi⁴⁴-mɿ³⁵.
 2SG.NOM 1SG.OBL ご飯 食べる-CAUS-PAST
 「あなたは私にご飯を食べさせた。」

(323a) は通常の事態を表す文であるのに対して、(323b) の述部は (323a) の動詞語根 *lai*⁵⁵ に使役接頭辞 *m-* が付加され、使役動詞化している。加えて使役者項 *khɣ*⁴² 「3SG.NOM」が増加している。同じく、(324a) は通常の事態を表す文であるが、一方 (324b) の述部は (324a) の動詞語根 *tso*⁵⁵ に使役接尾辞 *-vi* が付加され、やはり使役動詞化している。加えて使役者項 *khɣ*⁴² 「3SG.NOM」が増加している。

使役動詞は使役接辞の付いていない段階から 1 項分結合価が増加する。よって、使役自動詞の場合は 2 項動詞に、使役他動詞の場合は通常 3 項動詞となる。

また格体系にも注意しなければならない。使役者は主格で標示され、被使役者および被動者は斜格で標示される。特にこれらの名詞句が代名詞である場合は義務的に標示される。一般名詞である場合は随意的である。

6.4.1.1 使役接辞・使役の種類・強制度

(322) に掲げられた使役接辞は、表 6.5 にまとめられるように、直接使役と間接使役の 2 種類に分類され、かつ被使役者の人間性に応じて、間接使役接辞に連続的な強制度の差違がある。

表 6.5: チノ語使役接辞における強制度

被使役者の人間性	間接使役				直接使役
	容認的	強制的			
[+ human]	-vi<	pi-<	khø-<	ja-	m-
[- human]	-vi<	pi-			m-

m- は直接使役に用いられ、それ以外は間接使役である。被使役者が人間である場合、容認使役としてもっとも使われやすいのが *-vi* であり、*khø-* や *ja-* が用いられると強制使役として解釈される。*khø-* や *ja-* は 3.2.3.2 (p. 67), 3.2.3.3 (p. 68) で述べたように、被使役者が人間ではない場合は用いられない。

表 6.5 を裏付ける例をいくつか挙げる。まず、(325) のように *m-* は直接使役に、*-vi* は間接使役にそれぞれ解釈される。

- (325) a. *jao*³³*li*³³ *ŋa*³³*zo*⁵⁵ *pre*³⁵+*ja*⁵⁵-*vi*⁴⁴-*my*³⁵. 「李さんは鳥を飛ばせた。」 (= 148a)
 李さん 鳥 飛ば+行く-CAUS-PAST

- b. *jao*³³*li*³³ *ŋa*³³*zo*⁵⁵ *m*³³-*pre*³⁵+*ja*⁴²-*my*³⁵. 「李さんは鳥を飛ばした。」
 李さん 鳥 CAUS-飛ば+行く-PAST

(325a) は「被使役者である鳥の意志¹⁴に応じて、飛ばせる」という意味が含まれているが、(325b) は「李さん」が「鳥」を自由に飛ばせたのではなく、「李さ

¹⁴ 鳥に意志があるかどうか、という問題には触れない。鳥が人間から見て自由意志で飛び立つと想定する。

ん」自身が「鳥」を捕まえて、手から離して飛ばせるという直接的行為を意味している。

また強制度の連続性は (326) によって説明される。

(326) a. a⁵⁵mo⁴⁴ nə³⁵ khɿ³⁵ le³³-vi⁵⁵-nœ⁴⁴. 「母はあなたにそこへ行かせた。」
母 2SG.OBL あそこ 行く-CAUS-SFP

b. a⁵⁵mo⁴⁴ nə³⁵ khɿ³⁵ pi⁵⁵-le⁴⁴-nœ⁴⁴. 「母はあなたにそこへ行かせた。」
母 2SG.OBL あそこ CAUS-go-SFP

c. a⁵⁵mo⁴⁴ nə³⁵ khɿ³⁵ khø³³-le³³-nœ⁴⁴.
母親 2SG.OBL あそこ CAUS-行く-SFP

「母は(無理やりに)あなたにそこに行かせた。」

d. a⁵⁵mo⁴⁴ nə³⁵ khɿ³⁵ ja³⁵-le³³-nœ⁴⁴.
母 2SG.OBL あそこ CAUS-行く-SFP

「母は(無理やりに)あなたにそこに行かせる。」

(326a) は -vi によって、被使役者である「私」の意志を使役者の「あなた」が容認することが表されている。一方、(326c, d) の khø- と ja- は使役者の「母」が無理やりに被使役者の「あなた」の意志を無視して行動を起こさせていることを表している。他方、(326b) の pi- は使役者が被使役者の意志を無視した強制使役の意味にも、被使役者の意志を許可した容認使役の意味にも解釈できる。

また、khø- よりも ja- のほうが強制度がやや強いと考えられる場合がある。

(327) lao³³si⁵⁵ ŋo³⁵=va⁵⁵ tso³⁵ khø³³-/*ja³⁵-jue³³ji³⁵-mɿ³⁵.
先生 1SG.OBL=VA 家.OBL CAUS-勉強する-PAST

「先生は私に家で勉強させた。」

(327) では khø- は容認されるが、ja- は非文となる。khø- の場合は、基本的に使役者が被使役者に対して口頭で命令し、それを強制的に実行させるという意味が含意されていればよいと考えられる。そのため、被使役者が家に帰り、勉強する状態を強制的に作り出せばよい。ただ、話者によれば、ja- の場合は事情がやや異なる。ja- の場合は被使役者による行為の実現が使役者の目の前でなされる必要がある。そのため、(327) のように、使役者の目の届かないところで行為が実行される場合は ja- を用いることはできない。実際には多くの例で khø- と ja- は交替しうるほど、用法上類似しているが、(327) のような例があることから表 6.5 のような順序を設定している。

6.4.1.2 二重使役

チノ語では形式的に使役接辞が同一の動詞複合形式内に2個共起する二重使役がある。形式的に二重使役であるのは「直接使役 & 間接使役」および「間接使役 & 間接使役」の2種類である。直接使役は *m-* のみであるため、同一動詞複合形式内で2個以上現れることができない。そのため、「直接使役 & 直接使役」からなる二重使役はない。

また「間接使役 & 間接使役」は「直接使役 & 間接使役」の場合と異なり、意味的には二重使役を表さない。間接使役1個分の意味しか表さない。この点は注意が必要である。

6.4.1.2.1 直接使役 & 間接使役

まず、直接使役 & 間接使役の組み合わせによる二重使役を見ていく。これは形式どおりに意味の上でも二重使役を表す。以下の例を見よう。

■ *m-* & *-vi*

- (328) a. $\eta\phi^{42}$ ϕi^{44} $a^{55}ke^{55}$ $m^{33}\phi i^{35}n\phi e^{44}$.
1SG.NOM これ おかず CAUS-辛い-SFP

「私はこのおかずを辛くした。」

- b. $a^{55}m\phi^{44}$ $\eta\phi^{35}$ ϕi^{44} $a^{55}ke^{55}$ $m^{33}\phi i^{35}vi^{33}n\phi e^{44}$.
母 1SG.OBL これ おかず CAUS-辛い-CAUS-SFP

「母は私にこのおかずを辛くさせた。」

(328a) は直接使役の接辞が1つしか生起していない例である。これに更に間接使役の接辞 *-vi* が加わった例が (328b) である。(328b) は統語的にも使役者である「母」の項を文中に許し、意味的にも二重使役を表す。

以下では、同一の動詞に対して、直接使役と間接使役が共起した例を掲げる。

■ *pi-* & *m-*

- (329) a. $\eta\phi^{42}$ $ja\phi^{33}li^{33}$ $tjen^{55}to\eta^{44}$ $pi^{55}m^{33}pr\phi^{35}m\phi^{35}$.
1SG.NOM 李さん 電灯 CAUS-CAUS-明るい-PAST

「私は李さんに電灯をつけさせた。」

- b. $\eta\phi^{42}$ $zo^{55}ku^{55}$ $pei^{55}tsi^{44}$ $pi^{33}m^{33}lai^{35}m\phi^{35}$.
1SG.NOM 子供 コップ CAUS-CAUS-壊れている-PAST

「私は子供にコップを壊させた。」

■ *kh\phi-* & *m-/ja-* & *m-*

- (330) a. $\eta\phi^{42}$ $ja\phi^{33}li^{33}$ $tjen^{55}to\eta^{44}$ $kh\phi^{33}/ja^{35}m^{33}pr\phi^{35}m\phi^{35}$.
1SG.NOM 李さん 電灯 CAUS-CAUS-明るい-PAST

「私は李さんに(無理やりに)電灯をつけさせた。」

- b. ɲɔ⁴² zo⁵⁵ku⁵⁵ pei⁵⁵tsi⁴⁴ kho³³-/ja³⁵-m³³-lai³⁵-mɣ³⁵.
 1SG.NOM 子供 コップ CAUS-CAUS-壊れている-PAST

「私は子供に(無理やりに)コップを壊させた。」

(329), (330) ともに同一の動詞に対して、直接使役の接辞 m- と間接使役の接辞が共起した例である。いずれの例でも、「電灯が明るい」あるいは「コップが壊れる」という状態を「李さん」ないし「子供」が作り出すわけだが、それをすべて「私」が命令しているという状況を表している。以上から、直接使役と間接使役の接辞が共起した場合、統語的・意味的にも二重使役を表しうる。

6.4.1.2.2 間接使役 & 間接使役

間接使役の接辞が2つ生じた場合、形態的には二重使役であるように見える。しかし、統語的・意味的には二重使役ではなく、間接使役の接辞が1つだけ生じた場合と同じである。

■ pi- & -vi

- (331) a. ɲɔ³⁵ pja³³-vi⁴⁴. b. ɲɔ³⁵ pi⁵⁵-pja³³-vi⁴⁴.
 1SG.OBL 話す-CAUS 1SG.OBL CAUS-speak -CAUS

「私に話させてくれ!」

- (332) a. khɣ⁴² ʃao³³li³³ ku⁵⁵-pi⁴⁴-lao³³toŋ⁵⁵+le⁴⁴-ɔ⁴⁴-nœ⁴⁴.
 3SG.NOM 李さん また-CAUS-働く+行く-PFT-SFP
 b. khɣ⁴² ʃao³³li³³ ku⁵⁵-pi⁴⁴-lao³³toŋ⁵⁵+le⁴⁴-vi⁴⁴-ɔ⁴⁴-nœ⁴⁴.
 3SG.NOM 李さん また-CAUS-働く+行く-CAUS-PFT-SFP

「彼/彼女は李さんにまた働きに行かせた。」

(331a) および (332a) はともに使役接辞が動詞複合形式内に1つしか生起していない。一方、(331b) および (332b) は2つ生起している。

(331b) は (331a) に比べ、間接使役を表す pi- が加わっているが、統語的・意味的には (331a) と何ら差異がない。この事例ではかなり容認性が高い使役となり、被使役者である「私」の意志が意味にかなり反映している。

(332b) は (332a) に比べ、間接使役を表す -vi が加わっているが、これも先ほどの例と同じく、統語的・意味的には (332a) と何ら差異がない。

このように間接使役を表す pi- と -vi が同一の動詞複合形式内で共起しても差異がないことがわかる。そして以下の2つの間接使役接辞からなる二重使役も同様の現象を示している。(333, 334) を見られたい。

■ khø- & -vi

- (333) a. a⁵⁵mo⁴⁴ ɲo³⁵ a⁵⁵ko⁴⁴ pho⁴⁴-mjə⁴², khjə⁵⁵lo⁵⁵ khø³³-te⁴⁴-mɿ³⁵.
 母 1SG.OBL 扉 開ける-して 中 CAUS-見る-PAST
- b. a⁵⁵mo⁴⁴ ɲo³⁵ a⁵⁵ko⁴⁴ pho⁴⁴-mjə⁴², khjə⁵⁵lo⁵⁵ khø³³-te⁴⁴-vi³³-mɿ³⁵.
 母 1SG.OBL 扉 開ける-して 中 CAUS-見る-CAUS-PAST
- 「母は私に(無理やりに)ドアを開けて、中を覗かせた。」

■ ja- & -vi

- (334) a. ɲo⁴² zo⁵⁵ku⁵⁵ mɛ⁵⁵po⁴² ja³⁵-tʃhu³³-mɿ⁵⁵.
 1SG.NOM 子供 乳房 CAUS-吸う-PAST
- b. ɲo⁴² zo⁵⁵ku⁵⁵ mɛ⁵⁵po⁴² ja³⁵-tʃhu³³-vi³³-mɿ⁵⁵.
 1SG.NOM 子供 乳房 CAUS-吸う-CAUS-PAST
- 「私は子供に(無理やりに)乳を吸わせた。」

(333)も(334)もそれぞれ、khø-あるいはja-と-viからなる二重使役の例である。(333b)は(333a)に比べ、間接使役接辞-viが加わっている。(334b)も同様に(334a)に比べ、-viが加わっている。しかし、統語的・意味的には(333b)および(334b)はそれぞれ(333a)および(334a)と何ら差異がない。

このように間接使役の接辞が形態的に同一の動詞複合形式に二重に生起しても、統語的・意味的には二重使役を示すことはない。ただし、使役の解釈はより強制度の強い使役接辞が優先的に解釈される。

直接使役と間接使役からなる二重使役の場合は、それぞれ異なった使役のタイプが同一の動詞複合形式に存在するため、統語的・意味的に二重使役を示すのだろう。一方で、2つの間接使役からなる二重使役の場合は、それぞれの使役の強制度に差異はあるものの、使役のタイプが同一であるため、たとえ同一の動詞複合形式内に二重に生起しても、統語的・意味的には二重使役を示すことにならないと考えられる。

6.4.1.3 使役接辞の機能する領域

5.2 (p. 123)で見たように、チノ語には接続助詞がある。接続助詞は(335)に見るように、基本的に前件に後接し、従属節を形成する。

- (335) khɿ⁴² pa³³tʃu⁵⁵ ko³³+və³³-mjə⁴², o³³+le⁴⁴.
 3SG.NOM 蜘蛛の巣 取る+捨てる-して 入る+行く
- 「彼/彼女は蜘蛛の巣を払って、(部屋に)入る。」

通常、接続助詞は節末であることを表示するため、従属節の動詞複合形式内に存在する接辞類の機能する領域は、従属節を超えて主節に及ぶことはない。しかし、反対に主節の動詞複合形式内に存在する接辞類の機能する領域が、従属節に及ぶことがある。(336)の例を見てみよう。

- (336) a. $a^{55}mo^{44} pa^{33}tju^{55} ko^{33}+və^{33}-\emptyset/-vi^{33}-mjə^{42}, o^{33}+le^{33}-vi^{33}-mɣ^{35}$.
 母 蜘蛛の巣 取る+捨てる-CAUS-して 入る+行く-CAUS-PAST
 「母は(彼/彼女に)蜘蛛の巣を払って、(部屋に)入らせた」
- b. $a^{55}mo^{44} pa^{33}tju^{55} \emptyset-/ *pi^{33}-ko^{33}+və^{33}-mjə^{42}, pi^{33}-o^{55}+le^{44}-mɣ^{35}$.
 母 蜘蛛の巣 CAUS-取る+捨てる-して CAUS-入る+行く-PAST
 「母は(彼/彼女に)蜘蛛の巣を払って、(部屋に)入らせた」
- c. $a^{55}mo^{44} pa^{33}tju^{55} \emptyset-/ *khə^{33}-/ *ja^{35}-ko^{33}+və^{33}-mjə^{42}, khə^{33}-/ ja^{35}-o^{55}+le^{44}-mɣ^{35}$.
 母 蜘蛛の巣 CAUS-取る+捨てる-して CAUS-入る+行く-PAST
 「母は(彼/彼女に無理やりに)蜘蛛の巣を払って、(部屋に)入らせた」

(336)は(335)に使役接辞を加えたものである。(336)の主節には各種間接使役接辞が生起している。しかし、一方で、使役接辞によって、従属節内での生起状況が異なる。(336a)の従属節では-viが生起しうるが、(336b, c)に見るように他の間接使役接辞では現れることができない。また(336a)の従属節内の-viも生起しなくても、生起した場合と同じ意味である。

このことから基本的に主節に使役接辞が置かれ、従属節と主節の項構造が同一の場合(使役者は「母」で被使役者は「彼/彼女」)、主節の使役接辞の機能する領域が従属節に及んでいると考えられる。ただし、-viのみ、主節同様、従属節に生起しうる。

6.4.2 動詞を用いた統語的手法

使役構文は動詞 m^{55} 「言う」を用いた統語的手法によっても表しえる。この場合は基本的に間接使役しか表さない。構文は以下のとおりである。

[使役者] [被使役者] (=va⁵⁵) [被動者] V=ε m-SFP

構造上、「[使役者] [被使役者] (=va⁵⁵) [被動者] V」は後置詞 =ε⁴⁴ に後接される補文であり、この構文の主節動詞は m^{55} 「言う」である。すなわち、直訳すれば、「[使役者]が[被使役者]に[被動者]をVするように言う」のようになる。

それでは(337)で本構文の具体例を見ておく。

- (337) a. $tʃao^{35}+lɔ^{55}=ε^{44} m^{33}-mε^{35}-nɕε^{44}$.
 撮影する+来る=POSS 言う-PAST-SFP

「(彼/彼女は私に) 来て (写真を) 撮らせた。」

(= [私に写真を] 取りに来いと言った)

- b. $j\epsilon^{55}me^{44}=a^{55}$ $pu^{55}=\epsilon^{44}$ $ku^{55}-m^{33}-no\epsilon^{44}$.
 イエメイ=VA 閉める=POSS また-言う-SFP

「(私は) イエメイにまた扉を閉めさせた。」

- c. $a^{55}tjen^{44}=a^{44}$ $jan^{55}t\epsilon^{44}$ $tjh\epsilon^{33}+phe^{33}=\epsilon^{44}$ $m^{55}-no\epsilon^{44}$.
 アチェン=VA ゴムの木 共に+切る=POSS 言う-SFP

「(私は) アチェンと一緒にゴムの木を切りに行くように言った。」

- d. $le^{33}l^{55}=la^{55}$ $a^{55}tjen^{44}=a^{44}$ $tjen^{35}nao^{44}$ $jue^{35}+le^{44}-mj\epsilon^{42}$ $khv^{33}-ku^{33}$
 レイリー=すなわち アチェン=VA コンピュータ 学ぶ+行く-して あれ-CL
 $pan^{35}=\epsilon^{44}$ $m^{33}-me^{35}$.
 する=POSS 言う-PAST

「レイリーはアチェンにコンピュータを勉強してそのようなの(ネットカフェ)を開くように言った。」

(337)での使役者は、(337a)では「彼/彼女」、(337b, c)では「私」、(337d)では「レイリー」になっている。次に(337)での被使役者は、(337a)では「私」、(337b)では「イエメイ」、(337c, d)では「アチェン」となっている。自然発話では上記の例のように使役者が文中に現れることは少ない。(337a)では被使役者も文中に現れていない。

(337a)を取り上げて説明しておく。(337a)の使役者は「彼/彼女」、被使役者は「私」、被動者は「写真」である。直訳としては「彼/彼女は私に、(こちらに)来て写真を撮るように言った」となる。

この構文における使役は極めて間接的で、使役の強制度も非常に低い。よって、被使役者の行為が実際に行われたか否かは含意されない。例えば、(337d)で被使役者である「アチェン」は「コンピュータを勉強してネットカフェを開く」という行為を行うよう、使役者の「レイリー」から言われたが、実際には「コンピュータを勉強せず、ネットカフェも開かない」状態が存在してもよい。

6.5 受益構文

6.5.1 受益構文の基本的構造

第3章の冒頭、表3.1 (p. 63)で示した動詞複合形式によると、受益を表す接尾辞 $-m\epsilon$ が受益構文に関与する。

受益接辞 $-m\epsilon$ が付加された動詞を「受益動詞」と呼ぶことにする。チノ語の受益構文は以下のような構造を基本的にとる。

[動作主]_{NOM} [受益者]_{OBL} (=va⁵⁵) [被動者]_{OBL} [受益他動詞]

受益接辞は基本的に他動詞語根にのみ付加される。これまでのデータでは自動詞に付加された例は見つかっていない。また他動詞でも語根の段階で3項を要求すると見なされるもの(例えば pi⁵⁵「与える」など)にも受益接辞は基本的に付加されない。

受益接辞は語根の段階から1項分結合価を増やす。上述したように、基本的に2項動詞の語根に付加されるので、受益他動詞は3項動詞となっている。

以下で具体例について見ていこう。

- (338) a. khɿ⁴² a⁵⁵ʃɔ⁵⁵ tshu⁵⁵ lə⁵⁵-nɛ⁴⁴. 「彼/彼女は肌に薬を塗る。」¹⁵
3SG.NOM 肌 薬 塗る-SFP

- b. ji⁵⁵sɿŋ⁵⁵ khɿ³⁵ a⁵⁵ʃɔ⁵⁵ tshu⁵⁵ lə⁵⁵-mɛ³³.
医者 3SG.OBL 肌 薬 塗る-BEN

「医者は彼/彼女に薬を塗ってあげる。」

- (339) a. zɔ⁵⁵ku⁵⁵ vu⁵⁵tsho⁵⁵ tsho⁵⁵. 「子供は帽子をかぶる。」
子供 帽子 着る

- b. ɲɔ⁴² zɔ⁵⁵ku⁵⁵ vu⁵⁵tsho⁵⁵ tsho⁵⁵-mɛ³⁵.
1SG.NOM 子供 帽子 着る-BEN

「私は子供に帽子をかぶせてあげる。」

(338a)は受益接辞が付加される以前の段階の例で、(338b)は受益接辞が付加された段階の例である。(338a)では「薬を塗る」行為は彼/彼女によってなされるが、(338b)では彼/彼女の代わりに医者が「薬を塗る」行為を行う。

この現象は同様に(339)でも見られる。(339a)は受益接辞が付加される以前の段階の例で、(339b)は受益接辞が付加された段階の例である。(339a)では「帽子をかぶる」行為を子供自身が行うが、(339b)では「帽子をかぶせる」行為が私が行う。子供側から見れば、「(私に)帽子をかぶせてもらう」こととなる。

(338b)ないし(339b)は(338a)ないし(339a)に比べて動詞複合形式の結合価が1項分増加していることが見て取れよう。

以下では受益構文の例を若干並べておく。

- (340) a. ɲɔ⁴² nɛ³⁵ a⁵⁵xɔ³³ mi⁵⁵ kjao³⁵-mɛ⁵⁵.
1SG.NOM 2SG.OBL 漢語 教える-BEN

「私はあなたに漢語を教えてあげる。」

¹⁵この例の a⁵⁵ʃɔ⁵⁵「肌」は無標名詞句であるため、項構造に組み込まれるように見える。しかし、これは場所を表す名詞句であり、lə⁵⁵「塗る」の目的語とは解釈されないと考えられる。

- b. ɲo⁴² ɲo⁵⁵ɲo⁵⁵ sɔ³³-mə⁵⁵ sɔ³³-mə⁴² phɔ³³-mə³⁵-nɛ⁴⁴.
1SG.NOM 魚 3-CL 3-CL.OBL 買う-BEN-SFP

「私は(毎日猫に)3匹の魚を買ってあげている。」

- c. nɛ³⁵ tʃe⁴⁴tʃe⁴⁴ ʃi³³mɛ⁵⁵ ku³³-mə⁵⁵-mɛ⁵⁵ mɔ³⁵-a⁴⁴?
2SG.OBL 父 昨晚 持つ-BEN-PAST NEG.COP-PART

「あなたのお父さんは昨晚これを買ってあげたのではなかったのか?」¹⁶

- d. lə⁵⁵ ʃi⁵⁵ʃi⁵⁵ ʃi³³kuan³³ khɛ³³-mə⁵⁵, mi⁵⁵tso⁵⁵ la³³-mə⁵⁵-lur³³-mɛ⁵⁵-je⁴⁴.
あそこ 昔 レストラン 建てる-BEN 薪 運ぶ-BEN-来る-PAST-EUP

「昔あそこのレストランを建てて、薪を運んであげた。」

- e. khə³³mjo⁵⁵ pɔ³³pu⁵⁵-ma⁴² lə³³-xuan³⁵+tshi³³-mə⁴²-la⁴²?
それから 布団-PL.OBL いつも-換える+洗う-BEN-Q

「それから、(彼女はあなたのために)布団を交換して洗ってくれるのか?」

(340)の例はいずれも受益接辞 *-mə* が動詞複合形式に付加されていることが見て取れよう。(340a, b, c)のように、他言語でよく3項動詞として取り扱われている動詞でも、チノ語においては受益接辞を用いて表現している場合が多い。これらはチノ語においては3項動詞ではなく、2項動詞であると考えられる。また通常動詞連続構造に対しては動詞連続の末尾に *-mə* が後接する。しかし、動詞連続構造の末尾の動詞が *le*⁵⁵「行く」や *lur*⁵⁵「来る」等の移動動詞であるとき、(340d)の後半の動詞複合形式のように、その直前に *-mə* が現れる。

6.5.2 使役接辞との共起

第3章の冒頭、表3.1(p. 63)で見たように、受益接辞と使役接辞は異なるスロットに入る。よって、この2つは同一の動詞複合形式内で共起しうる。次の(341)を見てみよう。

- (341) a. ɲo⁴² nɔ³⁵ a³³pjo⁵⁵ pjo⁵⁵-mə⁴⁴=ɛ⁴⁴.
1SG.NOM 2SG.OBL 手紙 書く-BEN=POSS

「私があなたに替わって手紙を書いてあげよう。」

- b. a⁵⁵mɔ⁴⁴ ɲo³⁵ nɔ³⁵ a³³pjo⁵⁵ pjo⁵⁵-mə⁴⁴-vi⁴⁴-mɔ³⁵.
母 1SG.OBL 2SG.OBL 手紙 書く-BEN-CAUS-PAST

「母は私にあなたに替わって手紙を書かせた。」

¹⁶この例では *ʃe*⁴⁴*ʃe*⁴⁴ は「父」を意味する。これは漢語からの借用語であるが、固有語の *a*⁵⁵*pu*⁴⁴ に替わって自然発話で用いられることも多い。

(341a)は受益接辞が動詞複合形式内に存在している。使役接辞は生起していない。一方、(341b)は(341a)に使役接辞が加わったタイプである。(341a)では動作者は「私」、受益者は「あなた」、被動者は「手紙」となり、3項動詞となっている。これに対して、(341b)では更に使役者「母」が項解釈上許容され、動詞複合形式は4項述語となっている。

(341b)のように、他の使役接辞も受益接辞と共に起しうる(342)。

- (342) a. $\eta\alpha^{42}$ $\text{ja}\alpha^{33}\text{li}^{33}$ $\eta\alpha^{35}$ $\text{zo}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{ph}\alpha^{33}\text{-m}\alpha^{55}\text{-lei}^{44}\text{-vi}^{44}\text{-m}\gamma^{35}$.
 1SG.NOM 李さん 1SG.OBL 子供 扉 開ける-BEN-いく-CAUS-PAST
 「私は李さんに(私の)子供のために扉を開けさせた。」
- b. $\eta\alpha^{42}$ $\text{ja}\alpha^{33}\text{li}^{33}$ $\eta\alpha^{35}$ $\text{zo}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{pi}^{33}\text{-ph}\alpha^{33}\text{-m}\alpha^{55}\text{-lei}^{44}\text{-m}\gamma^{35}$.
 1SG.NOM 李さん 1SG.OBL 子供 扉 CAUS-開ける-BEN-いく-PAST
 「私は李さん(私の)子供のために扉を開けさせた。」
- c. $\eta\alpha^{42}$ $\text{ja}\alpha^{33}\text{li}^{33}$ $\eta\alpha^{35}$ $\text{zo}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{kho}^{33}\text{-/ja}^{35}\text{-ph}\alpha^{33}\text{-m}\alpha^{55}\text{-lei}^{44}\text{-m}\gamma^{35}$.
 1SG.NOM 李さん 1SG.OBL 子供 扉 CAUS-開ける-BEN-いく-PAST
 「私は(無理やりに)李さん(私の)子供のために扉を開けさせた。」

(342)によると、間接使役接辞はいずれも受益接辞と共に起しえ、また意味的には、使役の強制度を除けば、同一の事象構造を有していることが分かる。ただし、より一般的で自然なのは(341b)や(342a)で見るとような-viとの共起である。他の使役は一般的に強制度が高い。それに対して-viは基本的に容認使役を表し、受益の意味と比較的適合しやすいと考えられよう。

また例はきわめて少ないが、受益接辞は直接使役を表す m- と共に起しうる。

- (343) thi^{55} $\text{m}^{33}\text{-mr}\alpha^{55}\text{-m}\alpha^{55}=\epsilon^{55}\text{-tu}^{42}$, $\text{a}^{33}\text{p}^{55}=\text{la}^{44}$. 「舌で少し舐めなさい。」
 少し CAUS-舐める-BEN=POSS-HORT 舌=で

(343)は動詞複合形式内に使役接辞と受益接辞が確かに共に起しているが、両者の意味合いはむしろ表面的には現れず、一般的な他動詞構文の解釈が強い。

6.6 動詞連続構造

本節ではチノ語の動詞連続構造の特徴と接続助詞 -mja⁴² との関係について記述する。

6.6.1 動詞連続構造の位置

第3章の表3.1(p. 63)で示した動詞複合形式の中で、動詞連続は表3.1の動詞部([VERB])の部分に複数個の動詞が連なる構造をとる。動詞連続構造のモデル

表 6.7: 自動詞+自動詞の組み合わせ

意味的分類	主語の同一性	各動詞の関係	動作/状態実現の順序
意志+意志	同一	「目的-移動」	多くは $V_2 \rightarrow V_1$
意志+無意志 1 類	異なる	「原因-結果」	$V_1 \rightarrow V_2$
意志+無意志 2 類	同一	「動作-様態」	$V_1 \rightarrow V_2$
無意志+意志	同一	「様態-動作」	同時
無意志+無意志	同一	「存在-存在の状態」	同時, $V_1 \rightarrow V_2$
		「原因-結果」	

「(雨が降っているからすそが濡れないように)ズボン(のすそ)を巻き上げなさい。さもないと、しばらくしたら濡れてしまうよ。」

c. [意志 + 無意志] $\text{tho}^{55} + \text{pr}\ddot{\text{e}}^{55} - \text{no}\ddot{\text{e}}^{44}$.

起きる+怠けている-SFP

「(彼女は)だらだらと起きた。」 (= 起きてだらだらとした)

d. [無意志 + 意志] $\text{kh}\ddot{\text{y}}^{42} \quad \text{t}\ddot{\text{f}}\ddot{\text{e}}^{55} + \text{n}^{33} \text{ko}^{55} - \text{no}\ddot{\text{e}}^{44}$. 「あそこで(いて)遊んでいる。」

3SG.NOM いる+遊ぶ-SFP

e. [無意志 + 無意志] $\text{kh}\ddot{\text{y}}^{33} - \text{lo}^{33} - \text{a}^{55} \quad \text{t}\ddot{\text{f}}\ddot{\text{x}}^{33} - \text{t}\ddot{\text{f}}\ddot{\text{e}}^{55} + \text{so}^{55} - \text{a}^{44}$.

それ-ように-PART もっと-いる+心地よい-PFT

「そのような感じはもっと住み心地がいい。」

まず(345)を「意志/無意志型動詞」という観点から見てみると、(345a)は「意志+意志」、(345b, c)は「意志+無意志」、(345d)は「無意志+意志」、(345e)は「無意志+無意志」の組み合わせであることが分かる。

代表的な事例を意志/無意志の区分を用いて整理し直せば、表 6.7 のようにまとめられる。主語は一般的に各動詞語根で共有される。例えば(345a)であれば、それぞれの動詞の主語は $\text{kh}\ddot{\text{y}}^{42}$ 「3SG.NOM」で同一である。それぞれの動詞語根の意味に応じて各動詞連続の意味的關係は様々である。動作状態の実現の順序は図像的¹⁹か、同時であると考えられるが、「意志 + 意志」の組み合わせの時、動詞連続の末尾の動詞が移動系動詞である場合、 $V_2 \rightarrow V_1$ となることが多い。

¹⁹ 「無意志+意志」のタイプでも自然現象動詞が V_1 に来ることもある。この場合は動作の実現順序は $V_1 \rightarrow V_2$ と考えられるだろう。

i) $\text{ci}^{44} \quad \text{a}^{33} \text{mo}^{55} = \text{lo}\ddot{\text{e}}^{44} \quad \text{phj}\ddot{\text{e}}^{44} + \text{ta}^{33} + \text{la}^{33} = \text{e}^{55} - \text{m}\ddot{\text{y}}^{55}$.

これほこり=も 吹く+上る+く=POSS-PAST

「このほこりも(風によって)吹き上ったものよ。」

6.6.2.1.2 自動詞+他動詞

次に自動詞+他動詞の連続についてみてみよう。

- (346) a. [意志+意志] $\text{pu}^{55}\text{tʰe}^{55}\text{-ma}^{55}\text{te}^{33}\text{jə}^{33}\text{mɔ}^{35}\text{-a}^{44}$, $\text{mɔ}^{55}\text{-lao}^{33}\text{ton}^{55}\text{+tso}^{33}\text{-khju}^{55}\text{-a}^{44}$.
 タイ族-PL 田畑 NEG.COP-PFT NEG-働く+食べる-AUX-PFT

「タイ族は田畑でなければ、働いて食べられない。」

- b. [無意志+意志] $\text{jo}^{33}\text{ma}^{55}\text{tʰo}^{33}\text{+n}^{55}\text{-mjə}^{42}$, $\text{xə}^{55}\text{tʰo}^{55}\text{tʃə}^{33}\text{+tʃu}^{55}\text{-ko}^{44}\text{-a}^{44}$.
 3PL.NOM うずくまる+いる-して 野菜 いる+摘む-PROG-PFT

「彼らはうずくまって野菜を摘んでいた。」

まず(346)を「意志/無意志型動詞」という観点から見てみると、(346a)は「意志+意志」、(346b)は「無意志+意志」の組み合わせであることが分かる。理論的には知覚動詞など、「無意志」動詞でも他動詞ということはあるが、この組み合わせ上、「意志+無意志」型として用いられている例をいまだ発見していない。

代表的な事例を意志/無意志の区分を用いて整理し直せば、表6.8のようにまとめられる。例外²⁰もあるが、主語は一般的に各動詞語根で共有される。例えば(346a)であれば、それぞれの動詞の主語は $\text{pu}^{55}\text{tʰe}^{55}\text{-ma}^{55}$ 「タイ族-PL」で同一である。「意志+意志」型の動詞連続の意味的關係は「方法-目的」であることが多い一方、「無意志+意志」型の動詞連続は「様態-動作」、「原因-結果」の意味的關係となることが多い。また動作状態の実現の順序は図像的か、同時であると考えられる。

6.6.2.1.3 他動詞+他動詞

続いて「他動詞+他動詞」の連続を見てみよう。

- (347) a. [意志+意志] $\text{xo}^{33}\text{tʃha}^{42}\text{tʃu}^{55}\text{+se}^{42}\text{-a}^{44}\text{-ne}^{44}$. 「ねずみを殴り殺した。」
 ねずみ.OBL 殴る+殺す-PFT-SFP

²⁰ 「無意志+意志」型でも各動詞の主語が異なると考えられる例がある。

i) kha^{42} , $\text{mi}^{55}\text{pu}^{55}\text{tʃu}^{55}\text{+tʃha}^{42}\text{-me}^{44}$. 「あれまあ、たけのこを一緒に煮ちゃった。」
 あれまあ たけのこ いる+煮る-PAST

(i)は「いる+煮る」の組み合わせである。(346b)との違いは、同じ「いる」を表す動詞でも tʃu^{42} であるということである。各々の関係は、「いる」の意味が明確に出ているわけではないので、その意味の組み合わせに対する解釈は難しいが、「(動作対象の) 様態-動作」と考えられるかもしれない。それぞれの動詞の主語は同一ではなく、 V_1 の主語は V_2 の目的語(「たけのこ」)となっている点に注目すべきである。動作の実現の順番は同時的である。このパターンは現在のところこの例しか見つかっていない。この tʃu^{55} は元来 tʃu^{42} 「養う」という他動詞であり、その自動詞的用法であるとも考えられる。もしそれが正しいとすると、「養う+煮る」の他動詞+他動詞(意志+意志)型の動詞連続と考えられ、主語も同一であると捉えられる。

表 6.8: 自動詞+他動詞の組み合わせ

意味的分類	主語の同一性	各動詞の関係	動作/状態実現の順序
意志+意志	同一	「方法-目的」	$V_1 \rightarrow V_2$
無意志+意志	同一	「様態-動作」、「原因-結果」	同時、 $V_1 \rightarrow V_2$

表 6.9: 他動詞+他動詞の組み合わせ

意味的分類	主語の同一性	各動詞の関係	動作/状態実現の順序
意志+意志	同一	多様	$V_1 \rightarrow V_2$
意志+無意志	同一	「動作-結果」	$V_1 \rightarrow V_2$

- b. [意志 + 意志] a⁵⁵kəu⁵⁵ thi⁵⁵ma⁴⁴, mɛ³³tu⁵⁵-ma⁵⁵ khao⁴²=ɣ⁵⁵ ʃɔ³³+la⁵⁵+lu⁵⁵=ɛ⁴⁴-jɔ⁴⁴.
 もの 多い とうもろこし-PL 何=EMPH 探す+運ぶ+来る=POSS-PART

「とうもろこしとかのものが多くて、何を持ってきたのか分からないくらいだわ。」

- c. [意志 + 無意志] a⁵⁵xo⁴⁴-ma⁵⁵ kho³³jin³³ ma³³-ŋɔ⁵⁵+su⁵⁵-khju⁴².
 漢族-PL なまり NEG-聴く+分かる-AUX

「漢族はなまりが分からない。」 (= 漢族はなまりを聴いても分からない)

まず(347)を「意志/無意志型動詞」という観点から見ると、(347a, b)は「意志+意志」、(347c)は「意志+無意志」の組み合わせであることが分かる。(347c)を「意志+無意志」型と見ているのは、「分かる」を無意志型の他動詞であると考えからである。一般的に他動詞のほとんどは意志型であるため、無意志型の動詞との組み合わせを見つけることはかなり難しい。現在のところ、「無意志+意志」「無意志+無意志」のパターンは見つかっていない。

代表的な事例を意志/無意志の区分を用いて整理し直せば、表 6.9 のようにまとめられる。主語と目的語は一般的に各動詞語根で共有される。例えば(347a)であれば、各動詞の主語は明示的ではないが、ŋɔ⁴²「1SG.NOM」、目的語は xo³³tʃha⁴²「ねずみ.OBL」で同一である。各動詞語根の意味に応じて各動詞連続の意味的關係は様々であるが、「意志 + 無意志」型ではほぼ「動作-結果」の意味的關係となる。また動作状態の実現の順序は基本的に図像的である。

6.6.2.1.4 他動詞+自動詞

最後に他動詞+自動詞の組み合わせについて見ておこう。

- (348) a. [意志 + 意志] khə³³mɛ⁵⁵ khɔ³³phɔ⁵⁵-ma⁵⁵ thi⁵⁵-ɕo⁴⁴ thi⁵⁵-ɕo⁴⁴=ɛ⁴⁴
 それから 男-PL 1-CL 1-CL=POSS

表 6.10: 他動詞+自動詞の組み合わせ

意味的分類	主語の同一性	各動詞の関係	動作/状態実現の順序
意志+意志	同一	「様態-移動」、「目的-移動」	$V_1 \rightarrow V_2, V_2 \rightarrow V_1$
意志+無意志	異なる	「原因-結果」	$V_1 \rightarrow V_2$

po³³+kha³³-me⁵⁵.
背負う+過ぎる-PAST

「それから男たちが(女の人たちを)一人一人おんぶして(川を)渡った。」

- b. [意志+意志] tfao³⁵+lo⁵⁵=e⁴⁴ m³³-me³⁵-nɛ⁴⁴.
撮る+来る=POSS 話す-PAST-SFP

「(私に写真を)撮りに来いと言った。」 (= 337a)

- c. [意志+無意志] ci³⁵je⁴⁴ khrə³³+thə³⁵-e⁵⁵-mɤ⁵⁵.
ここ 捻る+切れている-PART-COMP

「(紐を)ここで捻りきった。」

- d. [意志+無意志] zo⁵⁵ku⁵⁵, ɲo⁴², mo³⁵, ji³⁵+ja⁵⁵-me⁵⁵
子供 1SG.NOM NEG.COP 死ぬ+行く-FUT

a⁵⁵kjo⁵⁵-a⁴⁴ ɬu⁵⁵+xɤ³⁵-mɤ³⁵=e⁴⁴ kjo⁴⁴-a⁴⁴.
間-PART 引く+大きい-PAST=POSS 思う-PART

「子供(たち)は、私が死んでいなくなってしまう前に、大きくなってほしい。」

まず (348) を「意志/無意志型動詞」という観点から見ると、(348a, b) は「意志+意志」、(348c, d) は「意志+無意志」の組み合わせである。現在のところ、「無意志+意志」「無意志+無意志」のパターンは見つかっていない。

代表的な事例を整理し直せば、表 6.10 のようにまとめられる。「意志+意志」型の主語は共有されるが、「意志+無意志」型の主語は共有されない。例えば、(348c) の V_2 の主語は次の V_1 の目的語である「紐」と共有される。それぞれの動詞語根の意味に応じて各動詞連続の意味的關係は様々であるが、「意志+無意志」型では「原因-結果」の意味的關係となることがほとんどである。また動作状態の実現の順序は基本的に図像的であるが、「意志+意志」型では V_2 に移動系動詞が用いられると $V_2 \rightarrow V_1$ となる場合がある。

6.6.2.2 動詞連続構造の性質

本小節では、6.6.2.1 の各小節内で提示された動詞連続構造のパターンの性質を振り返って検討したい。

6.6.2.2.1 主語の同一性と項の併合

■主語の同一性

6.6.2.1 の各小節における表 6.7 (p. 162), 表 6.8 (p. 164), 表 6.9 (p. 164), 表 6.10 (p. 165) を振り返れば、以下の (349) のパターンで、 V_1 と V_2 の主語が異なる。

(349) a. 自動詞+自動詞の「意志+無意志」型 1 類

b. 他動詞+自動詞の「意志+無意志」型

(349) を見ると、「意志+無意志」のパターンが用いられていると分かる。しかし、自動詞が無意志動詞である「意志+無意志」型が用いられていれば、主語が異なるというわけではない。例えば、自動詞+自動詞の「意志+無意志」型 2 類は主語が同じである。

自動詞でかつ無意志動詞であるグループを振り返れば、自動詞として分類したものには (350) の 2 種類がある。

(350) a. 動詞として通常用いられるもの。 b. 形容詞として通常用いられるもの。

チノ語の形容詞の語根は動詞と考えられる (4.1.1.1, p. 94 参照)。「動詞連続構造」として取り出すと、形容詞の語根部分が用いられていても、動詞連続構造の例として考える必要がある。

そこで主語の同一性において差異のある自動詞+自動詞の「意志+無意志」型を見てみよう。問題は V_2 に置かれている「無意志」動詞である。1 類の (345b) では V_2 は形容詞語根²¹ だけれども、2 類の (345c) のそれは動詞である。

一方で他動詞+自動詞の「意志+無意志」型における自動詞を見ると、やはりこれも形容詞語根である ($a^{33}th\theta^{55}$ 「切れている」、 $la^{55}ju^{44}$ 「大きい」)。

よって、形容詞語根を用いた動詞連続構造は (351) のようにまとめられる。

(351) 形容詞語根を V_2 に用いた動詞連続構造では V_1 と V_2 の主語が異なる。

■項の併合

動詞連続構造といっても各動詞が潜在的に要求する項をすべて要求できるわけではない。多くは項を動詞連続構造内で併合しなければならない。

自動詞+自動詞の動詞連続の場合は、基本的に各動詞の統語的要求項は 1 つであるため、動詞連続構造内で項を 1 つに併合する。すなわち、各動詞の要求項は主語であるが、それぞれが潜在的な要求項として考えられる 2 つの主語を併合して、動詞連続構造としては 1 つの主語を要求する仕組みである。

このことは自動詞+他動詞、他動詞+他動詞、他動詞+自動詞にも当てはまる。例えば、他動詞+他動詞の動詞連続の場合も、動詞連続構造内のいずれかに含ま

²¹(345b) の te 「ぬれている」は元來形容詞 $a^{33}te^{55}$ 「ぬれている」の語根である。

れる他動詞がもつ2つの潜在的な要求項を併合し、動詞連続構造全体でも統語的要求項を2つとしなければならない。

以上をふまえて、統語的要求項を併合するシステムについてモデル化しておこう²²。以下の表で示される S, A, P はそれぞれ、自動詞主語、他動詞主語、他動詞目的語を表す。表 6.11, 表 6.12 は自動詞+自動詞、他動詞+他動詞²³の項併合システムをモデル化している。

表 6.11: 自動詞+自動詞パターンの項併合システム

V ₁	併合可能性	V ₂
<S ₁ >	⇔	<S ₂ >

表 6.12: 他動詞+他動詞パターンの項併合システム

V ₁	併合可能性	V ₂
<A ₁ >	⇔	<A ₂ >
<P ₁ >	⇔	<P ₂ >

もし動詞連続構造内で完全に項が併合されるとすれば、上記に挙げた事例はすべて「複合動詞」として考えても問題はないように思える²⁴。しかし、項が併合できないパターンもある。それは先にも述べた自動詞+自動詞の「意志+無意志」型 1 類の場合である。すなわち、自動詞同士の動詞連続なのに、各動詞

²²加藤 (1998a) ではポー・カレン語において、意志性と項の取り方を基準として、動詞連続における主動詞を決定している。結論として、連結型の動詞連続では、V₁ と V₂ の主語が同じである場合は V₂ が、異なる場合は V₁ が主動詞であるようだ。

²³ 他動詞+他動詞の「意志+意志」型で、各動詞が並列的に置かれている例がある。

i) ja³³mx⁵⁵ kha⁵⁵lo⁴⁴ khœ⁴² ku³³-no⁵⁵+lo⁴²-lai³⁵-jo⁴⁴. khv⁴² tœ³³phw⁵⁵
 今晩 どのように する また+再び+来る -PART-PART 3SG.NOM 酒
 mju⁵⁵+krœ³³-mjo⁴².
 飲む+歌う-して

「今晩はいつ帰ってくるかわからないわ。 [= どのようにして戻ってくるかわからない。] あの子は酒を飲んで歌って(しまうのでしょうか)。」

この場合は「飲む+歌う」の組み合わせである。「飲む」の目的語は「酒」であるが、「歌う」の目的語は(文中に現れていないが)「歌」であるため、各動詞の目的語が併合できない。

このような並列型の動詞連続や各動詞が各々目的語を取りうることもほとんどない。

²⁴近年に見られる日本語の複合動詞の研究では、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分けている(影山 1993, 影山・由本 1997 [該当箇所の執筆は由本氏], 由本 2005)。その両者を区分する基準として、後者は V₁ を「そうする」といった代用表現で置き換えられるのに対し、前者はできない、などが挙げられる。チノ語の場合はそのような形式的基準を設けることが現段階ではできないが、本書で提示したデータのほとんどは影山 (1993) でいうところの「語彙的複合動詞」に近いものだろうと思われる。

影山 (1993) や影山・由本 (1997) の研究では、語彙的複合動詞の形成において、語彙概念構造 (LCS) の合成がなされると考えられている。また影山 (1993) などでは、自動詞を「非対格性の仮説」(Perlmutter & Postal 1984, Burzio 1986 など) に従い、「非能格自動詞」と「非対格自動詞」に分け、日本語の V₁-V₂ の複合動詞において、他動詞と非能格自動詞は結びつきうるが、非対格自動詞は非対格自動詞としか結びつき得ないと述べている。影山 (1993) などはその原因は項構造が他動詞および非能格自動詞と、非対格自動詞では大きく異なるためであるとし、複合動詞における各動詞の結びつきは「他動性調和の原則」と呼ばれるものに従うと述べている。

の主語が異なると考えねばならないパターンである。例えば、(345b)では「歩く」の主語は2人称だが、「ぬれている」の主語は「ズボン」である。

表 6.13: 自動詞 + 自動詞で「意志+無意志」型1類に属する場合の項併合

V ₁	併合可能性	V ₂
<S ₁ >	↔	<S ₂ >
↓		↓
NP _i		NP _j
2SG		「ズボン」

動詞連続構造内で表 6.13 のように項が併合されない場合がある。すなわち、V₁ と V₂ のそれぞれが独自に項を要求している。このようなパターンの存在のため、この構造自体を「動詞連続」と呼ばねばならないだろう。

6.6.2.2.2 各動詞の意味的關係と時間的順序

■ 意味的關係

動詞連続構造の意味的關係だけを拾うと、実に多様である。しかし、そのなかには構造と関係するような意味的關係も見出すことができる。

[原因-結果]

意味的關係において「原因-結果」となるパターンは、以下の通りである。

- (352) a. 自動詞+自動詞の意志+無意志型1類、無意志+無意志型
 b. 自動詞+他動詞の無意志+意志型
 c. 他動詞+他動詞の意志+無意志型 d. 他動詞+自動詞の意志+無意志型

いずれも意志動詞と無意志動詞の組み合わせで成り立っている。よって以下のようにまとめられるだろう。

- (353) 意味的關係において「原因-結果」を表す場合、「意志+無意志」型か、「無意志+意志」型である。前者のほうが相対的には多く見られる。

[様態-動作]

意味的關係において「様態-動作」となるパターンは、以下の通りである。

- (354) a. 自動詞+自動詞の無意志+意志型 b. 自動詞+他動詞の無意志+意志型

いずれも「無意志+意志」型である。しかも V₁ の無意志動詞は tʃo³⁵ 「いる」が用いられていることにも注意しなければならない(6.6.2.1.1 (p. 161), 6.6.2.1.2 (p. 163) 参照)。よって以下のようにまとめられるだろう。

- (355) 意味的關係において「様態-動作」を表す場合、「無意志+意志」型である。

■ 時間的順序

時間的順序を振り返ると、 $V_1 \rightarrow V_2$ 、同時、 $V_2 \rightarrow V_1$ である。そのうち $V_1 \rightarrow V_2$ が最も基本的である。すなわち、基本的には行為(状態実現)の順番どおりに動詞が置かれていると考えてよいだろう。

一方で同時であるときや、 $V_2 \rightarrow V_1$ のときはどのようなときか、見てみよう。

[同時]

時間的順序が同時であると考えられるパターンは以下の通りである。

- (356) a. 自動詞+自動詞の無意志+意志型 b. 自動詞+自動詞の無意志+無意志型
c. 自動詞+他動詞の無意志+意志型

「無意志+意志型」あるいは「無意志+無意志型」である。しかも (345d, e) および (346b) を見ると、無意志動詞に $t\phi^{35}$ 「いる」が用いられていることが特徴的である。

[$V_2 \rightarrow V_1$]

このような $V_2 \rightarrow V_1$ となるのは以下のパターンである。

- (357) a. 自動詞+自動詞の「意志+意志」型 b. 他動詞+自動詞の「意志+意志」型

しかもこれらは V_2 に移動を表す動詞が来るものである。

6.6.2.3 動詞連続構造のまとめ

以上、各小節で述べられた内容をまとめると、チノ語の2つの動詞からなる動詞連続構造の特徴は以下の通りである。

- (358) a. 自動詞/他動詞の基準のほかに、意志/無意志動詞の基準も有効に立てられる。
b. 動詞連続構造内で各動詞の統語的要求項の併合がなされるのが基本であるが、自動詞+自動詞などの一部の例に併合不可能なことがある。
c. 各動詞の意味的關係は多様であるが、「原因-結果」の關係のときは「意志+無意志」型が、「様態-動作」のときは「無意志+意志」型が基本である。
d. 動詞は基本的に図像的に(時間的順序に即した形で)並べられる。しかし、 V_1 に $t\phi^{35}$ 「いる」を用いた場合は「同時」の解釈を、 V_2 に移動系動詞を用いた場合は [$V_2 \rightarrow V_1$] の解釈を生むことがある。

6.6.3 非動詞連続構造—関係明示表現: 接続助詞 -mjə⁴² との関わり—

続いて本節では、動詞間に割り入るように見える接続助詞 -mjə⁴² と動詞連続との関係を考察していく。接続助詞については 5.2 (p. 123) を参照のこと。

6.6.3.1 接続助詞 -mjə⁴² の生起条件

チノ語の動詞連続の大部分において、基本的に行為・状態が動詞の配列順に実現することは先に見た。動詞連続構造が出来事(イベント)の継起関係を示しているならば、継起を表す接続助詞が生起してもよいのではないかと考えられる。

6.6.3.1.1 項の併合が行えない場合

例えば、以下の (359) で挙げた例では接続助詞 -mjə⁴² が生起してもしなくてもよい。しかし、(360) や (361) では -mjə⁴² が生起せねばならない。

(359) a. nə⁴² tsɔ⁵⁵+sɔ³⁵-mjə⁴² /-Ø, le⁴⁴. 「あなたは食べ終わってから行きなさい。」
2SG.NOM 食べる+終える-して 行く

b. nə⁴² tɿ⁴⁴ni⁴⁴-mjə⁴² /-Ø, pja⁴². 「あなたは座って話しなさい。」
2SG.NOM 座る-して 言う

(360) nə⁴² la⁵⁵pu⁴⁴ mɔ⁵⁵-mjə⁴² /*-Ø, ko⁴². 「手を伸ばして取りなさい。」
2SG.NOM 手 伸ばす-して とる

(361) ɲɔ⁴² kɿ⁵⁵thɿ⁵⁵ tɿ⁴⁴ni⁴⁴-mjə⁴² /*-Ø, khɿ³⁵ tɔ⁵⁵-tɔ⁴⁴-mɿ³⁵.
1SG.NOM 椅子 座る-して 3SG.OBL 待つ-EXP-PAST

「私は椅子に座って彼を待っていた。」

(359) と (360), (361) の違いは動詞連続構造における項の併合にある。

6.6.2.2.1 (p. 166) では、一部の例を除いて、基本的に動詞連続構造内で各動詞の統語的要求項の併合が行われる必要があると述べた。

(360) を例にとると、その項の併合は表 6.14 のようになる。

A₁ = A₂ = nə⁴² 「あなた」であるため、項の併合が可能である。しかし P₁ = la⁵⁵pu⁴⁴ 「手」、P₂ = 「(何らかのもの)」であるため、項の併合ができない。そのため、動詞連続構造を使えないのではないだろうか²⁵。

(361) も同様の原因と考えてよい、A₁ = A₂ = ɲɔ⁴² 「私」であり、項の併合が可能である。しかし、P₁ = kɿ⁵⁵thɿ⁵⁵ 「椅子」である一方で P₂ = khɿ³⁵ 「彼」であ

²⁵ 注 23 (p. 167) では他動詞+他動詞のパターンで目的語項の併合ができない場合でも動詞連続構造が用いられている例を見た。注 23 の例と (360) では意味的關係等の点において異なる。

注 23 の例は各動詞が並列的關係にあり、また「飲む」行為と「歌う」行為に一方的な順序關係があるとはっきりしているわけではない。一方で (360) は「手を伸ばす」行為と「なにか物を取る」行為が継起的時間關係にあることは確かである。

表 6.14: (360) の項の併合

V ₁	併合可能性	V ₂
<A ₁ >	\oplus	<A ₂ >
↓		↓
NP _i		NP _i
2SG		2SG
<P ₁ >	\otimes	<P ₂ >
↓		↓
NP _j		NP _k
手		(もの)

り、項の併合ができない²⁶。よって、(360) の例と同様、接続助詞 -mjo⁴² が生起せねばならない。

すなわち、生起条件は (362) のようにまとめられる。

(362) 動詞を配列する際、V₁→V₂ の時間関係がありながら、各動詞間の統語的要求項の併合ができない場合は、接続助詞で全体を複文化しなければならない。

6.6.3.1.2 項の併合が可能な場合

項の併合が可能な場合でも、接続助詞 -mjo⁴² が義務的であるとせざるを得ないときがある。

- (363) a. khɿ⁴² ji³³tʃho⁵⁵ tʃhi⁵⁵+sɔ³⁵-mjo⁴²/ *-∅ ji⁵⁵thɛ³⁵ -mɿ³⁵.
3SG.NOM 水 洗う+終える-して 寝る-PAST

「彼は水浴びしてから寝た。」

- b. khɿ⁴² khan³⁵piŋ³⁵-mjo⁴²/ *-∅ jɔ³⁵+ja³³-mɿ⁴⁴.
3SG.NOM 診てもら-して よい+行く-PAST

「彼は(病気を)診てもらってよかった。」

- c. lɔ⁵⁵po⁴⁴ phao³⁵-mɿ⁵⁵-suw⁴⁴, thi⁵⁵joŋ⁴⁴ phao³⁵-mjo⁴²/ *-∅ tɔ⁴².
茶 入れる-PAST-まだ しばらく 入れる-して 飲む

「お茶は今入れたばかりだから、しばらく蒸らしてから飲みなさいよ。」

²⁶(361) の V₁ である tɿ⁴⁴ni⁴⁴「座る」は自動詞と考えるべきかもしれない。チノ語の場所を表す名詞は後置詞 (=va⁵⁵) を取らずに自動詞の補語として現れることも可能だからである。

たとえば、tɿ⁴⁴ni⁴⁴「座る」を自動詞だと捉えなおしても、(361) は動詞間に名詞句が介在した形式をとっていることで動詞連続としては問題がある。(361) は接続助詞が生起しなければ VP-series (目的語等を伴った動詞句が連続している構造) の形式となる。形式面から見ると、チノ語は verb concatenation (動詞語根がいかなる他の形式をも介さず連続している構造) のタイプのみを許すため、やはり (361) における接続助詞 -mjo⁴² は義務的となる。

(363)の例は、(360)の例と同様、接続助詞 $-mja^{42}$ が義務的となる例である。しかし、(363)は(360)とは異なり、項の併合が可能である。(363a)は $A_1 = A_2 = S_3 = kh\chi^{42}$ 「彼」、(363b)は $S_1 = S_2 = S_3 = kh\chi^{42}$ 「彼」であり、ともに主語項の併合が可能である。(363c)も $A_1 = A_2 = na^{42}$ 「あなた」、 $P_1 = P_2 = lo^{55}po^{44}$ 「茶」であり、主語項および目的語項ともに問題なく併合できている。

これらの例で(364)に述べる意味的条件が関わっていると考えられる。

(364) a. 各動詞の表す各出来事が相互に因果関係や一体性などがなく、独立した事象であること。

b. 各出来事の発生時間が離れていること。

つまり、(363a)であれば、「水浴びする」行為と「寝る」行為は、ともに因果関係や一体性のない、独立した事象であり、発生時間も離れているため、動詞連続構造をとることができなくなっていると考えられる。(363b)の「診てもらふ」と「よくなる」、(363c)の「入れる」と「飲む」も同様の理由による。

この点が通常の動詞連続の例と異なる。例えば、(348a, p. 164)は「おんぶすること」「(川を)渡る」ことは継起的な事象連続であるが、事態発生時間は近い。また(348c, p. 165)は「捻る」と「切れている」ことは因果関係があり、やはり独立していない。

また先に見た(359)の2つの例において、接続助詞の生起可能性が可能/不可能の2パターンあるのは、各動詞の行為が独立した事象であるものの、発生時間が近い²⁷と考えられるためであろう。

6.6.3.2 $-mja^{42}$ と否定辞との共起制限

続いて、以下の例を見てみよう。(365)の文末には動詞語根が連続しているため、形式上「動詞連続構造」を有しているように見える。

(365) a. $kh\chi^{42}$ $a^{55}ko^{44}$ ma^{55} $-so^{35}$ $to^{35}+ja^{33}$ $-m\chi^{44}$.
3SG.NOM 扉 NEG-閉じる 出る+行く-PAST

「彼は扉を閉めずに出て行った。」

²⁷このあたりの解釈は実際には難しい。(359a, p. 170)の場合、「食べ終わる」時間と「行く」時間が離れていると考えられなくもない。その場合は $-mja^{42}$ の生起が好まれよう。 $-mja^{42}$ がない場合は、「あらかじめ聞き手がどこに行く意思表示をしているが、話し手がそれを引き止め、せめてご飯を食べてから行くように」というニュアンスがあると思われる。すなわち、「食べ終わる」時間と「行く」時間がお互いに近い関係にあると考えられる。

一方、後で見る(366b)では $-mja^{42}$ 生起が義務的である。この場合は各出来事は独立した事象を示しているが、発生時間は相互に近いと考えられる。しかしこの例は(359a)と異なり、各出来事はすべて過去に起こっている。この場合は各出来事が独立して起きたことを明示的に表す手法がとられているのかもしれない。チノ語は時制によって動詞連続における各出来事の時象認識が異なると見なせる。

- b. khɿ⁴² tɕe³³phur⁵⁵ la⁵⁵thə⁴² ma³³-tə⁵⁵ mo³⁵-mɿ⁵⁵.
 3SG.NOM 酒 多い NEG-飲む 狂っている-PAST

「彼は酒をあまり飲まないで酔ってしまった。」

しかし、これらの例を「動詞連続」と呼ぶには問題がある。チノ語において否定辞は同一句内すべてをスコープに取るため、これらの例がもし動詞連続であるとする、(365a)では「出て行かなかった」こととなるし、(365b)では「酔わなかった」こととなる。文意と異なってしまう。

よって、これらはすべて否定のスコープを基準に動詞句を分割しなければならない。この分割には一つの理由がある。すなわち、接続助詞 -mjə⁴² は否定と共起できないという制限があるためである。

- (366) a. khɿ⁴² a⁵⁵ko⁴⁴ ma⁵⁵-sɔ³⁵-*mjə⁴²/ -∅ to³⁵+ja³³-mɿ⁴⁴.
 3SG.NOM 扉 NEG-閉じる-して 出る+行く-PAST

「彼は扉を閉めずに出て行った。」 (= 365a)

- b. khɿ⁴² a⁵⁵ko⁴⁴ sɔ³⁵-mjə⁴²/ *-∅ to³⁵+ja³³-mɿ⁴⁴.
 3SG.NOM 扉 閉じる-して 出る+行く-PAST

「彼は扉を閉めて出て行った。」

- c. khɿ⁴² tɕe³³phur⁵⁵ la⁵⁵thə⁴² ma³³-tə⁵⁵-*mjə⁴²/ -∅ mo³⁵-mɿ⁵⁵.
 3SG.NOM 酒 多い NEG-飲む-して 狂っている-PAST

「彼は酒をあまり飲まないで酔ってしまった。」 (= 365b)

- d. khɿ⁴² tɕe³³phur⁵⁵ la⁵⁵thə⁴² tə⁵⁵-mjə⁴²/ *-∅ tə³³+mo⁵⁵-mɿ⁵⁵.
 3SG.NOM 酒 多い 飲む-して 飲む+狂っている-PAST

「彼は酒をたくさん飲んで酔ってしまった。」

(366a) は (366b) と、(366c) は (366d) と対応している。(366b) および (366d) では -mjə⁴² が義務的であるが、一方で (366a) および (366c) では -mjə⁴² が生起することができない。

接続助詞 -mjə⁴² 自体の意味も以上から (367) のように導き出されよう。

- (367) 接続助詞 -mjə⁴² はその生起している節が実現した、あるいは実現するだろうことが確実であることを示す。

おわりに

本書ではチノ語悠楽方言の共時的な文法体系を音韻・形態統語面を中心に可能なかぎり簡潔かつ包括的に記述した。

チノ語悠楽方言の特徴を簡単に要約すれば以下の通りになろう。

- (368) a. $\sigma = C_1C_2V_1V_2(V_3)C_3/T$ を音節構造とする。子音では無声鼻音・側面音の存在がある。普通母音の区別が他の同系言語に比して多い一方で、緊喉母音がない。声調も5種類あり、複雑な声調交替を見せる。
- b. 形態論的には動詞において膠着性の高い動詞複合形式をなす。使役接辞について5種類の区別が見られる。
- c. 基本語順はSOVであるが、言語外的知識ないし文脈が文法関係の解釈に用いられることも多い。
- d. 修飾構造においては、形容詞は主名詞に後続するが、関係節は主名詞に先行する場合も後続する場合もある。
- e. 動詞連続構造を形式的な側面から見ると、自動詞/他動詞の区別と意志動詞/無意志動詞の区別が関係している。動詞語根は基本的に図像的に配置されるが、移動系動詞が動詞連続構造の最終位置に置かれている場合、必ずしも図像性は担保されない。

チノ語のデータはこれまで蓋(1986)の成果を用いて、おもに音韻変化の解明のための比較言語学的研究に少なからず寄与してきた。本書は筆者の現地調査から得たデータを元に、チノ語の全体像をより明確に、詳細に描き出すことを試みた。今後も特に文法現象の諸問題を中心に引き続き調査・研究を進めていきたい。

またチノ語補遠方言の研究はチノ語の歴史ないしチノ族の民族移動の問題を解き明かす上で重要であると考えられるが、いまだ萌芽の域を出ない。今後は補遠方言および同系諸言語の記述研究も同時に進め、チノ語史の全容解明を目指していきたい。

略号一覧

文頭の * は非文であることを、‡ は問題となっている形式を用いれば非文とはならないが、異なる意味になることを示す。また第1章と第2章のそれぞれ一部を除いて、‘-’はその前後のいずれかが接辞類・助詞類であることを、‘+’はその両側が語根であることを、‘=’はその右側が後置詞(前倚辞)であることを示す。‖ はビルマ口語文の文末であることを示す。

ACC	対格	NUM	数詞
ACP	達成	OBL	斜格
ASP	アスペクト	OBLIG	義務・許可
AUX	助動詞	PART	助詞
BEN	受益	PAST	過去
CAUS	使役	PFT	完了
CH	漢語(中国語)	PL	複数
CL	類別詞	POSS	所有
COMP	補文標識	PREF	接頭辞
COP	コピュラ	PROG	進行相
DU	双数	PROH	禁止
EMPH	強調	Q	疑問
EUP	快音調	RCF	確認
EXP	経験	RCP	相互
EXCL	除外形	RDP	重複
FUT	未来	REL	関係節標識
HORT	勧告	SFP	文終止助詞
INCL	包括形	SG	単数
NEG	否定	SUF	接尾辞
NML	名詞化標識	VA	=va ⁵⁵
NOM	主格	XD	西雙版納傣語(タイ・ルー語)

参考文献

[日本語文献] (50 音順)

- 岡野賢二 1994. 「現代口語ビルマ語のいわゆる使役形式-sei.と-khain:について」(京都大学提出論文、未公刊)
- 影山太郎 1993. 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子 1997. 『語形成と概念構造』 東京: 研究社出版.
- 加藤昌彦 1998. 「ポー・カレン語(東部方言)の動詞連続における主動詞について」『言語研究』No. 113: 31-61.
- 久野章 1978. 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- 西田龍雄 1989. 「チノ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻. pp. 733-740. 東京: 三省堂.
- 林範彦 2000. 「チノ語の reduplication について—チベット = ビルマ語派の諸言語および泰語と対照しながら—」 京都大学文学部卒業論文.
- 2002a. 「チノ語の音韻に関する研究—周辺諸語を見据えて—」 京都大学大学院文学研究科修士論文.
- 2002b. 「チノ語の介音について—ロロ = ビルマ諸語との比較研究から—」(日本言語学会第124回大会における口頭発表、東京外国語大学)
- 2002c. 「チノ語の変調序論」(文部科学省特定領域研究(A)「環太平洋の＜消滅の危機に瀕する言語＞にかんする緊急調査研究」全体会議 東・東南アジア分科会における口頭発表、京都国際会館)
- 2002d. 「ロロ = ビルマ祖語 *? が現代チノ語に与えた影響について」『京都大学言語学研究』第21号: 311-335.
- 2003a. 「チノ語の述部構造に関する予備的考察」京都大学大学院文学研究科博士後期課程1年次研究報告.
- 2003b. 「韻母から見たチノ語音韻史」『京都大学言語学研究』第22号: 347-378.
- 2004a. 「チノ語の文中助詞 va⁵⁵ に関する考察—名詞項解釈システムとの関わり—」 京都大学大学院文学研究科博士後期課程2年次研究報告.
- 2004b. 「チノ語における漢語からの文法的借用」(第54回日本中国語学会全国大会における口頭発表、京都大学)

- 2005a. 「チノ語悠楽方言の音論と形態統語論の概要」京都大学大学院文学研究科博士後期課程3年次研究報告.
- 2005b. 「チノ語の疑問助詞について」(日本言語学会第130回大会における口頭発表、国際基督教大学)
- 2005c. 「チノ語の動詞連続にまつわる問題」(チベット=ビルマ言語学研究会第6回会合における口頭発表、京都大学文学研究科ユーラシア文化研究センター)
- 2006a. 「チノ語悠楽方言」『文法を描く—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』pp. 243–270. 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 2006b. 「チノ語 -mɿ の「多機能性」—漢藏語と対照しながら—」『京大大学言語学研究』第25号: 67–104.
- 2007. 「チノ語の疑問文末に現れる3つの助詞について」『言語研究』131号: 45–76.
- 由本陽子 2005. 「複合動詞の統語素性—日本語の語彙的複合動詞における下位範疇化素性を中心に—」大石強・西原哲雄・豊島庸二(編)『現代形態論の潮流』pp. 135–154. 東京: くろしお出版.

[漢語文献] (ピンイン表記順)

- 戴慶厦(Dài Qìngxia) 2004. << 中國瀕危語言簡案研究 >> 北京: 民族出版社.
- (主編) 2007. << 基諾族語言使用現狀及其演變 >> 北京: 商務印書館.
- 蓋興之(Gài Xīngzhī) 1981. << 基諾語概況 >> << 民族語文 >> 1981年第1期: 65–79.
- 1986. << 基諾語簡誌 >> 北京: 民族出版社.
- 1987. << 基諾語句子的語氣 >> << 民族語文 >> 1987年第2期: 29–36.
- 劉怡(Liú Yì)・白忠明(Bái Zhōngmíng)(主編) 1999. << 基諾族文化大觀 >> 昆明: 雲南民族出版社.
- 羅美珍(Luò Měizhēn) 1994. << 基諾語 >> 中國社會科學院民族研究所・國家民族事務委員會文化宣傳司(主編) << 中國少數民族語言使用情況 >> p. 798 北京: 中國藏學出版社.
- 馬學良・梁庭望(Liáng Tíngwàng)・張公瑾(Zhāng Gōngjīn) 1992. << 中國少數民族文學史 >> (上冊) 北京: 中央民族學院出版社.
- 孫天心(Sūn Tiānxīn)・石丹羅(Shí DānLuó) 2002. << 草登嘉戎語與「認同等第」相關的語法現象 >> << 語言暨語言學 >> 第3卷第1期: 79–99.
- 杜玉亭(Tù Yùtíng) 1985. << 基諾族簡史 >> 昆明: 雲南人民出版社.
- 2004[1996]. << 基諾族 >> 北京: 民族出版社.

- 王均 (Wáng Jūn) 等編 1984. 《壯侗語族語言簡誌》北京: 民族出版社。
- 王文光 (Wáng Wénguāng) · 薛群慧 (Xuē Qúnhuì) · 田婉婷 (Tián Wǎntíng) 2000. 《雲南的民族與民族文化》昆明: 雲南教育出版社。
- 王文光 (Wáng Wénguāng) · 龍曉燕 (Lóng Xiǎoyán) · 陳斌 (Chén Bīn) 2005. 《中國西南民族關係史》北京: 中國社會科學出版社。
- 吳應輝 (Wú Yīnghuī) 2000. 《當代基諾社會研究》昆明: 雲南大學出版社。
- 徐世璇 (Xú Shìxuán) 2001. 《瀕危語言研究》北京: 中央民族大學出版社。
- 尤中 (Yóu Zhōng) 1994. 《雲南民族史》昆明: 雲南大學出版社。
- 于希謙 (Yú Xīqiān) 2000. 《基諾族文化史》昆明: 雲南民族出版社。
- 雲南省地方誌編纂委員會 (Yúnnánshěngdìfāngzhìbiānzǔǎnwěiyuánhui) 1998. 《雲南省誌》卷五十九 少數民族語言文字誌。昆明: 雲南人民出版社。

[歐文文獻] (アルファベット順)

- Benedict, Paul 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. New York: Cambridge University Press.
- Bradley, David 1983. The linguistic Position of Jino. In Chauncey Chu et al. (eds), *Proceeding of the Fourteenth International Conference in Sino-Tibetan Languages and Linguistics*. pp. 21–42. Taipei: Student Book Publishing Co.
- 1997. Tibeto-Burman languages and classification. In: David Bradley (ed), *Papers in Southeast Asian Linguistics No. 14: Tibeto-Burman Languages of the Himalayas*. Pacific Linguistics Series A-86: 1–72. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax*. Boston: Reidel.
- Dixon, R. M. W. 1979. Ergativity. *Language*. Vol.55, No.1: 59–138.
- Hashimoto, Mantaro J. 1984. Question and its presupposition in Chinese. In The Chinese Language Society of Hongkong (ed.) *Wang Li Memorial Volumes (English Volume)*. pp. 148–177. Hongkong: Joint Publishing Co. (HK)
- Hayashi, Norihiko (林範彦) 2003a. Outline of Jino Phonology —with basic vocabulary—. *Descriptive and Theoretical Studies in Minority Languages of East and Southeast Asia*. (ELPR Publication Series A3-016) Suita: Osaka Gakuin University.
- 2003b. Jino Tone Alternation. Circulated at the 36th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (LaTrobe University, Melbourne, Australia).
- 2004a. Causative Constructions in Youle Jino. Circulated at the 37th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Lund University, Lund, Sweden).

- 2004b. Comments on Prof. Mazaudon's Presentation —'polysyllabicity' and voice quality of other languages in Sino-Tibetan area—. Circulated at the 4th International Conference on Cross-Linguistic Study of Tonal Phenomena (Research Institute for the Study of Languages and Cultures in Asia and Africa, Tokyo, Japan).
- 2005a. Polyfunctionality of the particle *-mɣ* in Youle Jino. Circulated at the 38th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Xiamen University, Xiamen, China).
- 2005b. On =va⁵⁵ as a non-subject marker in Youle Jino. Circulated at the 11th Himalayan Language Symposium (Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand).
- 2006a. Youle Jino Voice. Circulated at the Post-Conference Workshop of the 4th International Conference on Construction Grammar (University of Tokyo, Tokyo, Japan)
- 2006b. Youle Jino Adjectives. Circulated at the 39th International Conference for Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Washington University, Seattle, United States of America)
- 2007. Possessive marker of Youle Jino. Circulated at the 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Heilongjiang University (Harbin, Heilongjiang, China/ October, 2007).
- 2008a. Verb Serialization in Youle Jino. Circulated at Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium, Chulalongkorn University (Bangkok, Thailand/ May, 2008)
- 2008b. Semantic Gradation in Youle Jino Subordinators. Circulated at the 14th Himalayan Languages Symposium, University of Goteborg (Goteborg, Sweden/ August, 2008)
- 2008c. Historical Development of Youle Jino and Linguistic Substratum of Tibeto-Burman. Circulated at the International Symposium of Linguistic Substratum of Tibet-Burman Area (Suita, Osaka, Japan/ September, 2008)
- 2008d. Copula in Youle Jino. Circulated at the 41th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, School of Oriental and African Studies (London, United Kingdom/ September, 2008)
- LaPolla, Randy 2001. The Role of Migration and Language Contact in the Development of the Sino-Tibetan Language Family. In: Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds), *Areal Diffusion and Genetic Inheritance —Problems in Comparative Linguistics—*, pp. 223–254. Oxford: Oxford University Press.
- Matisoff, James A. 1976. Lahu causative constructions: case hierarchies and the morphology/syntax cycle in a Tibeto-Burman perspective. In Masayoshi Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics: The Grammar of Causative Constructions*, Vol.6.: 413–442. New York: Academic Press.

- 1978. Mpi and Lolo-Burmese microlinguistics. *Monumenta Serindica*. No. 4. 36 pp. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
- 2001. Genetic versus Contact Relationship: Prosodic Diffusibility in South-East Asian Languages. In: Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds), *Areal Diffusion and Genetic Inheritance—Problems in Comparative Linguistics*— pp. 291–327. Oxford: Oxford University Press.
- 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman—System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*— Berkeley: University of California Press.
- Perlmutter, David and Paul Postal. 1984. “The 1-Advancement Exclusiveness Law,” David Perlmutter and Carol Rosen (eds), *Studies in Relational Grammar* 2, pp. 81–125. Chicago: University of Chicago Press.
- Shafer, Robert 1972. *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Silverstein, Michael 1976. Hierarchy of features and ergativity. In R. M. W. Dixon (ed.), *Grammatical Categories in Australian Languages*. pp. 112–171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- Thurgood, Graham 1989. The subgrouping of Jino. In David Bradley, Eugénie J. A. Henderson and Martine Mazaudon (eds), *Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour R. K. Sprigg*. pp. 251–258. Canberra: Pacific Linguistics C-104.
- Wierzbicka, Anna 1981. Case marking and human nature. *Australian Journal of Linguistics* 1: 43–80.
- Zubin, David 1979. Discourse function of morphology: the focus system in German. In Talmy Givón (ed.), *Discourse and syntax (S & S 12)*. pp. 469–504.

索引

- /-a/, 23, 63, 80, 86, 87, 118, 119
 /-a⁴⁴/, 77, 87, 118, 119, 143, 145, 146
 /-e⁵⁵nœ⁴⁴/, 127
 /-je⁴⁴/, 122
 /-jɔ/, 88
 /-jɔ⁴⁴/, 121, 148
 /-ka⁴²/, 121
 /-khjo/, 76, 78
 /-khju/, 82
 /-kɔ/, 72, 73, 80
 /-la⁴²/, 116, 117, 119, 122, 143, 144
 /-lo/, 45, 47
 /-m/, 84
 /-me/, 85, 120, 121, 148
 /-mɛ/, 84, 85, 143
 /-mɿ/, 84, 85, 87, 98, 126, 138, 143
 /-mɿ⁴²/, 126
 /-mjə⁴²/, 123, 170–173
 /-mə/, 45, 46
 /-mə/, 64, 72, 76, 79, 157, 159
 /-mɿ/, 84
 /-na⁴²/, 87, 117, 119, 143–146
 /-nɔ⁴²/, 118
 /-nu/, 83
 /-nœ⁴⁴/, 93, 111, 112, 115, 116, 119, 127
 /-po⁴²/, 119–121
 /-pu/, 45, 46, 52
 /-su/, 86
 /-tɬɛ/, 82
 /-te⁴²/, 122
 /-tə⁴²/, 121
 /-təu³³/, 126
 /-tɔ/, 28, 29, 80, 81
 /-tɛ/, 55
 /-tsɿ/, 89
 /-tʃhə/, 47
 /-fi/, 79, 80
 /-vi/, 81, 82, 151–156, 160
 /-vu⁵⁵/, 124, 125
 /-xa/, 87
 /-xɔ⁴²/, 125, 126
 /=e⁴⁴/, 56, 61, 90, 91, 108, 117, 127, 148, 156
 /=ɿ⁴⁴/, 56, 90
 /=jɔ⁴⁴/, 58–60, 106–108, 148
 /=jo⁴⁴/, 59, 60
 /=la⁵⁵<I>/, 58
 /=la⁵⁵<II>/, 61, 91, 92
 /=lœ⁴⁴/, 44, 61, 62, 92, 93, 111
 /=the⁴⁴/, 61
 /=va⁵⁵/, 57, 120, 129–133
 /a₁-, 64, 69, 94–97, 100, 101, 137
 /a₂-, 67
 /ja-, 68, 82, 151, 152, 155
 /jɔ-, 94, 95, 101
 /khə-, 67, 68, 82, 151, 152, 155
 /kɔ-, 47, 48, 50
 /kü-, 65
 /la-, 94, 101
 /lə-, 88
 /m-, 69, 81, 82, 151, 153, 154, 160
 /ma-, 66, 94, 95, 97, 100
 /mɔ-, 24, 36, 66, 94, 95, 97, 100
 /pi-, 67, 82, 154
 /tɛ⁴²-, 64
 /thə-, 66, 67
 /tho-, 66
 /jɔ-, 64
 /tʃɿ-, 97, 99
 benefactive, 79
 iambic, 32
 l- 重複, 37, 96
 malefactive, 79
 SOV, 128–130
 verb concatenation, 171
 VP-series, 171

意志動詞, 70, 72, 73, 161, 166, 168, 169
 位置関係を表す名詞, 40
 一般小辞, 89
 移動系動詞, 71, 75-78
 イントネーション, 32, 33, 99, 121, 144, 148
 詠嘆, 118, 121
 音節声調 (型), 29, 32
 回数詞, 50, 51, 53-55
 回答要求, 143
 確認, 115, 118-122
 過去, 24, 63, 81, 84, 87, 172
 関係節, 98, 126, 136, 138-143
 漢語, 2, 8, 10, 11, 14, 15, 17, 19, 21, 22, 36, 46, 48-53, 70, 74, 79, 86, 91, 98, 101, 108, 127, 140, 158, 159
 勧告, 121
 間接疑問, 143, 149
 間接使役, 67, 68, 81, 153-156, 160
 完全重複, 37, 96
 カンタウ語, 10
 完了, 24, 63, 80, 81, 86, 87, 118, 119
 起点, 56, 58, 59
 基本語順, 128, 129, 131, 134, 135, 142
 義務, 88
 疑問, 13, 33, 40, 62, 73, 87, 93, 94, 103-107, 109-112, 115-117, 119, 121, 122, 127, 143-149
 逆接, 123, 127
 強調, 32, 37, 38, 47, 56, 64, 70, 90, 95, 96, 99, 122, 134, 147
 共同者, 56, 58
 禁止, 63, 66, 67
 継起, 123-125, 170, 172
 経験, 28, 29, 63, 80, 81
 継続, 54, 80, 81, 86, 87
 原因, 91, 92, 123, 124, 162-165, 168, 169
 語彙概念構造, 167
 項の併合, 39, 166, 169-172
 コピュラ, 24, 38-40, 61, 65, 73, 77, 85, 87, 88, 100, 116, 125, 126, 148

三重母音, 22
 西雙版納傣語, → ルー語
 使役, 13, 23, 67, 81
 使役者, 132, 136
 使役接辞, 63, 68, 81, 82
 指示詞, 12, 32, 34-36, 40, 45-47, 137
 自然現象動詞, 162
 事態の再発, 65
 自動詞, 38, 70, 71, 150, 151, 158, 161-169, 171
 シナ・チベット語族, 7, 8, 11
 自問, 73, 121, 143, 148
 社会的地位, 130, 131
 斜格, 26, 34-36, 38, 40, 41, 43-45, 59, 61, 98, 107, 128, 129, 132, 133, 137, 147, 148, 151
 修飾 (用法), 26, 35, 38, 43, 46, 47, 51, 54, 94, 96-101, 105-108, 110, 111, 116, 136-140, 142
 従属節, 13, 90-93, 109, 112, 123, 126, 149, 155, 156
 十分条件, 125
 重要度, 71, 133-136
 受益, 63, 76, 79, 157-160
 主格, 34-36, 40-42, 128, 151
 主節, 92, 123, 127, 156
 受動態, 130
 主名詞, 98, 136-143
 条件, 90-93, 123-126
 除外形, 41, 43
 叙述 (用法), 97, 99, 100, 116
 所有格, 41, 43, 127
 推測, 73, 77, 90, 91
 随伴者, 56, 61
 ストレス, 32
 成節鼻音, 22, 23
 静態動詞, 64, 69, 70, 72, 73, 75, 80, 87, 89, 94, 118, 119
 声調交替, 12, 25-29, 31, 32, 49-51, 83, 88, 95, 107, 115, 122
 接続助詞, 13, 92, 115, 123-127, 155, 156, 160, 170-173
 先行詞, 41, 42

相互, 9, 63, 79, 172

双数, 40, 41

対格, 41, 132, 167

対比, 56

尊格, 56

達成, 63, 76, 78

他動詞, 38, 70, 71, 79, 80, 105, 150, 151,
158, 160, 161, 163–170

単数, 40, 41, 43, 122

チノ族, 1–7, 9–11, 26, 42, 56, 60, 61, 73

チベット・ビルマ語派, 7, 8

直接疑問, 143, 149

直接使役, 69, 153–155, 160

陳述文, 115, 116

伝聞, 122

等位文, 73, 92, 110

動作の再開, 65

動詞述語, 12, 115–117, 119, 123, 143,
144, 146, 148

動詞連続, 13, 39, 124, 159–161, 163, 165–
173

動態動詞, 69, 70, 72, 73, 80, 81, 89

二重使役, 81, 82, 153–155

二重母音, 20–22

二重目的語, 129

巴卡下位方言, 2, 9, 23, 41, 47, 57, 66, 84,
87, 104–110

発話参与者, 135, 136

被使役者, 68, 132, 136

ピッチ, 32

必要条件, 124

否定, 24, 27–29, 31, 36, 63, 66, 70, 86, 89,
94, 95, 97, 100, 111, 124, 138,
149

被動者, 56, 57, 132

ビルマ語, 132

不確定, 148

複合動詞, 167

複数, 40, 41, 43, 45, 46, 160

複文, 13, 123, 171

部分重複, 37, 95–97

並列型, 167

包括形, 41

補遠方言, 8, 9, 174

ポー・カレン語, 167

補足的な情報, 135

補文, 74, 75, 77, 84, 85, 90, 91, 156

未来, 63, 85, 120, 121, 148

無意志動詞, 70, 72, 73, 161, 166, 168, 169

無生, 45, 57, 104, 122, 130

無声鼻音, 15, 23, 24

名詞化, 60, 63, 66, 84, 85, 88, 90, 91, 119,
143, 148

名詞述語, 12, 38–40, 88, 115–120, 143,
144, 146

命令, 29, 68, 73, 121, 122, 152, 154

モダリティ, 71, 73, 88, 115, 143

(母音等の) 融合, 24, 86, 106

有生, 57, 129–133

有声鼻音, 24

悠楽方言, 2, 8, 9, 13, 22, 174

容認使役, 81, 154, 160

要約, 56, 61

ラオ語, 102

ラフ語, 132

類別詞, 21, 34, 49–55, 105, 106

ルー語, 11, 19, 21, 22, 36, 101, 102

洛特下位方言, 9, 23, 49, 127

列举, 56, 61

連結型, 167

ロロ語群, 8

ロロ・ビルマ語支, 7

話題, 56, 57, 110, 111, 134

付録 (Appendix)

日本語 (Japanese) – 英語 (English) – チノ語 (Jino) 分類語彙

1 人体

- (1) 頭 **head** vu⁵⁵khɛ⁵⁵
 (2) 額 **forehead** nɿ⁴⁴thɿ⁴⁴
 (3) 眼 **eye** mja³³tsi⁵⁵
 —3a; 目糞 **eye mucus** mja³³khri⁵⁵
 —3b; 眼鏡 **glasses** mja³³tho³³
 (4) まゆげ **eyebrow** mja³³mu⁵⁵
 (5) 涙 **tears** mja³³ji⁵⁵
 (6) 盲目の **blind** mja³³pru⁵⁵
 (7) 鼻 **nose** nɔ³³to⁵⁵
 —7a; 鼻毛 **the hairs of the nostrils** nɔ³³mu⁵⁵
 —7b; 鼻の穴 **the nostril** nɔ³³khru⁴²
 (8) 鼻水 **snivel** ni⁵⁵pu⁴⁴
 (9) 耳 **ear** na³³khɔ⁵⁵
 (10) 耳が不自由である **deaf** nɔ⁵⁵pə⁵⁵
 (11) 口 **mouth** mɔ⁵⁵mɔ⁵⁵
 (12) 唇 **lips** mɔ⁵⁵khɔ⁴²
 (13) 舌 **tongue** a³³ʃɔ⁵⁵
 (14) 口が不自由である **dumb** ja³³pa⁵⁵
 (15) 歯 **tooth** a³³ʈu⁵⁵
 (16) つばき **saliva** kho³³ji⁵⁵
 (17) 痰 **phlegm** phi⁵⁵khɔ⁴⁴
 (18) 息をする **to breathe** sa⁵⁵
 (19) 声 **voice** a⁵⁵tho⁵⁵
 (20) 咳 **cough** tshi⁵⁵
 (21) くしゃみ **sneeze** xa⁵⁵ʈhi⁴⁴
 (22) あくび **yawn** xɿ⁵⁵xai⁴⁴
 (23) あご **jaw, chin** mɔ⁵⁵to⁴⁴
 (24) 顔 **face** mja³³phrɔ⁵⁵
 (25) ほお **cheek** mja³³po⁵⁵
 (26) ひげ **beard mustache, whiskers** mɔ³³mu⁵⁵
 (27) くび **neck** lu⁵⁵tshu⁵⁵
 (28) のど **throat** khju⁵⁵pɛ⁵⁵
 (29) 肩 **shoulder** pa³³phu⁵⁵
 (30) 脇 **armpit** ja⁵⁵o⁵⁵
 (31) 腕 **arm** la⁵⁵tshu⁵⁵
 (32) ひじ **elbow** la⁵⁵tshə⁵⁵
 (33) 手 [全体]、手 [手首から先] **hand, hand and arm** la⁵⁵pu⁴⁴
 (34) 指 **finger, toe** la³³mu⁵⁵
 (35) 爪 **nail** la⁵⁵su⁴⁴
 (36) 胸 **breast** nɿ⁵⁵kha⁵⁵
 (37) 乳房 **breast (of woman)** mɛ⁵⁵po⁴⁴
 (38) 心臓 **heart** nɿ³³su⁵⁵
 (39) 腹 **belly** o⁵⁵phu⁴⁴
 (40) はらわた **guts** a³³vu⁵⁵
 (41) 肝臓 **liver** a³³tshu⁵⁵
 (42) へそ **navel** tʃha³³to⁵⁵
 (43) 背中 **back** a⁵⁵mə⁵⁵
 (44) 腰 **waist** a³³ʈɔ⁵⁵
 (45) 尻 **hip** to⁵⁵phu⁵⁵
 (46) 肛門 **anus** to⁵⁵ʈhə⁴⁴
 (47) ひざ **knee** phuu⁵⁵tshu⁵⁵
 (48) 脚 **leg** a⁵⁵phro⁵⁵
 (49) 足、あし [足首から先] **foot** ʃɔ⁵⁵khi⁵⁵
 (50) 足が不自由である **to limp** khi³³ʃɔ⁴⁴
 (51) からだ **body** a⁵⁵mə⁵⁵
 (52) 毛、体毛 **hair** a⁵⁵mu⁵⁵
 (53) かわ [皮、皮膚] **skin** a⁵⁵ʃɔ⁵⁵
 (54) 膿 **pus** pru⁴²
 (55) 汗 **sweat** khi⁵⁵
 (56) 垢 **dirt** a⁵⁵tse⁵⁵
 (57) 大便 **excrement** a⁵⁵khri⁵⁵

- (58) 小便 **urine** ji³³tshe⁵⁵
 (59) 血 **blood** a⁵⁵ji⁵⁵
 (60) 骨 **bone** ɔ³³u⁵⁵
 (61) 肉、筋肉 **flesh** a³³na⁵⁵
 (62) 力 **strength** ko⁵⁵kho⁵⁵
 (63) 見る、見える **to see, to look**
 te⁵⁵(見る), mjo⁴²(見える)
 (64) 嗅ぐ **to smell it** ne⁴²[v.(e1)]
 (65) 聞く、聞こえる **to hear, to listen**

- no⁴²[v.(e1)]
 (66) 笑う **to laugh** u⁴²[v.(e1)]
 (67) 泣く **to cry** me³³[v.(c3)]
 (68) 叫ぶ **to shout** khu⁴²[v.(e1)]

2 衣

- (69) 着物、きもの [衣類一般] **clothes**
 ko⁵⁵to⁴⁴
 (70) 帽子 **hat, cap** vu⁵⁵tsho⁵⁵
 (71) ズボン **pants, trousers**
 lo⁵⁵tsho⁵⁵
 (72) 着る **to clothe**
 to⁴⁴[v.(b1a)](首から下の上半身
 の衣類を着る), tsho⁵⁵(帽子をかぶ
 る、ズボンあるいは靴などを履く)

- (73) 脱ぐ **to take off** lo⁴²[v.(e4)]
 (74) はだか **naked** to³³ta⁵⁵
 (75) 針 **needle** ko³⁵
 (76) 糸 **thread** a⁵⁵phi⁴⁴
 (77) 縫う **to sew** kju⁵⁵[v.(a4)]
 (78) 編む **to knit** tso⁵⁵[v.(a2)]

3 食

- (79) 食べ物 **food** a⁵⁵me⁵⁵/
 xo⁵⁵me⁵⁵(ご飯、米), tso⁵⁵jo⁵⁵
 (80) 粉 [食用としての] **flour**
 mjen³⁵fen³³
 (81) 肉 **meat** ko³³e⁵⁵
 —81a; 豚肉 **poke** 猪肉 va⁵⁵jo⁵⁵
 —81b; 鶏肉 **meat of chicken** 鶏肉
 ja³³jo⁵⁵
 —81c; 牛肉 **beef** po⁵⁵na³³jo⁵⁵
 (82) 実 **fruit** a⁴⁴su⁴⁴
 (83) バナナ **banana** ɲa³³su⁵⁵
 (84) マンゴー **mango** phe⁵⁵mo⁴⁴
 (85) もも **peach** su⁵⁵je⁴⁴
 (86) トマト **tomato** ma⁵⁵ky⁴⁴

- (87) かぼちゃ **pumpkin**
 to⁵⁵kho⁵⁵
 (88) パイナップル **pineapple**
 ma⁵⁵khe⁵⁵ne⁵⁵
 (89) ジャックフルーツ **jackfruit**
 ma⁵⁵mi⁴²
 (90) ライチ **lychee** a⁵⁵pjo⁵⁵
 (91) オレンジ **orange** kju³³tsi⁵⁵
 (92) 芋 **taro** pre⁵⁵
 (93) 甘藷 **sweet potato** ma³³kjo⁵⁵
 (94) とうもろこし **corn** me³³tu⁴⁴,
 lu⁵⁵tu⁴⁴
 (95) たね **seed** a³³tsu⁵⁵
 (96) 卵 **egg** ja³³vu⁵⁵(鶏の卵)

- (97) 塩 **salt** tshə⁵⁵khə⁴²
 (98) あぶら [脂]、脂肪 **grease**
 a³³tshu⁵⁵
 (99) ちち、牛乳 **milk** mɛ³³ji⁵⁵,
 ɲu³³nai³³
 (100) 水 **water** ji³³tʃho⁵⁵
 (101) 煮る、ゆでる **to cook, to boil**
 tʃha⁵⁵[v. (a2)], phu⁴²[v. (e3)]
 (102) 熟した **ripe** mɲɣ⁴⁴[v. (b1)]
 (103) 食べる **to eat** tso⁵⁵[v. (a1)]
 (104) 嘗める **to lick** mɾə⁵⁵[v. (a2)]
 (105) かむ、噛む **to chew** khe⁵⁵[v. (a2)]
 (106) 飲む **to drink** tə⁴²[v. (e1)],
 fu⁴²
 (107) 吸う **to suck** tʃu⁵⁵
 (108) 吐く **to vomit** phi⁵⁵[v. (a2)]
 (109) 吐き出す **to spit** phi⁵⁵[v. (a2)]
 (110) 腹がへる **hungry**
 mɔ⁵⁵[v. (a2)]
 (111) のどが渴く **thirsty** ji⁵⁵[v. (a2)]
 (112) おいしい **tasty** mɾɛ³⁵
 (113) 甘い **sweet** a³³tʃhi⁵⁵[a. (a1)]
 (114) 辛い **hot, chilly** a³³phi⁵⁵[a. (a1)]
 (115) 塩辛い **salty** a⁵⁵mjo⁴²[a. (c)]
 (116) にかい **bitter** a⁵⁵khə⁵⁵[a. (b)]
 (117) 腐った **rotten**
 a³³pu⁵⁵[a. (a1)]

4 住

- (118) 家、住居 **house** tso³³
 —118a; 部屋 **room** ɕa⁵⁵tu⁴⁴,
 ɕa⁵⁵jo⁵⁵
 —118b; トイレ **toilet** ɛ⁴⁴phi⁵⁵tu⁴⁴
 (119) 建てる **to build** khœ⁴²[v. (e3)]
 (120) 戸 **door** a⁵⁵ko⁴⁴
 (121) 壁 **wall** tʃhaɲ
 (122) 屋根 **roof** tso³³tha⁵⁵la⁴²
 (123) 火 **fire** mi⁵⁵
 (124) 煙 **smoke** mi⁵⁵khju⁵⁵
 (125) 灰 **ashes** a⁵⁵mə⁵⁵
 (126) 消す、消える **to put out, to extinguish** mi⁴²[v. (e3)]
 (127) 燃える **to burn** thu⁵⁵
 (128) (煙などが) 立ち上る **to rise up (smoke)** tu³³[v. (c2)]
 (129) 座る **to sit** tɣ⁴⁴ni⁴⁴[v. (c2)]
 (130) 寝ている、横たわる **to lie, to lie down** ji⁵⁵[v. (a4)]
 (131) 眠る **to sleep** ji⁵⁵,
 ji⁵⁵the⁴⁴[v. (b1b)]
 (132) もたれる **to lean**
 lə⁵⁵ɲə⁵⁵[v. (a1a)]
 (133) うつ伏せになる **to lie prone**
 ʃo³³[v. (c2)]
 (134) 夢、夢を見る **dream**
 me³⁵ma⁴⁴
 (135) 起きる、立ち上がる **to rise, to stand up** to⁵⁵tho⁴⁴[v. (b1a)]
 (136) 立っている、立つ **to stand**
 xe⁵⁵[v. (a4)]
 (137) 倒れる **to fall down**
 lə⁴²[v. (e2)]
 (138) 閉める、閉じる **to shut, to close**
 pu⁵⁵[v. (a1b)]

- (139) 開ける、開く to open
pho⁵⁵[v.(a1)]
(140) こじ開ける to force open
tʰao³⁵[v.(d)]

- (141) 住む to live ɕa⁵⁵[v.(a2)]

5 道具

- (142) 壺、甕 pot, jug, jar
kuan³⁵tsi⁴⁴
(143) 鍋、釜 pan, pot, kettle
ʃe⁵⁵jo⁵⁵
(144) 小刀 knife mi⁵⁵sə⁴⁴
(145) 刃 cutting edge mɾə⁵⁵su⁵⁵
(146) かま sickle khi³³xo⁵⁵

- (147) 鋤 plow tshə⁵⁵mə⁴⁴
(148) ほこり dust a³³mə⁵⁵
(149) 拭く to wipe khw⁴²[v.(e3)]
(150) 綱 rope a⁵⁵phi⁴⁴
(151) 網 net warj³³
(152) 棒っ切れ stick of wood
te³³khjə⁵⁵

6 生活・戦い

- (153) 生まれる to be born
tʃə⁴²[v.(e1)]
(154) 育つ to grow up xɿ⁴⁴
(155) 育てる、養う to bring up
ɕu⁴²[v.(e1)]
(156) 生きている to be alive
tʃə⁴²[v.(e1)] (= 153)
(157) 太った fat pə⁵⁵[v.(a2)]
(158) やせた thin a³³khju⁵⁵
(159) 疲れる to get tired
mɛ⁵⁵[v.(a3)]
(160) 病気 illness nɔ⁵⁵jo⁵⁵
(161) 傷 wound a⁵⁵so⁵⁵
(162) 痛い painful nɔ³³(一般的),
kjə³³(頭が痛い)
(163) 痒い itchy tsur⁴²[v.(e3)]
(164) 腫れる to swell up (parts of

- body) pə⁵⁵[v.(a2)]
(165) 掻く to scratch tsi³³
(166) 治す to cure ja⁴²
(167) 殺す to kill se⁵⁵[v.(a2)]
(168) 死ぬ to die ʃi⁵⁵[v.(e1)]
(169) 幽霊 ghost ne⁵⁵
(170) けんかする to fight pə⁵⁵ʃi⁵⁵,
ja³³ʃi⁵⁵
(171) 逃げる to run away
khju⁵⁵tshə⁵⁵, thao⁴²[v.(e3)]
(172) 追いかける to chase
ka⁵⁵[v.(a2)]
(173) 刀 sword mi⁵⁵sə⁴²
(174) やり spear xoj³³jiŋ⁴⁴ɕhaŋ⁵⁵
(175) 弓 bow lu³³pja⁵⁵
(176) 矢 arrow a⁵⁵ɕhə⁴⁴
(177) 銃、鉄砲 gun kro³⁵

7 人間関係

- (178) 人間、ひと **person, man in general** tshə³³zə⁵⁵
- (179) 男 **man, male** khə⁵⁵phə⁵⁵
- (180) 女 **woman, female** khə⁵⁵mə⁴⁴
- (181) 子供 **child** zə⁵⁵ku⁵⁵
- (182) 若い **young** zə⁵⁵khə⁵⁵ (男性), mi⁵⁵khə⁵⁵ (女性), nən³³phij³⁵
- (183) 年をとる、年取った **old** jo³³phə⁵⁵ (男性), jo³³kha³³ (女性)
- (184) 父 **father** a⁵⁵pu⁵⁵
- (185) 母 **mother** a⁵⁵mə⁴⁴
- (186) 息子 **son** khə⁵⁵phə⁵⁵zə⁵⁵ku⁵⁵
- (187) 娘 **daughter** khə⁵⁵mə⁴⁴zə⁵⁵ku⁵⁵
- (188) 兄弟姉妹 **brother and sister** a⁵⁵fo⁵⁵nu³³zə⁵⁵
- (189) 兄・姉 **elder brother/ elder sister** a⁵⁵fo⁵⁵
- (190) 弟・妹 **yonger brother/ younger sister** nu³³zə⁵⁵
- (191) 祖父 **grandfather** a⁵⁵phu⁵⁵
- (192) 祖母 **grandmother** a⁵⁵phi⁵⁵
- (193) 孫 **grandchild** li⁵⁵zə⁵⁵
- (194) 親戚 **relative** mo⁵⁵ne⁵⁵
- (195) チノ族 **Jino** ki⁵⁵no⁵⁵
- (196) 漢族 **Han Chinese** a⁵⁵xə⁴⁴
- (197) ハニ族 **Hani** kha⁵⁵kvi
- (198) タイ族 **Tai (Lue)** pu⁵⁵che⁵⁵

8 社会・職業・生産

- (199) 村 **village** tso⁵⁵mi⁵⁵
- (200) 獵に行く **to hunt** u³³tha⁵⁵khə⁴⁴
- (201) 撃つ **to shoot** pə³³
- (202) 盗む **to steal** khju⁵⁵[v.(a2)]
- (203) 働く **to work** koŋ⁵⁵tso⁴⁴, faŋ³⁵pan⁴⁴[v.(h)]
- (204) 休む **to rest** nə⁵⁵pjə⁵⁵[v.(a1b)]
- (205) 忙しい **to be busy** maŋ⁴²[v.(e3)]
- (206) 摘み取る **to pick off (fruits or tea leaves)** tʃhu⁴²[v.(e3)], tshu⁵⁵[v.(a4)]
- (207) 剥く **to peel** tsu⁵⁵

9 移動・交通

- (208) 行く **to go** le⁵⁵[v.(a1a)], je⁵⁵, ja⁵⁵
- (209) 来る **to come** lo⁴²[v.(e2)], lu⁵⁵, la⁵⁵
- (210) 帰る **to come/go back** no⁴⁴phə⁴⁴[v.(e1)]
- (211) 出る **to get out** to³³[v.(c1)]
- (212) 入る **to enter** o⁴²[v.(e2)]
- (213) 曲がる **to turn** o³³le⁵⁵
- (214) 止まる **to stop** tshu⁵⁵
- (215) 歩く **walk** zo⁵⁵[v.(a1b)]
- (216) 走る **to run** thə⁴²[v.(e3)]
- (217) 速い **swift** vai⁴⁴
- (218) のろい **slow** pjə⁵⁵[v.(a2)]

- (219) はう **to creep** pjo⁵⁵
 (220) 道 **road** jo⁵⁵kho⁵⁵
 (221) 橋 **bridge** ta³⁵ɕhao⁴⁴
 (222) 車 **cart** tʃho⁵⁵

- (223) 輪 **wheel** lun³³tsi⁴⁴
 (224) 船 **boat** tʃhuan⁴²

10 言語・伝達

- (225) ことば **language** mi⁵⁵
 (226) 話す **to speak** pja³³tsha⁵⁵
 (227) 言う **to say** pja⁴²[v.(e3)] ,
 m⁵⁵
 (228) 伝える **to tell** the⁴⁴[v.(b1b)]

- (229) 尋ねる **to ask** ɲo⁴²[v.(e1)]
 (230) 読む **to read** te⁵⁵[v.(a1b)]
 (231) 書く **to write** pjo⁵⁵[v.(a2)]
 (232) 呼ぶ **to call** khu⁴²[v.(e1)]
 (233) 名前 **name** a⁵⁵me⁵⁵

11 遊び・芸術

- (234) 遊ぶ **to play** ɲi³³ko⁵⁵[v.(f2)]
 (235) 歌う **to sing** krə⁵⁵[v.(a2)]

- (236) 踊る **to dance** thjao³⁵vu³³

12 授受

- (237) 与える **to give** pi⁵⁵[v.(a1b)]
 (238) 分ける **to divide** pe³³[v.(c3)]
 (239) 売る **to sell** ko³³
 (240) 買う **to buy** ju⁴²[v.(e1)] ,

- pho⁵⁵
 (241) 借りる **to borrow** tse³⁵[v.(d)]
 (242) 送る **to send** ɕi³⁵[v.(d)]

13 対人動作

- (243) 会う **to meet** mja⁴²
 (244) 出くわす **to encounter**
 tho⁵⁵phu⁵⁵[v.(a2)]
 (245) 待つ **to wait** tə⁵⁵[v.(a2)]
 (246) 招待する **to invite**
 tʃao⁵⁵[v.(a5)]
 (247) 連れ出す **to take out (some-
 body)** ɕu⁴⁴[v.(b1a)]
 (248) 叱る **to scold** ja⁵⁵[v.(a3)]

- (249) 騙す **to deceive** ko⁵⁵[v.(a2)]
 (250) 驚かせる **to astonish**
 tsha⁵⁵khja⁴²[v.(d)]
 (251) 殴る **to hit** tɕu⁵⁵[v.(a2)]
 (252) (手で) たたく **to clap**
 the⁴²[v.(e4)]
 (253) 愛する **to love**
 m⁵⁵ɲu⁵⁵[v.(a3)]

(254) 助ける to help
pro⁵⁵khœ⁴²[v.(d)]

(255) 口付けをする to kiss
po⁵⁵[v.(a2)]

14 対物動作

- (256) 咬む to bite khe⁵⁵[v.(a2)]
 (257) 取る to take ko⁴⁴[v.(b2)]
 (258) 得る to gain jo⁵⁵m³³[v.(c)]
 (259) 拾う to pick up ko⁴²[v.(e3)]
 (260) 使う to use joŋ³⁵[v.(d)]
 (261) 持つ to hold ko⁴⁴(= 257)
 (262) つかむ to seize ɲɛ⁵⁵[v.(a2)]
 (263) 握る to grip ʃɣ⁴⁴[v.(b1a)]
 (264) 放す to release m³³phja³⁵
 (265) 投げる to throw və⁴²[v.(e3)]
 (266) 触る to touch vɔ⁵⁵
 (267) こする to rub khw⁴²[v.(e3)]
 (268) 振る to wave lu³³[v.(c2)]
 (269) (手で) 支える to support
 …with hands pə⁴²[v.(e3)]
 (270) はたく to whisk
 khw³³[v.(c2)]
 (271) 押す to push zu⁵⁵[v.(a4)]
 (272) 引っ張る to pull
 ʃw⁴⁴[v.(b1)], mjo⁵⁵[v.(a4)](「(袖
 などを)引っ張る」)
 (273) 締め付ける to squeeze
 kja³³ma⁵⁵, phw⁴⁴ma⁵⁵
 (274) (肩で) 担ぐ to shoulder
 pa⁵⁵[v.(a2)]
 (275) 運ぶ to carry (baggage)
 la⁴⁴[v.(b1a)]
 (276) 背負う to carry on the back
 ʃa⁵⁵, phi⁴⁴
 (277) 蹴る to kick thi⁵⁵
 (278) 踏む to tread on it nɔ⁵⁵
 (279) 隠す to hide it ko³³va⁵⁵
 (280) 探す to seek it jo⁴²[v.(e1)]

- (281) 見つける to find it ʃɔ⁵⁵ju⁵⁵
 (282) 見せる to show it pi⁵⁵tɛ⁵⁵
 (283) 置く to put it ko³³khro⁵⁵
 (284) 集める to collect ko³³tho⁵⁵
 (285) 積み上げる to heap up
 khə⁴²[v.(e3)], ti⁴²[v.(e3)]
 (286) 作る to make khœ⁴²[v.(e3)]
 (287) 壊す to destroy it m³³lai⁵⁵
 (288) 割れる to break
 pha⁴²[v.(e4)]
 (289) 直す to repair it m³³jo³⁵
 (290) 裂ける to split a³³pha⁵⁵
 (291) 曲げる to bend it m³³khu³⁵
 (292) 折る to break it pha⁴²[v.(e4)]
 (293) 洗う to wash it
 tshi⁵⁵[v.(a1b)]
 (294) 吊るす、掛ける to hang
 ko³³tjhw⁵⁵[v.(f1)]
 (295) 干す to hang out (clothes)
 lo⁵⁵[v.(a4)]
 (296) 掬う to scoop ɲu⁵⁵[v.(a4)]
 (297) 巻く to wind it, to roll it
 khja⁵⁵[v.(a2)]
 (298) 結ぶ to tie it m³³tsha⁵⁵
 (299) ほどく to untie it
 phw⁴²phja³⁵[v.]
 (300) (髪を)梳く to comb
 khja⁴²[v.(e3)]
 (301) かぶせる to cover it
 m³³pu³⁵
 (302) 包む to wrap tho⁴²[v.(e3)]
 (303) ふくれる to swell xo⁵⁵
 (304) ふさぐ to stop up

- tu³³tshe³⁵[v.(g)]
 (305) 抜く to pull it out
 kə⁴²[v.(e1)]
 (306) 突き刺す to stab tshə⁴²
 (307) 切る to cut phe⁴⁴[v.(b1a)],
 se⁵⁵[v.(a1b)], tə⁴²[v.(e3)]
 (308) (臼などで) 挽く to grind
 mo³⁵[v.(d)]
 (309) もぎ取る to tear off
 ŋa⁵⁵[v.(a2)]
 (310) 混ぜる to mix it m³³phrə⁵⁵
 (311) 彫る to carve it tjaə⁵⁵khə⁴²,

- tso⁴⁴[v.(b1a)]
 (312) 掘る to dig tu⁵⁵[v.(a1b)]
 (313) 焼く、あぶる to roast
 phju⁵⁵[v.(a1a)]
 (314) 蒸す to steam po⁵⁵[v.(a1b)]
 (315) 撒く to scatter se⁵⁵[v.(a1b)]
 (316) 掃く to sweep ja⁴²[v.(e3)]
 (317) (たばこを) 吸う to smoke
 (cigarettes) m̥w⁵⁵[v.(a2)]
 (318) (写真を) 撮る to take pictures
 tjaə³⁵[v.(d)]

15 一般動作

- (319) する to do it khœ⁴²[v.(e3)]
 (320) 動く to move nu³³[v.(c1)]
 (321) はねる to jump thv³³tjo⁵⁵
 (322) 上がる to rise ta⁴²[v.(e3)]
 (323) 下りる to go down
 za⁵⁵[v.(a2)]
 (324) とどまる to stay

- tho⁵⁵[v.(a1b)]
 (325) 落ちる to fall kro⁴⁴[v.(b2)]
 (326) 転がる to roll over
 ly⁴⁴[v.(b1a)]
 (327) 濡れる to get wet
 pe⁴⁴[v.(b1)], tw⁴²[v.(e3)]
 (328) 乾く to dry kw⁴²

16 知識・精神活動

- (329) 考える to think kjo⁵⁵[v.(a3)]
 (330) 知る to know
 suw⁵⁵jo⁴⁴[v.(b2)]
 (331) わすれる to forget
 n̥ə⁴²[v.(e1)]
 (332) 学ぶ to learn le⁴²[v.(e3)],
 fuo⁴²[v.(e3)]
 (333) 恐がる afraid khə⁴⁴[v.(b1a)]
 (334) 目覚める to wake up

- nu⁵⁵[v.(a1b)]
 (335) 好む to like it m⁵⁵nu⁵⁵
 (336) 喜ぶ glad m̥vi⁵⁵
 (337) かわいそうだ pitiful
 ma⁵⁵ja⁴²
 (338) 悲しい、つらい sad, languish
 kjo⁵⁵ʃo³⁵
 (339) 怒る to get angry khw³⁵
 (340) 心 mind nx⁵⁵suw⁵⁵

17 天文・地文・鉱物

- (341) 空 **sky** tsho⁵⁵na⁴²
 (342) 雲 **cloud** mɾø⁵⁵khju⁴⁴
 (343) 雨 **rain** mi³³tha⁵⁵
 (344) (雨が) 降る **to rain**
 xo⁴²[v.(e1)]
 (345) 雷 **thunder** m⁵⁵tʃi⁵⁵
 —345a; (雷が) 鳴る **to thunder**
 (m⁵⁵tʃi⁵⁵) ku⁵⁵[v.(a3)]
 (346) 稲 光 **lightning**
 mja³³mru⁵⁵pre⁴⁴
 —346a; (稲光が) 走る **to lightning**
 pre⁴⁴[v.(b2)]
 (347) 虹 **rainbow** a⁵⁵m⁴⁴te⁵⁵kɿ⁴⁴
 (348) 氷 **ice** su⁵⁵tha⁵⁵
 (349) 凍る **to freeze** a⁵⁵phɛ⁴²
 (350) 溶ける **to melt** pja⁴²
 (351) 太陽 **sun** mi⁵⁵tsho⁵⁵
 (352) (太陽が) 照りつける **to shine**
 kha⁴²[v.(e3)]
 (353) 月 **moon** pu⁵⁵ɔ⁴⁴
 (354) 星 **star** pu⁵⁵ki⁵⁵
 (355) 光 **light** a⁵⁵pro⁵⁵
 (356) 影 **shadow** a⁵⁵ji⁵⁵
 (357) 明るい **bright** a⁵⁵pro⁵⁵[a.(b)]
 (358) 暗い **dark** a⁵⁵na⁴²[a.(c)]
 (359) 風 **wind** li³³
 (360) 吹く **to blow** phjə³³,
 tsi⁴⁴[v.(b1a)]
 (361) 暑い **hot (weather)**
 a⁵⁵lo⁵⁵[a.(b)]
 (362) 寒い、冷たい **cold** a³³tʃho⁵⁵
 (363) 暖かい **warm (of weather)**
 a⁵⁵lo⁵⁵[a.(b)]
 (364) 山 **mountain** u³³tha⁵⁵
 (365) 平原 **plain** a³³khø⁵⁵(lø⁵⁵)
 (366) 川 **river** a⁵⁵khro⁵⁵
 (367) 池 **pond** thø³³tu⁵⁵
 (368) 泡 **bubble** a³³m⁵⁵
 (369) 沈む **to sink** thu⁵⁵
 (370) 浮かぶ **to float** pu⁵⁵
 (371) 流れる **to flow** ji³³
 (372) 岸 **shore** a³³tse⁵⁵
 (373) 石 **stone** lo³³mo⁵⁵, ja⁵⁵tha⁵⁵
 (374) 砂 **sand** mu³³ji⁵⁵
 (375) 土 **earth** a³³no⁵⁵
 (376) 鉄 **iron** ʃɛ⁴²
 (377) 金 **gold** ʃu⁵⁵
 (378) 銀 **silver** phru³³

18 植物

- (379) 木 **tree** a³³tsu⁵⁵
 (380) 草 **grass** mjo⁵⁵
 (381) 幹 **trunk** a³³tsu⁵⁵
 (382) 皮 **bark** a⁵⁵kho⁵⁵
 (383) 茎 **stem** a³³tsu⁵⁵
 (384) 枝 **branch** a³³la⁵⁵
 (385) 葉 **leaf** a³³pha⁵⁵
 (386) 花 **flower** a⁵⁵po⁴⁴
 (387) つぼみ **bud** a⁵⁵tu⁴⁴
 (388) 根 **root** a³³tʃhe⁵⁵
 (389) 芽 **sprout** a⁵⁵mja⁴²
 (390) 生える **to come out** lu⁵⁵
 (391) 枯れる **to wither** khju⁵⁵
 (392) 竹 **bamboo** vɔ⁵⁵
 (393) きのこと **mushroom** m⁵⁵lu⁵⁵

19 動物

- (394) 鳥 **bird** ɲa³³zo⁵⁵
 (395) 魚 **fish** ɲo⁵⁵ʃo⁵⁵
 (396) 虫 **worm** pu⁵⁵tʃu⁵⁵
 (397) 犬 **dog** khur³³ni⁵⁵/
 khur³³mi⁵⁵
 (398) 猫 **cat** jo³³mɛ⁵⁵
 (399) 狼 **wolf** pho⁵⁵e⁵⁵
 (400) 馬 **horse** mjo⁵⁵
 (401) ヤギ **goat** tʰi⁵⁵prɛ⁴⁴
 (402) 豚 **pig** va⁵⁵
 (403) 鶏 **hen, cock** ja⁴²
 —403a; 雄鶏 ja³³pho⁵⁵
 —403b; 雌鳥 ja³³mo⁵⁵
 —403c; ひな ja³³tʃi⁵⁵
 (404) 水牛 **buffalo** pu⁵⁵na⁴²
 (405) 黄牛 **cattle** mɛ³³nu⁵⁵
 (406) アヒル **duck** tʃo⁵⁵ka⁴²
 (407) ガチョウ **goose** ta³⁵44
 (408) ふくろう **owl** kho⁵⁵pu⁴⁴
 (409) 虎 **tiger** lo⁵⁵mur⁴⁴
 (410) 熊 **bear** a³³ø⁵⁵
 (411) 鹿 **deer** tʃi⁵⁵prɛu⁴⁴
 (412) キョン **muntjac** tʃi³³zo⁵⁵
 (413) 猿 **monkey** xo³³mo⁵⁵
 (414) うさぎ **rabbit** po³³thu⁵⁵
 (415) ねずみ **mouse** xo³³tʃha⁵⁵
 (416) モグラ **mole** xo³³phi⁵⁵
 (417) 貝 **shell-fish** lu⁵⁵khɛ⁴²,
 lu⁴⁴tʃhu⁵⁵
 (418) えび **shrimp** nɛ⁵⁵pju⁵⁵
 (419) か に **crab** o⁵⁵ʃu⁵⁵,
 pu⁵⁵khjo⁴⁴
 (420) 蛙 **frog** pho⁵⁵thɛ⁴⁴
 (421) 亀 **turtle** pu³³tʃi⁵⁵pu³³pjo⁵⁵
 (422) 燕 **swallow** zu⁵⁵pi⁴⁴
 (423) 蟻 **ant** pu⁵⁵xo⁴⁴
 (424) クモ **spider** pa³³tʃo⁵⁵
 (425) イナゴ **grasshopper, locust**
 ke⁵⁵le⁵⁵
 (426) トンボ **dragonfly**
 a⁵⁵m³³te⁵⁵ke³³
 (427) ミツバチ **honey-bee**
 pjo⁵⁵jo⁵⁵
 (428) 蝶 **butterfly** pu⁵⁵lu⁴²
 (429) 蚊 **mosquito** ʃo³³kja⁵⁵
 (430) ハエ **fly** ʃo³³m⁵⁵
 (431) ウジ **maggot** lo³³
 (432) ミミズ **earthworm** pu³³sɿ⁵⁵
 (433) のみ **flea** khur³³ʃe⁵⁵
 (434) しらみ **louse** ʃi⁵⁵phru⁴⁴
 (435) 蛇 **snake** u³³(lo³³)
 (436) 角 **horn** u³³khi⁵⁵
 (437) 毛 **hair** a⁵⁵mu⁵⁵
 (438) 爪 **claw** phro⁵⁵su⁵⁵
 (439) 尻尾 **tail** to⁵⁵mi⁵⁵
 (440) くちばし **beak** mɔ⁵⁵su⁵⁵
 (441) 翼 **wing** a³³to⁵⁵
 (442) 羽 **feather** a⁵⁵mu⁵⁵
 (443) 巢 **nest** a⁵⁵pø⁴⁴
 (444) 飛ぶ **to fly** prɛ⁴²
 (445) 鳴く **to cry (animals)**
 to³³[v.(c3)]
 (446) 泳ぐ **to swim** (ji³³tʃho⁵⁵)
 tʃu⁵⁵[v.(a5)]

20 形・色・音・匂

- (447) 円い **round** a⁵⁵lɔ⁴⁴[a. (d)]
 (448) 鋭い **sharp** tha⁴²
 (449) 鈍い **blunt** mo⁵⁵tha³⁵
 (450) 穴 **hole** a³³khro⁵⁵
 (451) まっすぐな **straight**
 a⁵⁵pro⁴⁴[a.(d)]
 (452) 大きい **big** la⁵⁵xɿ⁴⁴,
 ma³³mo⁵⁵
 (453) 小さい **little** a³³ɲi⁵⁵[a. (a1)]
 (454) 長い **long** jo⁵⁵ɰ⁴²[a. (c)]
 (455) 短い **short** a³³tso⁵⁵[a. (a1)]
 (456) 厚い **thick (and flat)**
 a³³thu⁵⁵[a. (a2)]
 (457) 薄い **thin (and flat)**
 a⁵⁵po⁵⁵[a. (b)]
 (458) 赤い **red** a³³ɲɿ⁵⁵[a. (a2)]
 (459) 青い **blue** a³³lu⁵⁵[a. (a1)],
 a⁵⁵pro⁵⁵[a. (b)]
 (460) 黄色い **yellow** a³³ɰ⁵⁵[a.
 (a2)]
 (461) 緑 **green** a³³ɲu⁵⁵[a. (a2)]
 (462) 白い **white** a³³phru⁵⁵[a. (a2)]
 (463) 黒い **black** a⁵⁵na⁴²[a. (c)]
 (464) 灰色 **gray** a³³phu⁵⁵
 (465) 染める **to dye it** ran³³
 (466) 音 **sound, noise** a⁵⁵thə⁵⁵
 (467) 響く **to sound** so⁴²[v.(e1)]
 (468) 臭い **smelly** a³³nɛ⁵⁵[a. (a2)]

21 性質

- (469) 優しい **gentle** wen⁵⁵rou⁴⁴
 (470) ずるい **cunning** ɬao³³xua³³
 (471) 強い **strong** jo⁵⁵
 (472) 正しい **correct** a³³mo³⁵[n.]
 (= 「正しいこと」「真実」),
 xo⁴²[v.(e3)] (= 「あっている」「適
 している」)
 (473) いい **good** jo⁵⁵, mɿ⁴⁴
 (474) 悪い **bad** mo⁵⁵jo⁵⁵
 (475) 易しい **easy** a⁵⁵ɲai⁴⁴[a. (d)]
 (476) むずかしい **difficult**
 a⁵⁵ja⁴⁴[a. (d)]
 (477) きつい **tight** kja⁵⁵
 (478) すべすべした **smooth**
 a³³krə⁵⁵
 (479) 古い **old** a³³li⁵⁵[a.(a)]
 (480) 新しい **new** a³³ɰi⁵⁵[a.(a)]
 (481) 美しい **beautiful**
 mrə³³[v.(c4)]
 (482) きれいな、清潔な **clean**
 a⁵⁵kri⁵⁵
 (483) 汚い **dirty** a³³pu⁵⁵a³³pa⁵⁵
 (484) 静かな **quiet** a⁵⁵ɰu⁵⁵a⁵⁵kja⁴²
 (485) 堅い **hard** a⁵⁵kha⁴²[a. (c)]
 (486) 柔らかい **soft** a⁵⁵prə⁵⁵[a.
 (b)]
 (487) (値段が) 高い **expensive**
 phu⁴²[v.(e1)]

22 空間

- (488) 前 **front** a⁵⁵fu⁵⁵,
a⁵⁵pɿ³³po⁴⁴, a⁵⁵pɿ⁴⁴
- (489) 後ろ **back** a⁵⁵no⁴²,
a⁵⁵no³³po⁴⁴
- (490) あいだ **between** ko³³ɬhe⁵⁵
- (491) 上 **on** a³³tha⁵⁵phrə⁴⁴,
a³³tha⁵⁵po⁴⁴
- (492) 下 **under** a³³o⁵⁵phrə⁴⁴,
a³³o⁵⁵po⁴⁴
- (493) 中、内 **inside** khjo⁵⁵lo⁵⁵
- (494) 外 **outside** a⁴⁴tɿ⁴⁴
- (495) 右 **right** la³³mo⁵⁵(po⁴⁴)
- (496) 左 **left** la⁵⁵vu⁵⁵(po⁴⁴)
- (497) さき(棒、針の) **tip** a³³ɬhə⁵⁵
- (498) 近い **near** a⁵⁵ʃe⁴²[a.(c)]
- (499) 遠い **far** a⁵⁵xɿ⁵⁵[a.(b)]
- (500) 高い **high** la⁵⁵mjo⁴²[a.(c)]
- (501) 低い **low** a⁵⁵mɛ⁴²[a.(c)]
- (502) 深い **deep** a³³na⁵⁵[a.(a)]
- (503) 浅い **shallow** mo³³na⁴²
- (504) 広い **wide** a⁵⁵krə⁵⁵[a.(b)]
- (505) 狭い **narrow** a⁵⁵ɬhe⁴²[a.(c)]
- (506) いっしょに **together**
thi³³to⁵⁵
- (507) いっぱいの **full**
a⁵⁵pru⁴⁴[a.(d)]
- (508) 空っぽ **empty** a³³no⁵⁵[a.(a)]
- (509) 方向 **direction** -phrə⁵⁵, -po⁵⁵

23 時間

- (510) 朝 **morning** no³³ʃə⁵⁵
- (511) 昼、昼間 **daytime** n⁵⁵ku⁵⁵/
ni⁵⁵ko⁵⁵
- (512) 夕方、晩 **evening**
a⁵⁵no⁴⁴khju⁵⁵
- (513) 夜 **night** mi³³khju⁵⁵
- (514) 早い **early** na⁴²[v.(e1)]
- (515) 遅い **late** a⁵⁵la⁴²
- (516) 今 **now** ja³³tshu⁵⁵, ʃi⁵⁵vu⁴⁴
- (517) しばらく **temporarily,**
for a while thi⁵⁵jo⁴⁴joŋ⁴⁴,
khə³³mɛ⁵⁵
- (518) さきに **previously** a⁵⁵fu⁵⁵
- (519) あとで、のち **after** a⁵⁵no⁴²
—519a あとあと、のちのち **later, in**
the future a⁵⁵no³³ni⁵⁵
- (520) いつも **always** lo-
- (521) 今日 **today** ja⁵⁵ni⁴⁴/ja⁵⁵n⁴⁴
- (522) 今晚 **tonight** ja³³mɛ⁵⁵
- (523) 昨日 **yesterday** ji⁵⁵ni⁴⁴/
ji⁵⁵n⁴⁴
- (524) 昨晚 **last night** ji³³mɛ⁵⁵
- (525) おととい **the day before yester-**
day ʃi⁵⁵ni⁴⁴/ʃi⁵⁵n⁴⁴
- (526) さきおととい **three days ago**
ʃɿ³⁵ni⁴⁴/ʃɿ³⁵n⁴⁴
- (527) 明日 **tomorrow**
mi³³ʃo⁵⁵ni⁴⁴/mi³³ʃo⁵⁵n⁴⁴
- (528) あさって **the day after**
tomorrow ʃo³³pho⁵⁵ni⁴⁴/
ʃo³³pho⁵⁵n⁴⁴
—528a しあさって **two days after**
tomorrow phe⁵⁵ni⁴⁴/phe⁵⁵n⁴⁴
—528b やのあさって **three days af-**
ter tomorrow no³³ni⁵⁵/no³³n⁵⁵
—528c 5 日後 **four days after to-**

morrow ɲo³³thi⁵⁵ɲi⁴⁴/ɲo³³thi⁵⁵ɲ⁴⁴

(529) 今年 **this year** tshɿ⁵⁵ɲjo⁵⁵

(530) 去年 **last year** ji⁵⁵ɲjo⁵⁵

(531) 一昨年 **two years ago**
ji⁵⁵ɲjo⁵⁵

(532) 来年 **next year** ne³³ɲjo⁵⁵

(533) 再来年 **the year after next**
ɲo³³ɲjo⁵⁵

(534) 昔 **long time ago, the past**
ji⁵⁵ji⁵⁵

(535) 每日 **everyday**

ɲi³³tʃhə⁵⁵tʃhə⁵⁵

(536) 日 **day** ɲi⁵⁵/ɲ⁵⁵

(537) 月 **month** a⁵⁵ɭo⁴⁴

(538) 年 **year** a³³ɲjo⁵⁵

(539) 雨季 **rainy season**

mi³³tha⁵⁵xo⁴⁴khe⁴²

(540) 夏 **summer** a³³sa⁵⁵sa⁴⁴khe⁴²

(541) 冬 **winter** tʃho⁵⁵khe⁴²

24 数量

(542) 数える **to count** ne⁴²[v.(e1)]

(543) 一つ **one** thi⁵⁵

(544) 二つ **two** ɲi⁵⁵

(545) 三つ **three** sɔ⁵⁵

(546) 四つ **four** li⁵⁵

(547) 五つ **five** ɲo⁵⁵

(548) 六つ **six** khjo⁵⁵

(549) 七つ **seven** ji⁵⁵

(550) 八つ **eight** xe⁵⁵

(551) 九つ **nine** kju⁵⁵

(552) 十 **ten** tshɿ⁴²

(553) 十一 **eleven** tshɿ³³thi⁵⁵

(554) 十二 **twelve** tshɿ³³ɲi⁵⁵

(555) 二十 **twenty** ɲi³³tshɿ⁵⁵

(556) 二十一 **twenty-one**
ɲi³³tshɿ⁵⁵thi⁴⁴

(557) 三十 **thirty** sɔ³³tshɿ⁵⁵

(558) 九十 **ninety** kju³³tshɿ⁵⁵

(559) 百 **hundred** thi³³ɭo⁵⁵

(560) 百一 **one hundred and one**
thi³³ɭo⁵⁵thi⁴⁴

(561) 百十 **one hundred and ten**

thi³³ɭo⁵⁵tshɿ⁴²

(562) 百十一 **one hundred and eleven**

thi³³ɭo⁵⁵tshɿ³³thi⁵⁵

(563) 二百 **two hundred** ɲ³³ɭo⁵⁵

(564) 三百 **three hundred** sɔ³³ɭo⁵⁵

(565) 三百一 **three hundred and one**
sɔ³³ɭo⁵⁵thi⁴⁴

(566) 千 **thousand** thi⁵⁵tshen⁴⁴

(567) 二千 **two thousand**
ɲ⁵⁵tshen⁴⁴

(568) 万 **ten thousand** thi⁵⁵van⁴⁴

(569) 回 **times** la⁵⁵

(570) みんな **all** tɔ³³mo³³, a⁵⁵lai⁵⁵

(571) 半分 **half** thi⁵⁵pha⁴⁴

(572) 重い **heavy** a⁵⁵i⁵⁵[a. (b)]

(573) 軽い **light** a³³ɭo⁵⁵

(574) たくさんの **many, much**
la⁵⁵thə⁴², thi⁵⁵ma⁵⁵, a³³tu⁵⁵

(575) 少ない **few, little** a³³ɕi⁵⁵

25 代名詞など

- (576) わたし **I, me** ɲo⁴²(主格),
ɲo³⁵(斜格)
(577) わたしたち **we, us**
a³³ɲu⁵⁵(主格), a³³ɲu⁴²(斜格)
(578) おまえ **you (sg.)** nə⁴²(主格),
nə³⁵(斜格)
(579) おまえたち **you (pl.)**
khy⁴²(主格), khy³⁵(斜格)
(580) 彼、彼女 **he/ she, him/her**
khy⁴²(主格), khy³⁵(斜格)
(581) 彼ら、彼女ら **they, them**
khy³³ma⁵⁵/ jo³³ma⁵⁵(主格),
khy³³ma⁴²/ jo³³ma⁴²(斜格)
(582) 自分、自身 **oneself** ko⁵⁵to⁴⁴
(583) これ **this** ɕi⁴⁴
(584) あれ **that** khy⁴², lo⁵⁵(遠称)
(585) ここに、ここ **here** ɕi³⁵
(586) あそこに **there** lo⁵⁵
(587) だれ **who** kho³³su⁵⁵
(588) なに **what** khao⁴²,
kho⁵⁵ɕu⁴⁴, ɲu⁵⁵kvi⁴⁴
(589) どれ **which** khao⁴², ɲu⁴²
(590) どう、どのように **how**
ɲu⁵⁵lo⁴⁴, kha⁵⁵lo⁴⁴
(591) どこに **where** ɲu⁴²,
ɲu⁵⁵va⁴⁴, kho³⁵
(592) いつ **when** ɲu⁵⁵mə⁴⁴,
kho⁵⁵mə⁴⁴
(593) いくつ **how many**
ɲu⁵⁵pu⁴⁴thə⁴², kho⁵⁵pu⁴⁴thə⁴²

26 副詞・接続詞など

- (594) ひじょうに **very much, very**
ɕe⁴²-, nɛ³³khe⁵⁵-
(595) いちばん **the most** tɕi⁵⁵-
(596) きっと **surely** to³³ɕe³⁵
(597) 全然 **not at all** thi⁵⁵ɕu⁴⁴
(598) あまり～すぎる ɕe⁴²-
(599) もっと **more** tɕi⁵⁵-
(600) たぶん **perhaps** ma³³-ɕe⁴²
(601) 再び **again** no³³-
(602) まだ **yet, still** -su⁵⁵
(603) すでに **already** -mɕ⁴²-a⁴⁴
(604) もし～なら **if** -xo⁴²

27 助詞など

- (605) へ、に **to** =va⁵⁵
(606) まで **up to, till** khw⁵⁵
(607) (場所) から **from** =jo⁴⁴
(608) で、に **in, at, on** =va⁵⁵~a⁵⁵
(609) と、といっしょに **with**
thi³³to⁵⁵
(610) と **and** =jo⁴⁴, =the⁴⁴
(611) の **of** =ɛ⁴⁴
(612) も、もまた **also** =lɔ⁴⁴
(613) より **-er than** =jo⁴⁴
(614) で **with, by means of** =la⁴⁴
(615) ばかり **only** lu⁴⁴
(616) だ、です **be, is** ɲu⁵⁵
(617) ない **not** ma-, mə-
(618) な [禁止] **Do not** thə, a-
(619) か [疑問] **interrogative** -la⁴²,

- ŋa⁴², -a⁴⁴
 (620) から [理由] because -vu⁵⁵
 (621) けれど but, though -ε⁵⁵no⁴⁴

- (622) せる to make, to order to
 m-, pi-, khø-, ja-, -vi
 (623) たい、したい will, wish -ŋu

28 重要単語・連語

- (624) ある、いる be, is tʃə⁴²[v.(e1)]
 (有生存在物), tʃa³⁵(無生存在物),
 n⁵⁵to⁴⁴, ɕu⁴²(「含まれる」)
 (625) できる can, may -khju⁴²(可
 能), -kha³⁵(能力がある)
 (626) 要る need, be necessary m⁴²
 (627) 同じ same thi³³tʃho⁵⁵
 (628) 違う different ko⁵⁵tʃho⁴⁴lo⁴⁴

- (629) 似ている similar tʃhɯ⁴²
 (630) 他の other səu³³
 (631) ために for the sake of
 =va⁵⁵(受益接辞と共起して)
 (632) ならない ought to jo⁵⁵
 (633) はい yes ŋu³³-no⁴⁴,
 ŋu³³-a⁴⁴
 (634) いいえ no ma³³ŋu⁵⁵

日本語索引

[あ行]

愛する… 253
 あいだ… 490
 会う… 243
 青い… 459
 垢… 56
 赤い… 458
 上がる… 322
 明るい… 357
 開く… 139
 あくび… 22
 あくびをする… 22a
 開ける… 139
 あご… 23
 朝… 510
 浅い… 503

脚… 48
 足、あし [足首から先]
 … 49
 足が不自由である…
 50
 あさって… 528
 明日… 527
 汗… 55
 あそこに… 586
 遊ぶ… 234
 与える… 237
 暖かい… 363
 頭… 1
 新しい… 480
 暑い… 361
 厚い… 456
 集める… 284

あとあと… 519a
 あとで… 519
 穴… 450
 兄… 189
 姉… 189
 アヒル… 406
 あぶら [脂]… 98
 あぶる… 313
 甘い… 113
 あまり～すぎる…
 598
 網… 151
 編む… 78
 雨… 343
 洗う… 293
 蟻… 423
 ある… 624

歩く… 215
 あれ… 584
 泡… 368
 いい… 473
 いいえ… 634
 言う… 227
 家… 118
 生きている… 156
 息をする… 18
 行く… 208
 いくつ… 593
 池… 367
 石… 373
 忙しい… 205
 痛い… 162
 いちばん… 595
 いつ… 592
 5日後… 528c
 いっしょに… 506
 五つ… 547
 いっぱいの… 507
 いつも… 520
 糸… 76
 イナゴ… 425
 稲光… 346
 犬… 397
 今… 516
 芋… 92
 妹… 190
 いる… 624
 要る… 626
 上… 491
 浮かぶ… 370
 雨季… 539
 動く… 320
 うさぎ… 414
 ウジ… 431
 後ろ… 489
 薄い… 457

歌う… 235
 内… 493
 撃つ… 201
 うつ伏せになる…
 133
 美しい… 481
 腕… 31
 馬… 400
 生まれる… 153
 臆… 54
 売る… 239
 枝… 384
 えび… 418
 得る… 258
 追いかける… 172
 おいしい… 112
 狼… 399
 大きい… 452
 起きる… 135
 置く… 283
 送る… 242
 怒る… 339
 押す… 271
 遅い… 515
 落ちる… 325
 音… 466
 弟… 190
 男… 179
 おととい… 525
 一昨年… 531
 踊る… 236
 驚かせる… 250
 同じ… 627
 おまえ… 578
 おまえたち… 579
 重い… 572
 泳ぐ… 446
 下りる… 323
 折る… 292

オレンジ… 91
 雄鶏… 403a
 女… 180

[か行]

蚊… 429
 か [疑問]… 619
 貝… 417
 回… 569
 買う… 240
 帰る… 210
 蛙… 420
 顔… 24
 書く… 231
 掻く… 165
 嗅ぐ… 64
 隠す… 279
 影… 356
 掛ける… 294
 風… 359
 数える… 542
 肩… 29
 刀… 173
 ガチョウ… 407
 堅い… 485
 (肩で) 担ぐ… 274
 悲しい… 338
 かに… 419
 かぶせる… 301
 壁… 121
 かぼちゃ… 87
 かま… 146
 釜… 143
 雷… 345
 咬む… 256
 噛む… 105
 亀… 421
 糞… 142
 痒い… 163

から … 607(場 所),
620[理由]

からっぽ … 508

辛い … 114

からだ … 51

借りる … 241

軽い … 573

彼 … 580

彼ら … 581

枯れる … 391

川 … 366

皮 [皮、皮膚] … 53

皮 [樹皮] … 382

かわいそうだ … 337

乾く … 328

考える … 329

甘藷 … 93

肝臓 … 41

漢族 … 196

木 … 379

黄色い … 460

消える … 126

聞く … 65

聞こえる … 65

岸 … 372

傷 … 161

汚い … 483

きつい … 477

きつと … 596

昨日 … 523

きのこ … 393

着物 … 69

九十 … 558

牛肉 … 81c

牛乳 … 99

今日 … 521

兄弟姉妹 … 188

去年 … 530

キョン … 412

着る … 72

切る … 307

きれいな … 482

金 … 377

銀 … 378

筋肉 … 61

茎 … 383

草 … 380

臭い … 468

腐った … 117

くしゃみ … 21

くしゃみをする …

21a

口 … 11

口が不自由である …

14

口付けをする … 255

くちばし … 440

唇 … 12

首 … 27

熊 … 410

雲 … 342

クモ … 424

暗い … 358

来る … 209

車 … 222

黒い … 463

毛 … 52, 437

消す … 126

煙 … 124

蹴る … 277

けれど … 621

けんかする … 170

黄牛 … 405

肛門 … 46

声 … 19

氷 … 348

凍る … 349

小刀 … 144

ここ … 585

ここに … 585

九つ … 551

心 … 340

腰 … 44

こじ開ける … 140

こする … 267

今年 … 529

ことば … 225

子供 … 181

粉 [食用としての] …

80

好む … 335

これ … 583

転がる … 326

殺す … 167

こわがる … 333

壊す … 287

今晚 … 522

[さ行]

探す … 280

魚 … 395

さき (棒、針の) … 497

さきおととい … 526

さきに … 518

昨晚 … 524

叫ぶ … 68

裂ける … 290

(手で) 支える … 269

寒い … 362

再来年 … 533

猿 … 413

触る … 266

三十 … 557

三百 … 564

三百一 … 565

しあさって … 528a

塩 … 97

塩辛い… 115
 鹿… 411
 叱る… 248
 自身… 582
 静かな… 484
 沈む… 369
 舌… 13
 下… 492
 したい… 623
 尻尾… 439
 死ぬ… 168
 しばらく… 517
 自分… 582
 脂肪… 98
 締め付ける… 273
 閉める… 138
 ジャックフルーツ…

89

銃… 177
 十一… 553
 十二… 554
 熟した… 102
 招待する… 246
 小便… 58
 しらみ… 434
 尻… 45
 知る… 330
 白い… 462
 親戚… 194
 心臓… 38
 巢… 443
 水牛… 404
 吸う… 107
 (たばこを) 吸う…

317

鋤… 147
 掬う… 296
 少ない… 575
 すでに… 603

砂… 374
 すべすべした… 478
 ズボン… 71
 住む… 141
 する… 319
 ずるい… 470
 鋭い… 448
 座る… 129
 背負う… 276
 清潔な… 482
 咳… 20
 背中… 43
 狭い… 505
 せる… 622
 千… 566
 全然… 597
 育つ… 154
 育てる… 155
 外… 494
 祖父… 191
 祖母… 192
 染める… 465
 空… 341

[た行]

だ… 616
 たい… 623
 タイ族… 198
 大便… 57
 体毛… 52
 太陽… 351
 倒れる… 137
 高い… 500
 (値段が) 高い… 487
 たくさんの… 574
 竹… 392
 助ける… 254
 尋ねる… 229
 (手で) たたく… 252

正しい… 472
 立ち上がる… 135
 (煙などが) 立ち上る…
 128
 立つ… 136
 立っている… 136
 建てる… 119
 たね… 95
 たぶん… 600
 食べ物… 79
 食べる… 103
 騙す… 249
 卵… 96
 ために… 631
 だれ… 587
 血… 59
 小さい… 453
 近い… 498
 違う… 628
 力… 62
 ちち [乳]… 99
 父… 184
 チノ族… 195
 乳房… 37
 蝶… 428
 使う… 260
 つかむ… 262
 疲れる… 159
 月… 353, 537
 突き刺す… 306
 作る… 286
 伝える… 228
 土… 375
 包む… 302
 綱… 150
 角… 436
 つばき… 16
 翼… 441
 燕… 422

壺 … 142
 つぼみ … 387
 積み上げる … 285
 摘み取る … 206
 爪 … 35, 438
 冷たい … 362
 強い … 471
 つらい … 338
 吊るす … 294
 連れ出す … 247
 手 … 33
 で … 608, 614
 できる … 625
 出くわす … 244
 です … 616
 鉄 … 376
 鉄砲 … 177
 (太陽が) 照りつける …
 352
 出る … 211
 と … 609, 610
 戸 … 120
 といっしょに … 609
 トイレ … 118b
 どう … 590
 とうもろこし … 94
 十 … 552
 遠い … 499
 (髪を) 梳く … 300
 溶ける … 350
 どこに … 591
 年 … 538
 年取った … 183
 年をとる … 183
 閉じる … 138
 とどまる … 324
 どのように … 590
 飛ぶ … 444
 トマト … 86

止まる … 214
 虎 … 409
 鳥 … 394
 鶏肉 … 81b
 取る … 257
 (写真を) 撮る … 318
 どれ … 589
 トンボ … 426

[な行]

な … 618
 ない … 617
 治す … 166
 直す … 289
 中 … 493
 長い … 454
 流れる … 371
 泣く … 67
 鳴く … 445
 殴る … 251
 投げる … 265
 夏 … 540
 七つ … 549
 なに … 588
 鍋 … 143
 名前 … 233
 涙 … 5
 嘗める … 104
 ならない … 632
 (雷が) 鳴る … 345b
 に … 605, 608
 苦い … 116
 握る … 263
 逃げる … 171
 肉 … 61, 81
 虹 … 347
 二十 … 555
 二十一 … 556
 二千 … 567

似ている … 629
 二百 … 563
 鈍い … 449
 煮る … 101
 鶏 … 403
 人間 … 178
 縫う … 77
 抜く … 305
 脱ぐ … 73
 盗む … 202
 濡れる … 327
 根 … 388
 猫 … 398
 ねずみ … 415
 寝ている … 130
 眠る … 131
 の … 611
 のちに … 519
 のちのち … 519a
 のど … 28
 のどが渇く … 111
 のみ … 433
 飲む … 106
 のろい … 218

[は行]

歯 … 15
 刃 … 145
 葉 … 385
 灰 … 125
 はい … 633
 灰色 … 464
 バイナッブル … 88
 はう … 219
 入る … 212
 ハエ … 430
 生える … 390
 ばかり … 615
 吐き出す … 109

吐く… 108
 掃く… 316
 運ぶ… 275
 橋… 221
 走る… 216
 (稲光が) 走る… 346b
 はだか… 74
 はたく… 270
 働く… 203
 鼻… 7
 鼻毛… 7a
 鼻の穴… 7b
 花… 386
 鼻水… 8
 話す… 226
 放す… 264
 バナナ… 83
 ハニ族… 197
 羽… 442
 はねる… 321
 母… 185
 速い… 217
 早い… 514
 腹… 39
 腹がへる… 110
 はらわた… 40
 針… 75
 腫れる… 164
 晩… 512
 半分… 571
 火… 123
 日… 536
 光… 355
 (白などで) 挽く… 308
 低い… 501
 ひげ… 26
 ひざ… 47
 ひじ… 32

ひじょうに… 594
 額… 2
 左… 496
 引っ張る… 272
 ひと… 178
 一つ… 543
 ひな… 403c
 響く… 467
 皮膚… 53
 額… 2
 百… 559
 百一… 560
 百十… 561
 百十一… 562
 病気… 160
 昼… 511
 昼間… 511
 広い… 504
 拾う… 259
 深い… 502
 拭く… 149
 吹く… 360
 膨れる… 303
 ふくろう… 408
 ふさぐ… 304
 豚… 402
 再び… 601
 二つ… 544
 豚肉… 81a
 太った… 157
 船… 224
 踏む… 278
 冬… 541
 振る… 268
 (雨が) 降る… 344
 古い… 479
 へ… 605
 平原… 365
 へそ… 42

蛇… 435
 部屋… 118a
 方向… 509
 帽子… 70
 棒っ切れ… 152
 ほお… 25
 他の… 630
 ほこり… 148
 星… 354
 干す… 295
 ほどく… 299
 骨… 60
 彫る… 311
 掘る… 312

[ま行]

毎日… 535
 前… 488
 曲がる… 213
 巻く… 297
 撒く… 315
 曲げる… 291
 孫… 193
 混ぜる… 310
 まだ… 602
 待つ… 245
 まっすぐな… 451
 まで… 606
 学ぶ… 332
 眉毛… 4
 円い… 447
 万… 568
 マンゴー… 84
 実… 82
 見える… 63
 幹… 381
 右… 495
 短い… 455
 水… 100

見せる… 282
 道… 220
 見つける… 281
 三つ… 545
 ミツバチ… 427
 緑… 461
 耳… 9
 耳が不自由である…
 10
 ミミズ… 432
 見る… 63
 みんな… 570
 昔… 534
 剥く… 207
 虫… 396
 蒸す… 314
 むずかしい… 476
 息子… 186
 結ぶ… 298
 娘… 187
 六つ… 548
 胸… 36
 村… 199
 目… 3
 芽… 389
 眼鏡… 3b
 目糞… 3a
 目覚める… 334
 雌鳥… 403b

も… 612
 盲目の… 6
 燃える… 127
 もぎ取る… 309
 モグラ… 416
 もし～なら… 604
 もたれる… 132
 持つ… 261
 もっと… 599
 もまた… 612
 桃… 85

[や行]

矢… 176
 ヤギ… 401
 焼く… 313
 優しい… 469
 易しい… 475
 養う… 155
 休む… 204
 やせた… 158
 八つ… 547
 屋根… 122
 やのあさって… 528b
 山… 364
 やり… 174
 やわらかい… 486
 夕方… 512
 幽霊… 169

ゆでる… 101
 指… 34
 弓… 175
 夢… 134
 夢を見る… 134
 横たわる… 130
 四つ… 546
 呼ぶ… 232
 読む… 230
 より… 613
 夜… 513
 喜ぶ… 336

[ら行]

ライチ… 90
 来年… 532
 獺に行く… 200

[わ行]

輪… 223
 若い… 182
 脇… 30
 分ける… 238
 忘れる… 331
 わたし… 576
 わたしたち… 577
 笑う… 66
 悪い… 474
 割れる… 288

林 範彦（はやし のりひこ）

神戸市外国語大学専任講師

専門：言語学（チノ語，チベット・ビルマ諸語研究，東南アジア地域言語学）

研 究 叢 書 第 43 冊

2009年3月24日 印刷

2009年3月31日 発行

発行所

神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学外国学研究所

印刷所

神戸市兵庫区下沢通 4-7-30
株式会社 ルネック

Monograph Series in Foreign Studies, Vol. 43

A Descriptive Study on the Grammar of the Jino Language (Youle Dialect)

HAYASHI, Norihiko

Kobe City University of Foreign Studies

2009